下斉田・滝川A遺跡
滝川B・C遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第17集—

1987

群　馬　県　教　育　委　員　会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

下斉田・滝川・A・B・C遺跡　正　誤　表　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
P.36	表10中	器高一	器高4.0
P.62	表24中	29号土壙 長円形	29号土壙 長方形
P.88	２行目	３号溝に切られる	トル
P.92	表32中	坩	小型壺
		２号土壙 長円形	２号土壙 長方形
P.107	第94図中	14号土壙	14号溝
P.154	表38中 11行目	無果実型	無花果型
	表39 下から6～5行目	共存するうよう	共存するよう

資料 NO.98-4987
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
平成10年5月13日
01-320
36
(6)

下斉田・滝川A遺跡
滝川B・C遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第17集—

1987

群　馬　県　教　育　委　員　会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

関越自動車道新潟線は、首都圏と新潟を結ぶ交通の大動脈として、多くの人々に利用されています。この関越自動車道建設事業にかかわり、当事業団では、多くの貴重な遺跡を発掘調査してまいりました。現在、調査によって発見、出土した資料は貴重な文化遺産として、その活用を図るために、整理事業を進め、報告書の刊行に努力してまいりました。

ここに報告します下斉田・滝川Ａ遺跡、滝川Ｂ・Ｃ遺跡は、群馬県教育委員会が調査主体となり、昭和49～51年度にかけて調査が行われましたが、その整理事業は当事業団で実施するところとなりました。

下斉田・滝川Ａ遺跡では、古墳時代前期の住居址、方形周溝墓、平安時代の住居址などの遺構が、滝川Ｃ遺跡では、古墳時代前期の多量な遺物等が発見されています。これらの遺構・遺物は、高崎市周辺地域における古代の歴史を知るうえで、貴重な資料になるものと言えます。

これら遺跡の整理事業は、昭和61、62年度の２カ年にわたって進め、関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書第17集として刊行する運びになりました。

整理事業にあたっては、日本道路公団東京第二建設局の方々を始めとして、発掘調査、整理事業を進めていただいた方々等、多くの関係者のご指導、ご協力を頂きました。ここに厚く感謝の意を表するとともに、本報告書が学界を始めとして、多くの人々に活用さることを念じて序文といたします。

昭和62年10月

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　清　水　一　郎

例　言

1．本書は関越自動車道新潟線の建設に伴い、事前調査された群馬県高崎市下斉田町字小芝・熊野他に所在する下斉田・滝川Ａ遺跡及び滝川Ｂ・Ｃ遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は第一次調査を昭和49年11月14日～昭和50年２月４日、第二次調査を昭和50年９月22日～昭和51年２月28日にかけて実施した。

3．調査の実施は、日本道路公団東京第二建設局の委託を受けて、群馬県教育委員会文化財保護課が行った。

4．調査担当者（当時の職名）、調査員は次の通りである。

松本浩一（群馬県教育委員会文化財保護課主事）現在勢多郡東村杲小学校長
横倉興一（　　同　　上　　）現在高崎市教育委員会文化財保護係
巾　隆之（　　同　　上　　）現在群馬県教育委員会文化財保護課
坂爪久純（　　嘱　　託　　員　　）現在佐波郡境町教育委員会

5．整理作業および執筆担当は以下の通りである。

事務担当　白石保三郎、井上唯雄、大沢秋良、田口紀雄、上原啓巳、平野進一、定方隆史、国定　均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、並木綾子、今井もと子、松井美智子、大島敬子

整理担当　小野和之（群馬県埋蔵文化財調査事業団）昭和61年度
山口逸弘（群馬県埋蔵文化財調査事業団）昭和62年度
図面整理、遺物実測、トレース等は長沼久美子、高橋美津子、桑原恵美子、高橋とし子、高橋裕美、串淵すみ江、茂木範子、安達好子、阿部由美子、萩原鈴代、八峠美津子が行った。

6．執筆分担　Ⅰ－１、Ⅲ－１、Ⅳ－１、Ⅴ－１、Ⅵ－１、巾隆之
Ⅵ－２、横倉興一
結び　松本浩一
上記以外を小野が行った。

7．本書の編集は小野が行った。

8．発掘調査、整理作業にあたり下記の方々にご協力を頂いた。記して感謝の意を表する。（敬称略）
新井房夫、工楽善通、増田逸朗、田口一郎、桜井衛、金子智一、五十嵐信

9．石材鑑定は群馬地質研究会員、飯島静男氏にお願いした。

10．出土遺物および図面類は、現在群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

凡　例

1．本書における遺構番号は、住居址、掘立柱建物址については調査時のものを用いたが、土壙、溝に関しては新たに付け直した。

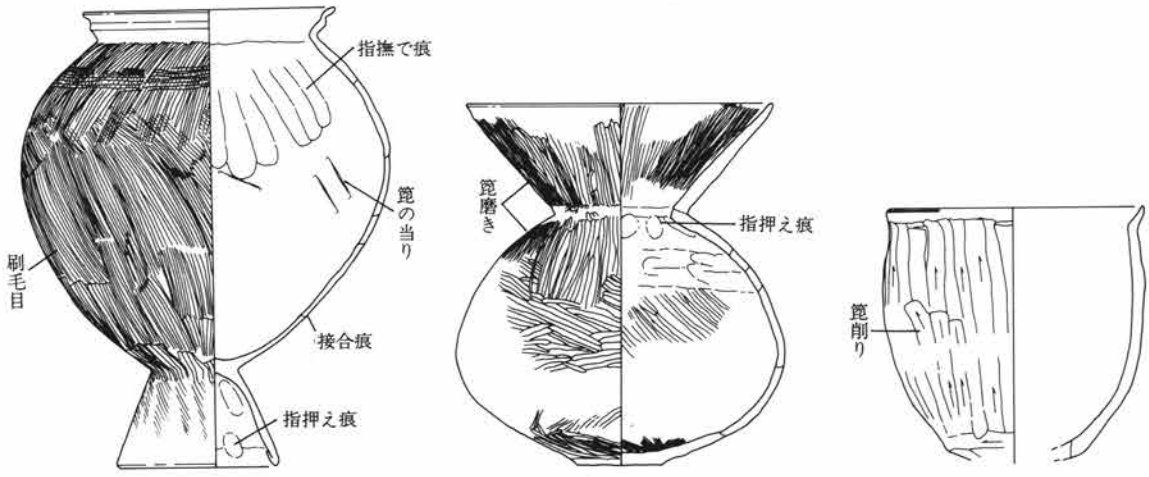
2．遺構図中におけるスクリーントーンは次のことを表す。

は地山を　は焼土をそれぞれ表す。

なお上記以外のものについては図中に示した。

3．本書における遺物実測図は原則として１／３とした。また遺構図の縮尺は住居址１／60、土壙１／40を基本とし、それ以外のものについては図中に記した。

4．土器の実測図における表記は以下のことを表す。



土器実測図の内、断面黒色のものは須恵器を表す。また縄文土器の断面におけるスクリーントーンは繊維土器を表す。

5．遺物観察表中、法量・遺構計測値の（　）は推定値を表す。

6．遺物写真図版中の番号は挿図中の番号と同一である。

目　次

序
例　言
凡　例
Ⅰ．調査の経過 …… 1
　1．調査に至るまでの経過 …… 1
Ⅱ．周辺の地形と遺跡 …… 1
　1．遺跡の概要 …… 1
　2．地理的環境 …… 1
　3．歴史的環境 …… 1
Ⅲ．下斉田・滝川Ａ遺跡 …… 6
　1．調査の方法と経過 …… 6
　　(1) 調査の経過と遺跡の概要
　2．基本土層 …… 10
　3．遺構と遺物 …… 10
　　(1) 住居址　(2) 方形周溝墓　(3) 掘立柱建物址
　　(4) 土壙　(5) 溝　(6) 水田址　(7) グリッド出土遺物
Ⅳ．滝川Ｂ遺跡 …… 80
　1．調査の方法と経過 …… 80
　2．基本土層 …… 80
　3．遺跡の概要 …… 80
Ⅴ．滝川Ｃ遺跡 …… 81
　1．調査の方法と経過 …… 81
　2．基本土層 …… 81
　3．遺構と遺物 …… 82
　　(1) 土壙　(2) 溝
　4．グリッド出土遺物 …… 100
Ⅵ．ま と め …… 131
　1．遺　構 …… 131
　2．遺　物 …… 132

挿　図　目　次

下斉田遺跡

第 1 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 3
第 2 図　調査区域図 …… 6
第 3 図　A区拡張区 …… 8
第 4 図　C・D区拡張区 …… 9
第 5 図　基本土層図 …… 10
第 6 図　1号住居址 …… 11
第 7 図　1号住居址遺物出土状態 …… 12
第 8 図　1号住居址出土遺物 (1) …… 13
第 9 図　1号住居址出土遺物 (2) …… 14
第10図　1号住居址出土遺物 (3) …… 15
第11図　2号住居址 …… 18
第12図　2号住居址出土遺物 (1) …… 18
第13図　2号住居址出土遺物 (2) …… 19
第14図　3号住居址・出土遺物 …… 20
第15図　4号住居址 …… 21
第16図　4号住居址出土遺物 (1) …… 22
第17図　4号住居址出土遺物 (2) …… 23
第18図　5号住居炉址・出土遺物 …… 24
第19図　6号住居址 …… 25
第20図　6号住居址出土遺物 …… 26
第21図　7号住居址 …… 27
第22図　7号住居址出土遺物 …… 27
第23図　8号住居址及び炉址 …… 28
第24図　8号住居址出土遺物 (1) …… 30
第25図　8号住居址出土遺物 (2) …… 31
第26図　8号住居址出土遺物 (3) …… 33
第27図　8号住居址出土遺物 (4) …… 34
第28図　9号住居址 …… 36
第29図　9号住居址出土遺物 …… 36
第30図　10号住居址 …… 37
第31図　10号住居址出土遺物 …… 37
第32図　11号住居址竈 …… 38
第33図　12号住居址 …… 39
第34図　12号住居址出土遺物 …… 39
第35図　13号住居址 …… 40
第36図　13号住居址出土遺物 …… 40
第37図　14号住居址 …… 41
第38図　14号住居址出土遺物 …… 41
第39図　方形周溝墓 …… 42
第40図　方形周溝墓出土遺物 …… 43
第41図　1号掘立柱建物址 …… 46
第42図　2号掘立柱建物址 …… 47
第43図　3号掘立柱建物址 …… 48
第44図　4号掘立柱建物址 …… 49
第45図　5号掘立柱建物址 …… 50
第46図　掘立柱建物址出土遺物 …… 51
第47図　1～6号土壙 (1) …… 52
第48図　7～14号土壙 (2) …… 53
第49図　15～16号土壙 (3) …… 55
第50図　17～20号土壙 (4) …… 56
第51図　21～24号土壙 (5) …… 57
第52図　25～29号土壙 (6) …… 58
第53図　30～31号土壙 (7) …… 60
第54図　32～35号土壙 (8) …… 61
第55図　2・3・4・13・16号土壙出土遺物 …… 63
第56図　20号土壙出土遺物 …… 64
第57図　20・26号土壙出土遺物 …… 65
第58図　29号土壙出土遺物 …… 66
第59図　溝全体図 …… 67
第60図　2・3・7号溝出土遺物 …… 68
第61図　グリッド出土縄文土器 …… 69
第62図　グリッド出土遺物 …… 70
第63図　グリッド出土埴輪 …… 71
第64図　1・4・6・7・8・9号住居址出土石器 …… 73
第65図　10・14号住居址、方形周溝墓出土石器 …… 74
第66図　方形周溝墓、土壙出土石器 …… 75
第67図　溝出土石器 …… 76
第68図　グリッド出土遺物 …… 76
第69図　グリッド出土石器 (1) …… 77
第70図　グリッド出土石器 (2) …… 79

滝川B遺跡

第71図　調査区域図 …… 80
第72図　基本土層図 …… 80

滝川C遺跡

第73図　調査区域図 …… 81
第74図　基本土層図 …… 82
第75図　遺構全体図 …… 83
第76図　1～4号土壙 (1) …… 84
第77図　5～9号土壙 (2) …… 85
第78図　10～13号土壙 (3) …… 86
第79図　14～18号土壙 (4) …… 87
第80図　19～22号土壙 (5) …… 89
第81図　23～28号土壙 (6) …… 90
第82図　29・30号土壙 (7) …… 91
第83図　1・2・5・7・8・9・10号土壙出土遺物 …… 93
第84図　11・13・14・19号土壙出土遺物 …… 94
第85図　2・8・19号溝出土遺物 …… 97
第86図　19号溝出土遺物 …… 98
第87図　遺構割付図 …… 100
第88図　遺構図　1 …… 101
第89図　遺構図　2 …… 102
第90図　遺構図　3 …… 103
第91図　遺構図　4 …… 104
第92図　遺構図　5 …… 105
第93図　遺構図　6 …… 106
第94図　遺構図　7 …… 107
第95図　遺構図　8 …… 108
第96図　遺構図　9 …… 109
第97図　遺構図　10 …… 110
第98図　遺構図　11 …… 111
第99図　遺構図　12 …… 112
第100図　遺構図　13 …… 113
第101図　遺構図　14 …… 114
第102図　遺構図　15 …… 115
第103図　遺構図　16 …… 116
第104図　遺構図　17 …… 117
第105図　遺構図　18 …… 118
第106図　遺物分布図 …… 119
第107図　グリッド出土遺物 (1) …… 120
第108図　グリッド出土遺物 (2) …… 121
第109図　グリッド出土遺物 (3) …… 122
第110図　グリッド出土遺物 (4) …… 123
第111図　グリッド出土遺物 (5) …… 124
第112図　グリッド出土縄文土器 …… 124
第113図　グリッド出土石器 …… 129
第114図　遺構全体図 …… 折り込み

ま と め

第115図　下斉田遺跡出土遺物 …… 134
第116図　下斉田遺跡出土遺物 …… 136
第117図　遺跡位置図 …… 137
第118図　下郷遺跡出土遺物 …… 139
第119図　下郷遺跡古墳関連遺物 …… 140
第120図　八幡原遺跡出土遺物 …… 141
第121図　滝川Ｃ遺跡出土遺物 …… 141
第122図　綿貫遺跡出土遺物 …… 141
第123図　上滝遺跡出土遺物 …… 142
第124図　元島名将軍塚古墳出土遺物 …… 142
第125図　元島名遺跡道路区出土遺物 …… 142
第126図　鈴ノ宮遺跡出土遺物 …… 143
第127図　矢中村東遺跡・矢中下村北遺跡出土遺物 …… 144
第128図　上大類北宅地遺跡 …… 145
第129図　貝沢柳町遺跡出土遺物 …… 146
第130図　新保田中遺跡出土遺物 …… 147
第131図　下日高旧河道資料 …… 148

表　目　次

下斉田遺跡

表 1　周辺の遺跡一覧表 …… 4
表 2　1号住居址遺物観察表 …… 12
表 3　2号住居址遺物観察表 …… 17
表 4　3号住居址遺物観察表 …… 20
表 5　4号住居址遺物観察表 …… 21
表 6　5号住居址遺物観察表 …… 25
表 7　6号住居址遺物観察表 …… 26
表 8　7号住居址遺物観察表 …… 29
表 9　8号住居址遺物観察表 …… 29
表 10　9号住居址遺物観察表 …… 36
表 11　10号住居址遺物観察表 …… 38
表 12　12号住居址遺物観察表 …… 38
表 13　13号住居址遺物観察表 …… 39
表 14　14号住居址遺物観察表 …… 42
表 15　方形周溝墓遺物観察表 …… 44
表 16　1～14号住居址、方形周溝墓遺構観察表 …… 45
表 17　1号掘立柱建物址遺構観察表 …… 46
表 18　2号掘立柱建物址遺構観察表 …… 47
表 19　3号掘立柱建物址遺構観察表 …… 48
表 20　4号掘立柱建物址遺構観察表 …… 49
表 21　5号掘立柱建物址遺構観察表 …… 49
表 22　掘立柱建物址遺構観察表 …… 50
表 23　掘立柱建物址遺物観察表 …… 50
表 24　土壙計測値 …… 62
表 25　土壙遺物観察表 …… 62
表 26　溝出土遺物観察表 …… 68
表 27　グリッド出土縄文土器観察表 …… 71
表 28　グリッド出土遺物観察表 …… 71
表 29　グリッド出土埴輪観察表 …… 72
表 30　住居、土壙、溝出土石器観察表 …… 73
表 31　グリッド出土石器観察表 …… 78

滝川Ｃ遺跡

表 32　土壙計測値 …… 92
表 33　土壙遺物観察表 …… 94
表 34　溝遺物観察表 …… 99
表 35　グリッド遺物観察表 …… 125
表 36　グリッド出土縄文土器観察表 …… 128
表 37　グリッド出土石器観察表 …… 130

ま と め

表 38　壺型土器の分類とその特徴 …… 154
表 39　単口縁系甕型土器の分類とその特徴 …… 154
表 40　井野川下流域における関連遺跡での土器組み合わせ状況 …… 155

写真図版目次

下斉田遺跡

図版 1　下斉田遺跡全景
図版 2　下斉田遺跡全景
図版 3　1～4号住居址
図版 4　5～8号住居址
図版 5　9～13号住居址
図版 6　14号住居址、方形周溝墓
図版 7　1～5号掘立柱建物址
図版 8　1～9号土壙
図版 9　10～18号土壙
図版 10　19～27号土壙
図版 11　29～35号土壙、3号溝
図版 12　1号住居址出土遺物
図版 13　1・2号住居址出土遺物
図版 14　2・3・4号住居址出土遺物
図版 15　5・6・7・8号住居址出土遺物
図版 16　8号住居址出土遺物
図版 17　8号住居址出土遺物
図版 18　9・10・12・13・14号住居址方形周溝墓出土遺物
図版 19　方形周溝墓、土壙出土遺物
図版 20　土壙、掘立柱建物址出土遺物
図版 21　溝、グリッド出土遺物
図版 22　グリッド出土埴輪、グリッド出土縄文土器
図版 23　1～14号住居址、方形周溝墓出土石器
図版 24　方形周溝墓、土壙、溝出土石器
図版 25　グリッド出土石器

滝川Ｂ・Ｃ遺跡

図版 26　滝川Ｂ遺跡、滝川Ｂ・Ｃ遺跡遠景
図版 27　滝川Ｃ遺跡調査区
図版 28　1～8号土壙
図版 29　9～15号土壙
図版 30　16～28号土壙
図版 31　土壙、溝出土遺物
図版 32　溝出土遺物
図版 33　溝、グリッド出土遺物
図版 34　グリッド出土遺物
図版 35　グリッド出土遺物、グリッド出土縄文土器
図版 36　グリッド出土石器、28号土壙出土馬歯
図版 37　下斉田、滝川Ｃ遺跡土器部分写真

Ⅰ．調査の経過

１．調査に至るまでの経過

関越自動車道新潟線は、昭和42年に出された「道路整備特別処置法」に基づき、建設大臣から事業認可が出た事業である。東京から新潟を結ぶ総計310㎞に及ぶもので、東京―川越間が、昭和46年に共用開始となった。それに続く川越―渋川間は昭和44年に基本計画が策定され、昭和48年に正式路線が発表された。

群馬県教育委員会では、埋蔵文化財を保護するため基本計画策定の前年に分布調査を計画した。昭和44年に渋川市以南の、路線が通過することの予想される地域について、幅４㎞に限定し、国の補助金を得て実施した。更に昭和46年には、整備計画に基づき、渋川市以南の幅200ｍ内について詳細な分布調査を実施し、藤岡市―渋川市間で合計22箇所の遺跡を発見した。

遺跡名は、遺跡の所在する地域の大字あるいは小字名をとって命名したが、略号として「関越高速道」の頭文字である「KK」の２文字で表現することとし、南から番号を与えることとした。従って下斉田遺跡は「KK６」、滝川Ａ遺跡は「KK７」、滝川Ｂ遺跡は「KK８」、滝川C遺跡は「KK９」となる。

関越自動車道新潟線の発掘調査は、昭和48年の佐波郡玉村町下郷遺跡から開始された。同年中に藤岡市温井遺跡の調査も行われ、翌49年には高崎市八幡原Ａ・Ｂ両遺跡及び下斉田遺跡と順次進められた。滝川Ａ遺跡は下斉田遺跡と隣接しており、遺構のありかた等から個別の遺跡として区別することができないことが判明したため、併せて調査を行うこととした。

Ⅱ．周辺の地形と遺跡

１．遺跡の概要

下斉田遺跡は関越自動車道新潟線の建設に伴い、第一次（昭和49年11月～同50年２月まで）、第二次（昭和50年９月～同51年２月）にかけて調査を行った。検出された遺構は古墳時代初頭から平安時代にかけてのものが主である。主な遺構の種類は、住居址、掘立柱建物址、土壙、溝、および方形周溝墓である。遺構の残りは、確認面までがかなり浅く、また遺構がかなり小範囲に集中して切り合っていたことや、近・現代の溝、土壙などの重複等で検出状況は良好ではなかった。

２．地理的環境

下斉田・滝川Ａ遺跡は高崎市の南東部にある。現在の行政区画下斉田町の北東部に位置する。遺跡は高崎市と伊勢崎市を結ぶ国道354号線の北側に在って、榛名山麓に源を発する井野川左岸にあり、東側には滝川が南流している。遺跡は前橋台地の南端縁にあり、周囲の地形は比較的緩やかで、現況は水田地帯が広がり、僅かに微高地上に桑畑が点在している。遺跡の標高は約70ｍである。

３．歴史的環境

埼玉県のほぼ中央を横断した関越自動車道は群馬県に入り、藤岡市から烏川を渡り玉村町から高崎市の東

でやや西側へカーブして北上する。この玉村町から高崎市東部のこの地域にかけては多くの遺跡が知られており、特に古墳時代に関しては古式古墳として知られる、柴崎蟹沢古墳（註１）を初めとして元島名将軍塚古墳（註２）、観音山古墳（註３）、不動山古墳（註４）、岩鼻二子山古墳（註５）等が知られ、他にも若宮古墳群等、数多くの古墳が存在する。また近年の開発に伴う発掘調査で周辺地域においても多くの集落跡が調査されており次第に本地域の様子が明らかになりつつある。群馬県内の関越道に伴う発掘調査は下郷遺跡（註６）を皮切りに温井遺跡（註７）、八幡原Ａ・Ｂ遺跡（註８）、そして本報告の下斉田・滝川Ａ遺跡、滝川Ｂ・Ｃ遺跡、さらには上滝遺跡（註９）と調査が進められた。そして本遺跡より５㎞程井野川上流の新保遺跡（註10）、日高遺跡（註11）では弥生時代から平安時代にかけての集落、墓址、水田址とともに多くの土器や木製品、さらには獣骨類が多量に発見され注目を集め、井野川流域における弥生から古墳時代にかけての遺跡の濃密さがあらためて浮き彫りにされた形となった。

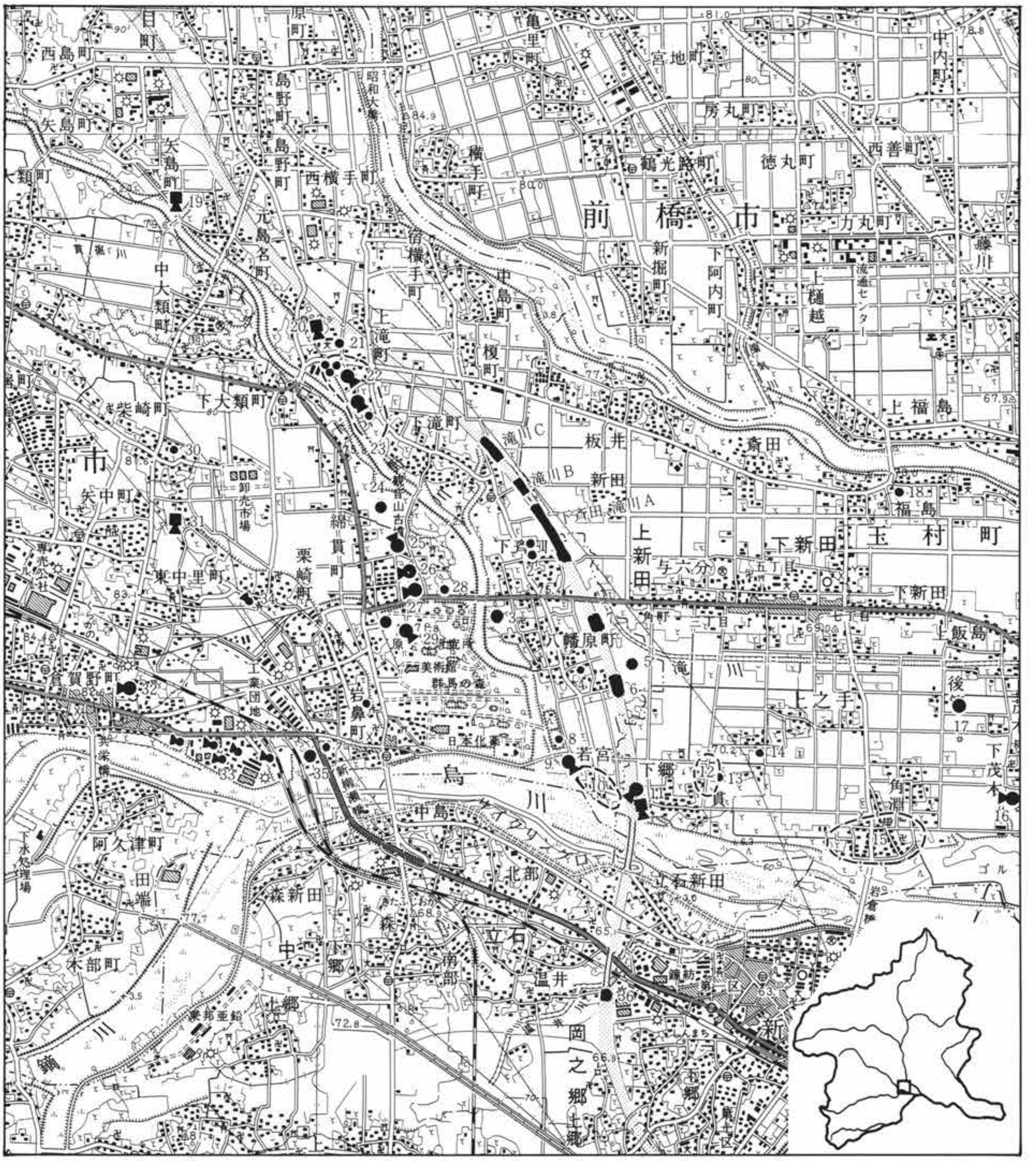
本遺跡の周辺における各時代毎の遺跡について、近年明らかになったものを中心に概観しておきたい。縄文時代の遺構は少ないが、八幡原Ａ遺跡では前期の住居址１軒を調査している。また堀米前遺跡（註12）では中期の土壙、元島名遺跡（註13）では後期の土壙が、また井野川に沿ってやや上流へ上った大類地区では川押遺跡（註14）、天神遺跡（註15）、万相寺遺跡（註16）などでも中期、前期の遺構、遺物が検出されている。弥生時代に関しては、鈴ノ宮遺跡（註17）、元島名遺跡、万相寺遺跡で中期から後期にかけての遺構が検出されている。特に鈴ノ宮遺跡では中期の方形周溝墓が見られ、後続する次代の遺構と関連して注目される。また近年調査された矢島・竹之内遺跡（註18）は鈴ノ宮遺跡の西にあたるが、弥生時代後期の住居址と古墳時代初頭の周溝墓が３基検出されている。万相寺遺跡では後期樽式期の住居址を検出している。古墳時代については、井野川の左岸段丘上には墳墓以外にも多くの集落跡の存在が知られており、灰塚遺跡（註19）、八幡原遺跡（註20）、八幡原大鼻・稲荷遺跡（註21）上滝遺跡などでは住居址、土壙、溝等が検出されている。こうした集落に隣接する形でいくつかの古墳群が見られる。また、前方後方形の方形周溝墓が矢中村東遺跡（註22）や下郷遺跡で検出されており注目される。若宮古墳群は井野川と烏川の合流地点にあり下郷遺跡と接している。その東には宇貫古墳群がある。上滝遺跡の西に位置する元島名将軍塚古墳は全長90ｍの前方後方墳で４世紀代の築造とされる。その南には下滝古墳群がある。井野川を挟んだ対岸には大形の前方後円墳である観音山古墳、不動山古墳がありそれらの周辺では綿貫遺跡（註23）、堀米前遺跡などで集落が調査されている。

古墳時代後期になると集落地は広がり、この井野川を挟んだ両段丘上には多くの古墳が築造されることになる。

本遺跡が立地する場所は現在では北に水田地帯が広がり、南側には井野川に沿った両段丘上に多くの古墳が存在していた。さらに西側の烏川の段丘上にも浅間山古墳、大鶴巻古墳、小鶴巻古墳などがあり、一つの地域集団が形成されていたと考えられ、下佐野遺跡（註24）や万福寺遺跡（註25）などの調査成果は今後の研究に必要な具体的資料を提供していると言えよう。

水田址は本遺跡の南東部沖積地でＢ軽石下の水田址が検出されている。八幡原大鼻・稲荷遺跡では長方形区画の水田が検出されている。矢中地区（註26）では広い範囲にわたり調査が行われ、浅間B軽石に覆われた水田址やこれらに伴う水路を調査している。下斉田遺跡でもＡ・Ｂ区において浅間山Ｂ軽石層の堆積が認められ、直下に水田土壌らしきものも認めているがトレンチ調査のために面的な確認はなし得なかった。

奈良・平安時代の集落は綿貫遺跡において数十軒の住居址を調査しており、さらに東西17ｍ、南北14ｍの土壇状の遺構が検出されており周辺からは大量の瓦片が確認され、何等かの建物址が存在したと考えられる。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡　　国土地理院（高崎）五万分の１使用

1　諏訪甲341号古墳
2　天神山古墳
3　灰塚遺跡
4　稲荷山古墳
5　八幡原大鼻・稲荷塚遺跡
6　八幡原Ａ遺跡
7　八幡原Ｂ遺跡
8　前原1052号墳
9　若宮八幡北古墳
10　若宮古墳群
11　下郷遺跡
12　宇貫古墳群
13　上之手薬師前古墳
14　若王子古墳
15　角淵古墳群
16　梨ノ木山古墳
17単配山古墳
18　天神古墳
19　鈴ノ宮遺跡
20　元島名将軍塚古墳
21　淵ノ上遺跡
22　御伊勢山古墳
23　下滝古墳群
24　綿貫遺跡群
25　観音山古墳
26　普賢寺裏古墳
27　不動山古墳
28　堀米前・不動山東遺跡
29　岩鼻二子山古墳
30　柴崎蟹沢古墳
31　矢中村東Ｂ遺跡
32　長賀寺古墳
33　大道南古墳
34　飯玉山古墳
35　大応寺遺跡
36　温井遺跡

Ⅱ．周辺の地形と遺跡

中世以降についてはいちいち取り上げないが、付近には岩鼻陣屋跡を初めとして元島名城跡、元島名内出跡などが知られる。

表　1　　周辺の遺跡一覧表

	遺　　跡　　名	内　　容
1	諏訪甲341号古墳	下斉田遺跡の西に近接する小円墳。
2	天神山古墳	下斉田遺跡の西に位置し、近接する。
3	灰塚遺跡	昭和50年度に高崎市教育委員会で調査。古墳時代から平安時代にかけての住居址約30軒を検出。
4	稲荷山古墳	八幡原B遺跡の西に位置する。八幡原古墳群に含まれる。
5	八幡原大鼻・稲荷塚遺跡	滝川の右岸に位置しており、八幡原Ａ・Ｂ遺跡の東側に接する。古墳時代後期を中心とする集落。
6	八幡原Ａ遺跡	井野川左岸台地上に位置。縄文前期諸磯ｂ式期の住居址、掘立柱建物址、中世の溝等多数検出。
7	八幡原Ｂ遺跡	井野川左岸台地上に位置。中世の居館、溝等多数あり。
8	前原1052号墳	若宮古墳群の中に含まれ、若宮北古墳の北西に近接。
9	若宮八幡北古墳	前方後円墳。全長71.5ｍ、墳丘長46.3ｍで長方形の周堤帯を持つ。
10	若宮古墳群	井野川と烏川が合流する左岸に広がる古墳群で、前述した８・９も含まれる。
11	下郷遺跡	烏川左岸台地上に位置。古墳時代前期の方形周溝墓を始め、古墳、住居址、土壙等が検出されている。特に全長46ｍの前方後方墳SZ42と推定墳丘長約80ｍのSZ46は、興味ある変遷過程を示すものとして注目される。
12	宇貫古墳群	若宮古墳群の東に位置する。
13	上之手薬師前古墳	宇貫古墳群に含まれる。
14	若王子古墳	径10～15ｍの円墳であるが、かなり平夷されている。土器、直刀等出土。
15	角淵古墳群	烏川と神流川の合流する付近、玉村町角淵にある小円墳群。
16	梨ノ木山古墳	径約40ｍの円墳と思われていたが、調査の結果２重の濠を巡らす前方後円墳と判明。主体部は竪穴式と思われ、副葬品として直刀、勾玉、石製模造品などが発見されている。
17	軍配山古墳	昭和５年に発掘されている。築造時は基壇部が低い二段築造の円墳と思われる。高さ６ｍ、径40ｍ。出土遺物は内行花文鏡２面の他に、玉類、刀、鉄鏃、鉄斧などが発見されている。河原石と粘土で固められた槨を持つ。４世紀末に比定される。
18	天神古墳	利根川右岸。
19	鈴ノ宮遺跡	井野川左岸台地上に位置。弥生時代から平安時代にかけての集落跡、住居址、方形周溝墓、土壙、溝等多く検出している。特に弥生時代から続く墳墓の流れは四隅が切れる形から、方形、前方後方形、さらには円墳と興味ある資料が検出されている。
20	元島名将軍塚古墳	前方後方墳。全長91ｍ、後方部辺51ｍ、前方部長40ｍ、明治44年に発掘され粘土槨内から鏡１、石釧、刀、鉋などが出土。さらに昭和55年に高崎市教育委員会によって周堀の一部が調査され、墳丘の構築状況などが明らかにされ、周堀中からは底部穿孔の二重口縁壺が出土している。高崎市指定史跡。
21	淵ノ上遺跡	住宅の建設に伴う確認調査により古墳時代の住居址の存在が確認された。
22	御伊勢山古墳	前方後円墳。全長30ｍ、横穴式両袖型石室を持つ。５世紀代の築造。下滝古墳群内。
23	下滝古墳群	将軍塚古墳の南に有り、御伊勢山古墳を含む２基の前方後円墳を中心に多くの円墳から成る古墳群。
24	綿貫遺跡群	観音山古墳の西側一帯を占める。土地改良に伴い昭和58年度に高崎市教育委員会によって調査が行われた。その結果古墳時代前期から奈良時代、平安時代の住居址、中世の溝等が検出されているが、興味を引くものとして布目瓦を伴う土壇状の遺構がある。
25	観音山古墳	前方後円墳。全長97ｍ、後円径61ｍ、後円高9.6ｍ。切石角閃石安山岩両袖型横穴式石室。２段築造で、２重の堀を持つ。墳丘には祭人や武人などの埴輪群が配列されていた。また、出土した鏡や銅製水瓶は東アジアとの強い交流を窺わせている。国指定史跡。
26	普賢寺裏古墳	前方後円墳。墳丘長約70ｍ。
27	不動山古墳	前方後円墳。全長94ｍ、後円部径54ｍ、高さ10ｍ、前方南端部幅56ｍ、高さ９ｍ。墳丘は二段構築で後円部寄りに造り出しあり、主体部は舟形石棺。
28	堀米前遺跡・不動山東遺跡	不動山古墳の北に位置する。病院の建設に伴い調査が行われたもので、両者は同一の遺跡と考えられる。古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての住居址を中心に検出している。堀米前遺跡では古式の須恵器が、不動山東遺跡では叩き目の残る土師器の甕が出土している。
29	岩鼻二子山古墳	前方後円墳。全長約120ｍ、主体部は舟形石棺、埴輪列有り、神獣鏡、太刀、鉄鏃、鉄鏃、槍、石製模造品等出土、現在は消滅。
30	柴崎蟹沢古墳	円墳または方墳。明治43年頃に平夷、□始元年銘の三角縁神獣鏡の他に鏡３面、鉄斧、鉾等出土。この地における初現的なものとして注目される古墳である。
31	矢中村東Ｂ遺跡	前方後方形の周溝墓が検出されている。
32	長賀寺山古墳	前方後円墳。全長約50ｍで周堀を巡らす。
33	大道南古墳	総覧記載。旧倉賀野村75号墳。横穴式両袖形石室を持つ。1980年調査。ガラス小玉、鉄鏃、刀子等出土。
34	飯玉山古墳	前方後円墳。全長30ｍ。
35	大応寺遺跡	古墳時代中期から後期にかけての住居址が30軒検出されている。
36	温井遺跡	鏑川と烏川が形成する沖積微高地上に位置する古墳時代の集落跡。住居址37軒の他土壙、溝等を検出している。

(註１) 前期古墳。「□」始元年陳是作の銘を持つ舶載四神四獣鏡・獣文帯三神三獣鏡製内行花文鏡など鏡３面と、鉄斧、槍等を出土している。墳丘は現在は削平され失われている。
(註２) 元島名将軍塚古墳　高崎市文化財調査報告書　第22集　1981（昭56）年
(註３) 史跡観音山古墳　1981（昭56）年
(註４) 不動山古墳　梅沢重昭「群馬県群馬郡綿貫不動山古墳」年報18　日本古考学協会　1970（昭45）年
(註５) 津金沢吉茂、飯島義雄、大久保美加　群馬県高崎市岩鼻町「群馬の森」を中心とする地域の歴史について　群馬県立歴史博物館紀要第２号　1981（昭56）年
(註６) 下郷　群馬県教育委員会　1980（昭55）年
(註７) 真下高幸他「温井遺跡」群馬県教育委員会　1981（昭56）年
(註８) 八幡原Ａ・上滝・元島名Ａ遺跡　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1981（昭56）年
(註９) 註８に同じ
(註10) 新保遺跡Ⅰ大溝編　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986（昭61）年
(註11) 日高遺跡　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982（昭57）年
(註12) 堀米前遺跡　昭和53年高崎市教育委員会調査。古墳時代中期の住居址、土壙等を検出。なお昭和61年４月～６月にかけて本遺跡の西側を調査しており古墳時代初頭から平安時代にかけての竪穴住居址６軒、井戸１基、溝４条、集石状遺構１、土壙37基を検出している。
田村孝、清水秀紀　不動山東遺跡　不動山東遺跡調査会　1986（昭61）年
(註13) 元島名遺跡　高崎市文化財調査報告書　第６集　1979（昭54）年
(註14) 天田・川押遺跡　〃　第41集　1983（昭58）年
(註15) 山鳥・天神遺跡　〃　第56集　1984（昭59）年
(註16) 万相寺遺跡　〃　第66集　1985（昭60）年
(註17) 鈴ノ宮遺跡　〃　第４集　1978（昭53）年
(註18) 矢島・竹之内遺跡　昭和63年刊行予定
(註19) 灰塚遺跡　昭和50年高崎市教育委員会発掘調査。
(註20) 八幡原遺跡　高崎市文化財調査報告書　第3集　1974（昭49）年
(註21) 八幡原大鼻・稲荷遺跡　高崎市文化財調査報告書　1984（昭59）年
(註22) 矢中村東遺跡　高崎市文化財調査報告書　第57集　1984（昭59）年
(註23) 綿貫遺跡　高崎市文化財調査報告書第47集　1985（昭60）年
(註24) 下佐野遺跡　上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第６集（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　縄文時代から平安時代までの住居址等が調査されている。玉造工房址を含む古墳時代の住居址などが調査されている。　1986（昭61）年
(註25) 倉賀野万福寺遺跡　高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会　1983（昭58）年
(註26) 矢中遺跡群（Ⅰ）高崎市文化財調査報告書　第28集　1981（昭56）年
天王前遺跡　〃　第35集　1982（昭57）年
村間・富士塚前Ａ遺跡　〃　第49集　1984（昭59）年
柴崎前・村北Ｂ遺跡　〃　第52集　1984（昭59）年
平安時代の水路、水田址、古墳時代の方形周溝墓等を検出している。遺物としては銅製の古印「物部私印」出土。

参考文献

・木崎喜雄他　群馬のおいたちをたずねて（上）（下）上毛新聞社　1977（昭52）年
・上毛古墳總覧　群馬県史跡名勝天然記念物調査報告書第五集　群馬県　1938（昭13）年
・前澤輝政　毛野国の研究上・下　古墳時代の解明　1982（昭57）年
・群馬県史　資料編纂　県史編纂委員会　1983（昭58）年

Ⅲ．下斉田・滝川Ａ遺跡

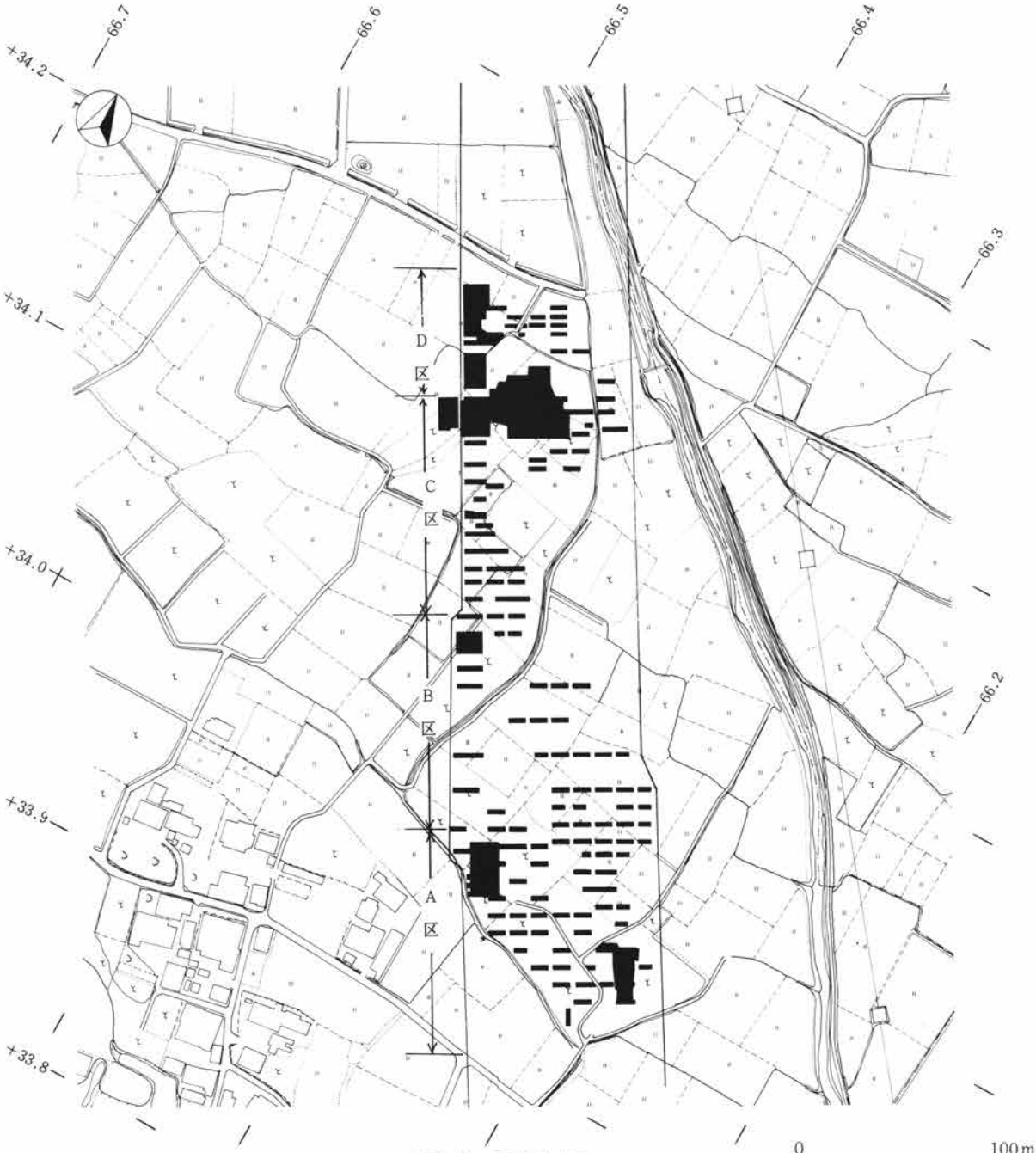
１．調査の方法と経過

(1) 調査の経過と遺跡の概要

発掘調査は二次にわたり実施した。

第一次調査（昭和49年11月14日～昭和50年２月４日）

遺跡地は桑畑の微高地と、水田の低地が交互に繰り返された地形となっている。第一次調査では、遺構確



第２図　調査区域図

認のためのトレンチ調査から開始した。

道路の中心杭の２点を結んだ線を基軸とし、グリッドを設定した。遺構の南東隅にグリッドの原点を置き南北をＸ軸、東西をＹ軸とし、両軸とも最小単位を２ｍに区切り数字を配した。数字は東から西に、同じく南から北へ大きくなるように配したが、長軸が全体で400ｍと長いため、100ｍごとに区切り、アルファベットを配した。グリッドの表記方法は（Ｘ軸、Ｙ軸）とした。便宜的に南からＡ～Ｄ地区と呼称することとした。

Ａ・Ｂ区の水田面の低地に、幅２ｍ、長さ４ｍのトレンチを８ｍごとに配置し、掘開を行うこととした。微高地の縁辺部から、浅間Ｂ軽石を覆土にもつ溝や、土壙状遺構とともに、Ｂ軽石下の黒色土を検出した。本遺跡を調査していた段階では、Ｂ軽石下の水田遺構について認識されていなかったため、調査に至っていない。

Ｃ地区にトレンチ調査を進めると、浅間A軽石を含む溝が多数検出された。

Ｄ地区においても、微高地に対するトレンチ調査を行う。古墳時代前期の竪穴住居址をはじめ、土壙、溝状遺構等を検出した。

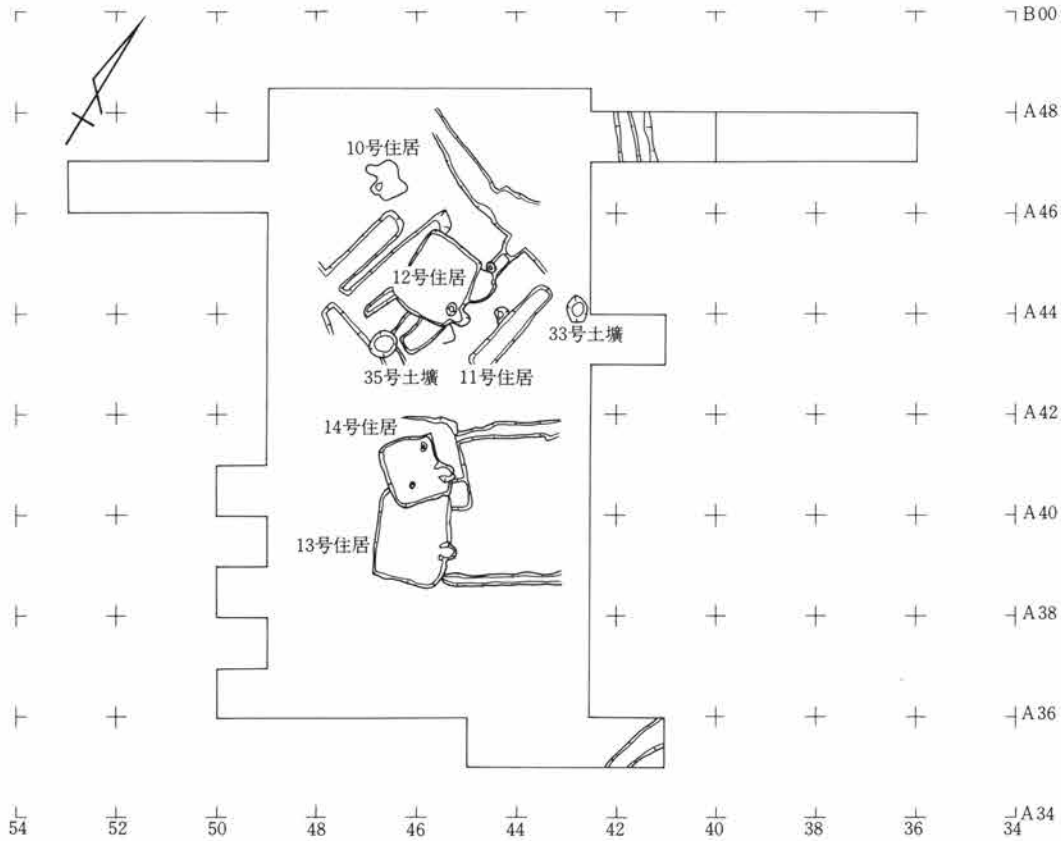
昭和50年になり、Ｂ～Ｄ地区西側の側道部分を優先的に調査するよう要請があったために調査を開始する。１～３号住居址、１～４号土壙を検出する。なお、Ｄ区の一部は滝川Ａ遺跡として登録されているが、下斉田遺跡と区別できないため、併せて調査を行う。A・B軽石を覆土に持つ溝状遺構が重複して発見されたが、現行の水田用小水路と重複していることが判明した。

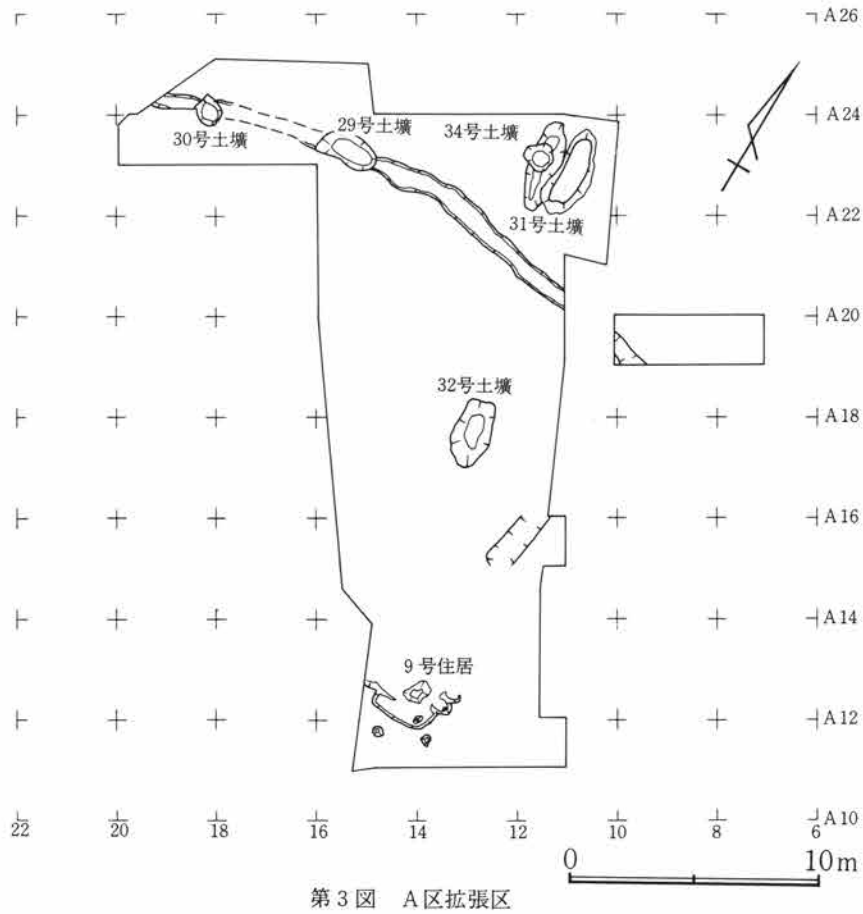
第二次調査（昭和50年９月22日～昭和51年２月28日）

第二次調査では、Ａ・Ｂ地区の微高地に対するトレンチ調査から再開し、続いてＣ・Ｄ地区のトレンチ調査を行う。Ａ地区では、竪穴住居址、溝状遺構、形象埴輪を出土する土壙等を検出する。

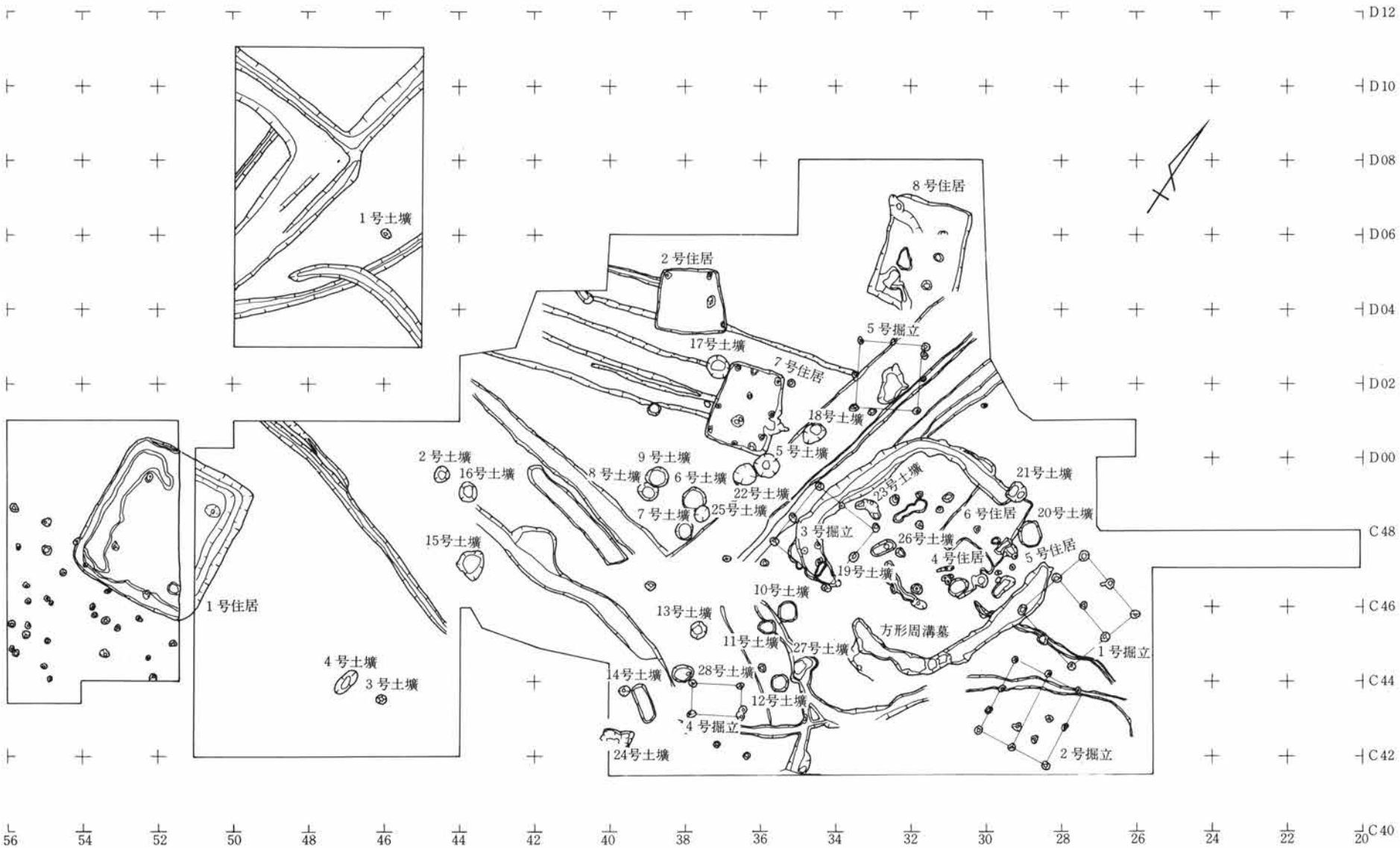
Ｃ・Ｄ地区の微高地上からは、竪穴住居址や方形周溝墓をはじめ、掘立柱建物址、小鍛冶遺構、土壙墓、溝状遺構等を検出する。なお、1号住居址は第一次調査の側道部分から発見されたが、西側のほとんどが路線外であったため、今回の調査で隣地を借地した上で、全面調査を行った。

註　関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ　群馬県教育委員会　1975（昭50）年
　　〃　　Ⅲ　〃　1976（昭51）年


B00
A48
A46
A44
A42
A40
A38
A36
A34
10号住居
12号住居
33号土壙
35号土壙
11号住居
14号住居
13号住居
54
52
50
48
46
44
42
40
38
36
34


A26
A24
A22
A20
A18
A16
A14
A12
A10
30号土壙
29号土壙
34号土壙
31号土壙
32号土壙
9号住居
22
20
18
16
14
12
10
8
6
0
10m

第３図　Ａ区拡張区


D12
D10
D08
D06
D04
D02
D00
C48
C46
C44
C42
C40
56
54
52
50
48
46
44
42
40
38
36
34
32
30
28
26
24
22
20
1号土壙
2号住居
17号土壙
7号住居
8号住居
5号掘立
18号土壙
5号土壙
2号土壙
16号土壙
9号土壙
8号土壙
6号土壙
22号土壙
7号土壙
25号土壙
23号土壙
21号土壙
6号住居
20号土壙
3号掘立
26号土壙
4号住居
5号住居
19号土壙
15号土壙
10号土壙
1号住居
13号土壙
11号土壙
27号土壙
方形周溝墓
1号掘立
4号土壙
3号土壙
14号土壙
28号土壙
12号土壙
4号掘立
24号土壙
2号掘立
0
10m

第4図　C・D区拡張区

2．基本土層（第５図）

遺跡地内の地形は若干の起伏を示しており、やや高まった微高地と低地部とでは層序に若干の差が認められる。Ｂ軽石層（註１）は差はあるがどちらにも確認され、表土からこのＢ軽石層までは基本的には差がない。軽石下については粘性土を基調としてはいるが色調、混入物に違いが見られ、３ないし４層に分けられる。微高地ではＣ軽石（註２）の堆積が見られる。以下ローム漸移、ローム層またはシルト層となる。以上が基本的な層序であるが、場所によって若干の差が認められる。

Ⅰ層　Ａ軽石（註３）混入の灰褐色土で表土層。

Ⅱ層　Ｂ軽石自然堆積層より上の褐色土層で、２～３層に細分される。

Ⅲ層　微高地は３層に低地は４層に細分される。

微高地

Ⅲ－１b層　粘性のある黒色土層で鉄分が凝集し、焦げ茶色を帯びる。

Ⅲ－２b層　黒色土層で部分的に褐色を帯びる。Ｃ軽石が認められる。

Ⅲ－３b層　第１地区では黒色土層で、第２地区では焦げ茶色に近い黒色土層。

低　地

Ⅲ－１a層　粘性黒色土層で、粒状に凝集した鉄分を多量に含む。

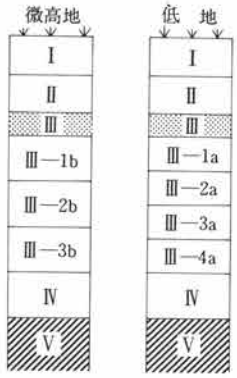
Ⅲ－２a層　粘性黒色土層で、褐色ないしは灰褐色を帯びる。

Ⅲ－３a層　粘性黒褐色土層で、ローム混入のため褐色を帯びる。

Ⅲ－４a層　強い粘性黒色土層で、鉄分大凝集斑を多く作る。第２地区では砂利を多量に含むところが多い。

Ⅳ層　ローム漸移層。低地では黒色土と粘土ブロックの混土。

Ⅴ層　微高地はローム層、低地は浅いローム（再堆積）またはシルト層。



第５図　基本土層図

（註１）浅間山を給源とする降下軽石で天仁元年（1108）降下と考えらている。
（註２）浅間山を給源とする降下軽石で４世紀初めに降下したと考えられている。
（註３）浅間山を給源とする降下軽石で天明三年（1783）の降下。

3．遺構と遺物

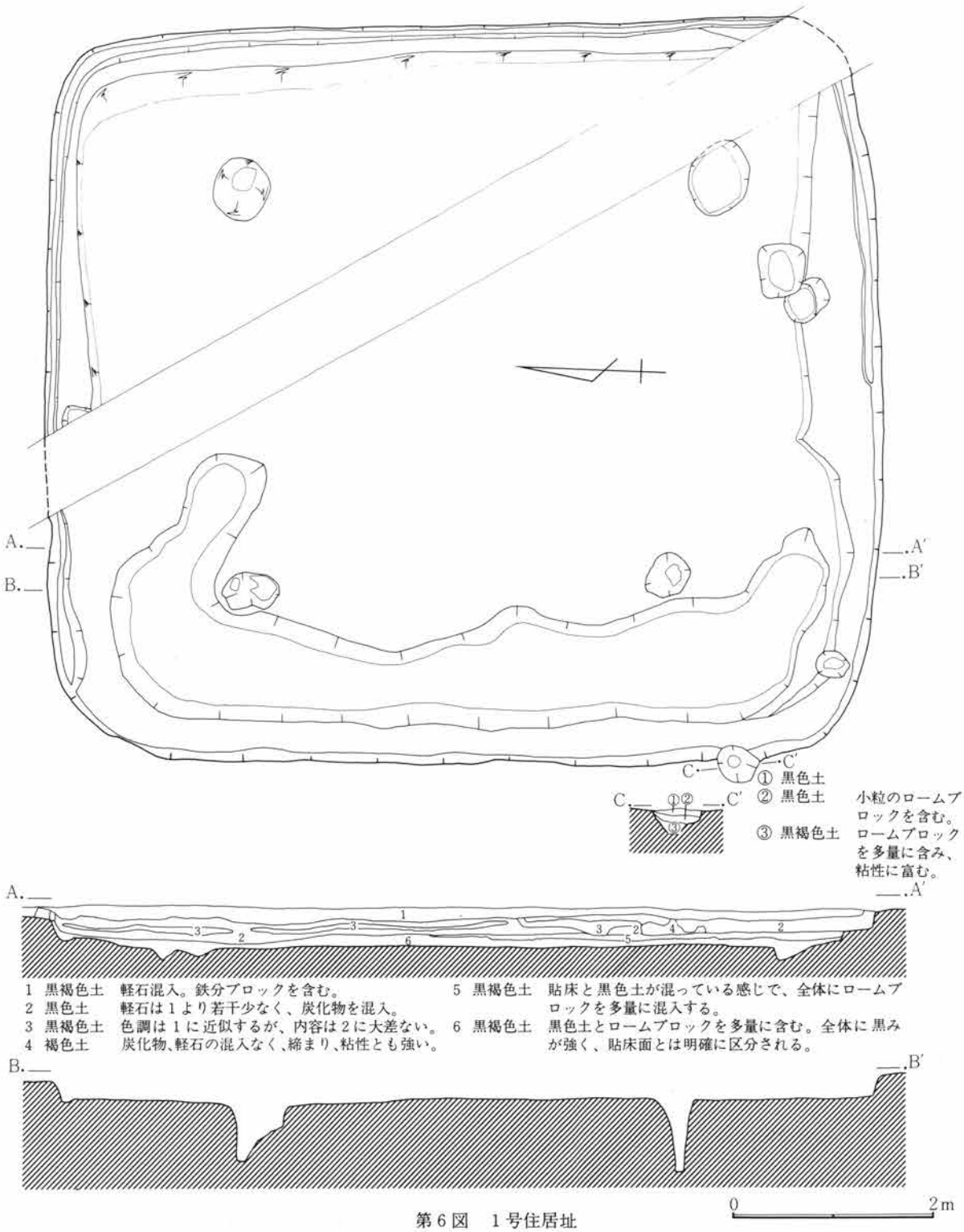
検出された遺構の内訳は竪穴住居址14軒、方形周溝墓１基、土壙35基、掘立柱建物址５棟、小鍛冶遺構１、溝22条である。その他近世の溝、掘り込み等により遺構の遺存状況は余り良くなかった。

(1)　住居址

検出した総軒数は14軒である。時期別に見ると、古墳時代初頭が３軒、奈良・平安時代が８軒、不明３軒である。この内５・９・10・11号住居址については遺存状況が極めて悪く、住居址一部分のみの調査である。

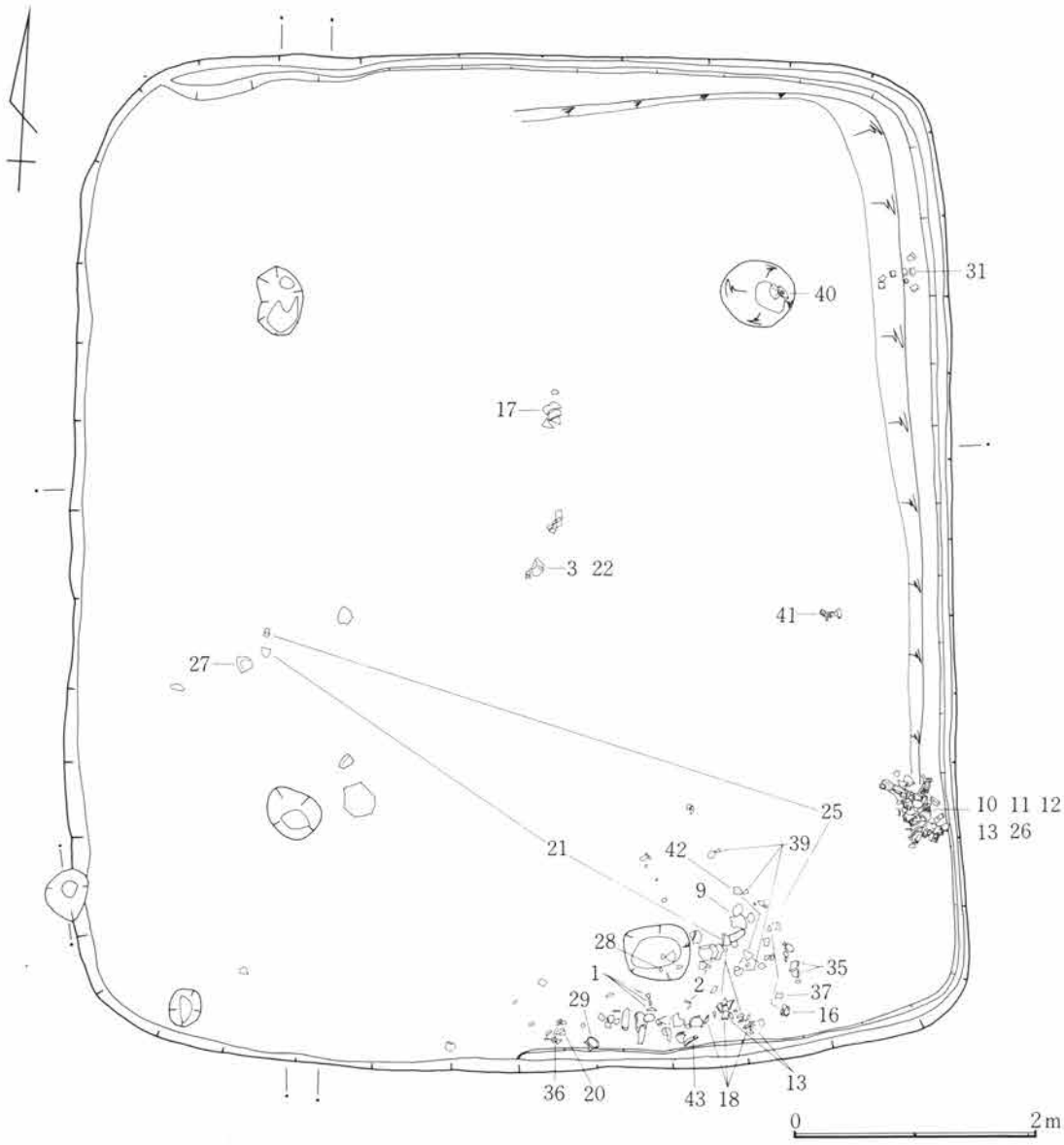
１号住居址（第６図）

本住居址はＣ区西拡張区49～54－C45～D00グリッドにて検出した。西側半分が調査区外へ延びていたためにその部分は後日調査を行った。平面形状はやや南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は830×726㎝で壁高は平均20㎝、主軸方位はＮ－５°－Ｗである。本遺跡で検出された住居址中最大規模を持つ。床面は比較的平



第6図　1号住居址

坦であるが最初に調査を行った北側半分については床面の確認が困難であった。各壁の掘り込みは垂直に近い。壁周溝は幅10～15cmで北側半分程に廻る。柱穴はほぼ対角線上に4本が検出された。それぞれの規模はPit 1が57×37cm、深さ55cm。Pit 2が46×39cm、深さ73cm。Pit 3が76×60cm、深さ16cm。Pit 4が60×57cm、深さ39cmである。炉は中央やや北よりに検出された。地床炉で焼土が若干認められた。遺物は住居址の南東コー

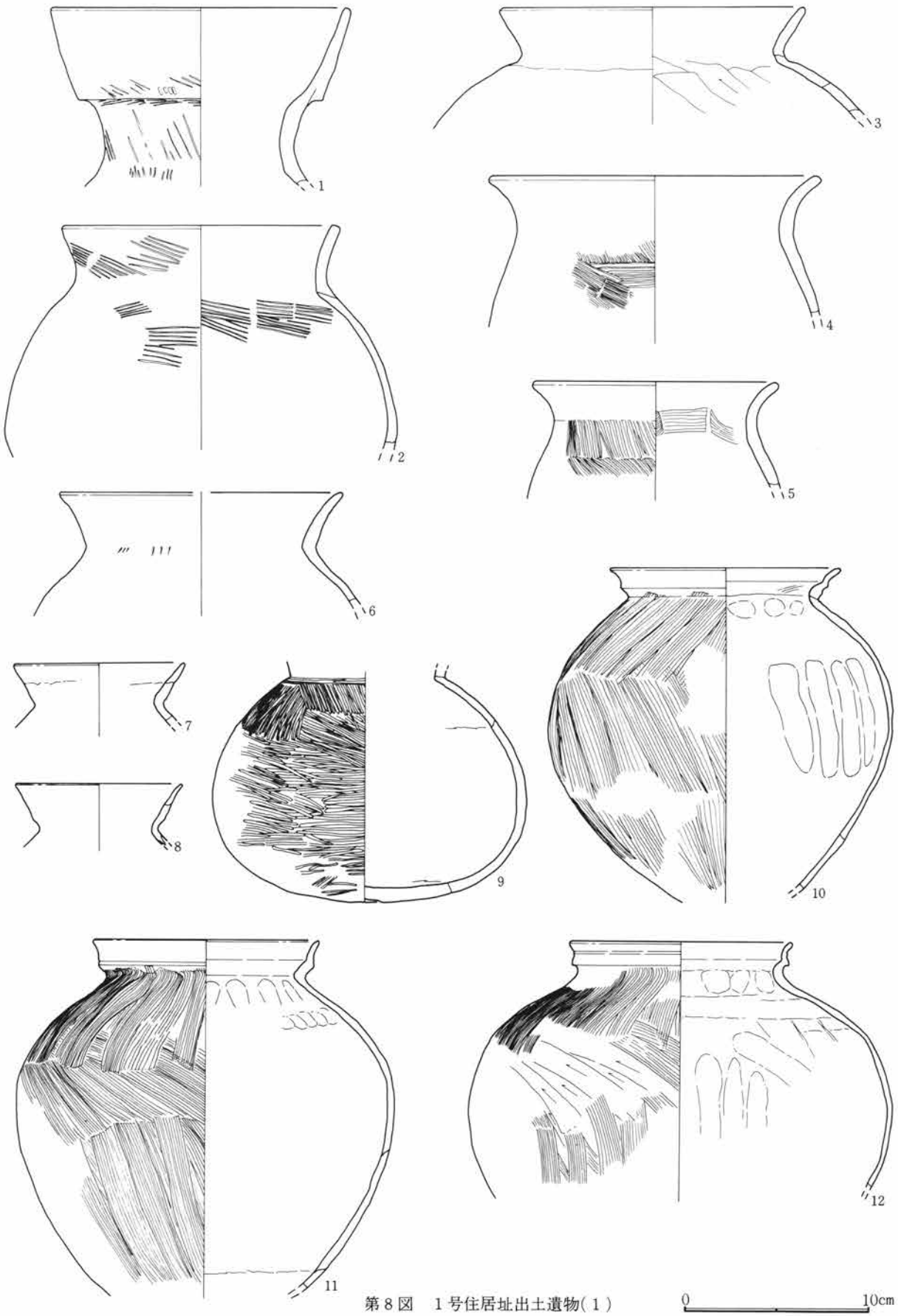


第７図　１号住居址遺物出土状態

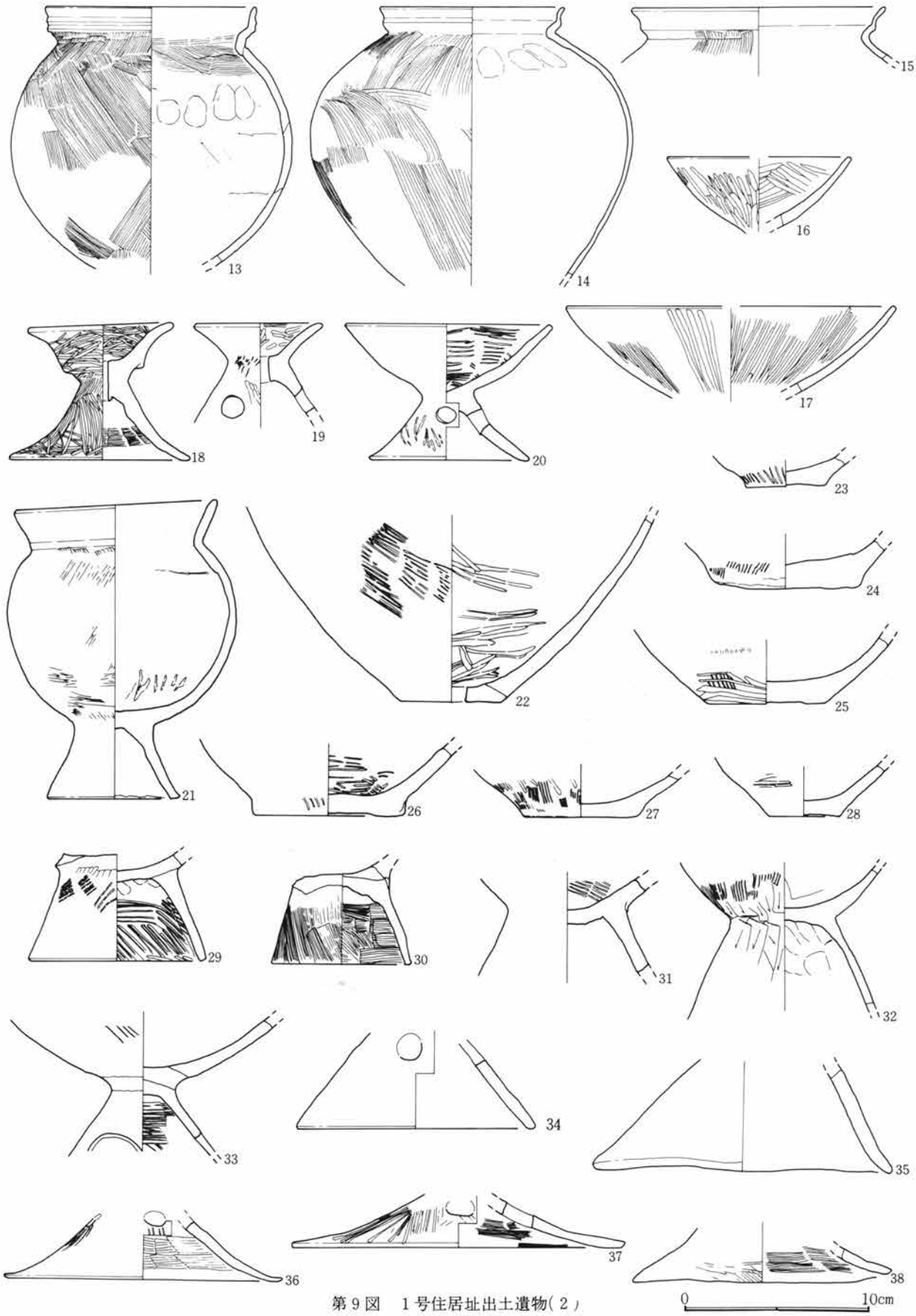
ナー部分にＳ字甕、高坏、器台等が多く出土したが、ほとんどが床面との間に間層を挟む。時期は古墳時代初頭に比定される。

表　2　　1号住居址遺物観察表

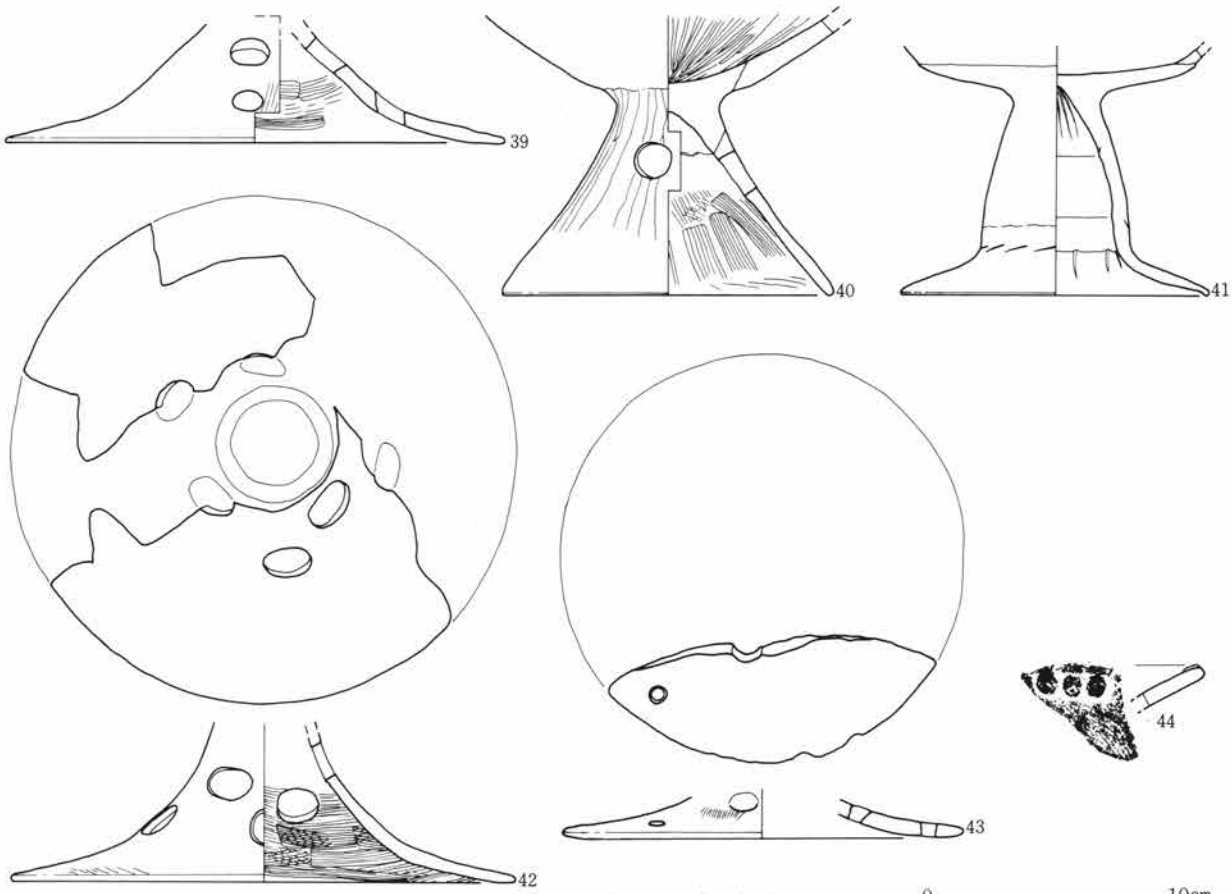
番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	成・整　形　の　特　徴	胎土・焼成	色　調	備　考
1	壺	口径　16.2 器高　—— 底径　——	頸部は直気味に立ち、折り返し部はやや内彎気味に外へ開く。	外面　口縁部刷毛目後、横篦磨き。頸部縦刷毛目。 内面　横刷毛目後、横篦磨き。	砂粒を混入やや軟弱	橙色	
2	甕	口　15.0 高　—— 底　——	肩部余り張らず、頸部緩く締まり口縁部外反する。	口縁部　内面横撫で、外面斜め刷毛目 外面　胴部横刷毛目。 内面　胴部横篦撫で、上部横刷毛目。	小石（５㎜前後）混入やや軟弱	橙色	
3	甕	口　(16.1) 高　—— 底　——	丸みのある肩部より、口縁部は強く「く」の字に外反する。	外面　口縁部横撫で。肩部篦撫で。 内面　肩部篦撫で。	砂粒を含む良	橙色一部黒褐色	



第８図　１号住居址出土遺物(１)



第９図　１号住居址出土遺物（２）



第10図　1号住居址出土遺物(3)

0　10cm

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
4	甕	口径（18.0） 器高 —— 底径 ——	頸部丸みを持って外反する。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　篦撫で。	細砂粒を含む	橙色	
5	甕	口　（13.2） 高 —— 底 ——	なだらかな肩部からやや締まり、口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　刷毛目横撫で。	小石を混入 良	橙色	刷毛目粗い
6	甕	口　（15.3） 高 —— 底 ——	頸部「く」の字にくびれ、口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　調整不明。 内面　刷毛目。	砂粒・石粒(1～2㎜)含む 普通	橙色	器外面荒れている
7	小型壺	口　（ 9.2） 高 —— 底 ——	頸部「く」の字にくびれ口縁部外反する。口唇部薄くなる。	口縁部　横撫で。	細砂粒を混入 良	橙色	
8	小型壺	口　（ 9.0） 高 —— 底 ——	頸部「く」の字にくびれ口縁部やや膨らみを持って外反する。	口縁部　横撫で。	細砂粒を混入 良	橙色	
9	壺	口 —— 高 —— 底　2.2	胴部下位で膨らみ、最大径を持つ。底部は平に近い丸底を呈し、中央が丸く凹む。	外面　頸部横篦磨き。肩部縦篦磨き、胴部中位下斜め又は横篦磨き。 内面　横撫で。	微細砂粒混入 堅緻	下部黒褐色、上部淡褐色	
10	S字甕	口　12.3 高 —— 底 ——	口縁部開き気味に立ち、端部外反する。胴部丸みを持ち上半部に最大径。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　縦指撫で、頸部刷毛目後篦撫で。	砂粒を含む 良	暗赤褐色	
11	S字甕	口　（12.0） 高 —— 底 ——	口縁部開き気味に立ち、端部外反する。胴部丸みを持ち上半部に最大径。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　指撫で、肩部指押え痕。	石粒（2～3㎜）を混入 良	灰褐色	
12	S字甕	口　（12.0） 高 —— 底 ——	口縁部直気味に立ち、端部やや外反。胴上半部に最大径を持ち、肩部張る。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目、一部篦削り。 内面　縦指撫で、頸部横篦撫で。	細砂・石粒を少量混入 良	黒褐色	

Ⅲ．下斉田・滝川Ａ遺跡

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
13	S字甕	口径 11.4 器高 —— 底径 ——	球形の胴部、頸部「く」の字に締まり、口縁部はほぼ直に立つ。外面に浅い凹線を２本持つ。	口縁部　横撫で。 外面　胴部細い斜め刷毛目。 内面　胴部斜め篦削り、肩･頸部横刷毛目。	粗砂(1~5mm)を多量に含む 良	橙色	
14	S字甕	口 10.0 高 —— 底 ——	口縁部直気味に立ち、口唇部やや外反。胴部やや上位で最大径を持つ。	口縁部　横撫で。 外面　胴部刷毛目。 内面　指撫で肩部指押え､頸部横篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	暗赤褐色	
15	S字甕	口 (13.8) 高 —— 底 ——	口縁下段外傾し、上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　篦撫で。	石粒・砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	
16	高　坏	口 (10.0) 高 —— 底 ——	やや丸みを持って外反する。	外面　縦篦磨き。 内面　横篦磨き。	細砂粒を含む 良	灰黒色	坏部のみ
17	高　坏	口 (18.0) 高 —— 底 ——	内彎気味に外傾して立ち上がる。	外面　口縁部横、以下縦篦磨き。 内面　縦篦磨き。	砂粒を含む 良	橙色	坏部のみ
18	器　台	口 7.5 高 7.2 底 9.7	器受け部は段を持ち外反する。胴部は「ハ」の字に開き、裾は大きく開く。	外面　器受け部横篦磨き、脚部刷毛目後篦磨き。 内面　器受け部横篦磨き脚部横刷毛目。	細砂・粗砂粒若干含む 良	橙色	
19	器　台	口 7.0 高 —— 底 ——	器受け部は小さく、直線的に開く。円形の透し孔３個。	外面　器受け部上半横撫で、以下篦磨き。 内面　器受け部篦磨き、脚部篦撫で。	細砂粒を含む 良	橙色	
20	高　坏	口 (11.2) 高 7.3 底 8.3	杯部直線的に外傾する。脚部は「ハ」の字に開き低い。円形の透し孔３個。	外面　坏部、脚部ともに縦篦磨き。 内面　坏部横刷毛目後篦磨き、脚部篦撫で。	砂粒を混入 堅緻	褐色	
21	小　型 台付甕	口 11.0 高 15.8 底 7.2	胴部は丸みを持って立ち上がる。台部は外へ開く。	外面　胴部篦撫で、台部縦篦磨き。 内面　胴部・台部ともに篦撫で。	砂粒を混入 やや軟弱	橙色	
22	甑	口 —— 高 —— 底 (5.5)	平底から胴部緩く内彎して外傾する。孔は一つで径１cm。	外面　刷毛目後篦撫で。 内面　篦磨き。	小石を混入 堅緻	赤褐色	底部のみ
23	小型甕	口 —— 高 —— 底 4.1	小さめの底部から胴部は開く。	外面　刷毛目、底面篦磨き。 内面　刷毛目。	小石を混入 堅緻	褐色	底部のみ
24	壺	口 —— 高 —— 底 7.9	厚手で底面やや凹凸を持つ。	外面　刷毛目後篦磨き、底面篦磨き。 内面　篦撫で。	砂粒を混入 普通	明褐色	底部のみ
25	甕	口 —— 高 —— 底 6.1	外傾して立ち上がる。 底部外縁わずかに高まる。	外面　篦磨き。 内面　篦磨き。	小石を混入 堅緻	褐色 黒色	底部のみ
26	甕	口 —— 高 —— 底 8.0	厚みのある底部から外傾して立ち上がる。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　刷毛目後篦磨き。	砂粒を混入 やや軟弱	橙色	底面に糸痕
27	壺	口 —— 高 —— 底 (6.0)	底部より外反して立ち上がる。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　篦磨き。	細砂粒を含む 良	にぶい橙色	底部のみ
28	甕	口 —— 高 —— 底 3.8	小さい底部から外傾して立ち上がる。	外面　篦磨き。 内面　篦撫で。	小石を混入 堅緻	淡褐色	底部のみ
29	台付甕	口 —— 高 —— 底 9.6	やや膨らみを持って「ハ」の字に開く。	外面　篦撫で。 内面　台部斜め刷毛目。	砂粒を混入 堅緻	褐色	台部のみ
30	台付甕	口 —— 高 —— 底 (7.2)	「ハ」の字に開く。	外面　斜め刷毛目。 内面　甕底部篦磨き、台部横刷毛目。	砂粒を混入 堅緻	褐色	台部のみ
31	台付甕	口 —— 高 —— 底 ——	「ハ」の字に開く台部。	外面　篦撫で。 内面　底部刷毛目、台部篦撫で。	砂粒を混入 堅緻	黒褐色	台部のみ
32	S字甕	口 —— 高 —— 底 ——	「ハ」の字に開く台部から、「く」の字に折れ、外傾する胴部へ続く。	外面　篦削り後刷毛目。 内面　底面篦撫で、台部指撫で。	砂粒を多く含む	にぶい橙色	台部のみ

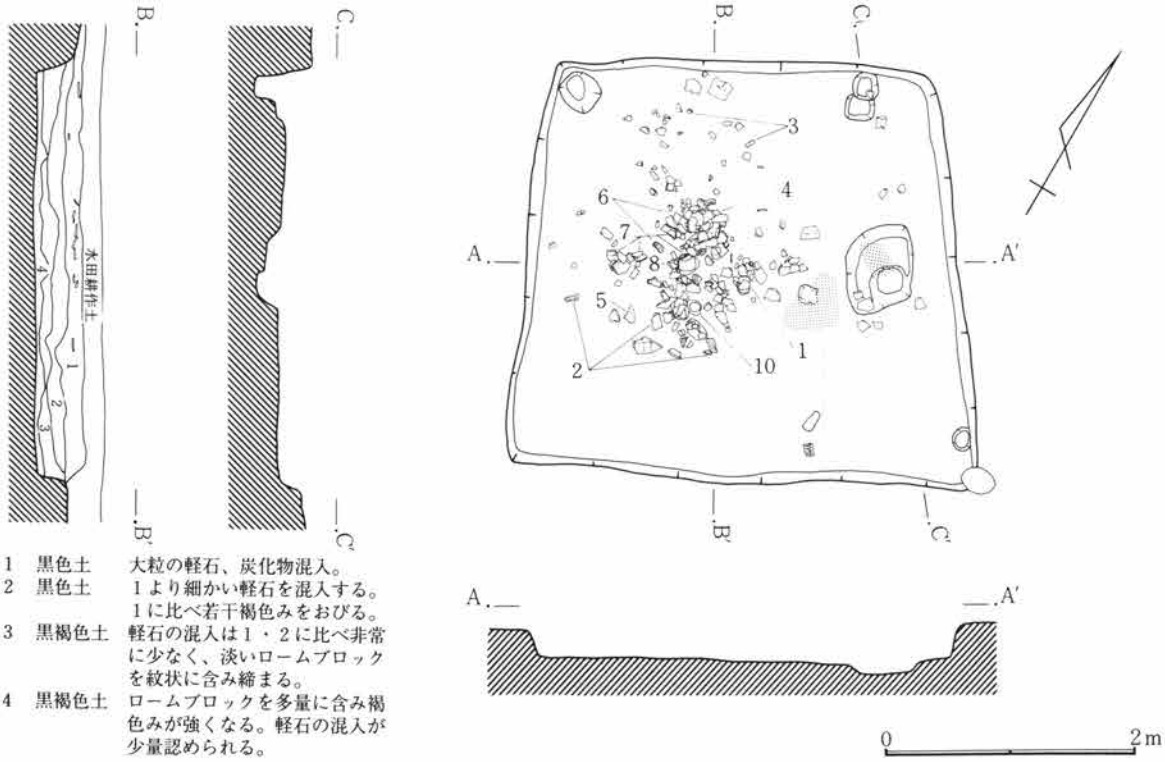
番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
33	高坏	口径 —— 器高 —— 底径 ——	坏部は直線的に外へ開く。脚部も直線的に開く。円形の透し孔3個か。	外面 篦磨き。 内面 坏部不明、脚部横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	外面風化している
34	高坏	口 —— 高 —— 底 (13.0)	「ハ」の字に直線的に開く。円形の透し孔。	外面 篦磨き。 内面 篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	脚部のみ
35	高坏	口 —— 高 —— 底 (16.2)	「ハ」の字に開くが、焼き歪みを生じている。	外面 器面荒れており、調整痕不明。 内面 器面荒れており、調整痕不明。	砂粒を多量に混入	にぶい橙色	二次焼成受け発泡脚の一部
36	高坏	口 —— 高 —— 底 15.1	大きく裾部広がる。円形の透し孔4個か。	外面 刷毛目後縦篦磨き。 内面 横刷毛目。	砂粒を含む 良	橙色	脚部のみ器面風化
37	高坏	口 —— 高 —— 底 (18.0)	横へ開く裾部。円形の透し孔。	外面 縦篦磨き。 内面 横刷毛目、端部篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	脚部のみ
38	高坏	口 —— 高 —— 底 (14.0)	やや膨らみを持って外へ開く。	外面 刷毛目。 内面 横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	脚部のみ焼き歪み有り
39	高坏	口 —— 高 —— 底 20.0	大きく裾部が広がる。円形の透し孔を2段に付す。	外面 篦磨き。 内面 横刷毛目。	砂粒を混入やや軟弱	橙色	脚部のみ
40	高坏	口 —— 高 —— 底 13.0	坏部やや丸みを持って開く。脚部大きく「ハ」の字に開く。円形の透し孔3個。	外面 篦磨き。 内面 坏部篦磨き、脚部斜め刷毛目。	細砂・粗粒を多量に含む やや甘い	橙色	脚部のみ
41	高坏	口 —— 高 —— 底 (12.4)	坏部は横へ開き弱い稜を持つ、柱部は膨らみを持ち裾部は横へ開き端部内側へ折れる。	外面 篦磨き。 内面 篦撫で、接合部絞り目残る。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	脚部のみ
42	高坏	口 —— 高 —— 底 20.0	大きく裾部広がる。円形の透し孔8個か。	外面 篦磨き。 内面 上半篦撫で、下半横刷毛目。	細砂粒を混入 堅緻	にぶい橙色	脚部のみ
43	高坏	口 —— 高 —— 底 (16.0)	横へ開く裾部。円形の透し孔。	外面 篦磨き。 内面 篦磨き。	小石を多量に含む 不良	橙色、裾部黒斑有り	脚部のみ裾部に補修孔？
44	壺	口 —— 高 —— 底 ——	直線的に外反。	口縁部 横撫で。 内縁端部に円形浮文。	砂粒を混入 普通	橙色	口縁部破片

2号住居址（第11図）

調査区37～38－D03～04グリッドに位置する。平面形状は小形で南辺がやや長い台形を呈し、規模は345×335cmで壁高は27cmである。主軸方位はN－36°－Wである。各壁は垂直に近く掘り込まれている。柱穴は不明であるが、北辺の両隅に小ピットが見られた。床面は比較的平坦である。炉は中央やや東よりに焼土が見られ、東側に接して40×30cm程の浅い掘り込みがある。出土遺物はほぼ中央に甕類を中心にまとまった状態で出土したが、いずれも覆土上層からの出土である。時期は古墳時代初頭である。

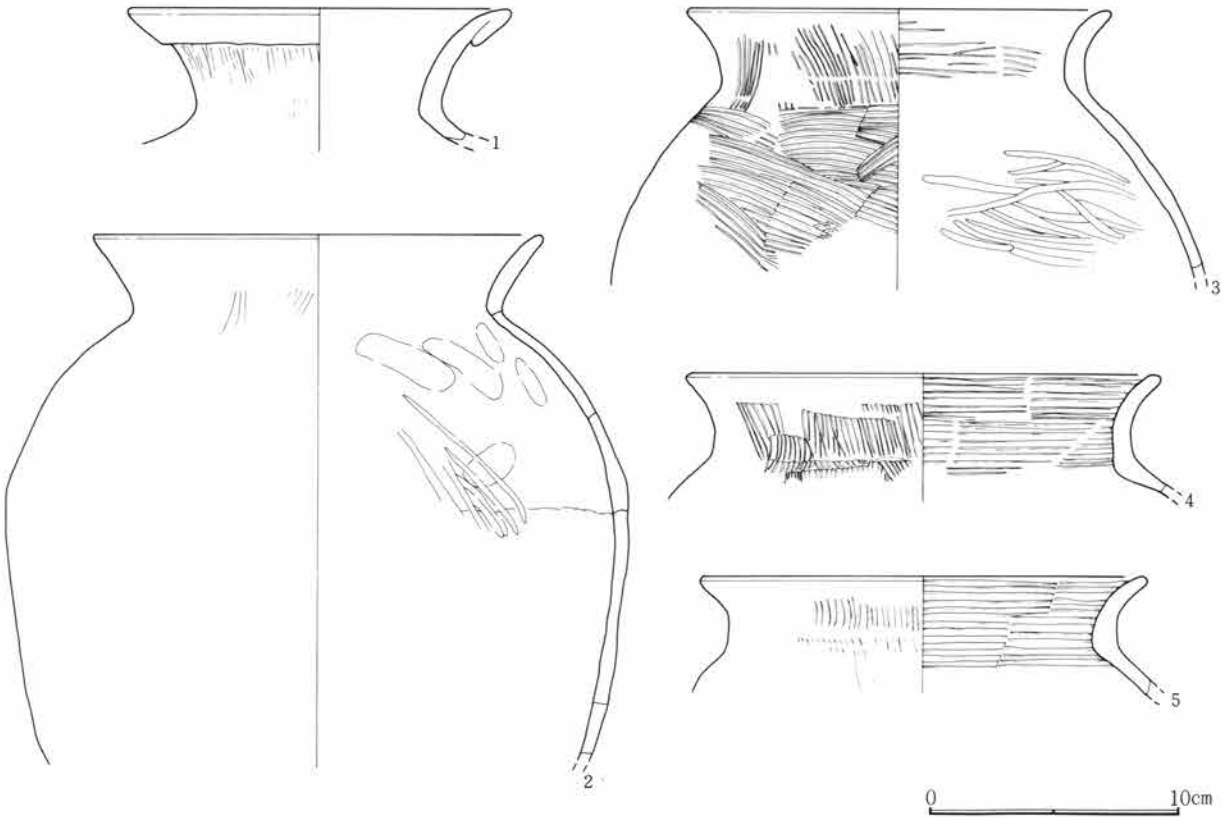
表 3　2号住居址遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	壺	口径 (15.3) 器高 —— 底径 ——	口縁部やや外傾して立ち上がり端部外反する。口縁部折り返し。	外面 折り返し部分横撫で、頸部縦刷毛目。 内面 刷毛目後篦撫で。	微細砂粒を含む 良	橙色	
2	甕	口 (18.0) 高 —— 底 ——	口縁部外反、頸部で「く」の字に締まり、胴上位でやや張る。	外面 刷毛目。 内面 篦撫で、肩部指頭圧痕。口縁部内面 刷毛目。	砂粒・石粒を多量に含む 良	にぶい橙色	器面荒れている
3	甕	口 (16.9) 高 —— 底 ——	口縁部端部が外反。肩部緩く開く。	口縁部 端部横撫で。 外面 頸部横、胴部斜め刷毛目。 内面 刷毛目後篦磨き。	砂粒・石粒(1～2mm)を含む 不良	にぶい黄橙色、褐灰色混り	

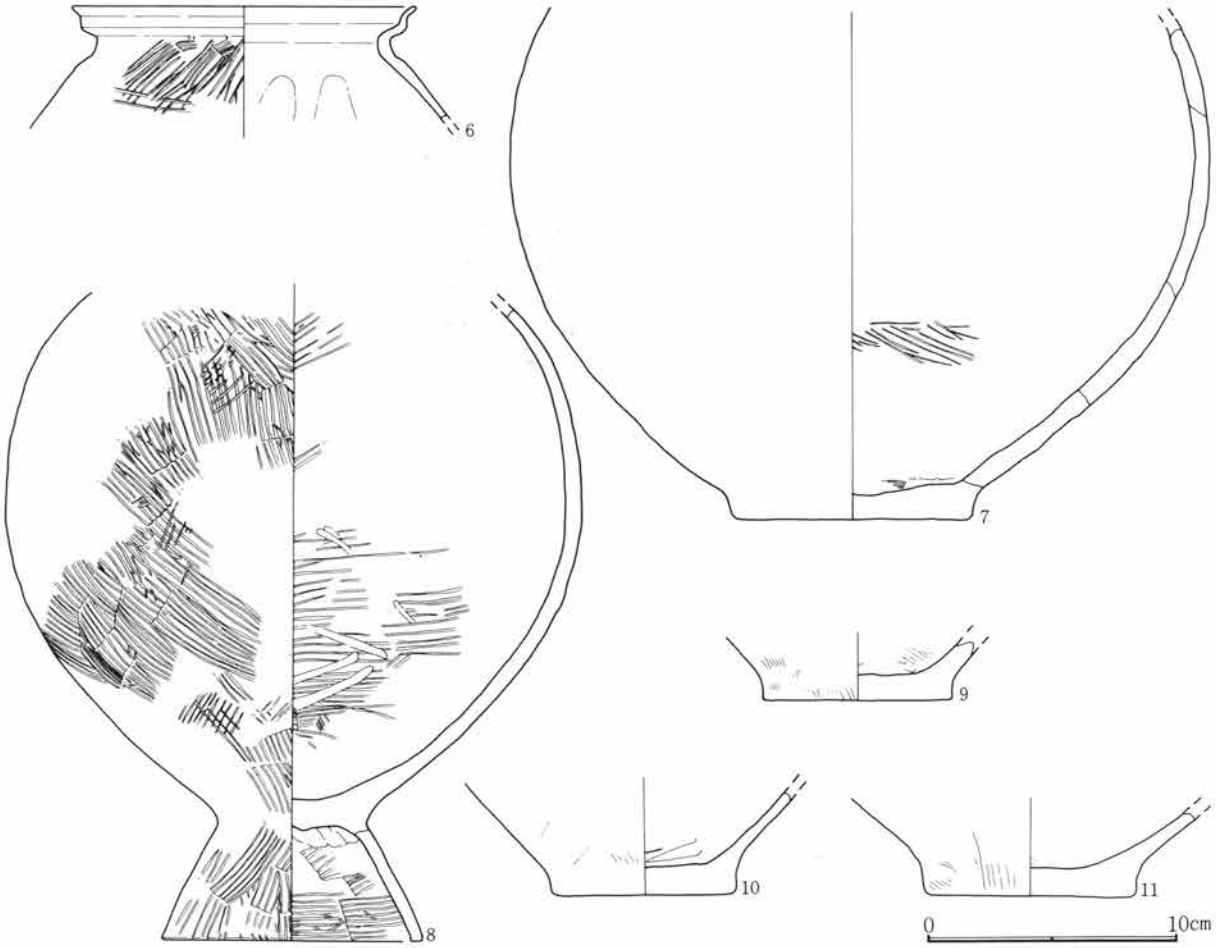


1　黒色土　大粒の軽石、炭化物混入。
2　黒色土　１より細かい軽石を混入する。１に比べ若干褐色みをおびる。
3　黒褐色土　軽石の混入は１・２に比べ非常に少なく、淡いロームブロックを紋状に含み締まる。
4　黒褐色土　ロームブロックを多量に含み褐色みが強くなる。軽石の混入が少量認められる。

第11図　２号住居址

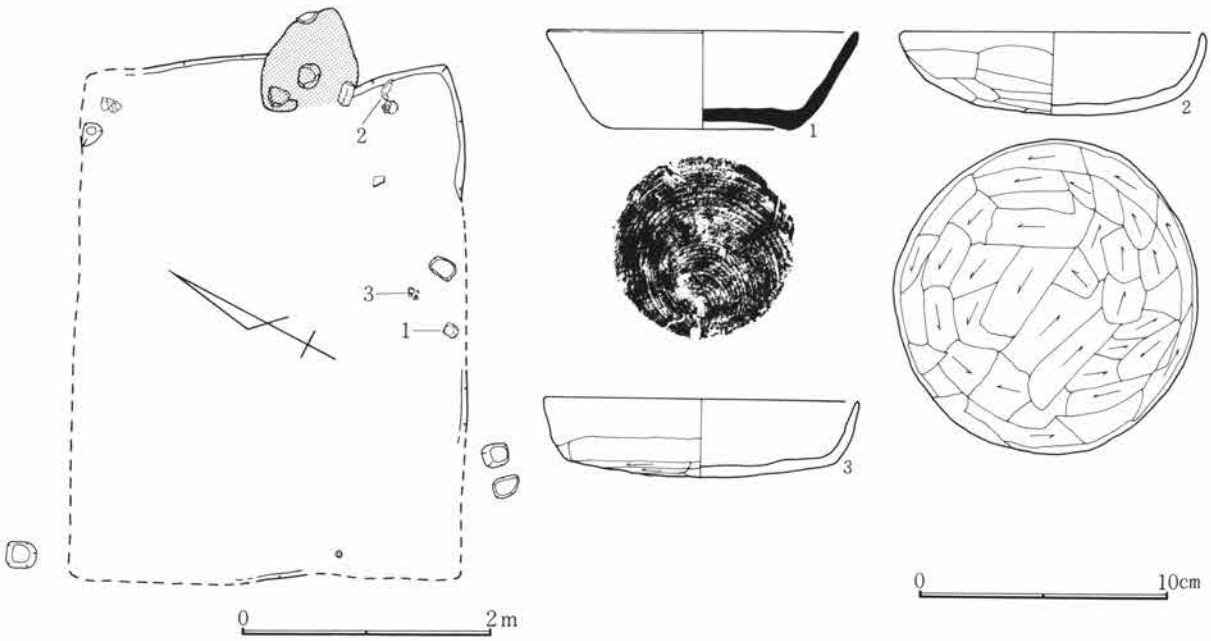


第12図　２号住居址出土遺物（１）



第13図　2号住居址出土遺物(2)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
4	甕	口径 (19.0) 器高 —— 底径 ——	頸部短く直に立ち上がり、口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　縦刷毛目。 内面　頸部横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
5	甕	口 (18.0) 高 —— 底 ——	口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　縦刷毛目。 内面　横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい黄橙～にぶい黄褐色	
6	S字甕	口 (13.3) 高 —— 底 ——	口縁部下位やや外傾し、上段外反する。	口縁部　横撫で。 外面　粗い刷毛目。 内面　篦撫で、縦指撫で。	砂粒・石粒 雲母を含む 良	暗赤褐色～橙色、内面橙色	
7	甕	口 —— 高 —— 底 9.1	厚みのある丸底から胴部丸みを持って立ち上がり、中位で最大径を持つ。	外面　一部篦磨き痕が認められる。 内面　横刷毛目後篦撫で。	砂粒・石粒を多量に含む 不良	橙色～黒褐色	器面荒れている
8	台付甕	口 —— 高 —— 底 (10.5)	胴中位で最大径を持ち、下部で締まる。台部は直線的に「ハ」の字に開く。	外面　胴部斜め刷毛目。台部も同様。 内面　胴部刷毛目後篦磨き。台部指撫で、下部横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 普通	にぶい橙色～褐灰色混り	
9	壺	口 —— 高 —— 底 7.5	厚手の底部から外反して立ち上がる。	外面　刷毛目、底面篦磨き。 内面　刷毛目。	砂粒・石粒を少量含む 良	橙色、外面吸炭有り	底部のみ
10	壺	口 —— 高 —— 底 (7.5)	厚手の底部から外反して立ち上がる。	外面　刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を混入 良	橙色	底部のみ
11	壺	口 —— 高 —— 底 8.4	平底から胴部外傾して開く。	外面　刷毛目。 内面　器面荒れて調整不明。	1～2㎜の石粒を含む 良	橙色	底部のみ



第14図　３号住居址・出土遺物

３号住居址（第14図）

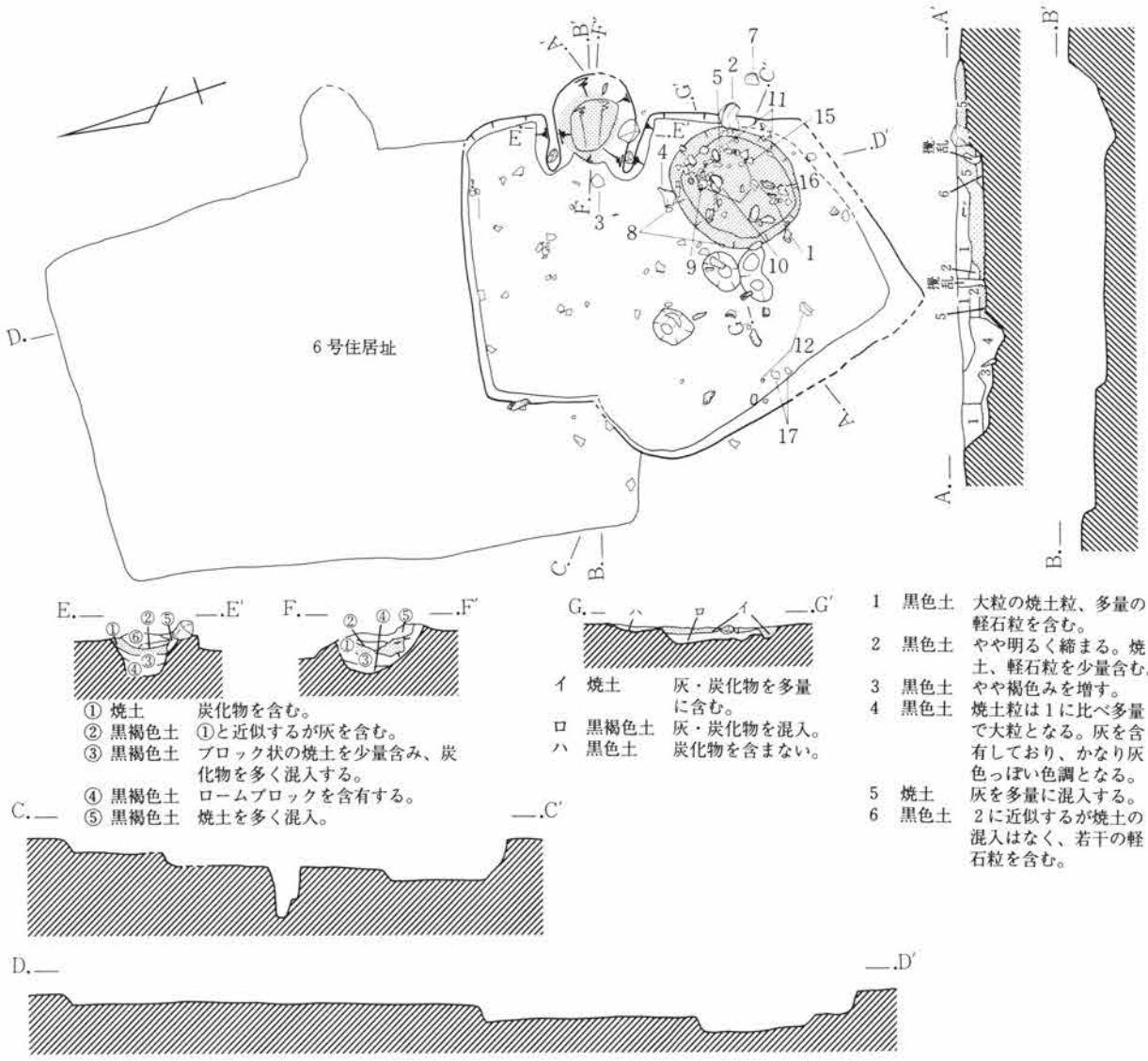
48～50－B42～43グリッドに位置する。平面形状は隅丸長方形を呈すと思われるが、北、西および南側は削平を受けている。このため壁高については東壁で僅かに計測されたのみである。規模は（420）×（313）㎝である。竈は東壁の中央やや南寄りに築かれているが遺存状態は極めて悪い。両袖部に竈の芯材に用いられたと思われる石が見られ、中央に小ピットが検出されている。竈内ほぼ全面に焼土が残る。柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。出土遺物は少なく、竈付近において須恵器坏１、土師器坏２点が出土しているのみである。時期は平安時代である。

表　4　　３号住居址遺物観察表

番号	器　種	法量（㎝）	器　形　の　特　徴	成・整　形　の　特　徴	胎土・焼成	色　調	備　考
1	須恵器坏	口径　12.5 器高　3.9 底径　7.2	やや上げ底状の底部から体部直線的に開く。	体部　横撫で。 底部　ロクロ右回転糸切り。	砂粒・石粒を含む 良	灰白色	
2	坏	口　12.0 高　3.3 底　――	底部やや丸みを持ち、口縁部内彎する。	口縁部　横撫で。 底部　手持ち篦削り。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
3	坏	口　12.6 高　3.1 底　10.2	底部ほぼ平らで体部わずかに丸みを持って立ち上がり、口縁部は直線的。	口縁部　横撫で。 底部　手持ち篦削り。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	

４号住居址（第15図）

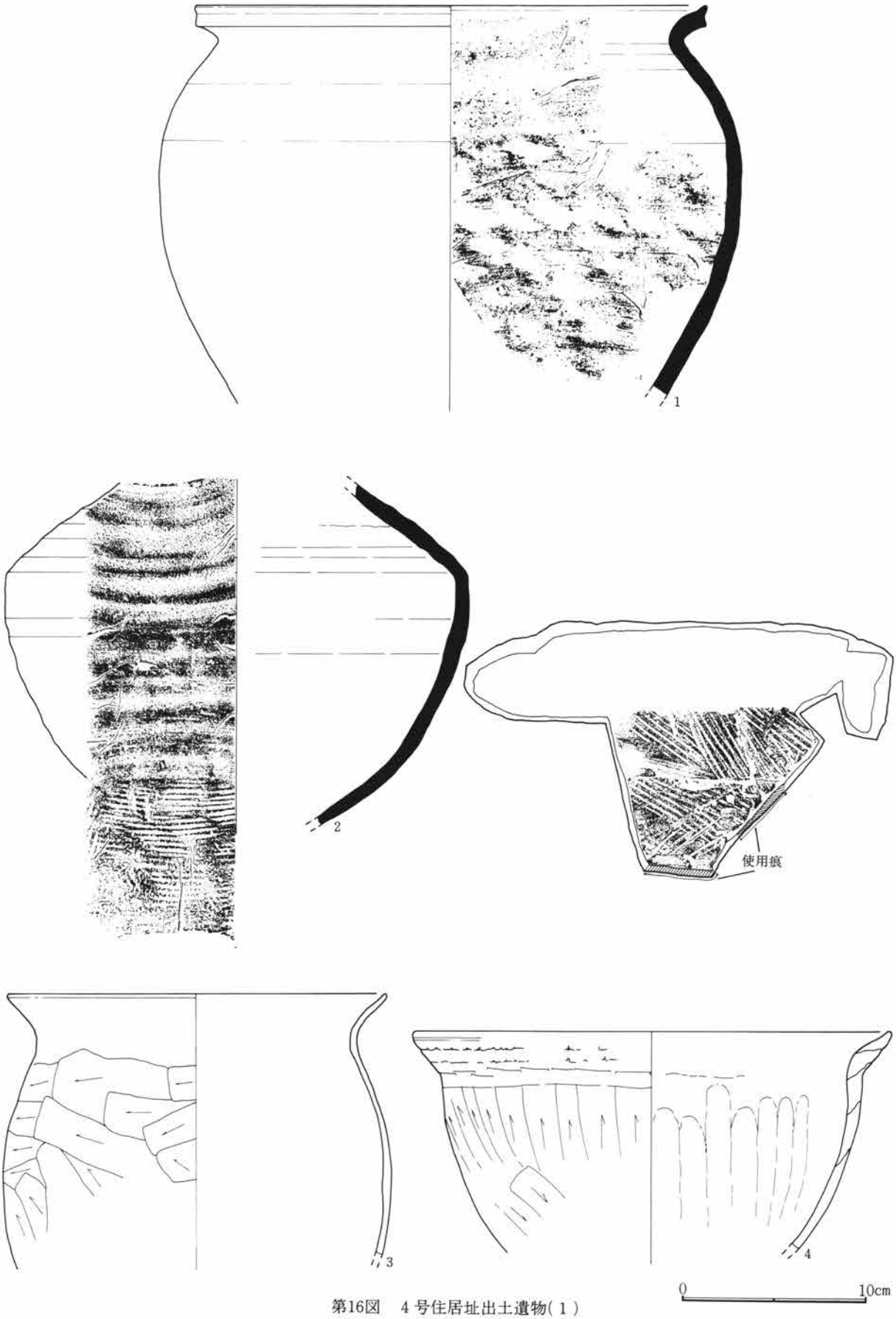
29～31－B46～47グリッドにて検出した。北側半分が６号住居址に重複する。形状は南および西側は攪乱等で確認が困難であったために結果的に不規則に張り出した不定形を呈している。現況での規模は（349）×（265）㎝で壁高は最大で24㎝である。床面はかなり荒れた状態で正確な面は検出されなかった。柱穴は確実なものは見られなかった。貯蔵穴と思われる掘り込みが竈右側に検出された。上面に焼土を伴う。規模は径90㎝、深さ15㎝程である。出土遺物は坏類を中心に散在した状況で出土している。時期は平安時代である。



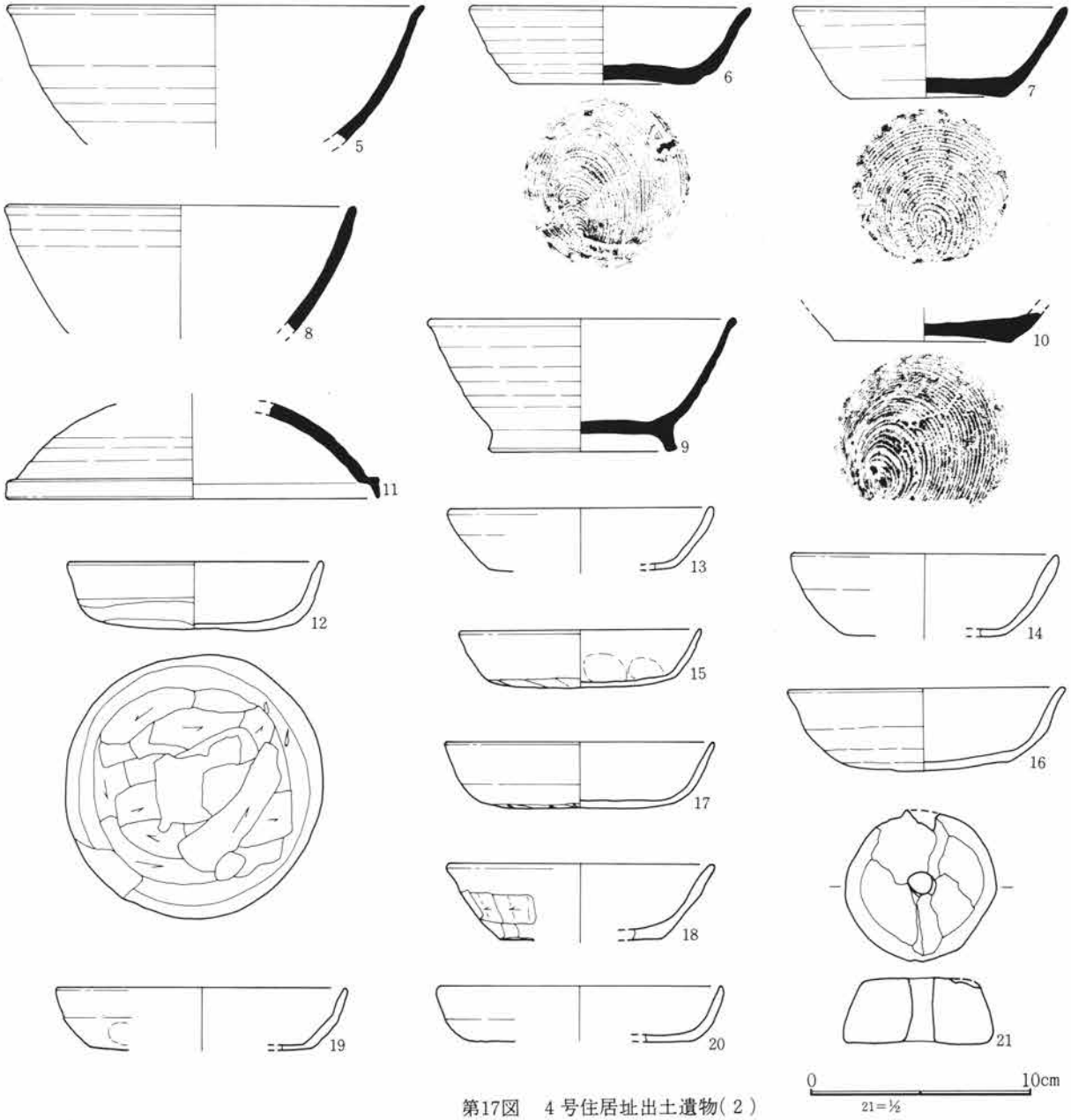
第15図　4号住居址

表 5　4号住居址遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	須恵器壺	口径（27.7） 器高 —— 底径 ——	胴上位に最大径を持つ。頸部で締まり、口縁部外反し、口唇部は断面三角形を呈す。	口縁部　横撫で、胴部ロクロ成形。 内面　胴部に指押え痕。	砂粒・石粒を多量に含む 良	黄灰色	
2	須恵器壺	口 —— 最大径（25.1） 底 ——	胴部丸みを持って立ち上がり、肩部で最大となり「く」の字に屈曲する。	外面　ロクロ痕、下半部平行叩き目。 内面　上半部横撫で、下半部かき目。	砂粒をわずかに含む 良	灰白色	
3	甕	口（20.7） 高 —— 底 ——	胴部わずかに膨らみ、口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　胴部箆削り。 内面　横撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
4	甕	口（26.0） 高 —— 底 ——	胴部わずかに膨らみを持って立ち上がり、頸部「く」の字にくびれ口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 胴部　箆削り、輪積痕見られる。 内面　箆撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙～明赤褐色	
5	須恵器坏	口（18.9） 高 —— 底 ——	わずかに丸みを持って立ち上がり、口縁部やや外反する。	ロクロ成形。	砂粒・石粒を含む 良	灰白色	



第16図　４号住居址出土遺物（１）



第17図　4号住居址出土遺物(2)

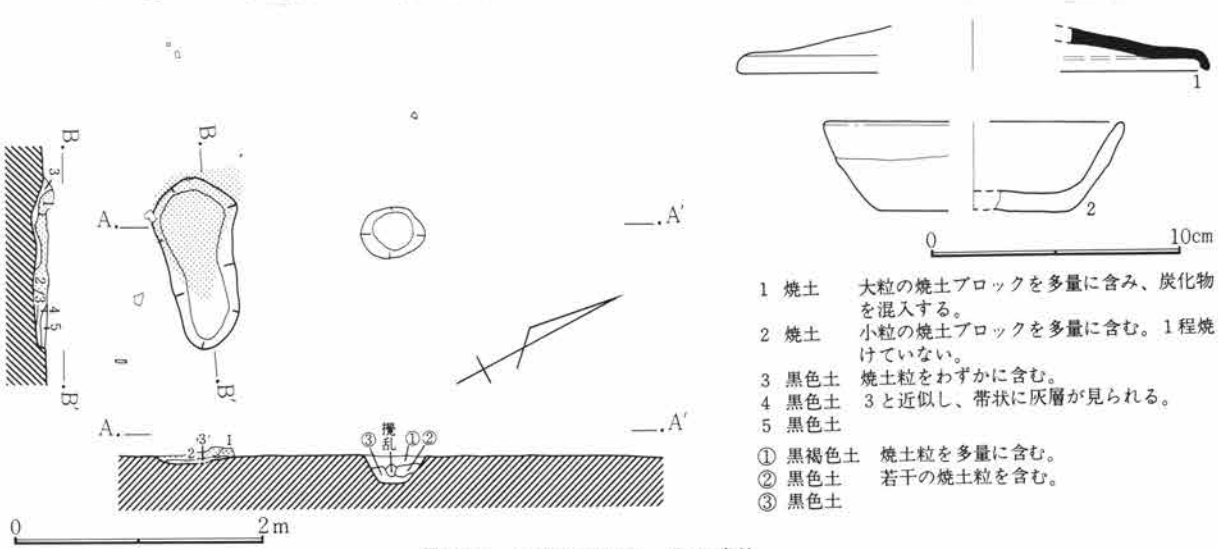
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
6	須恵器坏	口径 12.9 器高 3.5 底径 8.0	腰にわずかな屈曲を持って立ち上がる。口縁部わずかに外反する。	体部　ロクロ水引き痕。 底部　ロクロ右回転切り放し。	砂粒・石粒を含む 良	灰白色	
7	須恵器坏	口 12.4 高 4.0 底 7.1	平底から体部逆「ハ」の字に開く。	体部　ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転切り放し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	
8	須恵器坏	口 (16.0) 高 —— 底 ——	わずかに丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。	砂粒・石粒を含む 良	褐灰色～灰黄褐色	
9	須恵器椀	口 (14.0) 高 6.0 底 8.6	やや開く高台を持ち、体部ゆるく内彎気味に立ち上がる。口唇部丸みを持って外反する。	ロクロ成形。 底部　糸切り後、篦調整か。	砂粒・石粒(2～4mm)混入 やや軟質	浅黄色	
10	須恵器坏	口 —— 高 —— 底 8.0	やや上げ底の底部。	底部　ロクロ右回転切り放し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	底部のみ

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
11	須恵器蓋	口径（17.0） 器高 —— 底径 ——	体部内彎気味に立ち上がり、端部張り出して直に立つ。	体部　ロクロ成形。 天井部　篦削り。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	
12	坏	口　11.6 高　3.0 底　9.0	ほぼ平底で腰部は丸みを持つ。口縁部やや外傾して立ち上がる。	底部　手持ち篦削り。 口縁部　横撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
13	坏	口　（12.1） 高　（2.8） 底　（8.5）	丸みを持って立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で。 底部　篦削り。	細砂粒を含む 良	にぶい橙色	
14	坏	口　（12.2） 高　（3.7） 底　（7.2）	体部やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で。	細砂粒をわずかに含む 良	橙色	
15	坏	口　（11.0） 高　（2.6） 底　（8.5）	体部外傾して立ち上がる。	口縁部　横撫で。 底部　篦削り。	細砂粒を含む	にぶい赤褐色	
16	坏	口　（12.6） 高　（3.7） 底　（7.6）	ほぼ平底で、体部はやや丸みを持って立つ。口縁部やや外反する。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で。 底部　篦削り。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
17	坏	口　（12.3） 高　（3.0） 底　8.4	平底から丸みを持って体部となる。やや外傾して立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で。 底部　篦削り、内面見込み部篦撫で。	砂粒・細砂粒を含む 良	橙色	
18	坏	口　（12.2） 高　（3.5） 底　（7.4）	体部やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で。 底部　篦削り。	砂粒をわずかに含む 良	橙色	
19	坏	口　（13.2） 高　（2.8） 底　（10.0）	体部やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で。 底部　篦削り。	細砂粒を含む 良	明赤褐色	
20	坏	口　（13.0） 高　（2.5） 底　（10.2）	丸みを持って立ち上がる、口唇部内彎。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で。 底部　篦削り。	砂粒を含む 良	にぶい橙色	

番号	出土位置	器種	法量（cm・g）	石材	備考
21	4号住居	紡錘車	4.6×4.5×2.0　43.9	流紋岩	一部破損、周辺に若干の製作痕、孔の径9㎜。

5号住居址（第18図）

焼土の範囲を確認したのみである。平面形状、規模共に不明である。焼土は南北に長く100×70cmの範囲で検出した。焼土下に120×80cm、深さ10cmの浅い掘り込みを検出。さらに北側1.2mの所に径40cm、深さ20cm程のピットが見られる。遺物は蓋と坏の破片が出土しているが本遺構に伴うものか確定は出来ない。住居

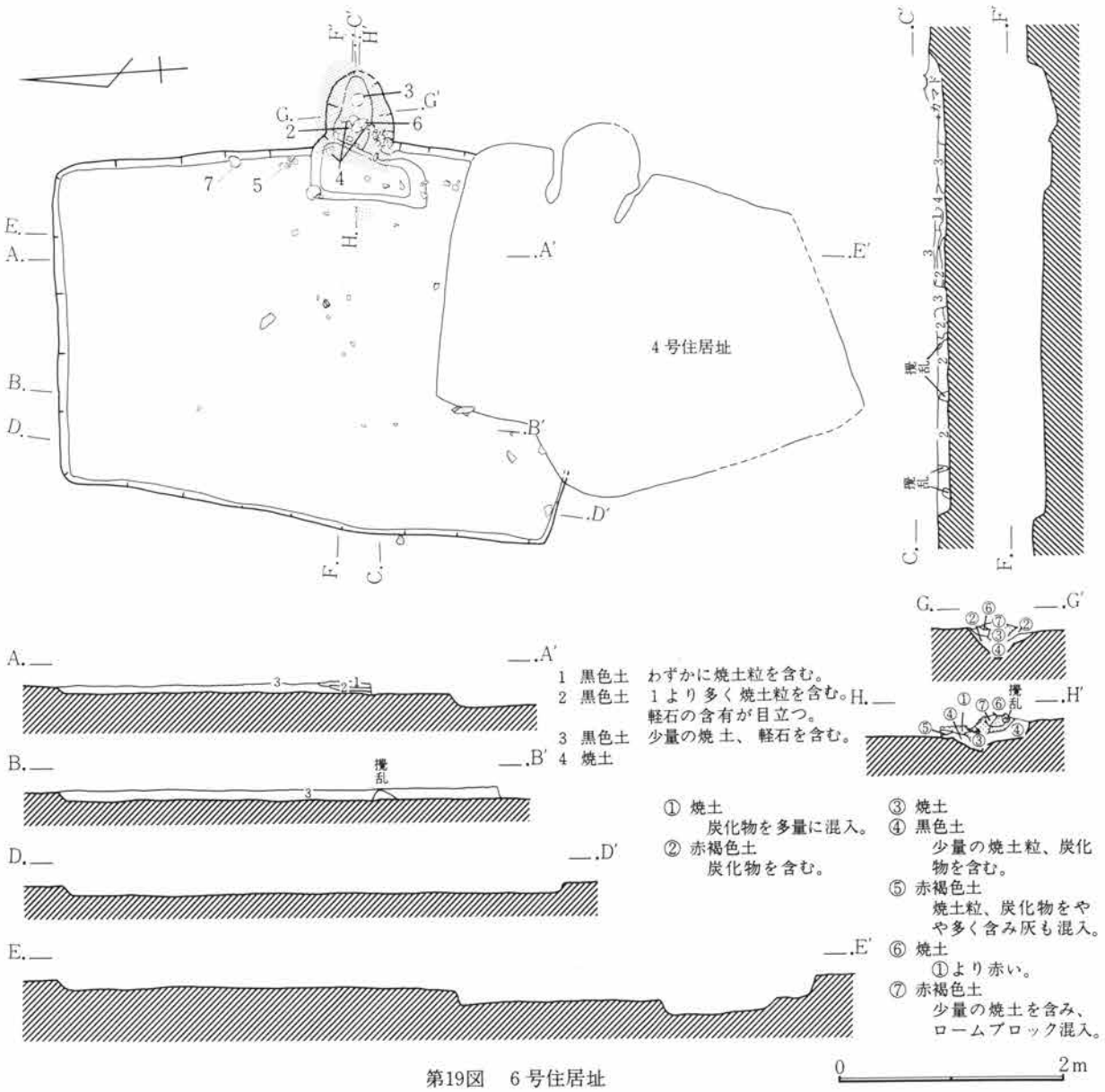


第18図　5号住居炉址・出土遺物

址としたが若干の疑問も残る。時期は不明。

表 6　5号住居址遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	須恵器蓋	口径（19.0） 器高 —— 底径 ——	体部やや直線的に開き、端部屈曲して立つ。	ロクロ成形。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	
2	坏	口 （12.0） 高 （ 3.6） 底 （ 7.5）	平底から体部外傾して立つ。	口縁部　横撫で。 体部　箆撫で。 底部　箆削り。	砂粒を含む 良	にぶい橙色	やや厚手

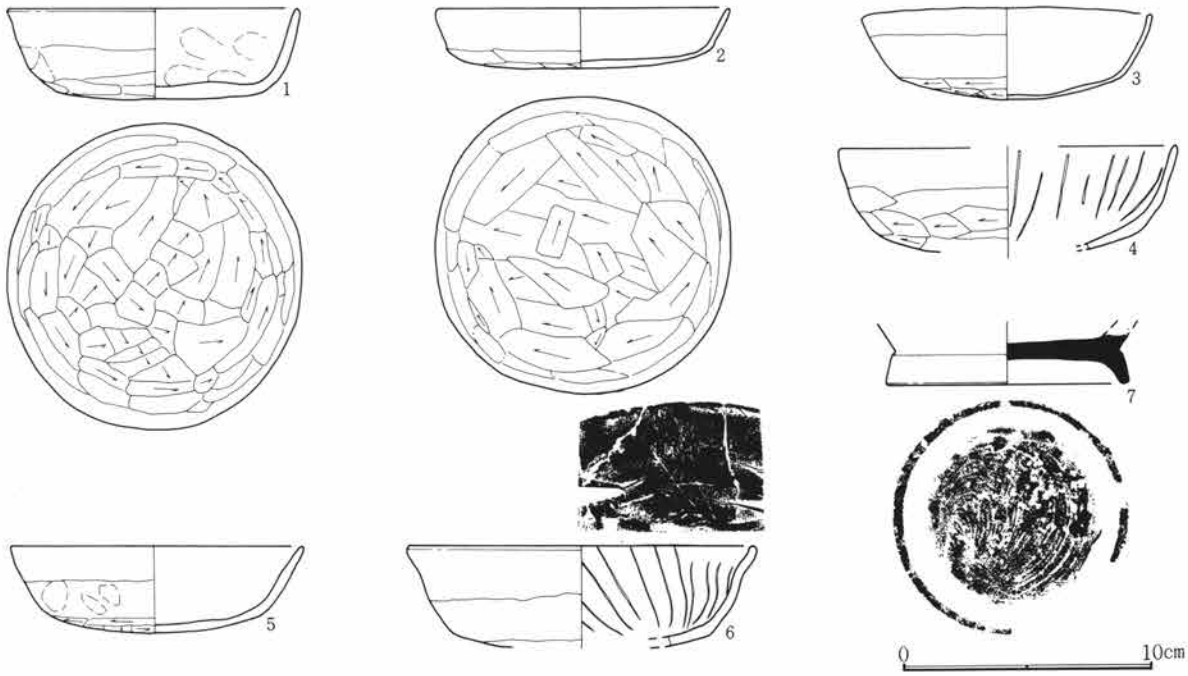


第19図　6号住居址

Ⅲ．下斉田・滝川Ａ遺跡

６号住居址（第19図）

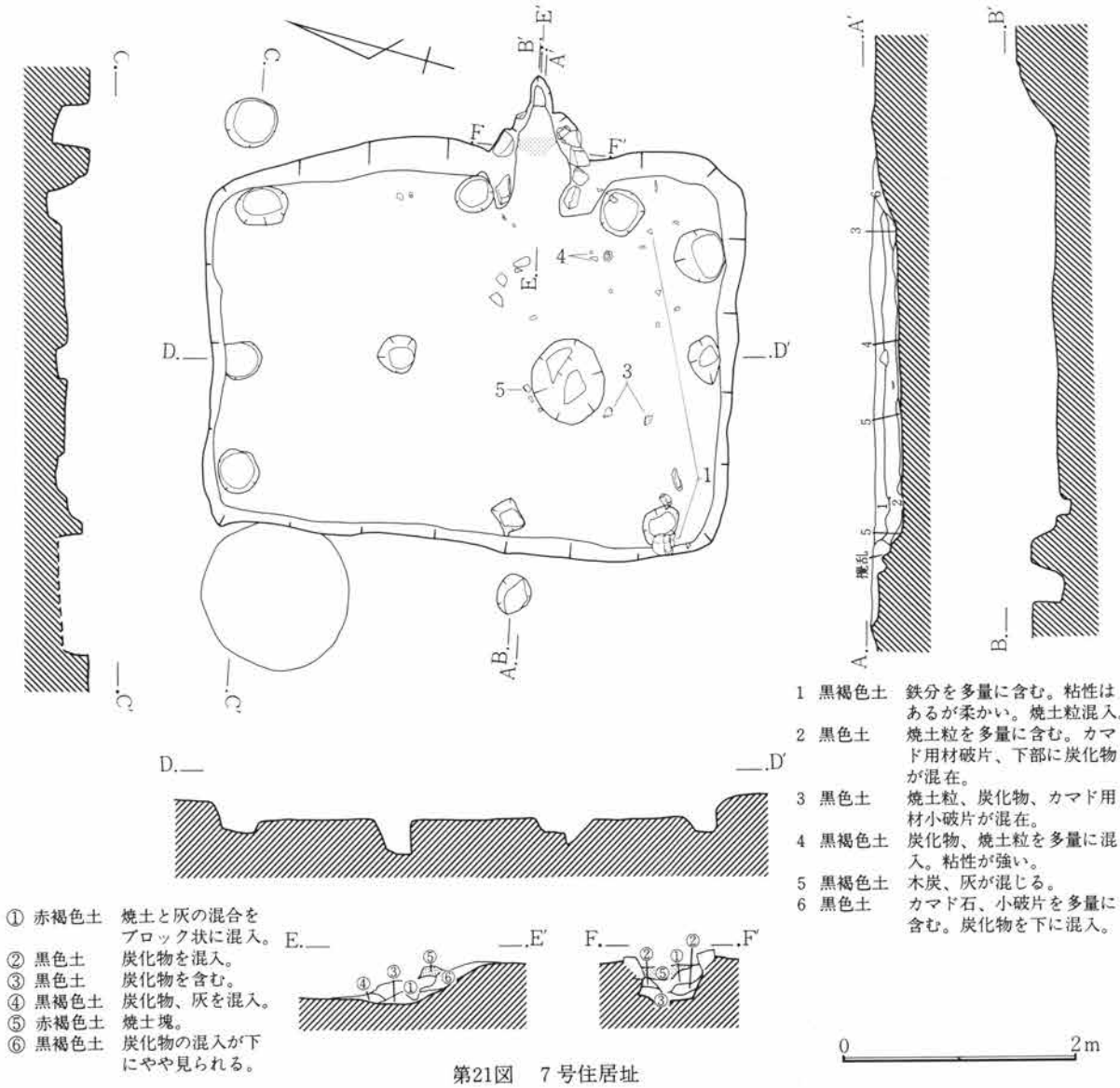
28～31－C47～50グリッドに位置する。南側に４号住居址が重複する。平面形状は長方形を呈すが、南辺がやや広がる。規模は450×345㎝である。壁高は最大で12㎝と浅い。床面は平坦で、柱穴、貯蔵穴は見られない。竈は東壁中央やや南寄りに築かれている。焚き口幅約35㎝で住居址外へ80㎝程掘り出されている。焼土と若干の炭化物が見られた。また竈前面に長円形の落ち込みが検出されている。遺物は竈周辺に坏類が出土している。時期は平安時代である。



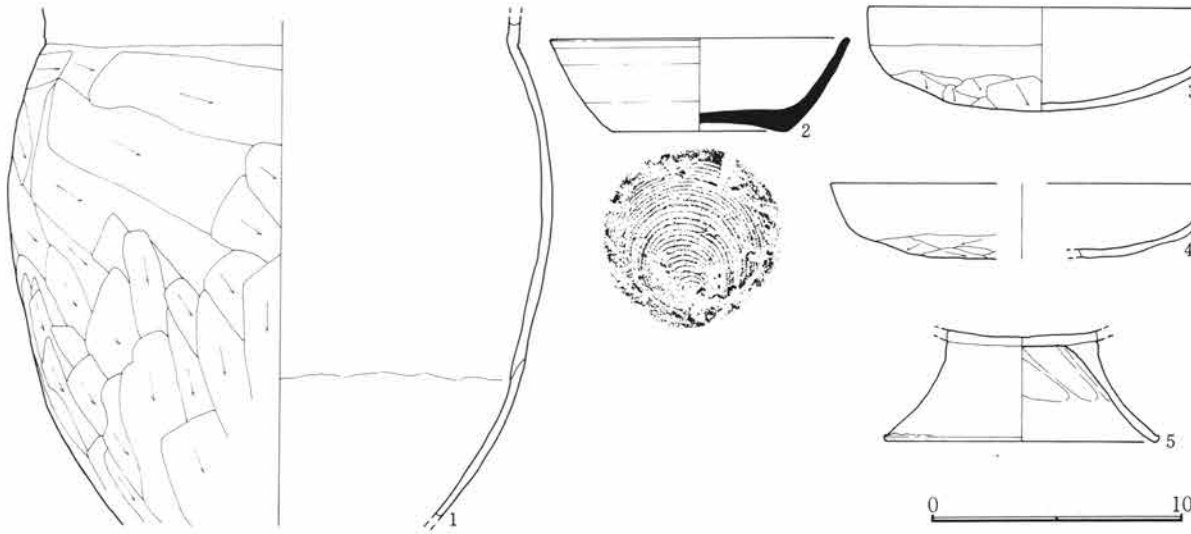
第20図　６号住居址出土遺物

表　７　６号住居址遺物観察表

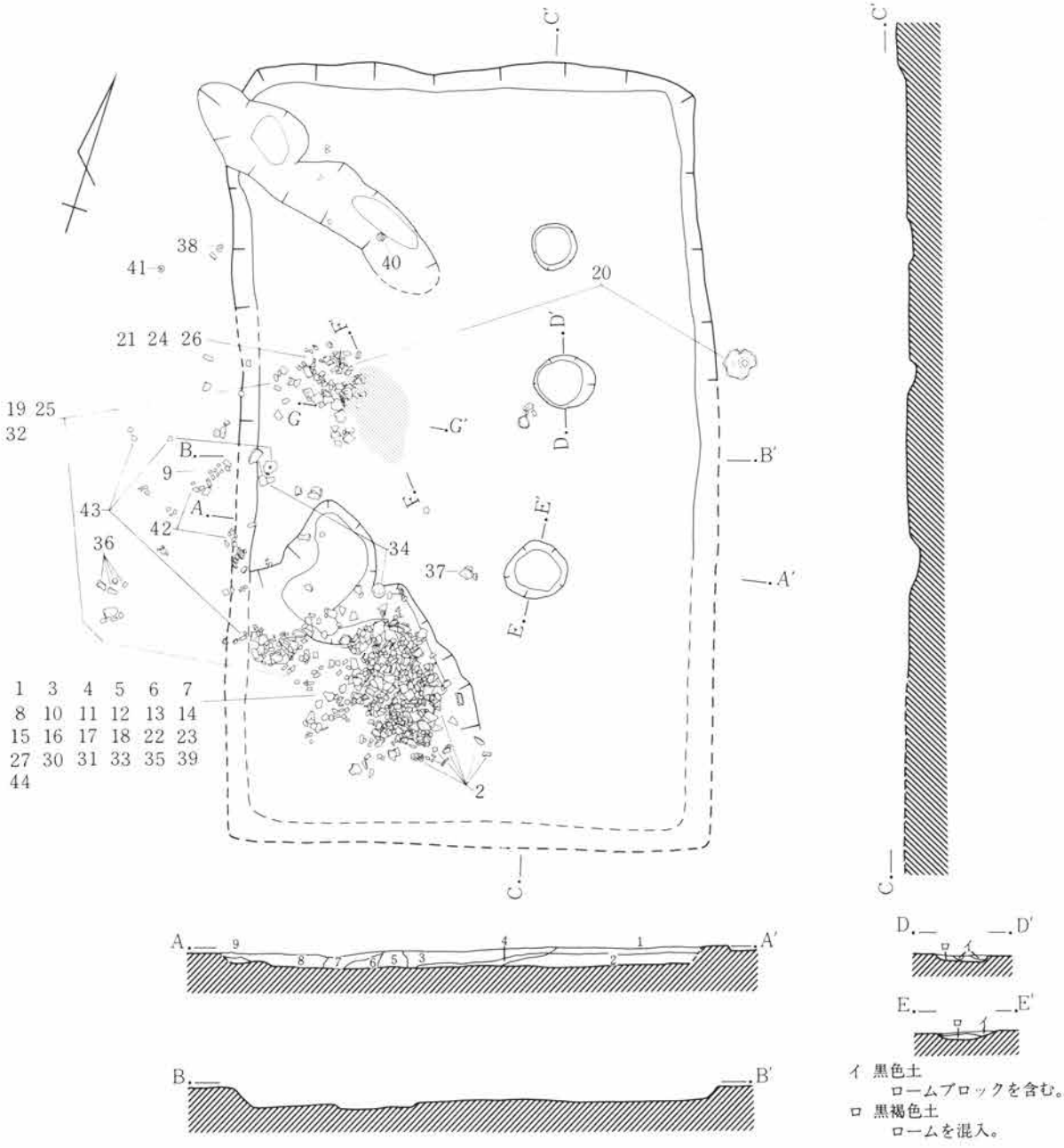
番号	器　種	法量（㎝）	器　形　の　特　徴	成・整　形　の　特　徴	胎土・焼成	色　調	備　考
1	坏	口径　11.6 器高　3.6 底径　8.6	平底で口縁部やや丸みを持って立ち上がり口縁部外傾する。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で。 底部　篦削り。	砂粒を含む 良	橙色	完形
2	坏	口　11.8 高　2.4 底　8.4	ほぼ平底で口縁部外傾して立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で。 底部　篦削り。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
3	坏	口　11.6 高　3.6 底　――	底部やや丸みを持つ。口縁部やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部　横撫で。 底部　篦削り。	砂粒・石粒を含む 普通	橙色	
4	坏	口　(13.6) 高　―― 底　――	底部やや丸みを持ち、体部から口縁にかけてやや丸みを持って立ち上がる。	口縁部　横撫で。 底部　篦削り。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	内面放射状暗文有り
5	坏	口　(11.8) 高　3.5 底　――	底部やや丸みを持ち、口縁部外傾して立ち上がる。	口縁部　横撫で。 底部　篦削り。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
6	坏	口　(13.8) 高　―― 底　――	体部から口縁にかけて、ゆるくＳ字状になって立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で。 底部　篦削り。	砂粒を含む 良	橙色	細沈線による放射状暗文
7	須恵器 高台付埦	口　―― 高　―― 底　9.5	やや外傾、「ハ」の字に開く高台が付く。	底部　ロクロ右回転糸切り。	石粒（５㎜）を含む 良	灰黄一部褐灰色	付け高台

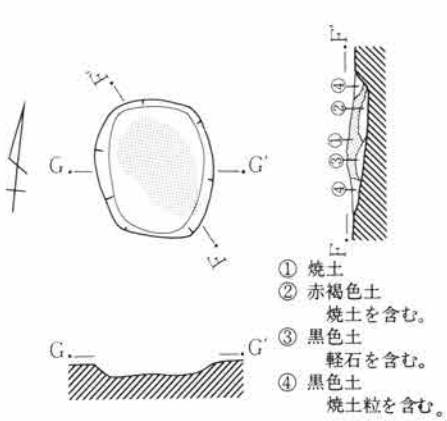


第21図　7号住居址



第22図　7号住居址出土遺物





1 黒褐色土
2 黒褐色土　ローム粒を多量に含む。
3 黒褐色土　ロームを含む。
4 黒褐色土　ロームを含み、粘性が強い。
5 黒色土　ローム粒を多量に含む。
6 黒褐色土　3に似る。
7 黒褐色土　4に似る。
8 黒褐色土　2に似るが粘性がややある。
9 黒褐色土　地山ブロック。

0　2m

第23図　8号住居址及び炉址

7号住居址（第21図）

35～37－D00～02グリッドに位置する。平面形状は隅丸長方形を呈し、規模は448×340㎝で壁高は25㎝である。各壁は比較的直に立ち上がる。柱穴は中央に並んで2本、各壁に沿って9本が検出されている。貯蔵穴らしきものは見られない。竈は東壁中央南寄りに築かれている。両袖部に石の芯材を用いている。焚き口幅は30㎝で、住居址外へ約50㎝掘り出している。竈の埋土中には炭化物が比較的多く、焼土は少なかった。出土遺物は少なく、甕1、坏3、脚台部片が1点である。時期は平安時代である。

表 8　7号住居址遺物観察表

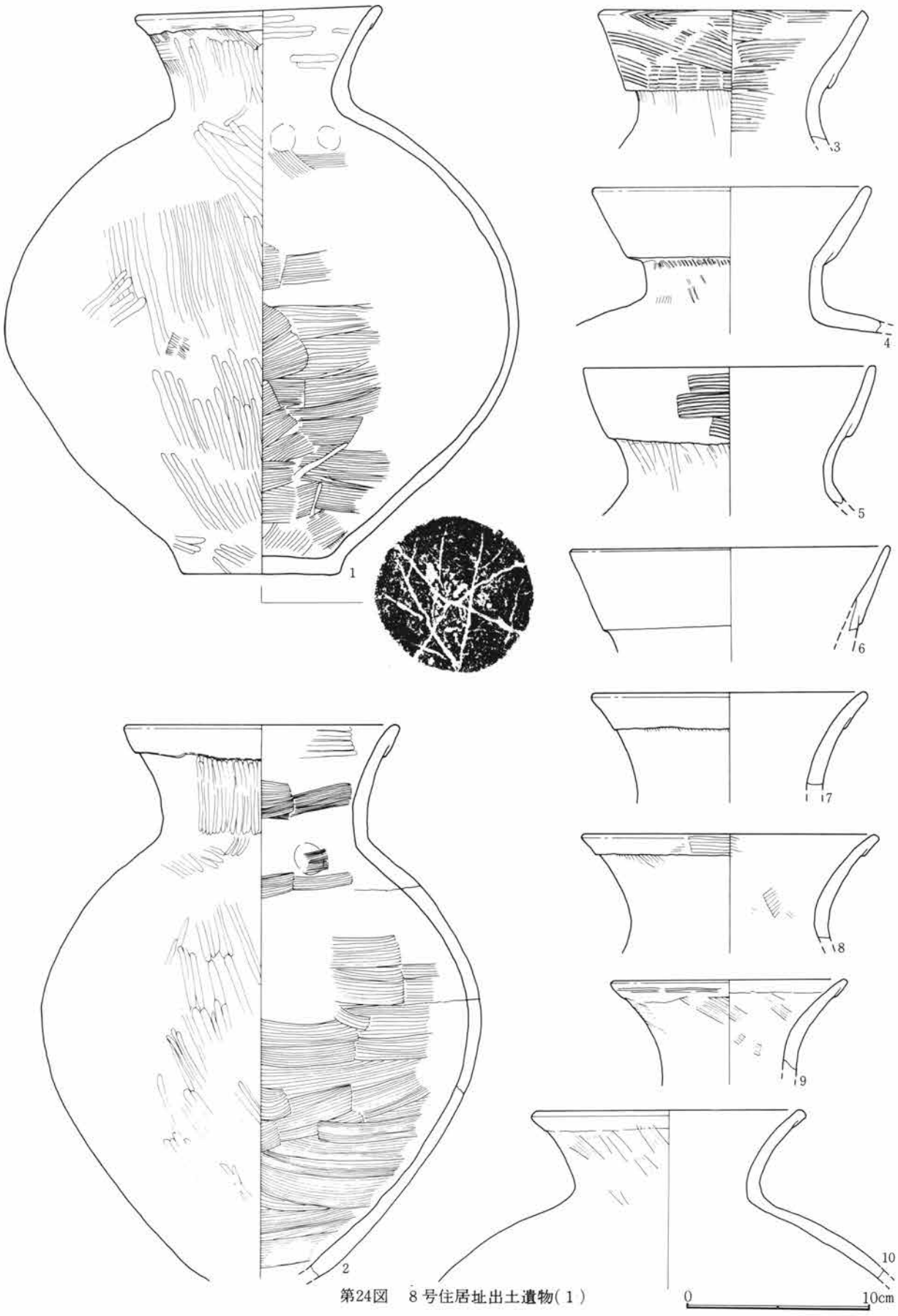
番号	器種	法量（㎝）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	甕	口径 ―― 器高 ―― 底径 ――	胴部はやや膨らみを持ち、頸部は直気味に立つ。	頸部　横撫で。 胴部　篦削り。 内面　篦撫で。	石粒を含む 良	暗赤褐色	
2	須恵器坏	口　(12.0) 高　3.7 底　7.1	やや上げ底で、やや丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り。	石粒を含む 良	暗灰色	
3	坏	口　13.6 高　4.1 底 ――	やや丸底で、口縁部内彎気味に立ち上がる。	口縁部　横撫で。 底部　篦削り。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい赤褐色	
4	坏	口　(15.0) 高 ―― 底 ――	口縁部やや内彎気味に立ち上がる。	口縁部　横撫で。 底部　篦削り。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
5	台付甕	口 ―― 高 ―― 底　(11.0)	外反しながら「ハ」の字に開く。	外面　横撫で。 内面　胴部底面篦撫で。台部横撫で、指押え痕有り。	砂粒を含む 良	明赤褐色	脚部

8号住居址（第23図）

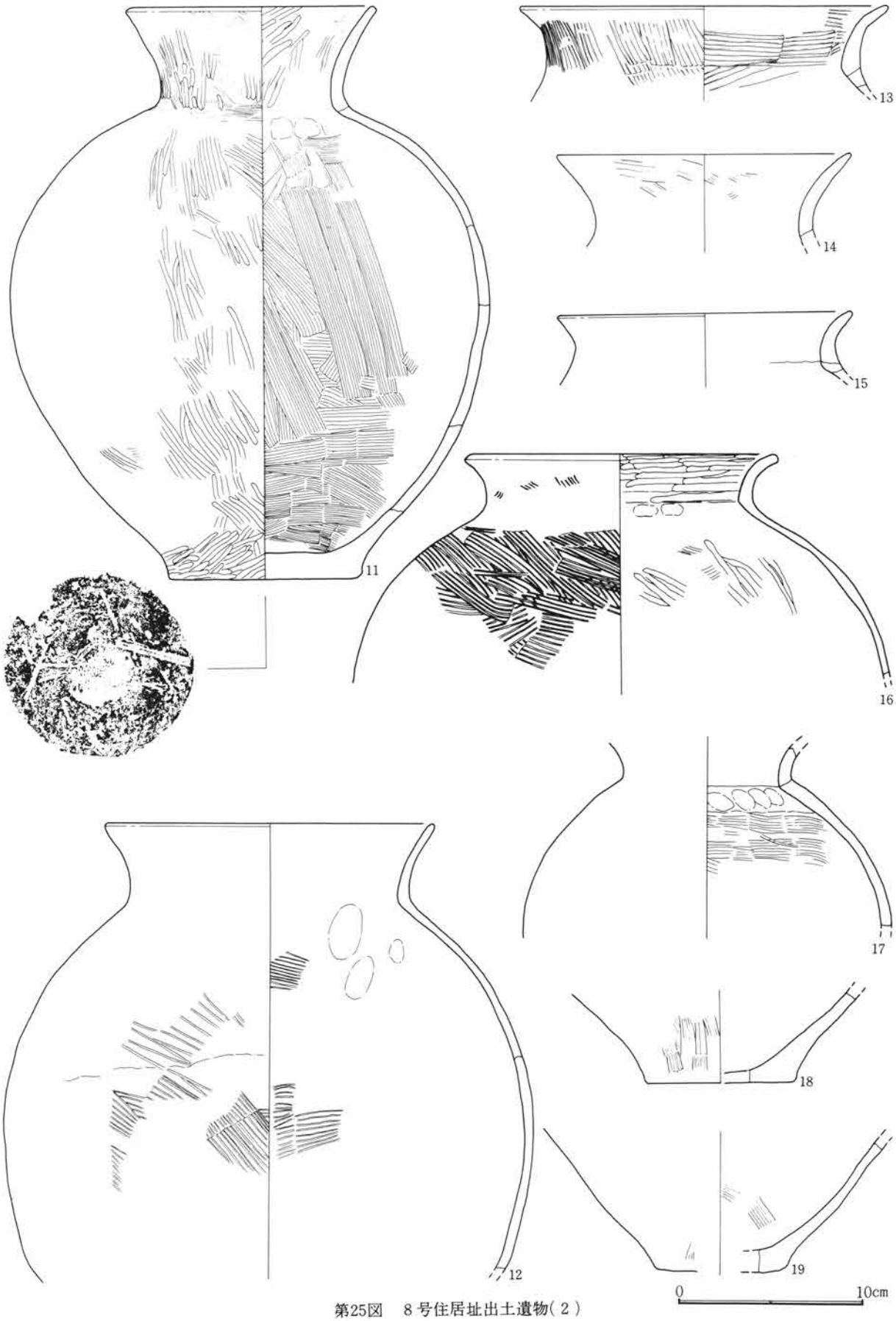
30～33－D04～07グリッドに位置する。南北に長い長方形を呈すと思われるが南側半分は、攪乱等により壁、床面が削平されている。正確な範囲の確定はできないが、およその規模は（565）×420㎝で、北壁で計測される壁高は約20㎝である。床面は凹凸が目立ち、特に南側については顕著であった。主柱穴は不明であるが、径50㎝程のピットが3本並んで検出されている。炉は中央やや西寄りに設けられている。60×50㎝程の浅い円形の掘り込み中に焼土が検出されている。遺物はかなり多く、壺類を中心にして南西部に集中して出土しているが、いずれも覆土上層からである。時期は古墳時代初頭である。

表 9　8号住居址遺物観察表

番号	器種	法量（㎝）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	壺	口径　13.2 器高　30.1 底部　8.7	胴部膨らみ、中位に最大径を持つ。頸部は締まり直立し、口縁部外反する。端部折り返し。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目後縦篦磨き。 内面　刷毛目。	砂粒を含む 良	橙色	底部木葉痕有り
2	壺	口　(14.9) 高 ―― 底 ――	胴部膨らみ上半部に最大径を持つ。頸部直気味に立ち、口縁部外反し、端部は折り返し。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目後縦篦磨き。 内面　口縁上部篦磨き、胴部刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	橙色～黒褐色	頸部・肩部に黒斑
3	壺	口　14.7 高 ―― 底 ――	頸部から口縁にかけてやや外傾して立ち上がる。二重口縁、口唇部やや角張る。	外面　口縁、頸部ともに刷毛目、折り返し部下半に簾状文様の刷毛目。 内面　横刷毛目。	細砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色	
4	壺	口　(15.2) 高 ―― 底 ――	二重口縁、頸部やや外傾して立ち上がり、口縁部開く。肩部は大きく開く。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目後篦磨き。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	褐灰橙色	
5	壺	口　(16.0) 高 ―― 底 ――	口縁部やや内彎して立ち上がる。二重口縁。	口縁部　外面横刷毛目、内面撫で。 外面　頸部縦刷毛目。	石粒を含む 普通	橙色	

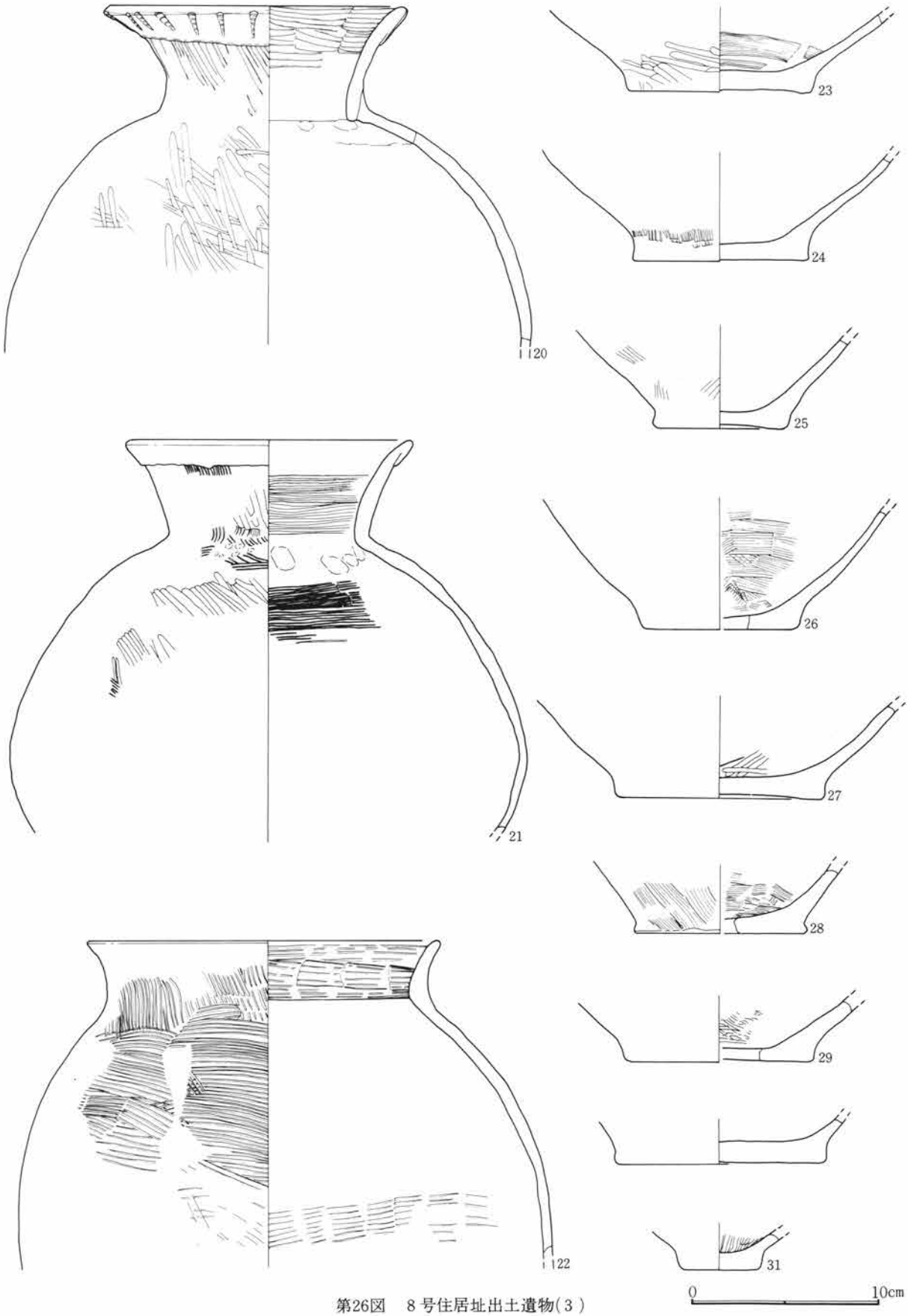


第24図　８号住居址出土遺物（１）



第25図　8号住居址出土遺物(2)

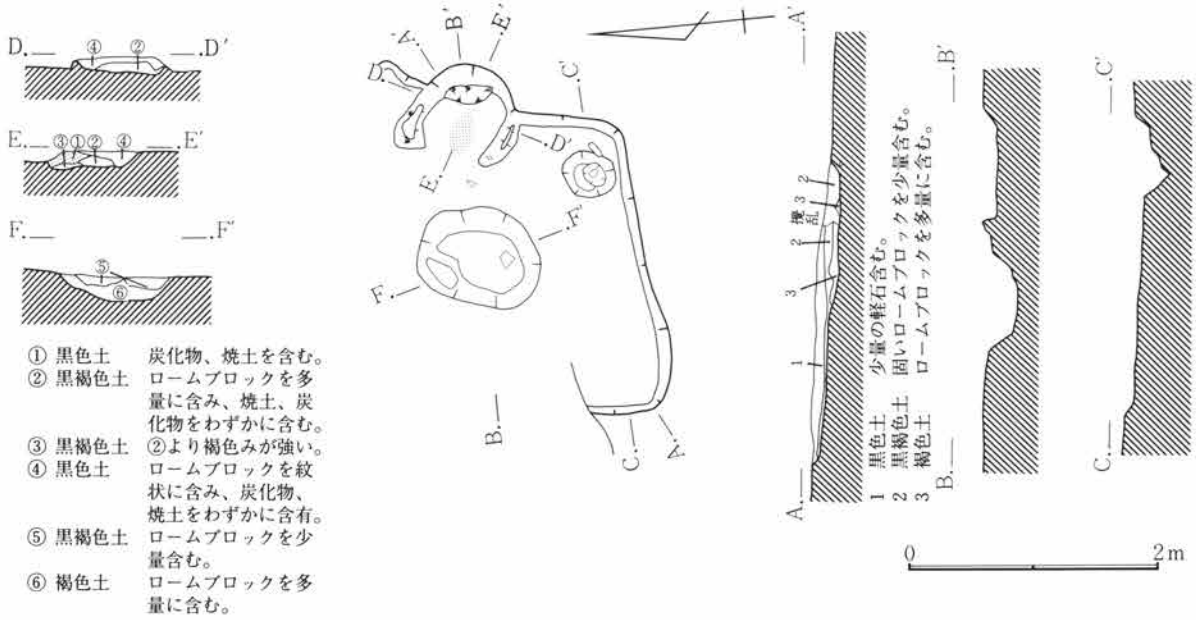
番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
6	壺	口径（17.6） 器高 —— 底径 ——	口縁部外傾して開く。二重口縁。	外面　刷毛目後磨き。 内面　刷毛目後撫で。	砂粒・石粒を含む やや不良	橙色	
7	壺	口　（15.0） 高 —— 底 ——	口縁部外傾して開く。折り返し口縁。	口縁部　端部横撫で。 外面　刷毛目後撫で。 内面　刷毛目後撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色～褐灰色	
8	壺	口　（16.2） 高 —— 底 ——	頸部から口縁部にかけてやや外反する。口縁端部折り返し。	口縁部　折り返し部横刷毛目。 外面　頸部刷毛目後篦磨き。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	にぶい橙色～灰白色	
9	壺	口　（13.0） 高 —— 底 ——	外反して口縁端部折り返し。	口縁部　端部横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　斜め刷毛目。	砂粒を含む 良	橙色	
10	壺	口　（15.0） 高 —— 底 ——	やや張る肩部から、頸部は締まり、口縁部外反する。口縁端部短く折り返し。	口縁部　端部横撫で。 外面　刷毛目後篦磨き。 内面　篦撫で。	砂粒を含む 良	灰褐色	
11	壺	口　13.1 高　30.8 底　10.5	胴部中位で最大径を持つ。頸部直立し、口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目後篦磨き。	砂粒・石粒(1～2㎜)を含む 良	橙色～明褐灰色	底部木葉痕あり
12	甕	口　（17.9） 高 —— 底 ——	胴部でやや膨らみ、頸部で締まり、口縁部は外反。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　刷毛目後撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	器面荒れている。胴部黒斑
13	甕	口　20.1 高 —— 底 ——	頸部直に立ち、口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　頸部縦刷毛目。 内面　頸部横、肩部斜め刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色	
14	甕	口　（16.0） 高 —— 底 ——	外反して立ち上がる。	外面　横刷毛目。 内面　刷毛目後撫で。	砂粒を含む 良	橙色	
15	甕	口　（15.9） 高 —— 底 ——	口縁部外反、口唇部薄くなる。	口縁部　横撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい黄橙色	
16	甕	口　17.0 高 —— 底 ——	肩部開き頸部短く立ち、口縁部やや強く外反する。	口縁部　外面横撫で、内面篦磨き。 外面　刷毛目。 内面　篦撫で。	粗砂粒をわずかに含む 良	暗赤褐色～明赤褐色	
17	壺	口 —— 高 —— 底 ——	丸みを持った肩部から頸部直に立ち上がる。	外面　磨き。 内面　肩部横刷毛目、指押え痕。	砂粒・石粒多量に含む 良	橙色	
18	甕	口 —— 高 —— 底　（8.0）	胴部外反して立ち上がる。	外面　縦刷毛目。 内面　横刷毛目後篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
19	壺	口 —— 高 —— 底　（7.0）	胴部外傾して立ち上がる。	外面　器面荒れて不明。 内面　刷毛目。	粗い砂粒を含む 良	明黄褐色	
20	壺	口　16.0 高 —— 底 ——	胴部丸みを持つ。頸部で締まり口縁部外反。端部折り返し。	口縁部　刷毛目状工具による連続刻み。 外面　刷毛目後磨き。 内面　頸、口縁部刷毛目、胴部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色一部褐灰色	胴部黒斑
21	壺	口　14.8 高 —— 底 ——	胴部丸みを持つ。頸部直気味に立ち、口縁部外反。端部折り返し。	口縁部　横撫で。 外面　胴、頸部縦刷毛目後篦磨き。 内面　横刷毛目、肩部指押え痕。	砂粒を含む 良	橙色一部黒褐色	
22	甕	口　（18.6） 高 —— 底 ——	胴部膨らみ、頸部でやや締まり、口縁部は外反。	口縁部　端部横撫で。 外面　頸部縦、胴部斜め刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	灰色一部にぶい橙色	
23	甕	口 —— 高 —— 底　9.6	平底から大きく外反して立ち上がる。	外面　篦磨き。 内面　刷毛目。 底面　磨き。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色一部黒褐色	
24	甕	口 —— 高 —— 底　9.2	胴部外傾して立ち上がる。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　篦撫で。	石粒（2～3㎜）を含む 普通	橙色	
25	甕	口 —— 高 —— 底　7.0	やや上げ底状の底部から胴部は外傾して立ち上がる。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	橙色	



第26図　8号住居址出土遺物(3)

第27図　８号住居址出土遺物（４）

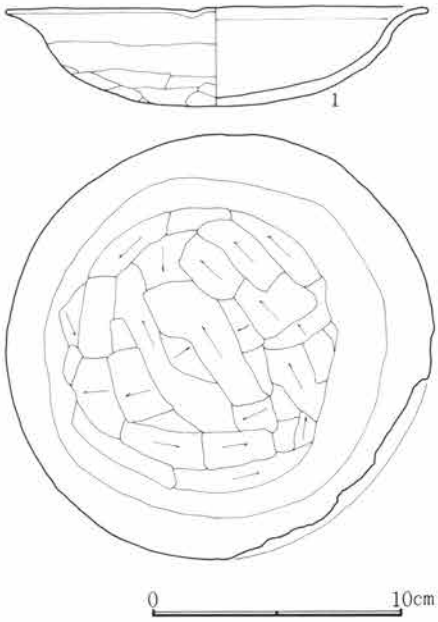
番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
26	壺	口径 —— 器高 —— 底径（8.4）	厚手の底部からやや内彎気味に立ち上がる。	外面　篦磨き。 内面　刷毛目。	細砂粒をわずかに含む 良	橙色	
27	壺	口 —— 高 —— 底 11.0	大きめの平底から胴部内彎気味に立ち上がる。	外面　撫で。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
28	壺	口 —— 高 —— 底（9.2）	底部端が外へ張り出し、外傾して立ち上がる。	外面　刷毛目。 内面　刷毛目。 底面　篦撫で。	砂粒・細砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	
29	甕	口 —— 高 —— 底（10.0）	胴部外傾して立ち上がる。	外面　不明瞭。 内面　刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい黄橙色	
30	甕	口 —— 高 —— 底 11.0	大きめの平底から胴部外反して立ち上がる。	内・外面ともに器面荒れており、調整不明。	石粒（2～4㎜）を含む 普通	にぶい橙色	
31	壺	口 —— 高 —— 底 4.0	小さく厚手の底部から胴部開く。	外面　篦磨き。 内面　篦磨き。	砂粒をわずかに含む 良	橙色	底部のみ
32	壺	口 —— 高 —— 底 ——	胴部膨らみ、中位に最大径を持つ。	外面　篦磨き。 内面　刷毛目後撫で。	粗い砂粒を含む 良	明黄褐色	
33	壺	口 —— 高 —— 底（9.6）	胴部丸く膨らみを持って立ち上がる。	外面　刷毛目後縦篦磨き。 内面　横刷毛目。	細砂粒をわずかに含む 良	褐灰色～にぶい橙色	胴下半部に黒斑
34	壺	口 —— 高 —— 底 9.4	厚みのある底部より胴部は丸みを持って立ち上がる。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	底部木葉痕有り
35	台付甕	口 —— 高 —— 底 11.0	台部「ハ」の字に開き、胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	外面　刷毛目。 内面　刷毛目。	砂粒を含む 良	橙色	
36	台付甕	口 —— 高 —— 底 ——	台部「ハ」の字に開き、胴部は直線的に開く。	外面　斜め刷毛目。 内面　胴部刷毛目後篦磨き、台部刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい赤褐色	
37	台付甕	口 —— 高 —— 底（12.0）	大型で「ハ」の字に開く。	外面　斜め刷毛目。 内面　刷毛目。	砂粒・石粒を含む やや不良	橙色	台部のみ
38	台付甕	口 —— 高 —— 底 ——	接合部。	外面　刷毛目。 内面　胴部刷毛目後篦撫で。	砂粒・石粒(0.6㎜)含む 良	明褐色	台部のみ
39	台付甕	口 —— 高 —— 底（8.8）	脚部は「ハ」の字に開き、胴部外反する。	外面　篦磨き。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	台部のみ
40	台付甕	口 —— 高 —— 底 ——	「ハ」の字に開く台部から胴部外反する。	外面　刷毛目。 内面　胴部刷毛目、台部横刷毛目。	砂粒・石粒(0.6㎜)含む 良	橙色	台部のみ
41	高坏	口 —— 高 —— 底 ——	「ハ」の字に開く脚部。 4個の円形透し孔。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　脚部刷毛目後撫で。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色	
42	高坏	口 22.1 高 —— 底 ——	脚部は小さく、坏部弱い稜を持って大きく開く。脚部に円形の透し孔。	外面　篦磨き。 内面　篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
43	高坏	口 23.0 高 —— 底 ——	坏部下位に弱い稜を持って大きくやや内彎気味に開く。下部に「ほぞ」が見られる。	外面　篦磨き。 内面　篦磨き。	細砂粒を含む 良	明赤褐色 一部黒褐色	
44	塊？	口（12.0） 高 —— 底 ——	体部やや内彎気味に立ち上がる。	外面　篦磨き。 内面　篦磨き。	細砂粒を含む 良	黒色	



第28図　９号住居址

９号住居址（第28図）

13～14－A11～12グリッドに位置する。北側半分以上を欠失しており正確な形状、規模は不明である。残存する南壁部分での壁高は10cm程である。床面の状態は余り良好ではない。南東隅に貯蔵穴と見られる掘り込みが検出されている。竈は東側に築かれている。馬蹄形に構築部分が残っており、壁外への掘り出しは少ない。若干の焼土、炭化物が検出されている。住居中央に径１m程の掘り込みが見られたが、本址に伴うものか否か断定できない。出土遺物は土師器坏が１点のみである。時期は奈良時代か。



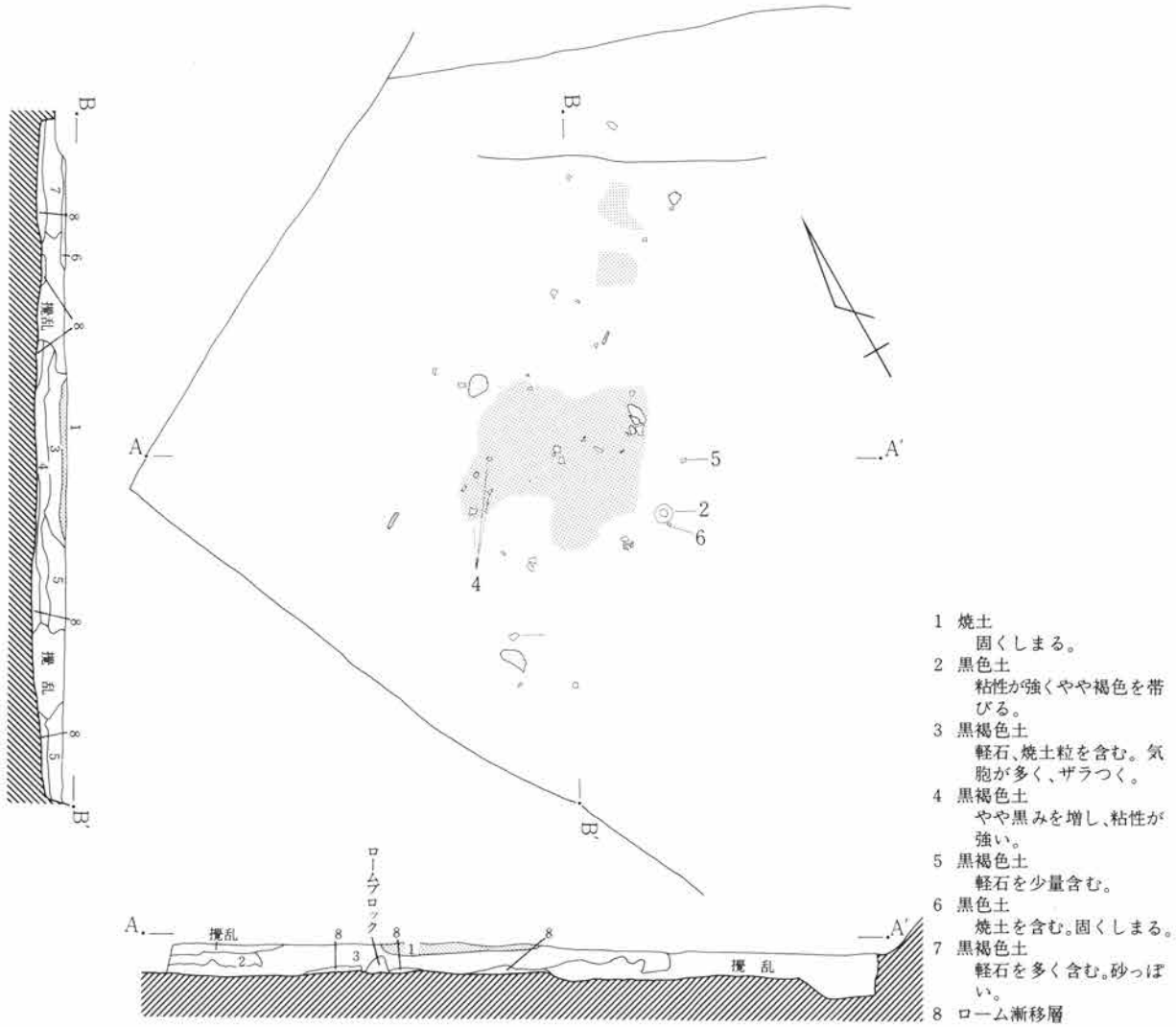
第29図　９号住居址出土遺物

表 10　９号住居址遺物観察表

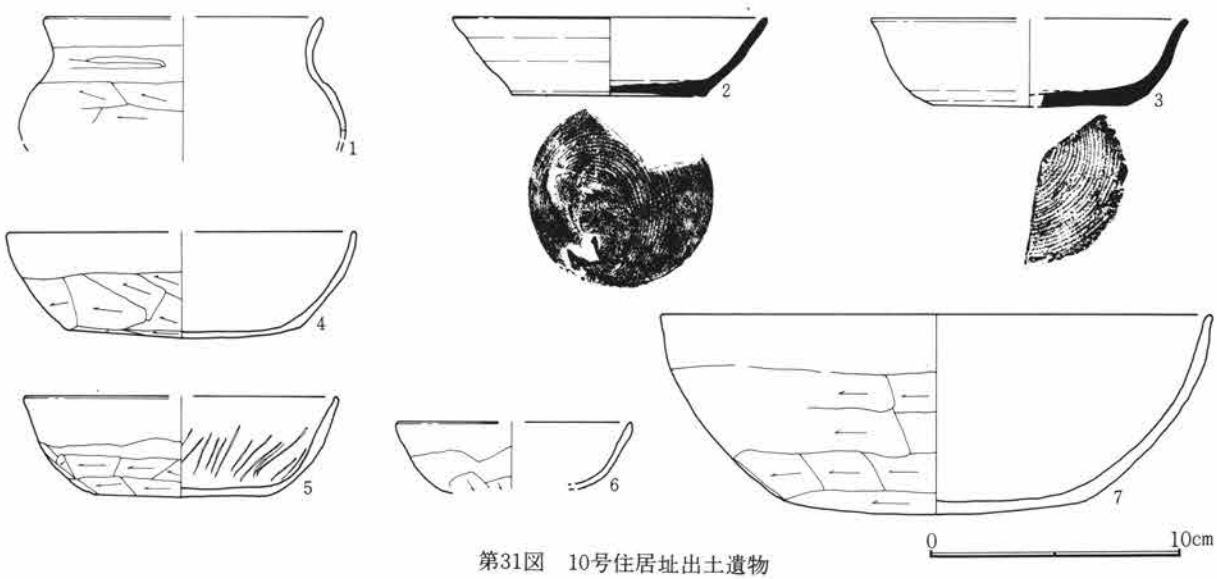
番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	坏	口径 16.9 器高 —— 底径 ——	体部丸みを持ち、口縁部横へほぼ水平に開く。	口縁部　横撫で。 外面　底部篦削り。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	

10号住居址（第30図）

位置的には46～47－A46グリッドにあるが、北壁の一部を確認したのみで全体の形状、規模は不明である。床面も断面にてわずかに確認されたにとどまり、柱穴も検出されていない。焼土の広がりが不定形に見られる。遺物は焼土周辺に坏類を中心に７点程が出土している。時期は平安時代である。



第30図　10号住居址



第31図　10号住居址出土遺物

表 11　10号住居址遺物観察表

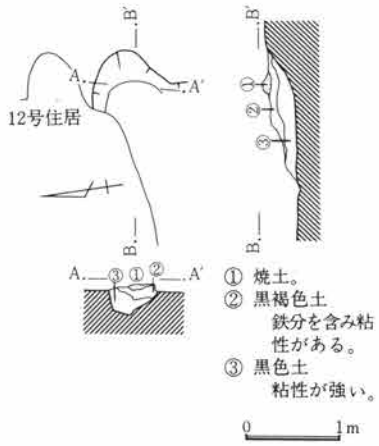
番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	甕	口径（11.0） 器高 —— 底径 ——	なだらかな肩部から口縁部直気味に立つ。	口縁部　横撫で。 外面　肩部篦削り。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
2	須恵器坏	口　12.6 高　3.1 底　7.3	体部丸みを持ち外傾して立ち上がる。	体部　ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り。	砂粒を含む 良	褐灰色	
3	須恵器坏	口　（12.6） 高　（3.6） 底　（7.7）	体部膨らみを持って立ち上がり、口縁部外反する。	体部　ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り。	砂粒を含む 良	赤灰色	
4	坏	口　（14.0） 高　（4.2） 底　（9.3）	平底に近い底部から体部やや内彎気味に立ち上がる。	口縁部　横撫で。 外面　底部篦削り。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
5	坏	口　（12.6） 高　（3.9） 底　（6.9）	平底から体部やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部　横撫で。 外面　体部横篦削り、底部篦削り。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	内面に放射状暗文
6	小型坏	口　（9.4） 高 —— 底 ——	体部やや丸みを持って立ち上上がる。	口縁部　横撫で。 体部　撫で。	砂粒を含む 良	にぶい橙色	
7	鉢	口　（21.9） 高　7.9 底　12.0	底部わずかに膨らみを持つ。体部やや内彎気味に立ち上がる。	口縁部　横撫で。 外面　体・底部篦削り。 内面　撫で。	砂粒を含む 良	橙色	

11号住居址（第32図）

12号住居址に切られて竈の残骸の一部が検出されたのみである。規模、形状共に不明で出土遺物も無い。時期は不明である。

12号住居址（第33図）

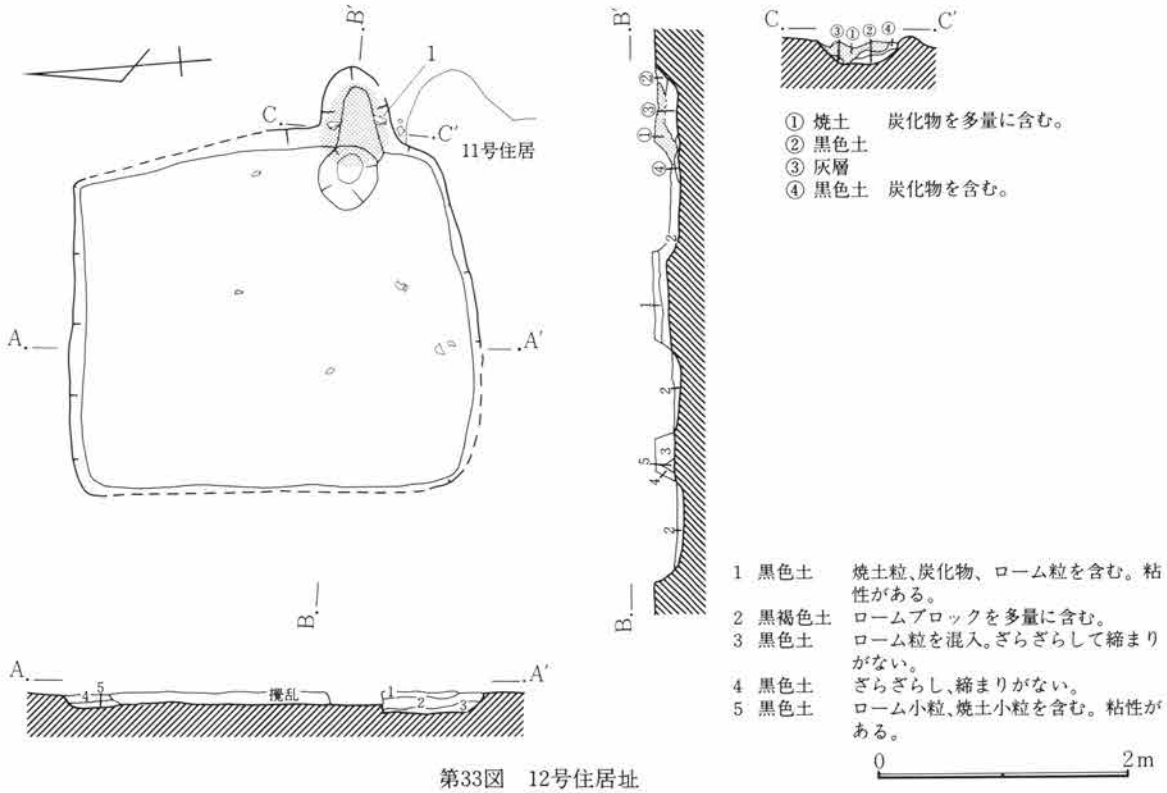
44～46－A43～45グリッドに位置する。隅丸長方形を呈し、規模は325×(284)cm、壁高は12cmであるが各壁の残りは良くない。後世の浅い溝が南北に走っており、このため床面は良好な状態とは言えない。柱穴は見られず、貯蔵穴も検出されていない。竈は南東隅近くに築かれており、焚き口幅40cm長さ50cmを測る。竈の前面に小ピットがある。出土遺物は坏が４点と少ない。時期は平安時代である。



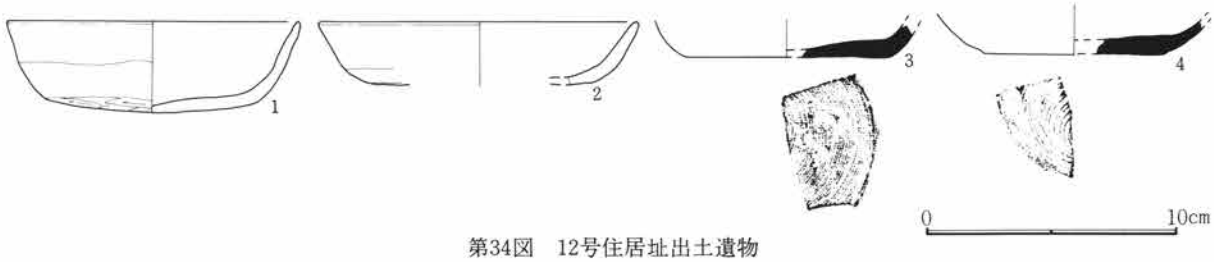
第32図　11号住居址竈

表 12　12号住居址遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	坏	口径　11.7 器高　3.6 底径　7.4	ほぼ平底を呈す。体部外傾して立ち上がり、口縁部やや外反気味。	口縁部　横撫で。 外面　体部撫で、底部篦削り。 内面　撫で、指押え痕有り。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
2	坏	口　（12.8） 高 —— 底 ——	底部から体部への屈曲部丸みを持つ。	口縁部　横撫で。 体部　篦削り。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
3	須恵器坏	口 —— 高 —— 底　（8.2）	底部、中央が薄くなる。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り。	砂粒を含む 軟質（酸化気味）　良	黒色一部黄灰色	
4	須恵器坏	口 —— 高 —— 底　（7.0）	体部開き気味に立つ。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り。	砂粒を含む 軟質（酸化気味）　良	体部黒色 底部灰色	



第33図　12号住居址



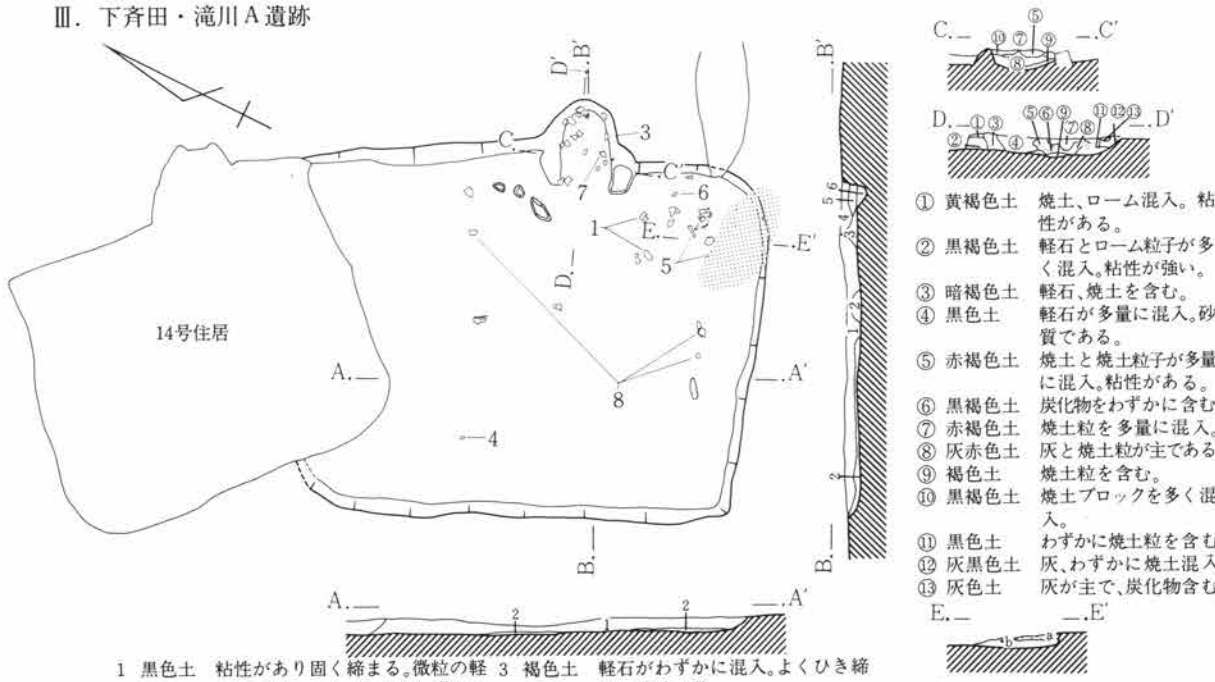
第34図　12号住居址出土遺物

13号住居址（第35図）

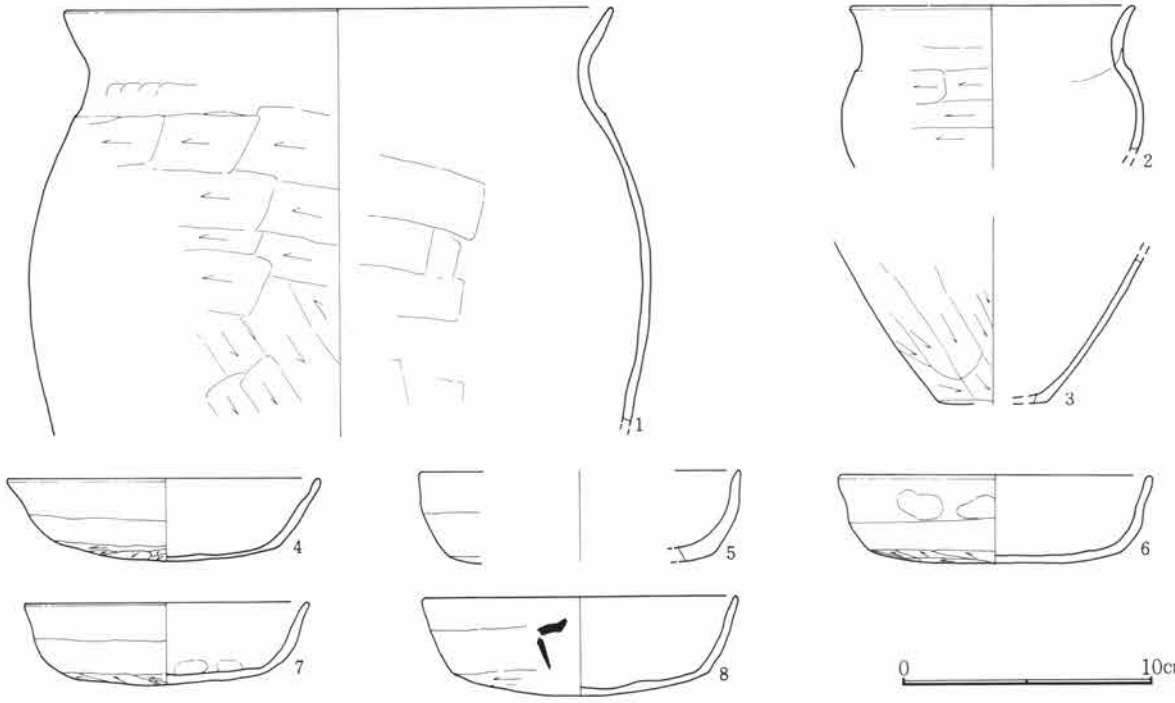
45～46－A38～40グリッドにて検出した。北側部分に14号住居址が重複する。平面形状は隅丸長方形であるが東壁がやや長い。規模は（320）×300㎝、壁高は最大で25㎝である。床面は比較的平坦である。柱穴、貯蔵穴は検出されていない。竈は東壁の中央やや南寄りに築かれ、焚き口幅30㎝、長さ40㎝で右側に袖石が見られる。遺物は竈前面部を中心に散在して出土している。時期は平安時代である。

表 13　13号住居址遺物観察表

番号	器種	法量（㎝）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	甕	口径（22.0） 器高 —— 底径 ——	胴部膨らみ頸部でやや締まる。口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　箆削り。 内面　箆撫で。	細砂粒を混入 良	橙色	
2	小型甕	口　（12.0） 高 —— 底 ——	なだらかな肩部から口縁部直立気味に立ち上がる。	口縁部　横撫で。 外面　横箆削り。 内面　撫で。	細砂粒を混入 良	褐色～暗褐色	
3	甕	口 —— 高 —— 底　（4.5）	小さめの底部より胴部は外傾して立ち上がる。	外面　胴部、底部箆削り。 内面　箆撫で。	細砂粒を混入 良・堅緻	にぶい橙色	



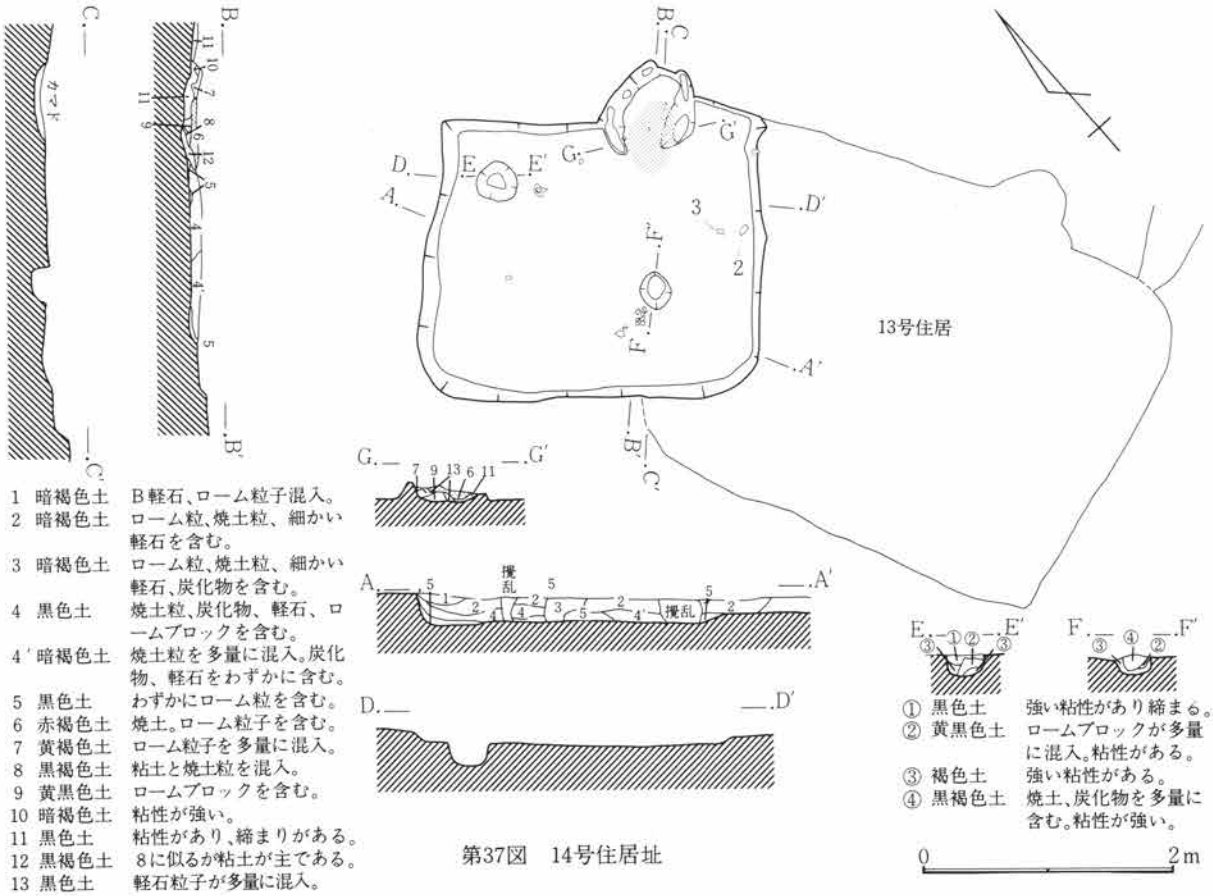
第35図　13号住居址



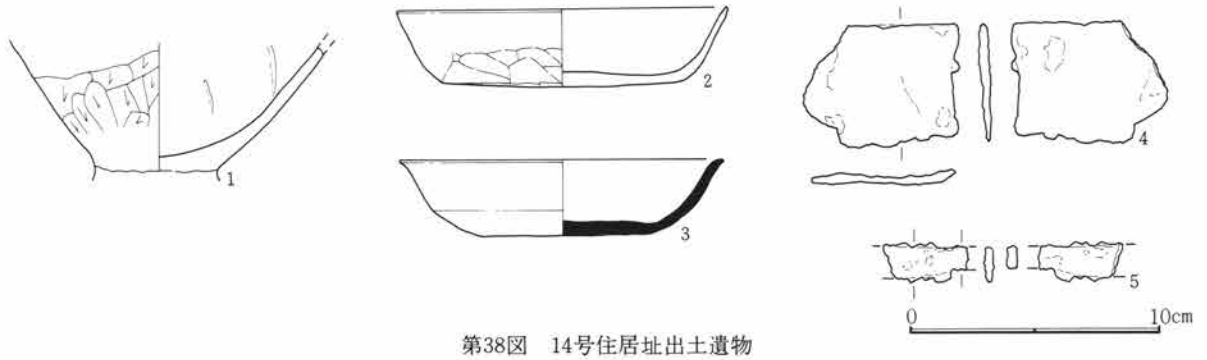
第36図　13号住居址出土遺物

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
4	坏	口径　12.5 器高　3.3 底径　――	底部やや丸みを持つ。口縁部外傾して立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で、内面撫で。 底部　篦削り。	砂粒をわずかに混入 良	橙色	
5	坏	口　(12.8) 高　―― 底　――	口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で、内面撫で。 底部　篦削り。	細砂粒をわずかに混入 良	にぶい橙色	

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
6	坏	口径（12.5） 器高（ 3.5） 底径（10.1）	平底に近い底部から口縁部丸みを持って立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で、内面撫で。 底部　篦削り。	細砂粒を混入 良	橙色	
7	坏	口　（11.4） 高　（ 3.2） 底　（ 7.8）	平底に近い底部から口縁部やや外傾して立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で、内面撫で。 底部　篦削り。	細砂粒を混入 良	にぶい橙色	
8	坏	口　（12.6） 高　（ 3.9） 底　（10.2）	底部やや丸みを持つ。口縁部丸みを持って立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で、内面撫で。 底部　篦削り。	砂粒を混入 良	橙色	側面に墨書「＋」か？



第37図　14号住居址



第38図　14号住居址出土遺物

14号住居址（第37図）

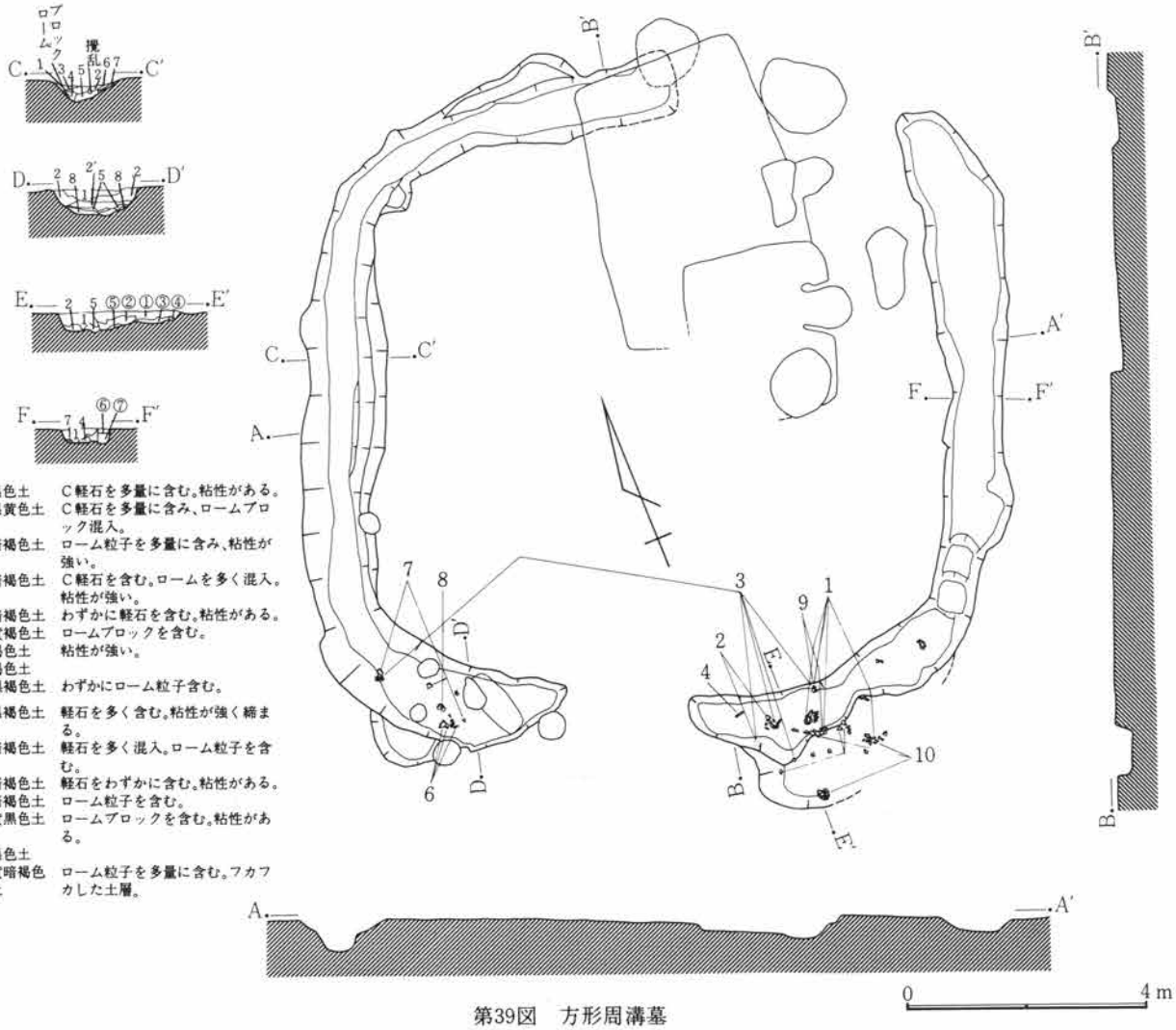
45～46－A40～41グリッドに位置し、13号住居址の北壁部分に重複する。形状は隅丸長方形で規模は271×218cm、壁高は12cmである。床面は比較的平坦であるが、余り良好な状態ではない。柱穴、貯蔵穴は見られず、

Ⅲ．下斉田・滝川Ａ遺跡

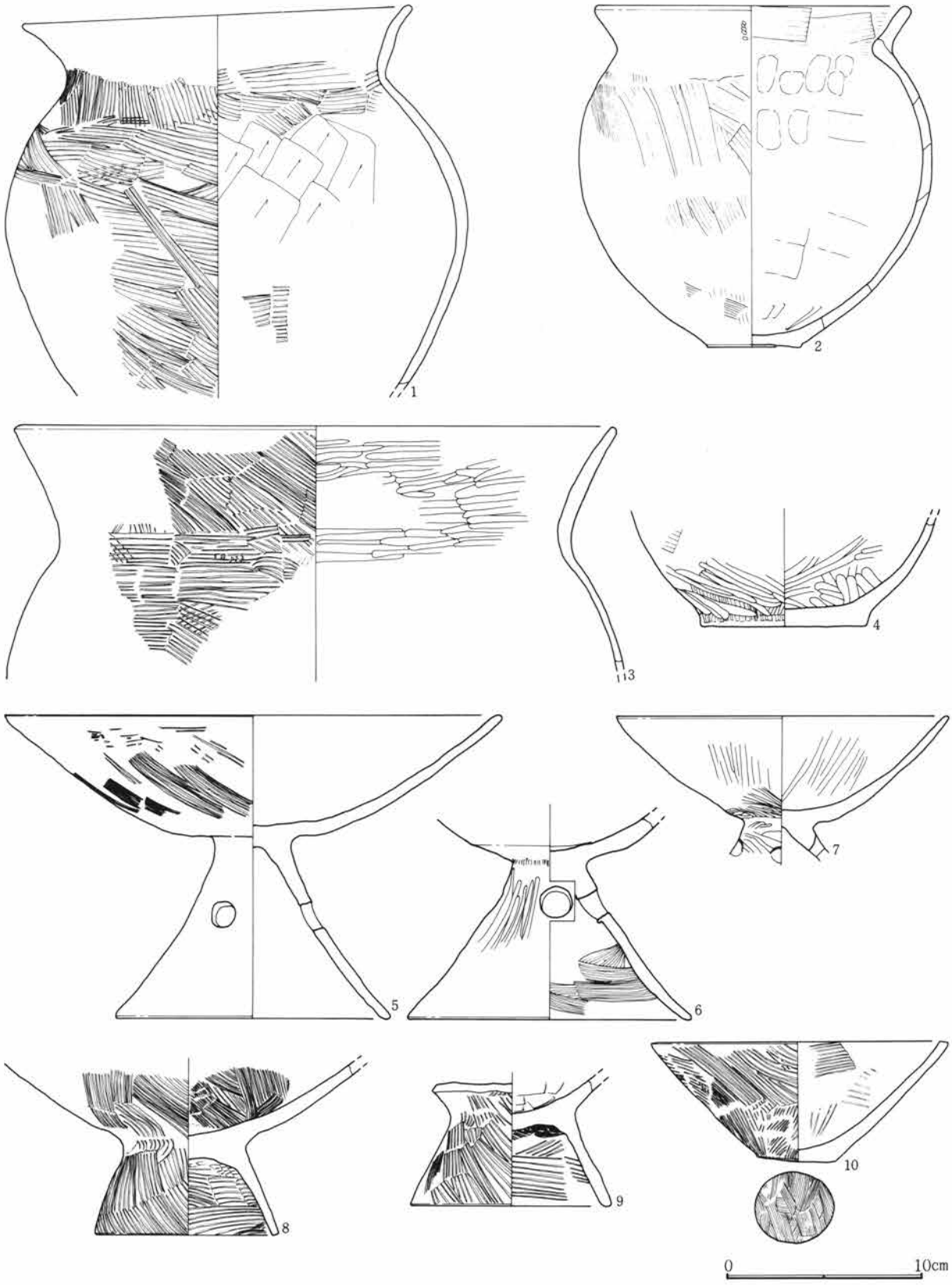
北東隅、中央やや南寄りに小ピットが検出されたのみである。竈は東壁中央やや南寄りに築かれている。焚き口幅30㎝、長さ40㎝でかなり丸みを持つ。出土遺物は少ないが土器の他に鉄製品が２点出土している。時期は平安時代である。

表 14　14号住居址遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	台付甕	口径 —— 器高 —— 底径 ——	胴部逆「ハ」の字に開く。	外面　箆削り、接合部撫で。 内面　箆撫で。	砂粒・石粒(5～6㎜)を含む 良	にぶい橙色	
2	坏	口　(13.0) 高　3.1 底　(10.0)	ほぼ平らな底部から口縁部やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部　横撫で。 体部　箆撫で、内面撫で。 底部　箆削り。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
3	須恵器 坏	口　(13.0) 高　3.0 底　7.0	口縁部丸みを持って立ち上がる。口縁端部外反。	口縁部　横撫で。 体部　箆撫で。 底部　ロクロ右回転糸切り。	砂粒・石粒(7～8㎜)含む 良	灰白色	
4	鉄器	長さ（6.1） 幅　4.9 厚さ　0.3	板状で刃と思われる部分は薄くなる。				
5	鉄器 （刀子）	長さ（3.4） 幅　1.3 厚さ　0.4	関部分か。				



第39図　方形周溝墓



第40図　方形周溝墓出土遺物

(2) 方形周溝墓（第39図）

西拡張区28～35－C44～D00グリッドに位置する。５号住居址精査中に周溝の一部を検出した。規模は東西11.6m、南北11.0mを測り、台状部は9.5×9.3m、主軸方位はN－40°－Eである。周溝の平面形状はほぼ方形を呈すが、南北部分に橋状に切れる部分がある。周溝の上幅は1.0～1.3mで、下幅は約0.5m、深さは0.2～0.3mである。南側の溝がやや深くなる。溝の断面形状はおよそ浅い「U」字状であるが、いずれも内側は垂直に近い掘り込みを示し、外側はやや緩やかに立ち上がる。台状部については後世の遺構が数多く重複しているために、方形周溝墓に伴うと思われる主体部等の検出は無かった。遺物は南側周溝内にて壺、甕類を中心に出土している。いずれも底から浮いた状態である。

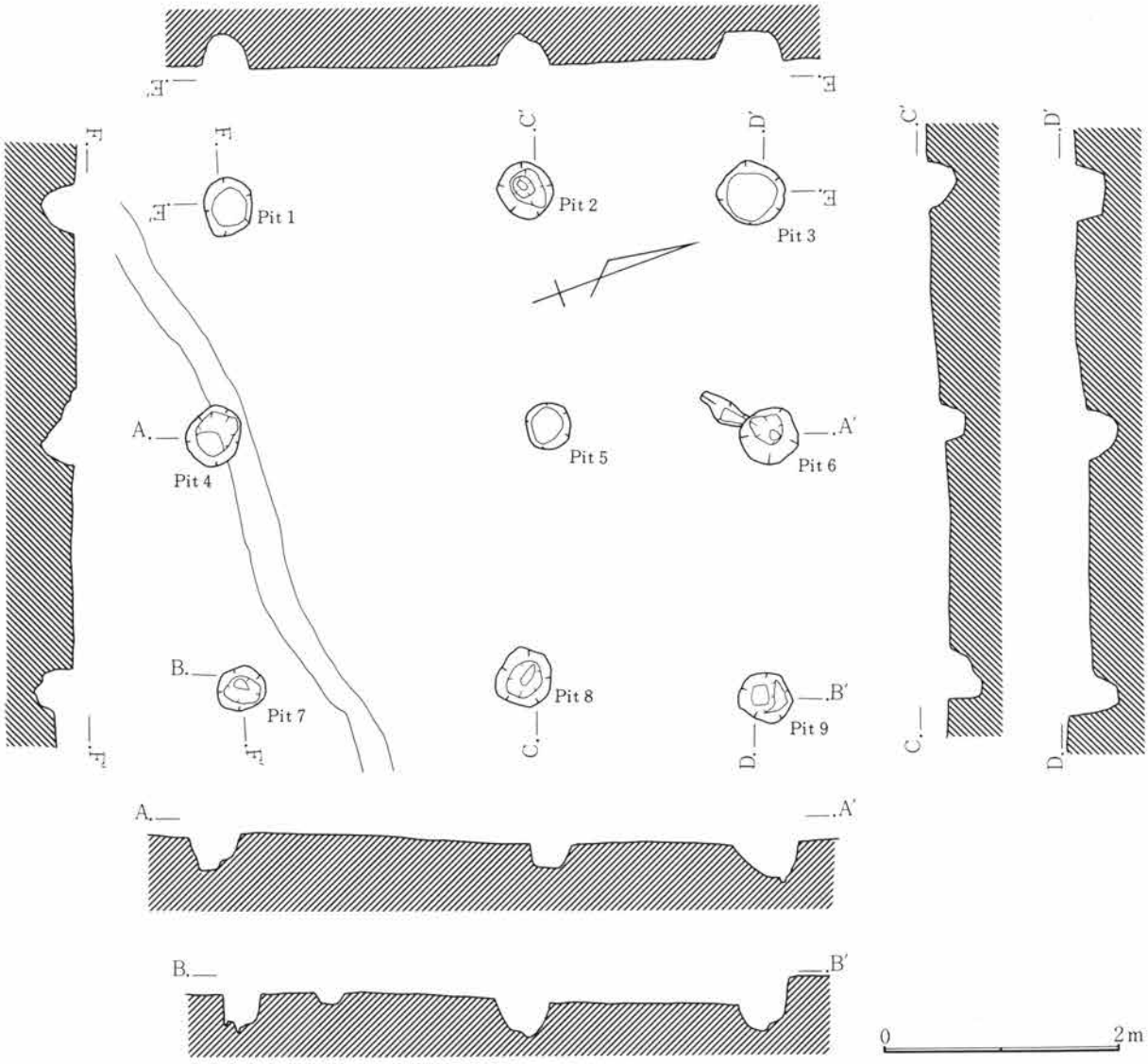
表 15　方形周溝墓遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	甕	口径 20.0 器高 —— 底径 ——	胴部丸みを持ち、頸部でやや締まり、口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　胴部篦削り、肩部刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
2	甕	口 16.1 高 17.1 底 4.9	胴部は丸く膨らみを持ち立上がる。頸部「く」の字にくびれ口縁部外反、端部丸くなる。	口縁部　横撫で。 外面　胴部斜め刷毛目。 内面　篦撫で、肩部指押え痕。	粗砂粒をわずかに混入 良	赤褐色～橙色	
3	甕	口 31.0 高 —— 底 ——	なだらかな肩部から頸部わずかに締まり、口縁部ゆるやかに外反する。	外面　刷毛目。 内面　口縁部横篦磨き、以下篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	大型品
4	甕	口 —— 高 —— 底 8.4	胴部丸みを持って立ち上がる。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　篦磨き。	砂粒を含む 良	にぶい橙色一部黒褐色	
5	高坏	口 (25.2) 高 (15.1) 底 (7.0)	坏は下部に弱い稜を持ち、大きく開く。脚部は「ハ」の字に広がる。3個の円形透し孔。	外面　脚部、坏部ともに刷毛目後篦磨き。 内面　坏部篦磨き、脚部刷毛目後撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
6	高坏	口 —— 高 —— 底 14.4	脚部は「ハ」の字に開き、裾部はやや広がる。坏部に弱い屈曲、脚上位に4個の円形透し孔。	外面　縦篦磨き。 内面　坏部篦磨き、脚部上部指撫で。 下部横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
7	高坏	口 (17.0) 高 —— 底 ——	坏部はやや丸みを持って立ち上がる。脚部に円形の透し孔４個持つ。	外面　脚部、坏部ともに篦磨き。 内面　坏部篦磨き。	砂粒を含む 良	橙色	
8	台付甕	口 —— 高 —— 底 9.4	「ハ」の字に開く台部から胴部は大きく開いて立ち上がる。	外面　刷毛目。 内面　台部刷毛目、下部篦撫で。 台部上面篦撫で、以下横刷毛目。	２～４㎜の石粒を含む 良	明赤褐色	台部のみ
9	台付甕	口 —— 高 —— 底 (10.4)	台部「ハ」の字に開く。	外面　刷毛目。 内面　胴部篦撫で、台部篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	台部のみ
10	椀	口 15.1 高 4.0 底 6.1	小ぶりの底部から直線的に開いて立ち上がる。口唇部平らに面取りされている。	口縁部　端部横撫で。 外面　体部斜め刷毛目、底部刷毛目(密) 内面　刷毛目後撫で。	1～2㎜の石粒少量混入 良	にぶい橙色～明赤褐色	

表 16　1～14号住居址、方形周溝墓遺構観察表

番号	規模(cm)	位置	形状	主軸方位	カマド・炉	柱穴	貯蔵穴	周溝	備考
1号住	長軸 830 短軸 726 壁高 23	49～54－C45～D00	長方形	N－5°－W	——	4本	なし	なし	炉は中央の未掘部分にあると推定される
2号住	長 345 短 335 壁 27	37～38－D03～D04	不明	N－36°－W	炉 中央東より	——	——	——	
3号住	長 (420) 短 (313) 壁 ——	48～50－B42～43	長方形	——	カマド 中央やや南寄り	なし	なし	——	
4号住	長 (349) 短 265 壁 24	29～31－B46～47	不定形	N－90°－E	なし	なし	竈右側	——	北側半分が6号住居址に重複する
5号住	不明	29－C46	不明	——	——	——	——	——	
6号住	長 450 短 345 壁 12	28～31－C47～50	長方形	N－90°－E	カマド 東壁中央やや南寄り	なし	なし	——	南側に4号住居址が重複する
7号住	長 448 短 340 壁 25	35～37－D00～02	長方形	N－70°－E	カマド 東壁中央南	11本	なし	——	
8号住	長 (565) 短 (420) 壁 19	30～33－D04～07	長方形	N－20°－W	炉 中央やや西寄り	——	——	——	
9号住	長 (235) 短 —— 壁 10	13～14－A11～12	不明	N－6°－E	カマド 東側	——	南東隅	——	
10号住	不明	46～47－A46	不明	——	——	なし	——	——	
11号住	不明	45－A43	不明	——	——	——	——	——	
12号住	長 325 短 (284) 壁 12	44～46－A43～45	長方形	N－2°－E	カマド 南東隅	なし	なし	溝 南東	
13号住	長 (320) 短 300 壁 25	45～46－A38～40	長方形	N－27°－W	カマド 東壁やや中央	なし	なし	——	北側部分に14号住居址が重複する
14号住	長 271 短 218 壁 12	45～46－A40～41	長方形	N－49°－W	カマド 東壁中央やや南寄り	なし	なし	——	13号住居址の北壁部分に重複する

	規模（m）	位置	主軸方向	備考
方形周溝墓	11.6×11.0 台状部 9.5× 9.3	28～36－C44～D00	N－40°－E	



第41図　１号掘立柱建物址

(3) 掘立柱建物址

総数５棟を検出している。いずれも方２間以内の小規模のものである。時期は掘り込み面と掘り込み面上の遺物、周囲の遺構から判断して平安期に比定されると思われる。５号については中央に小鍛冶遺構が見られ、検討を要す。

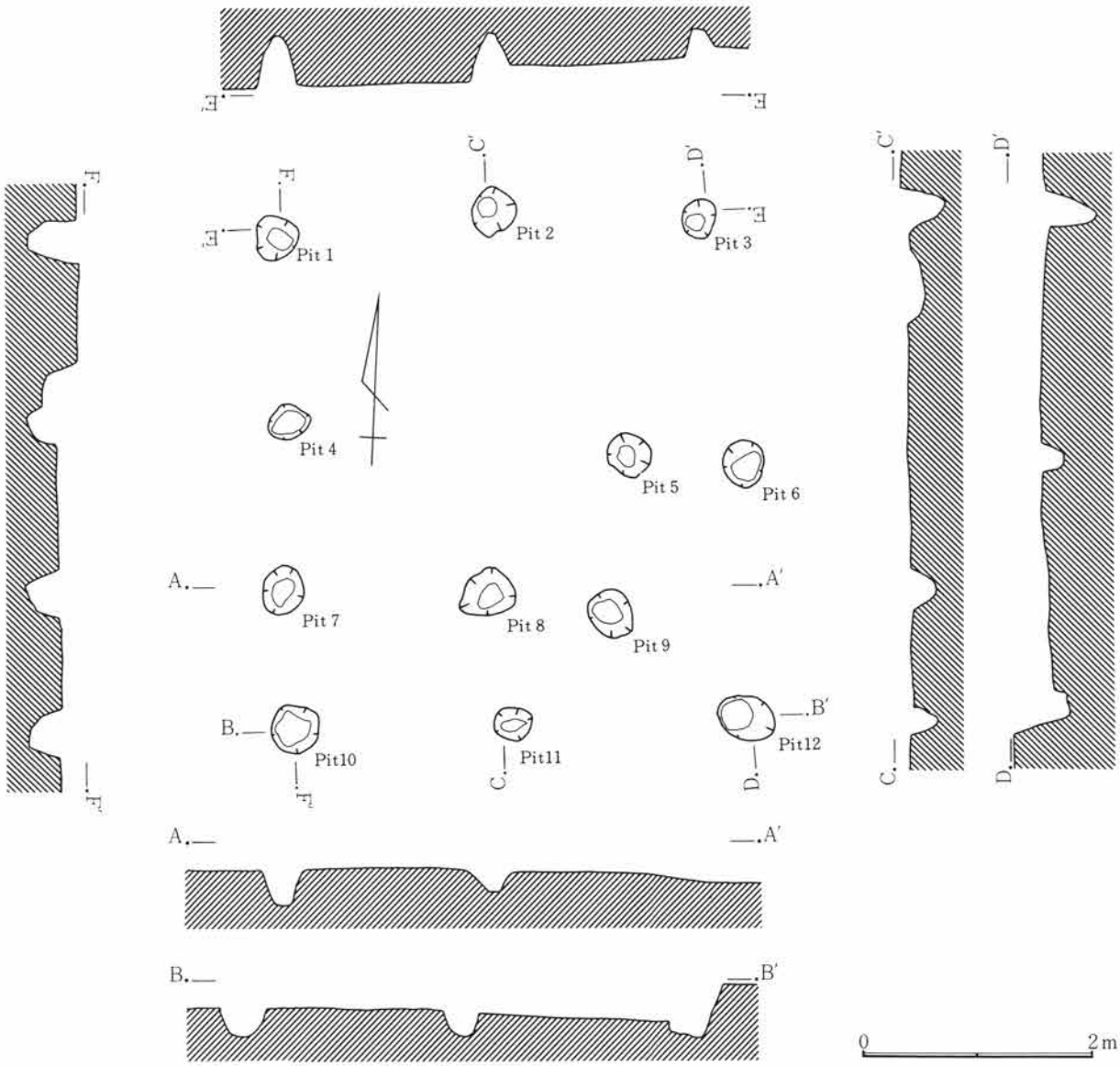
１号掘立柱建物址（第41図）

26～29－C44～47グリッドに位置する。２間×２間である。方形周溝墓と重複。総柱である。

表 17　１号掘立柱建物址遺構観察表

単位＝cm

	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深
１号掘立	Pit 1 50×41×28	Pit 2 48×48×26	Pit 3 58×54×24	Pit 4 52×46×31	Pit 5 39×38×21	Pit 6 50×48×30	Pit 7 41×37×32	Pit 8 49×47×31	Pit 9 46×42×46



第42図　2号掘立柱建物址

2号掘立柱建物址（第42図）

27～30－C41～44グリッドに位置する。2間×2間で廂を持つ可能性もある。

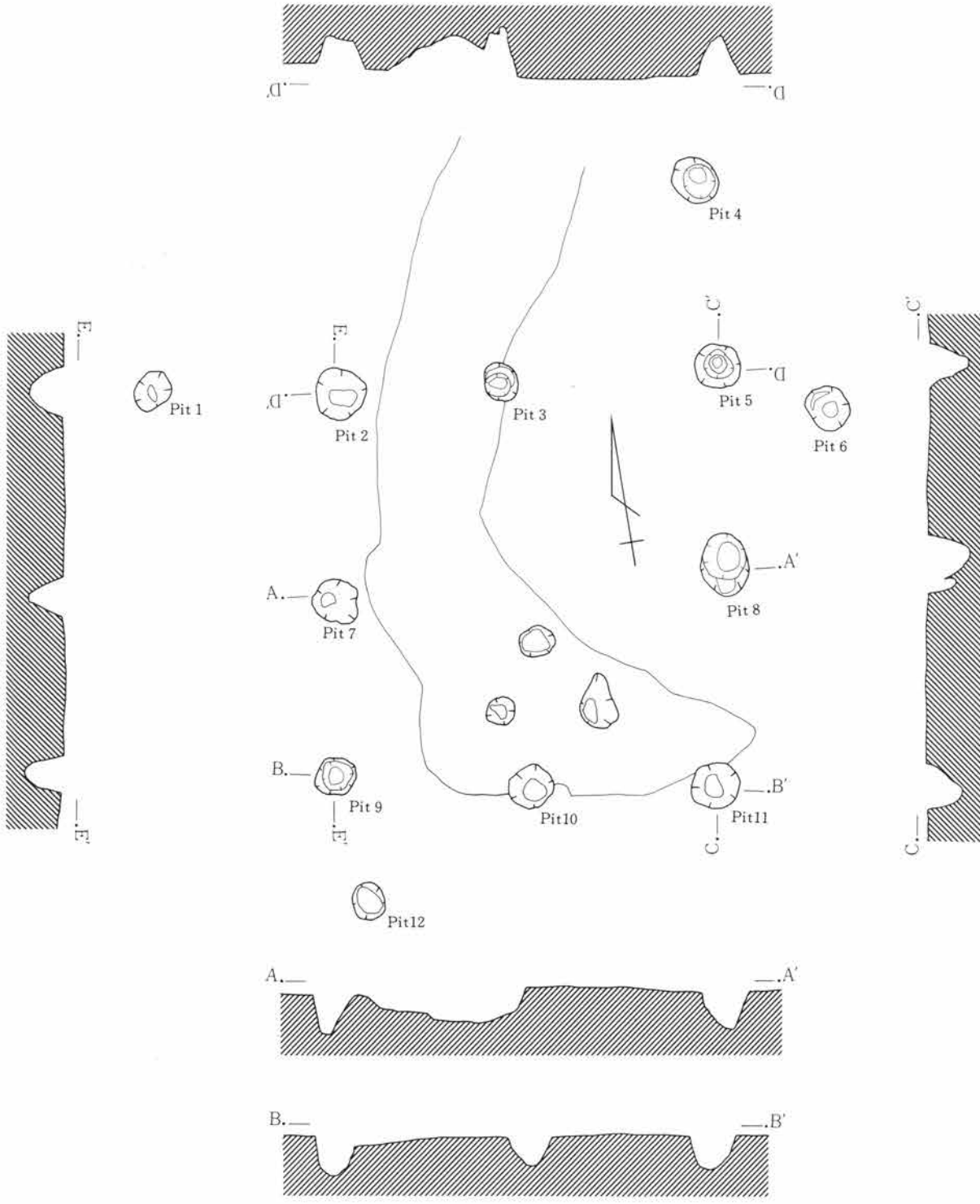
表 18　2号掘立柱建物址遺構観察表

単位＝cm

	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深
2号掘立	Pit 1 39×37×45	Pit 2 44×39×43	Pit 3 34×29×43	Pit 4 36×31×27	Pit 5 39×38×21	Pit 6 42×36×17	Pit 7 42×36×30	Pit 8 46×42×22	Pit 9 42×39×10	Pit 10 41×41×28
	Pit 11 33×28×23	Pit 12 47×37×48								

3号掘立柱建物址（第43図）

32～35－C46～49グリッドに位置する。2間×2間である。方形周溝墓、19号土壙と重複する。ややひしゃげた形となる。



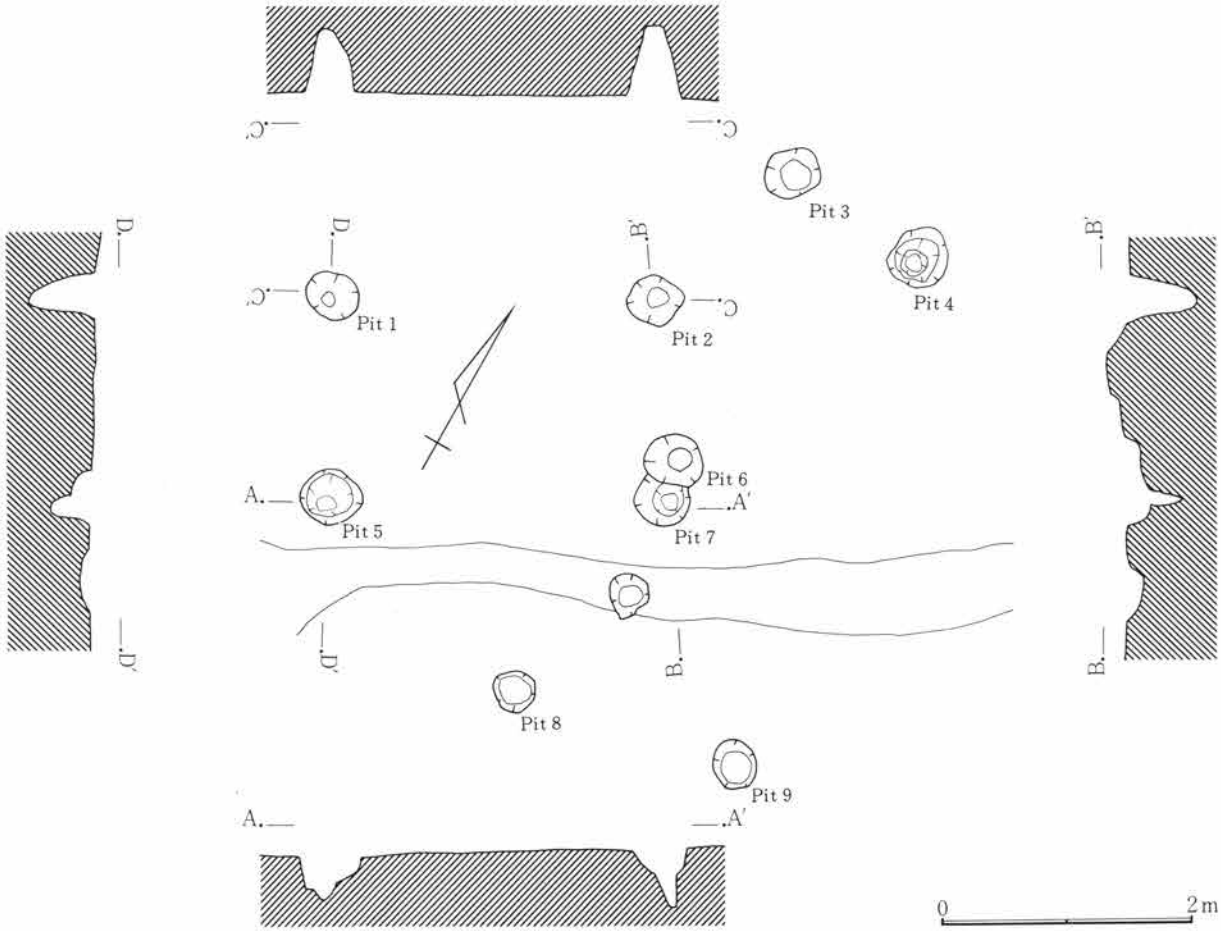
第43図　3号掘立柱建物址

0　2m

表 19　3号掘立柱建物址遺構観察表

単位＝cm

	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深
3号掘立	Pit 1 38×37×47	Pit 2 50×49×32	Pit 3 37×33×48	Pit 4 47×45×19	Pit 5 45×42×38	Pit 6 43×42×35	Pit 7 44×41×37	Pit 8 62×47×37	Pit 9 42×36×37	Pit 10 44×43×27
	Pit 11 47×46×34	Pit 12 37×32×18								



第44図　4号掘立柱建物址

4号掘立柱建物址（第44図）

36～37－C43～44グリッドに位置する。1間×1間である。柱穴の位置がやや不規則で、それぞれの掘り方もばらつきが見られる。

表 20　4号掘立柱建物址遺構観察表

単位＝cm

	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深
4号掘立	Pit 1 42×37×54	Pit 2 46×41×55	Pit 3 44×38×23	Pit 4 48×47×32	Pit 5 50×44×33	Pit 6 47×40×13	Pit 7 45×(45)×46	Pit 8 34×33×14	Pit 9 39×36×20

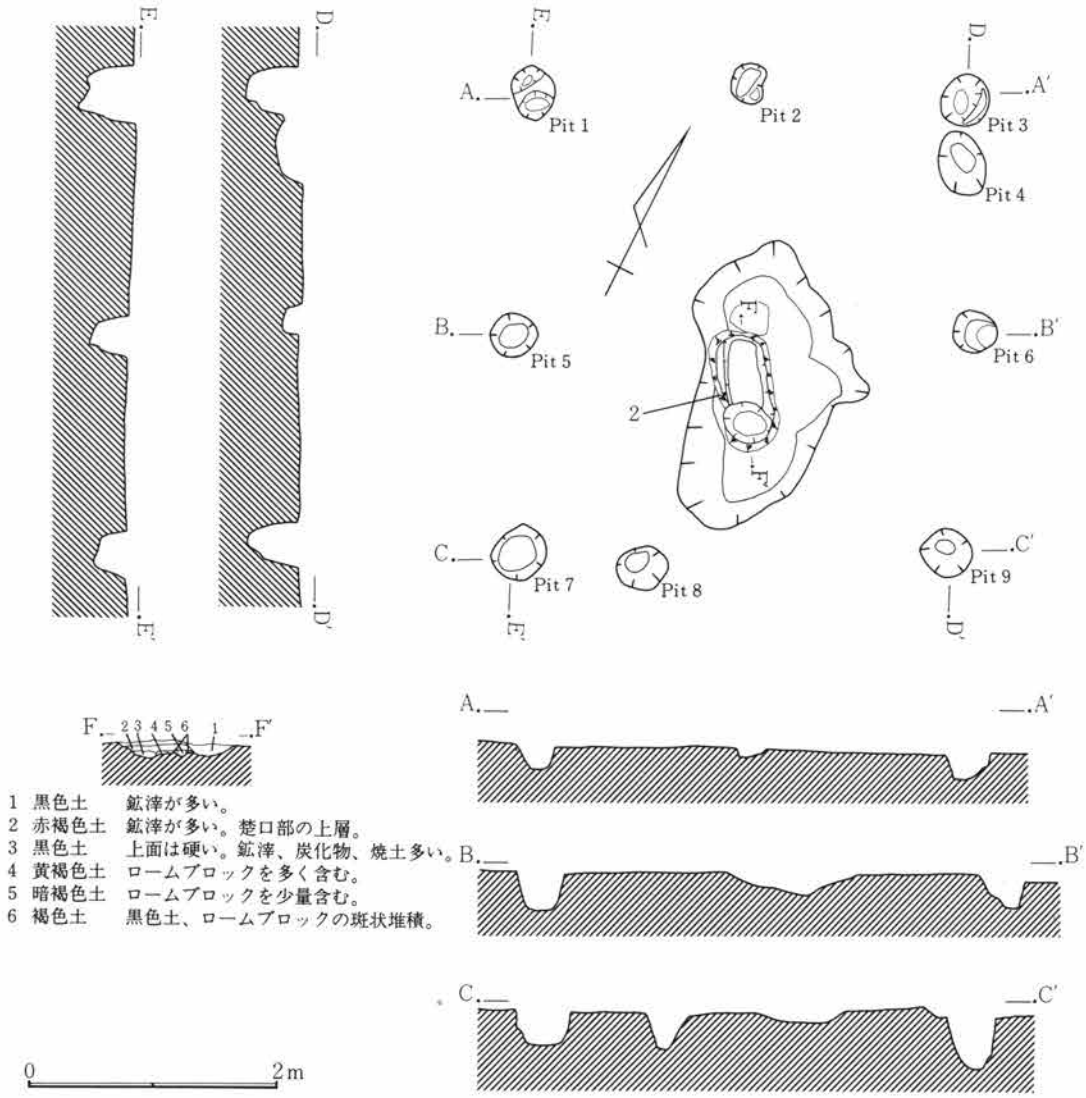
5号掘立柱建物址（第45図）

31～33－C01～03グリッドに位置する。2間×2間で中央に小鍛冶遺構を持つ。その規模は長軸2.3m 短軸1.1m、深さ15cmで中央が鍋底状にややくぼんでいる。焼土、鉱滓に混じり鞴羽口が出土している。

表 21　5号掘立柱建物址遺構観察表

単位＝cm

	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深
5号掘立	Pit 1 43×35×45	Pit 2 33×25×8	Pit 3 42×39×47	Pit 4 50×38×21	Pit 5 39×35×30	Pit 6 36×34×25	Pit 7 45×45×28	Pit 8 42×36×28	Pit 9 42×38×41



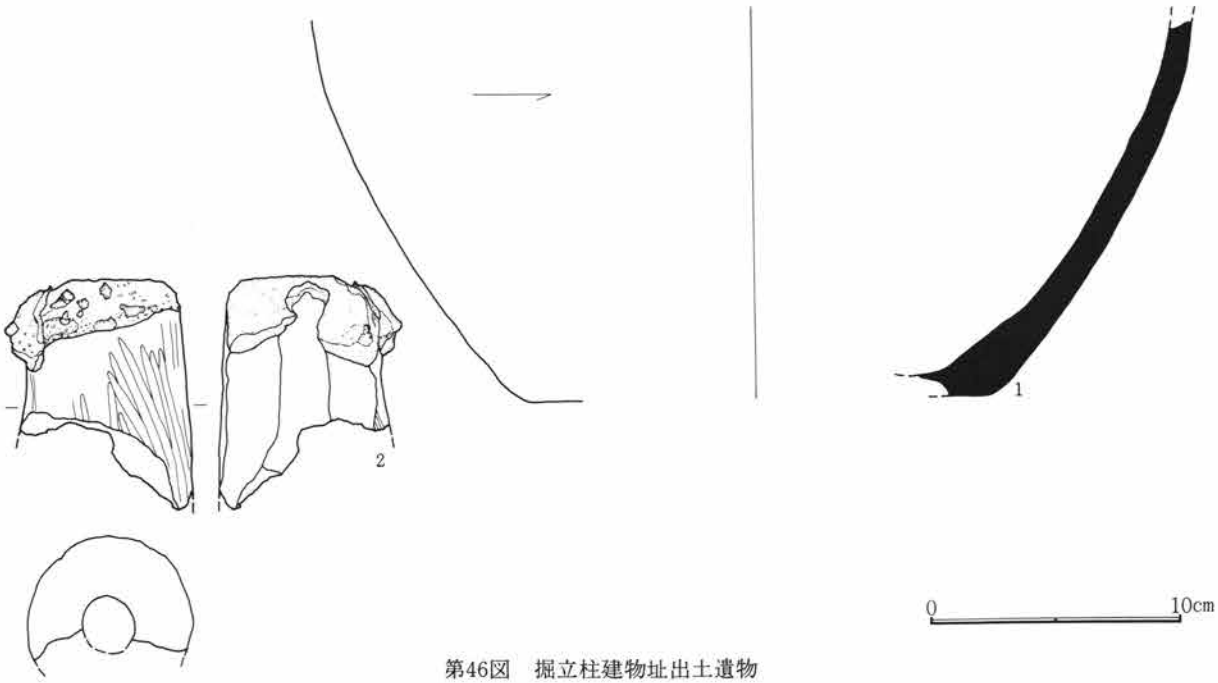
第45図　5号掘立柱建物址

表 22　掘立柱建物址遺構観察表

番号	棟方向	位置	方位	規模(間)	柱間寸法（cm）		柱間隔（cm）		備考
					桁行	梁行	桁行	梁行	
1号	E W	26～29－C44～47	N－71°－W	2間×2間	(N) 425 (S) 400	440	(N)205＋220 (S)200＋200	(N)245＋195	方形周溝墓と重複
2号	E W	27～30－C41～44	N－96°－W	2間×2間 ＋廂(?)	(N) 360 (S)(?)	(W)300＋125 (E) (?)	(N)180＋180 (S)180＋(?)	(W)125＋150 ＋150	
3号	E W	32～35－C46～49	N－89°－W	2間×2間	(N)375 (S)370	(W)370 (S)410	(N)160＋215 (S)185＋185	(W)185＋185 (E)220＋190	方形周溝墓、19号土壙と重複
4号	E W	36～37－C43～44	N－32°－W	1間×1間	270	165			
5号	E W	31～33－D01～03	N－30°－W	2間×2間	350	350	(N)100＋250 (S)175＋175	(W)175＋175 (E)170＋180	小鍛冶遺構と重複

表 23　掘立柱建物址遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	須恵器 甕	口径 —— 器高 —— 底径（18.0）	胴部は内彎気味に立ち上がる。 底は平底。	外面　横撫で、左→右。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色～橙色	
2	鞴羽口	法量（cm） 全長（9.2）　外径（6.8）　孔径（1.5）		形態の特徴 外面は棒状工具により縦の調整痕。	備考 先端部に溶解物付着		



第46図　掘立柱建物址出土遺物

(4) 土　壙

総数35基を検出したが明らかに人為的なものと考えられるもののみを取り上げた。かなり浅いものや形状が不定なものについては一部取り上げていないものもある。時期が比定し得るものには古墳時代初頭のものが調査区西拡張区にて検出されており、以下個別に説明を加えてゆくこととする。

1号土壙

45～46－D05～06グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で径約40㎝、深さ117㎝を測る。断面の形状は「U」字状で底は平坦である。

2号土壙

45－C49グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は径約70㎝、深さ79㎝で底は平坦である。覆土下層より壺の底部片が1点出土している。

3号土壙

45～46－C43グリッドに位置する。径50㎝、深さ47㎝を測り底部はやや狭くなり平坦となる。高坏が出土している。

4号土壙

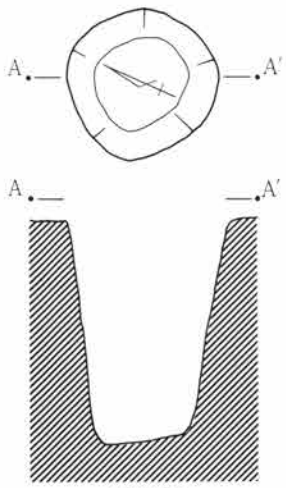
46～47－C43～44グリッドに位置する。長円形で、規模は197×87㎝で深さは10㎝と浅い。そこは平らである。浮いた状態で土師器の坏1点が出土している。

5号土壙

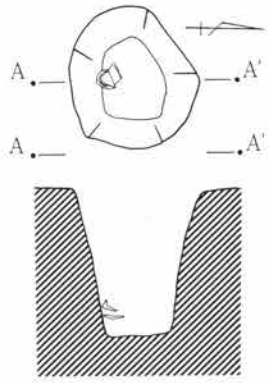
35～36－C49～D00グリッドに位置する。円形を呈し規模は径が約130㎝で深さ100㎝である。底はやや狭くなり丸みを持つ。

6号土壙

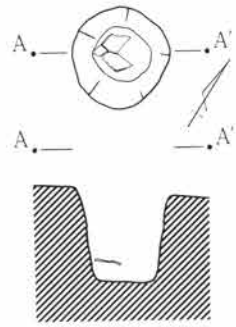
37～38－C49～D00グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、規模は129×(107)㎝深さ27㎝で、底は平らであ



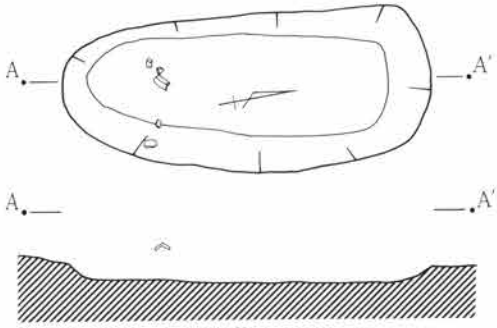
1号土壙



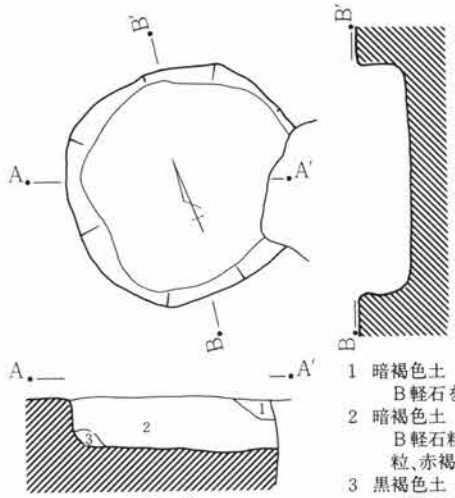
2号土壙



3号土壙

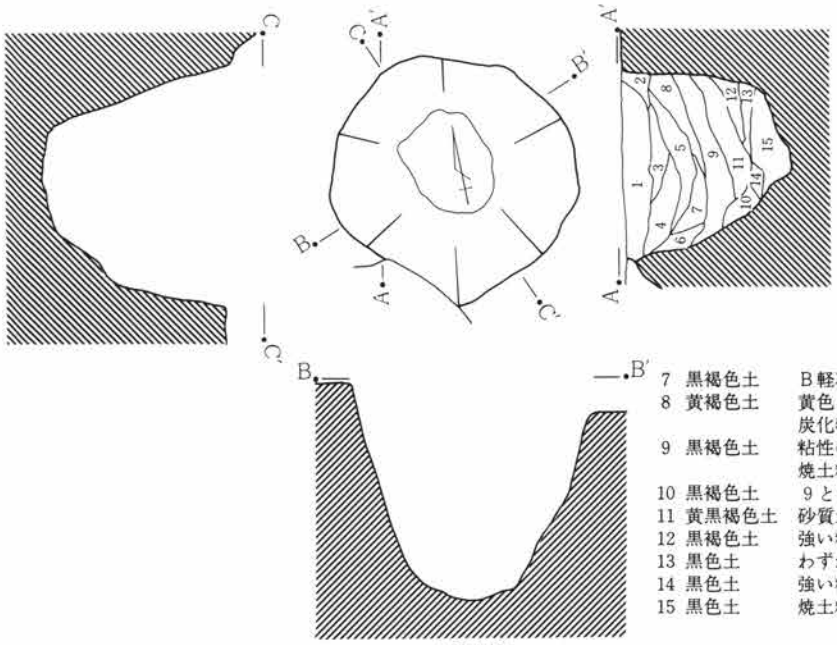


4号土壙



6号土壙

1 暗褐色土
　Ｂ軽石を多量に含む砂質土。
2 暗褐色土
　Ｂ軽石粒を含み、カーボン粒、赤褐色粒を少量含む。
3 黒褐色土
　粘性を呈し、2のブロック、ローム粒子少量含む。

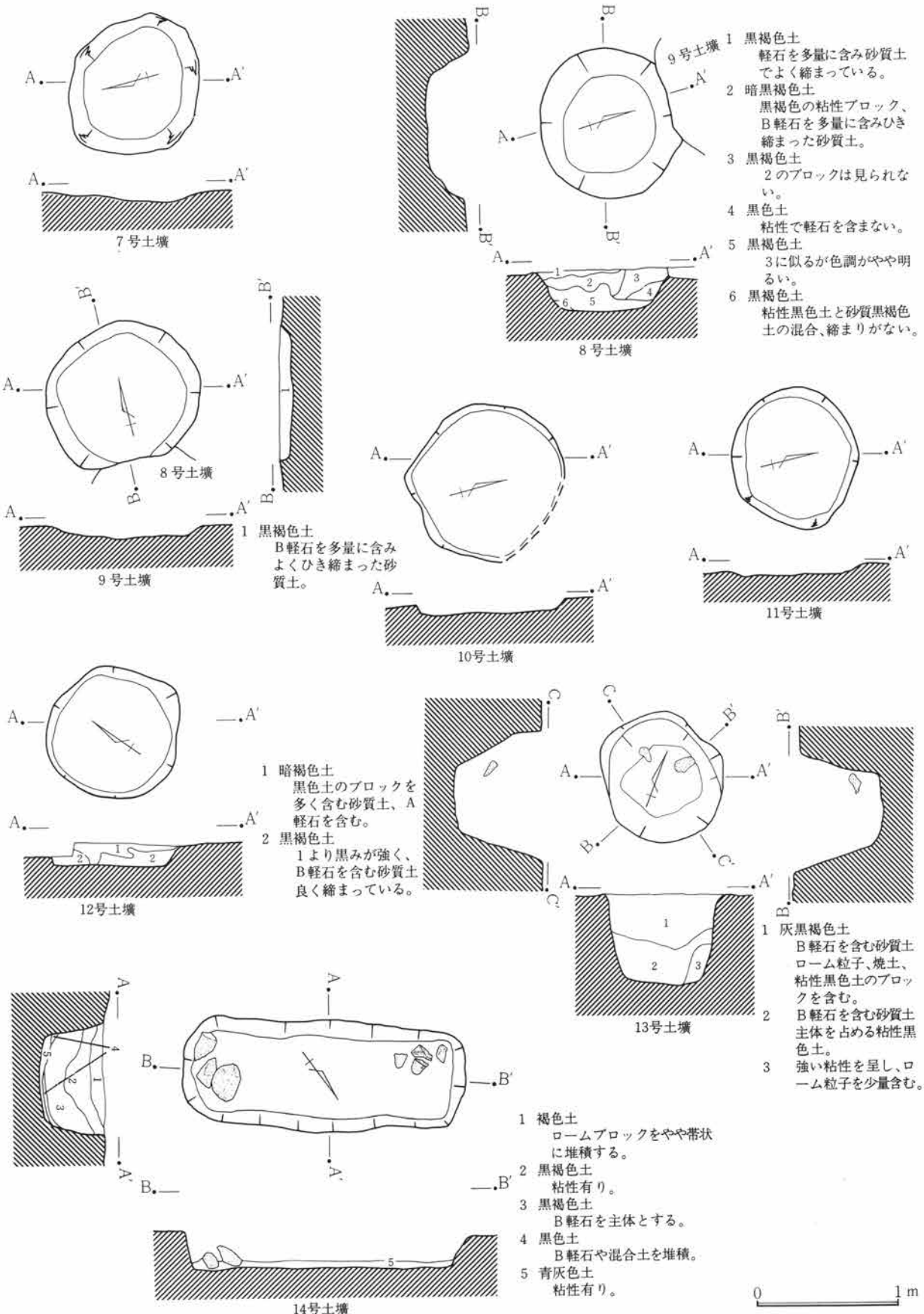


5号土壙

1 黒褐色土
　Ｂ軽石を含んだ砂質土。ローム粒子、焼土粒、炭化物を含む。
2 黒褐色土
　1よりやや硬質土。
3 灰黒色土
　基調は粘質土。焼土粒や灰のブロックを含む。
4 暗褐色土
　Ｂ軽石、焼土粒を若干含む。
5 灰黒色土
　2と同じ。ローム粒（5㎜大）を含み、鉄分凝集粒の見られる粒質土。
6 暗褐色土
　4と同じ。ややふかふかしている。
7 黒褐色土　Ｂ軽石を微量に含む砂質土。炭化物わずかに含む。
8 黄褐色土　黄色ローム、粘性黒色土ブロックの混合土。炭化物わずかに含む。
9 黒褐色土　粘性の褐色土と黒色土、砂質土の混合土。焼土粒、ローム粒を含む。
10 黒褐色土　9と似るがローム粒がない。粘性黒色土が主。
11 黄黒褐色土　砂質土にローム粒子を大量に含む。
12 黒褐色土　強い粘性を持ち、ローム粒子を多く含む。
13 黒色土　わずかに粘性黒色土ブロックを含む。
14 黒色土　強い粘性を持ち、良く締まっている。
15 黒色土　焼土粒をわずかに含む。粘性土と砂質土の混合土。

0　1m

第47図　1～6号土壙（1）



第48図　7～14号土壙(2)

る。東側一部分を25号土壙により切られている。

７号土壙

37～38－C47～48グリッドに位置する。径は約100㎝で掘り込みは浅い。

８号土壙

38～39－C48～49グリッドに位置する。規模は径100㎝で、深さ30㎝である。覆土はＢ軽石の混土層で北側に９号土壙が接する。

９号土壙

38～39－C49グリッドに位置する。平面形状は円形で規模は径100㎝で深さは10㎝である。底は凹凸が見られる。

10号土壙

35－C45～46グリッドに位置する。規模は113×100㎝、深さ９㎝である。

11号土壙

35～36－C45グリッドに位置する。規模は100×90㎝で、深さ６㎝と非常に浅い。

12号土壙

35－C43～44グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、規模は径約100㎝で深さは16㎝である。底は平坦である。

13号土壙

37－C45グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は90×84㎝、深さは63㎝で底は平坦である。遺物は甕、壺、高坏がそれぞれ１点づつ出土している。

14号土壙

38～39－C42～43グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は80×20㎝、深さ25㎝である。底はほぼ平坦である。底部両側に石が置かれている。

15号土壙

43～44－C46～47グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で規模は147×146㎝、深さは118㎝である。壁は垂直に掘り込まれており、底は平坦である。

16号土壙

43－C48～49グリッドに位置する。円形を呈し、規模は100×97㎝で、深さは121㎝である。上部がやや広がり、底はほぼ平らである。遺物は甕が１点出土している。

17号土壙

36～37－D02グリッドに位置する。平面形状はほぼ円形を呈し、規模は121×117㎝、深さ128㎝である。

18号土壙

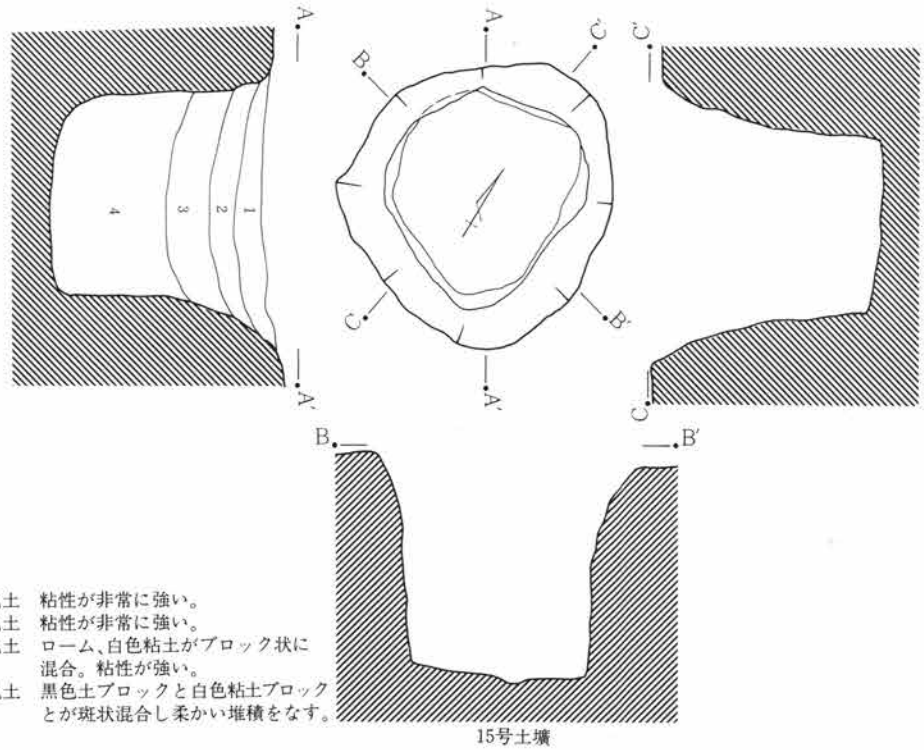
34－D01グリッドに位置する。平面形はやや長円形で規模は120×105㎝、深さ130㎝である。

19号土壙

34－C46～47グリッドに位置する。南北に長い不正長方形を呈し、掘り込みは浅い。規模は114×45㎝、深さ８㎝である。

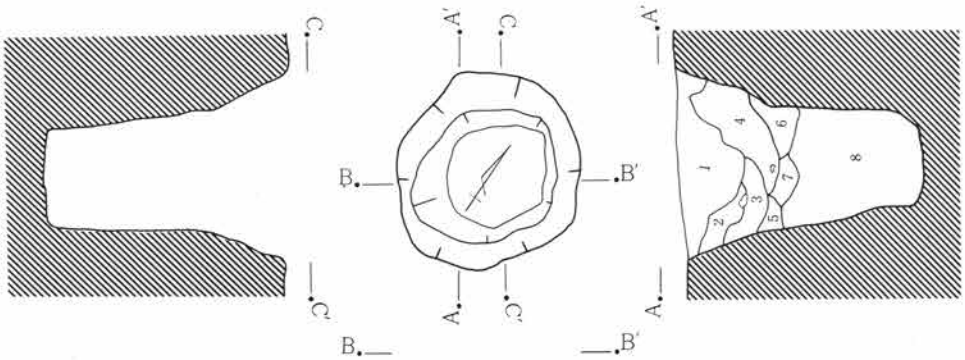
20号土壙

28～29－C47～48グリッドに位置する。やや長方形で、規模は140×114㎝、深さ23㎝である。遺物は甕、壺、台付甕、甑、高坏、埦などがやや浮いた状態で出土している。



1 黒色土　粘性が非常に強い。
2 黒色土　粘性が非常に強い。
3 黒色土　ローム、白色粘土がブロック状に混合。粘性が強い。
4 黒色土　黒色土ブロックと白色粘土ブロックとが斑状混合し柔かい堆積をなす。

15号土壙

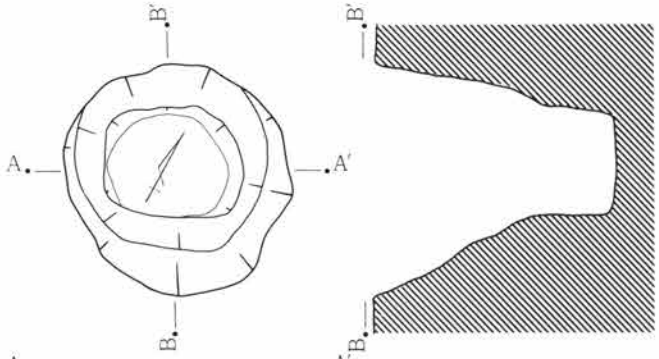


1 黒褐色土　多量の軽石、若干のローム粒子を含む。粘性が強い。
2 黒褐色土　1より茶色みがある。ローム粒子を含む。軽石は少なく粘性が強い。
3 暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子を含む。粘性有り。
4 黒褐色土　ローム粒子を含み粘性が強い。
5 黒色土　ローム粒子を若干含む。粘性が強くやや引き締まる。
6 暗褐色土　ローム粒子を含む。軟弱で粘性有り。
7 黄黒色土　ロームブロックが主体。
8 黄黒色土　ロームブロックを含む。

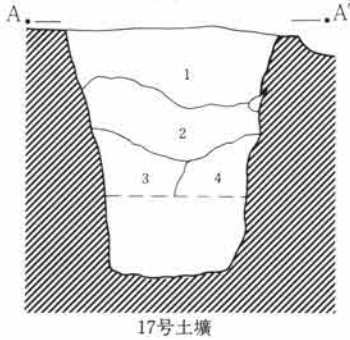
16号土壙

0　1m

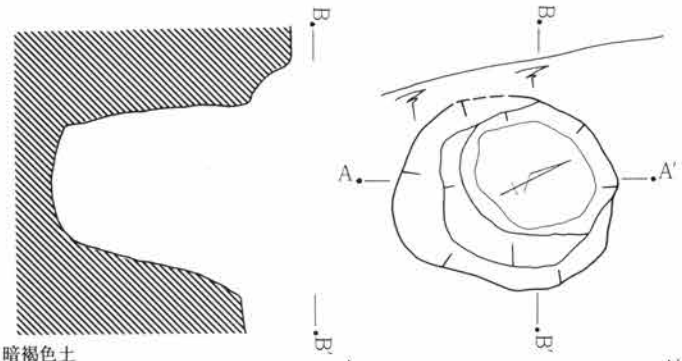
第49図　15～16号土壙(3)



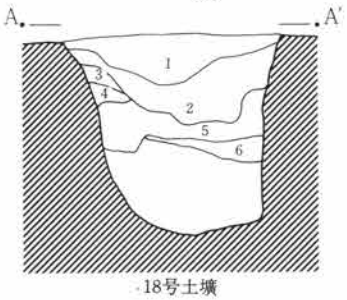
1 黒褐色土
　Ｂ軽石を含み砂質土で硬く締まっている。
2 黒色土
　Ｂ軽石、粘性黒色土のブロックを少量含む。
3 灰黒褐色土
　砂質土で粘性黒色土のブロックを少量含む。
4 黒色土
　ローム粒子少量含み、全体的に粘性有り。



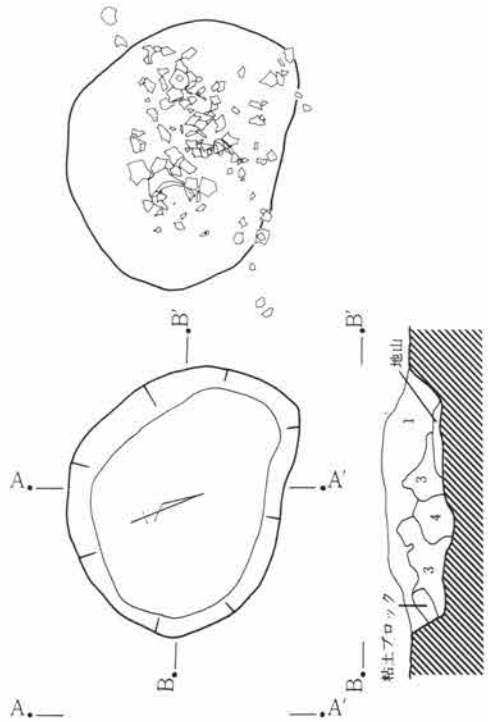
17号土壙



1 暗褐色土
　Ｂ軽石を多量に含む。ローム粒子を少量含みよくひき締まった砂質土。
2 黒褐色土
　ローム粒子、Ｂ軽石を少量含む砂質土。
3 黒色土
　２より黒みが強く、ローム粒子、粘性黒色土ブロックを少量含む。
4 暗褐色土
　ロームブロックの崩壊土を含む、基調は２と同じである。
5 黒褐色土
　粘性黒色土のブロックを多量に含む。ローム粒子を少量含む。
6 黄黒褐色土
　ロームブロックを多量に含む。

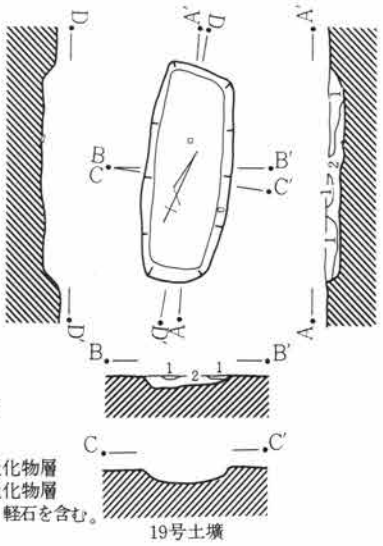


18号土壙



1 黒色土
　軽石、焼土粒子を少量含み、粘性が強く締まりがある。
2 暗褐色土
　黄白色の軽石を多量に含み、非常に硬く、強い粘性をもつ。
3 暗褐色土
　焼土ブロック、粒子を少量含む、硬くひき締まっている。
4 黒色土
　粘性有り。
5 黒色土
　軽石を多量に含み、硬く粘性有り。

20号土壙

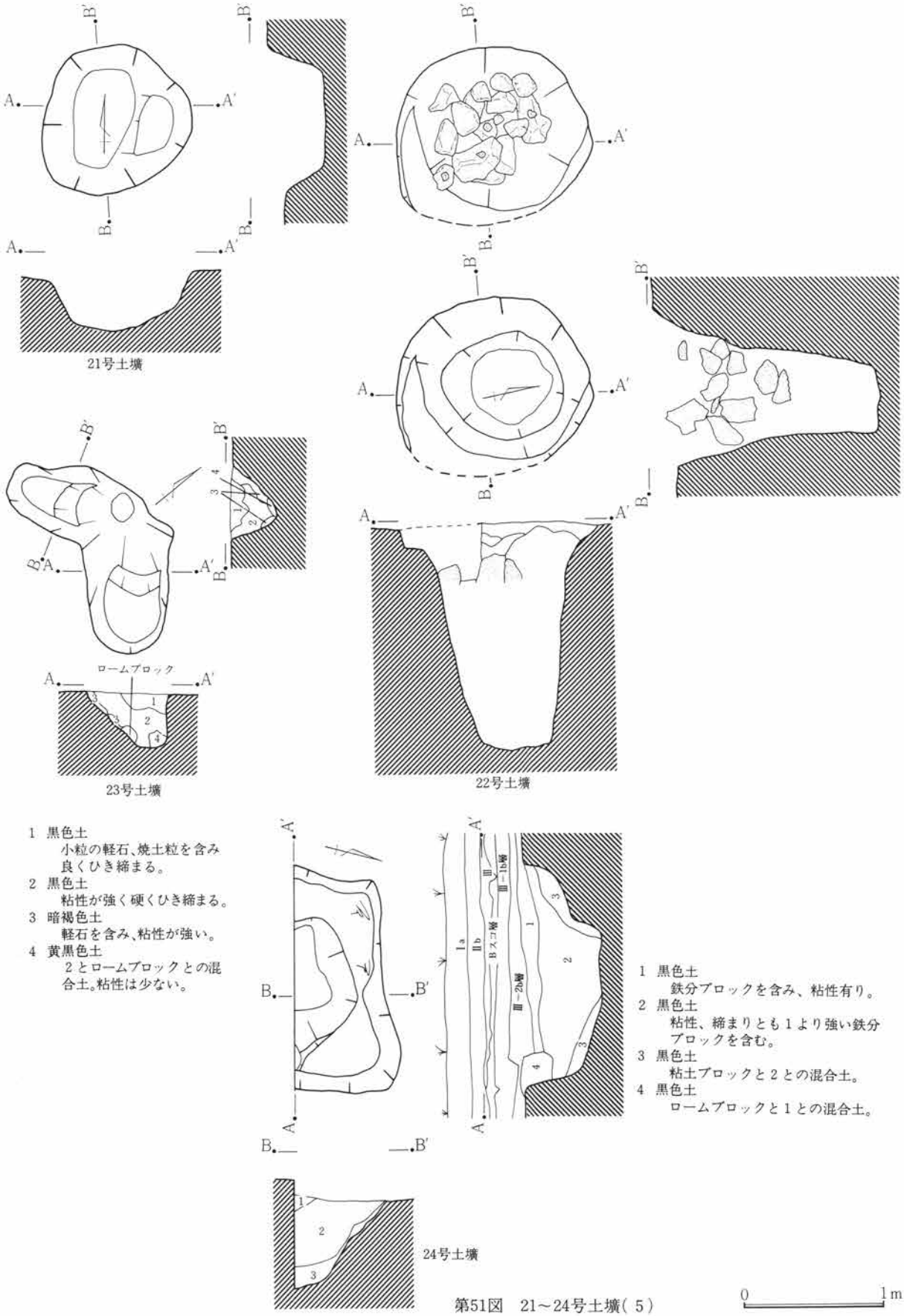


1 炭化物層
2 炭化物層
　軽石を含む。

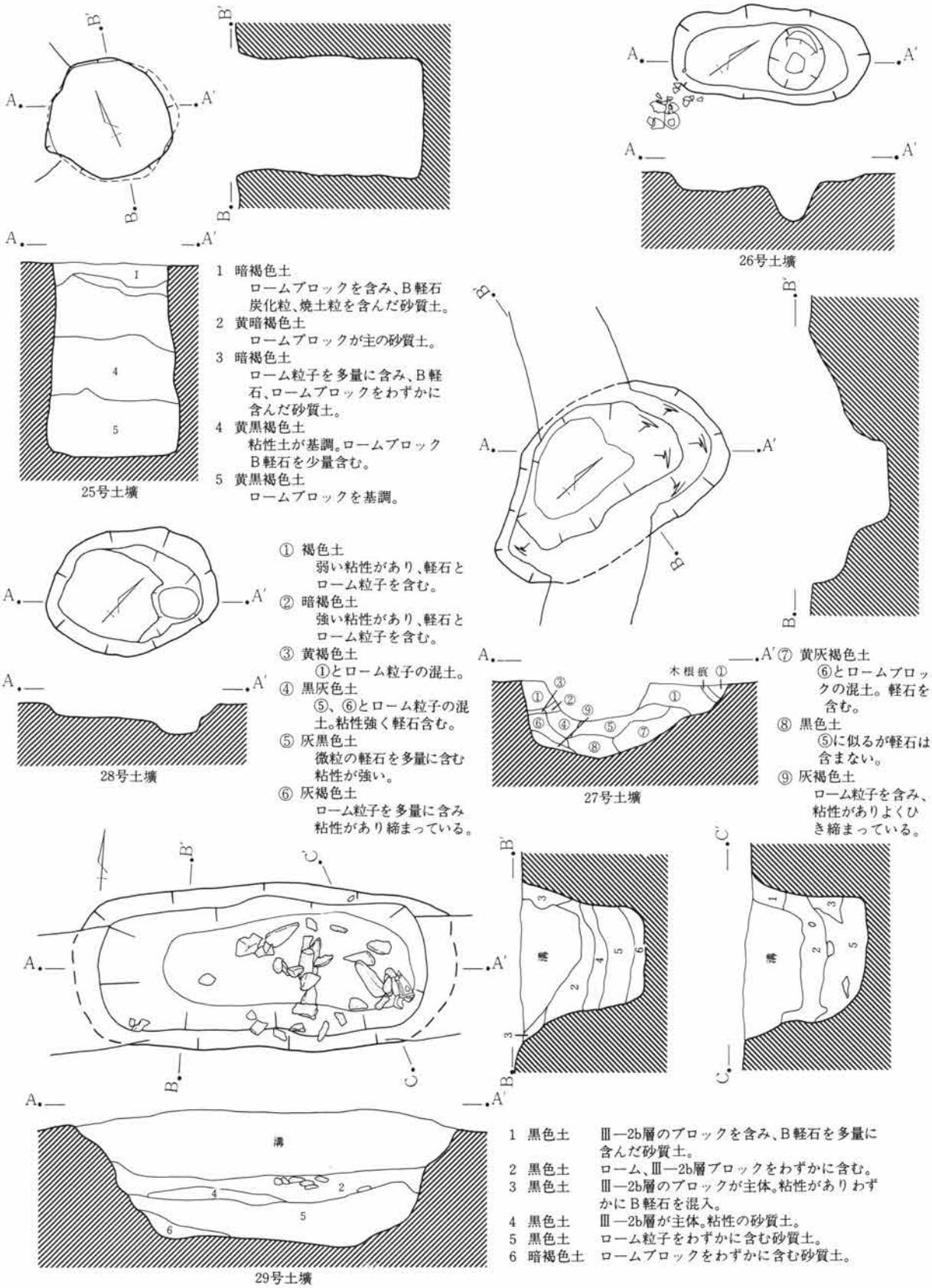
19号土壙

0　1 m

第50図　17～20号土壙（４）



第51図　21～24号土壙（5）



第52図　25～29号土壙（６）

21号土壙

28～29－C48～49グリッドに位置する。ほぼ円形で規模は113×103㎝、深さ35㎝である。時期は縄文時代。

22号土壙

36－C49グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、規模は184×(113)㎝、深さ150㎝である。かなり掘り込みは深く、下に行くに従ってやや狭まる。上層から中層にかけて角礫が出土している。井戸と思われる。

23号土壙

32～33－C49グリッドに位置する。不正形を呈し、規模は140×54㎝、深さ38㎝である。２基以上の重複か。

24号土壙

39～40－C42グリッドに位置するが、西側半分は調査区外となるために未調査である。平面形は長円形を呈すと思われる。規模は159×(64)㎝、深さ55㎝である。

25号土壙

37－C48グリッドに位置する。ほぼ円形で、規模は85×79㎝、深さ133㎝で掘り方は垂直である。
底はほぼ平坦となる。６号土壙を切っている。

26号土壙

32～33－C47グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は138×63㎝、深さ33㎝で底にピットを持つ。遺物は壺が１点出土している。

27号土壙

34～35－C44グリッドに位置する。不正長円形を呈し、規模は137×(107)㎝、深さ56㎝である。３号溝と重複する。

28号土壙

37～38－C44グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は120×56㎝、深さ15㎝である。

29号土壙

14～15－A22～23グリッドに位置する。長方形を呈し、規模は267×(115)㎝、深さ86㎝である。20～30㎝大の礫に混じって南東隅で馬形埴輪の頭部片が出土している。上部に同方向に走る溝が重複している。

30号土壙

17～18－A23～24グリッドに位置する。不正円形を呈し、規模は124×106㎝、深さ43㎝である。溝と重複する。

31号土壙

11－A22～23グリッドに位置する。長円形を呈す大形の土壙で、規模は363×274㎝、深さ43㎝である。最上層に若干の焼土が見られる。34号土壙と東側で接している。

32号土壙

12～13－A17～18グリッドに位置する。平面形状は長円形で、規模は256×129㎝、深さ63㎝である。

33号土壙

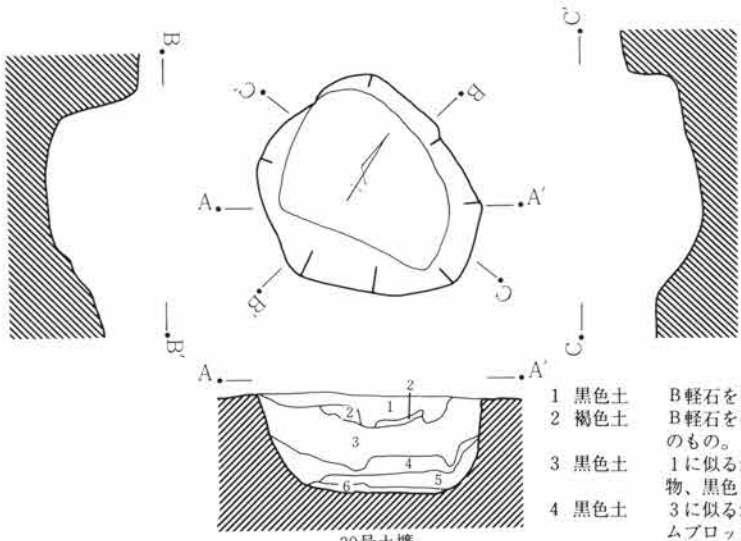
42－A43～44グリッドに位置する。平面形状は円形を呈し、規模は112×88㎝、深さ45㎝である。

34号土壙

11－A22～23グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は113×84㎝、深さ134㎝である。31号土壙を切る。

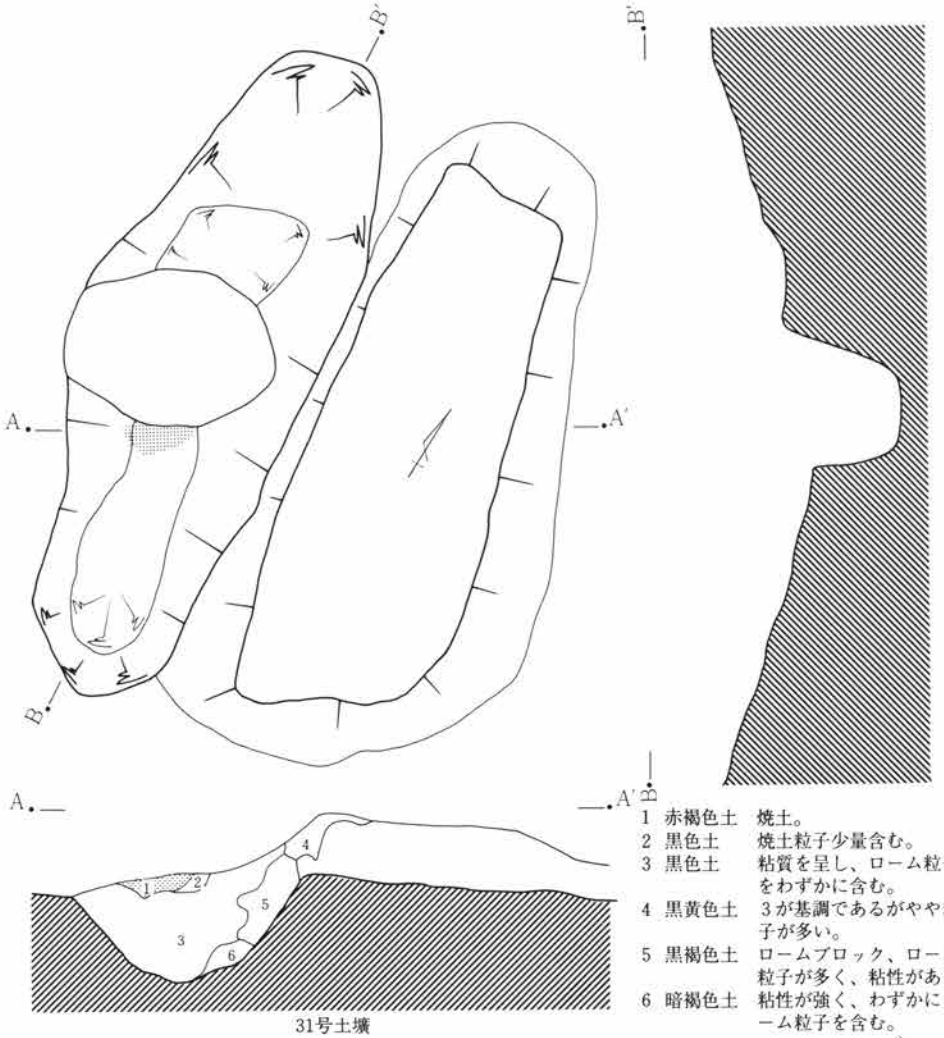
35号土壙

46－A43グリッドに位置する。平面形状は円形を呈し、規模は105×100㎝、深さ110㎝である。ほぼ垂直に



30号土壙

1 黒色土　Ｂ軽石を多量に含む。
2 褐色土　Ｂ軽石を少量含む、褐色土のブロック状のもの。
3 黒色土　１に似るが、ロームの小ブロック、炭化物、黒色ブロックを含む。
4 黒色土　３に似るが軽石の粒が小粒になり、ロームブロックを少量含む。
5 黒褐色土　Ｂ軽石を少量含む、網状にロームブロックを含む。
6 黒色土　極めて粘性が強い。

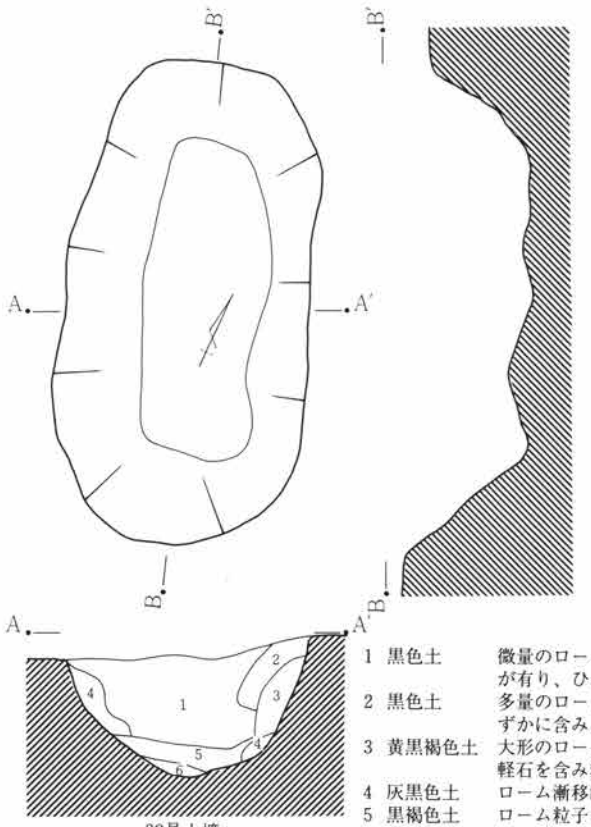


31号土壙

1 赤褐色土　焼土。
2 黒色土　焼土粒子少量含む。
3 黒色土　粘質を呈し、ローム粒子をわずかに含む。
4 黒黄色土　３が基調であるがやや粒子が多い。
5 黒褐色土　ロームブロック、ローム粒子が多く、粘性がある。
6 暗褐色土　粘性が強く、わずかにローム粒子を含む。

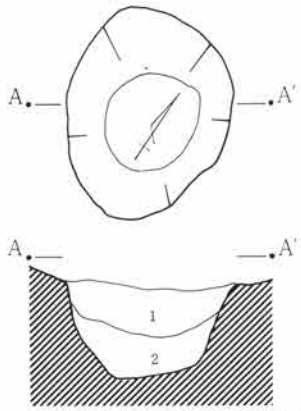
0　1m

第53図　30～31号土壙（７）



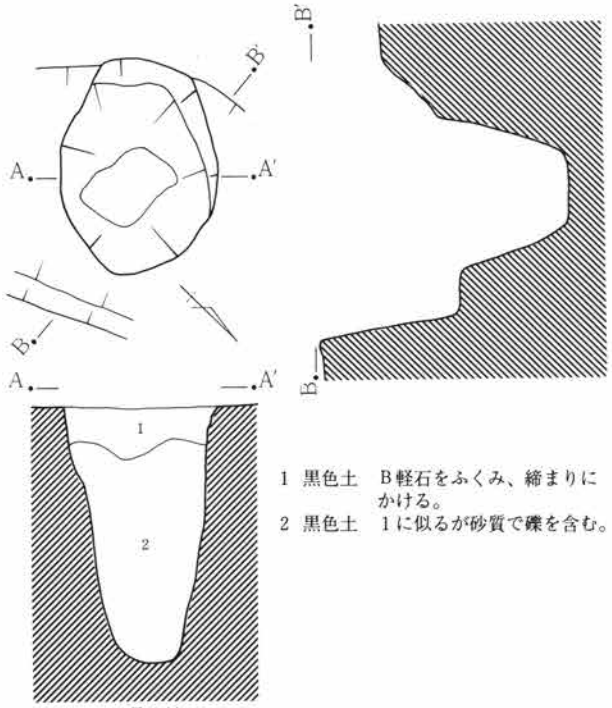
1 黒色土　微量のローム粒子を含み、強い粘性が有り、ひき締まっている。
2 黒色土　多量のローム粒子を含む。軽石をわずかに含み、粘性が強い。
3 黄黒褐色土　大形のロームブロックを多量に含む。軽石を含み粘性が有り締まっている。
4 灰黒色土　ローム漸移的色調呈し、粘性が強い。
5 黒褐色土　ローム粒子を少量含み粘性に富む。
6 黒褐色土　ロームブロックを多く含む。

32号土壙



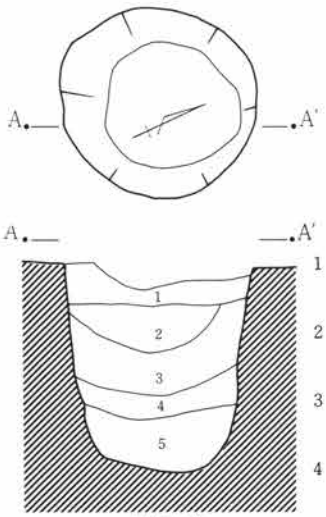
1 黒色土（Ⅱ層）により埋められる。
2 黒色土　ロームブロックをやや含んでいる。

33号土壙



1 黒色土　B軽石をふくみ、締まりにかける。
2 黒色土　1に似るが砂質で礫を含む。

34号土壙



1 褐色土　ローム小ブロックを含む。
2 黒褐色土　ロームブロックを多量に含む。
3 黒色土　大小のロームブロックを含む。
4 黒色土　ロームブロックを多量に含む。
5 黒色土　ロームブロックを含む。

35号土壙

0　1m

第54図　32～35号土壙（8）

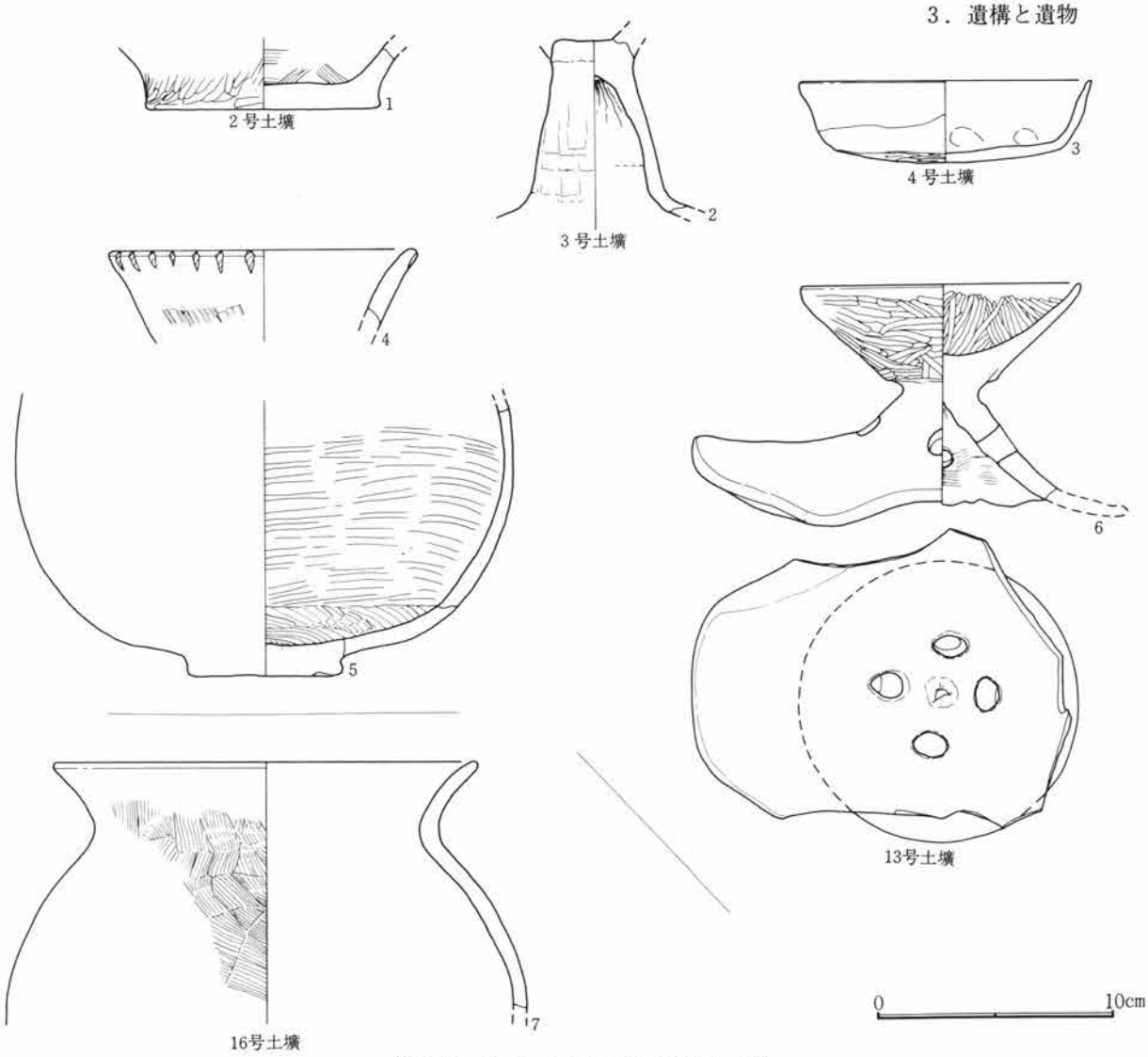
掘り込まれている。溝と重複する。

表 24　土壙計測値

番号	規模（cm）長軸×短軸×深さ	位置（グリッド）	形状	方位	出土遺物	備考
1号土壙	44× 40×117	45～46－D05～06	円形			
2号土壙	76× 70× 79	45－C49	円形		壺1	
3号土壙	52× 50× 47	45～46－C43			高坏1	
4号土壙	197× 87× 10	46～47－C43～44	長円形		坏1	
5号土壙	132×130×100	35～36－C49－D00	円形			
6号土壙	129×(107)× 27	37～38－C49－D00	円形			25号土壙に切られる
7号土壙	110× 94× 13	37～38－C47～48				
8号土壙	100×100× 30	38～39－C48～49				9号土壙に切られる
9号土壙	98× 38× 10	38～39－C49	円形			8号土壙を切る
10号土壙	113×100× 9	35－C45～46		N－4°－E		
11号土壙	100× 90× 6	35－36－C45				3号溝を切る
12号土壙	102× 97× 16	35－C43～44	円形			
13号土壙	90× 84× 63	37－C45	円形		高坏1　甕1　壺1	
14号土壙	80× 20× 25	38～39－C42～43	長円形			
15号土壙	147×146×118	43～44－C46～47	円形			
16号土壙	100× 97×121	43－C48～49	円形		甕1	
17号土壙	121×117×128	36～37－D02	円形			溝を切る
18号土壙	120×105×130	34－D01	長円形			
19号土壙	114× 45× 8	34－C46～47	不正長方形	N－1°－E		溝を切る
20号土壙	140×114× 23	28～29－C47～48	長方形		甕9 壺2 高坏1 台付甕1 鉢1 甑1	
21号土壙	113×103× 35	28～29－C48～49	円形			縄文時代
22号土壙	184×(113)×150	36－C49	円形			
23号土壙	140× 54× 38	32～33－C49				
24号土壙	159×(64)× 55	39～40－C42	長円形			
25号土壙	85× 79×133	37－C48	円形			6号土壙を切る
26号土壙	138× 63× 33	32～33－C47	長円形	N－3°－W	壺1	
27号土壙	137×(107)× 56	34～35－C44	不正長円形	N－3°－W		3号溝を切る
28号土壙	120× 56× 15	37～38－C44	長円形			
29号土壙	267×(115)× 86	14～15－A22～23	長円形	N－36°－W	埴輪1	溝を切る
30号土壙	124×106× 43	17～18－A23～24	不正円形			溝を切る
31号土壙	363×274× 43	11－A22～23	長円形	N－2°30′－E		34号土壙に切られる
32号土壙	256×129× 63	12～13－A17～18	長円形	N－3°－E		
33号土壙	112× 88× 45	42－A43～44	円形			
34号土壙	113× 84×134	11－A22～23	長円形			31号土壙を切る
35号土壙	105×100×110	46－A43	円形			溝を切る

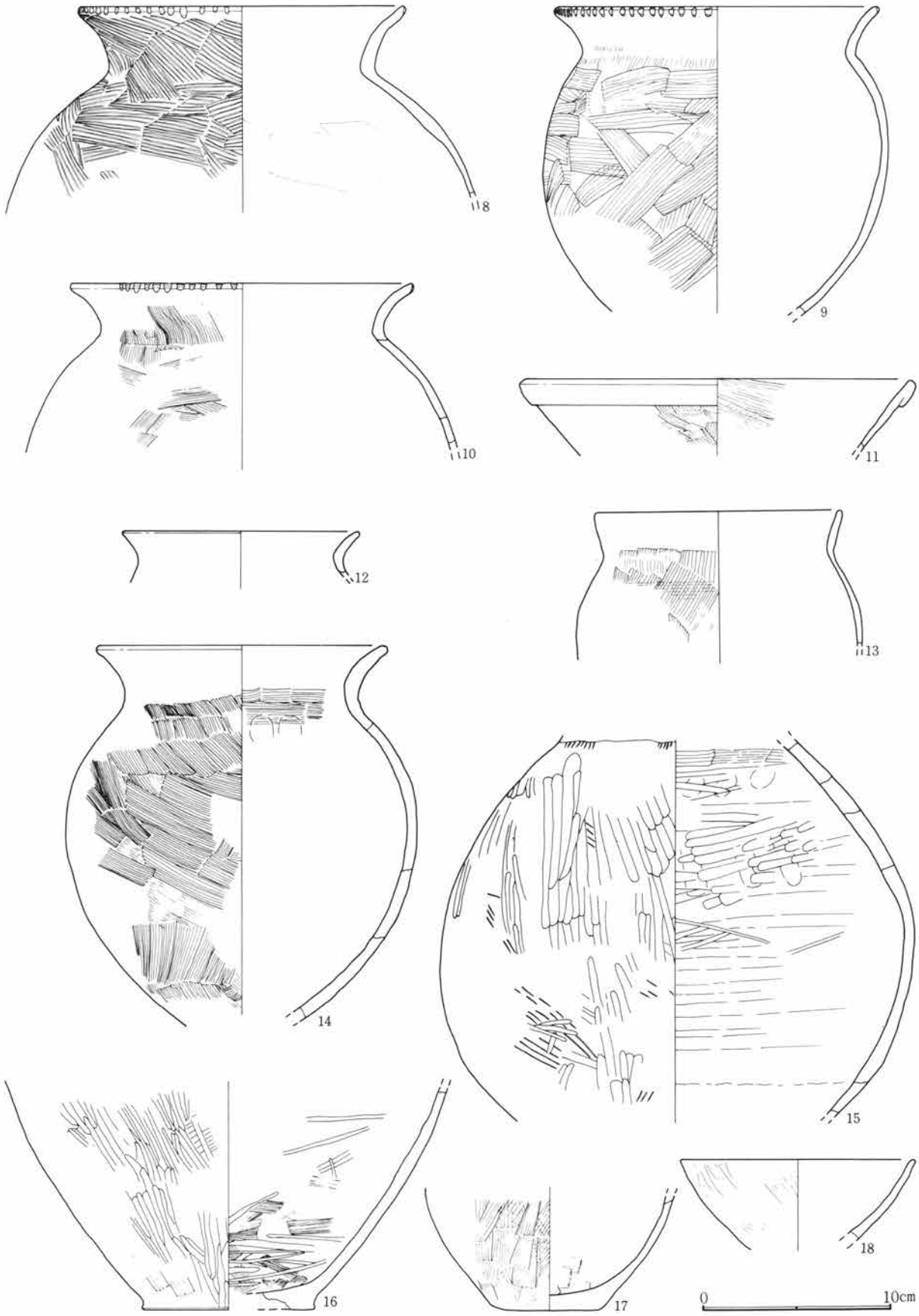
表 25　土壙遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	壺	口径 —— 器高 —— 底径 9.9	厚手でしっかりした底部。	外面　篦磨き。 内面　刷毛目。	細砂粒わずかに混入 良	橙色	2号土壙 底部片
2	高坏	口 —— 高 —— 底 ——	柱部下半でやや膨らみ裾部は開く。	外面　篦撫で。 内面　縦指撫で、上部に絞り目。	細砂粒を混入 良	橙色	3号土壙 脚部
3	坏	口 12.3 高 3.3 底 9.4	やや丸みを持つ底部から体部やや外傾して立ち上がる。口縁部弱く外反する。	口縁部　横撫で。 外面　体部篦撫で、底部篦削り。	砂粒を含む 良	橙色	4号土壙
4	壺	口 (12.2) 高 —— 底 ——	やや外反する口縁部。	口縁部　横撫で、口唇部に連続刻み。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	13号土壙
5	壺	口 —— 高 —— 底 6.6	胴部下部が膨らみ底部は丸く肥厚する。	外面　胴部篦削り。 内面　横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	13号土壙 底面に籾痕有り
6	高坏	口 11.8 高 10.2 底 (18.4)	坏部下部に弱い稜を持って開き、口縁部内彎。脚は二次焼成で大きく歪む。円孔4。	外面　坏部篦磨き、脚部篦磨き。 内面　坏部篦磨き、脚部刷毛目。	砂粒・石粒(1～4㎜)含む 良	にぶい橙色一部明赤褐色	13号土壙

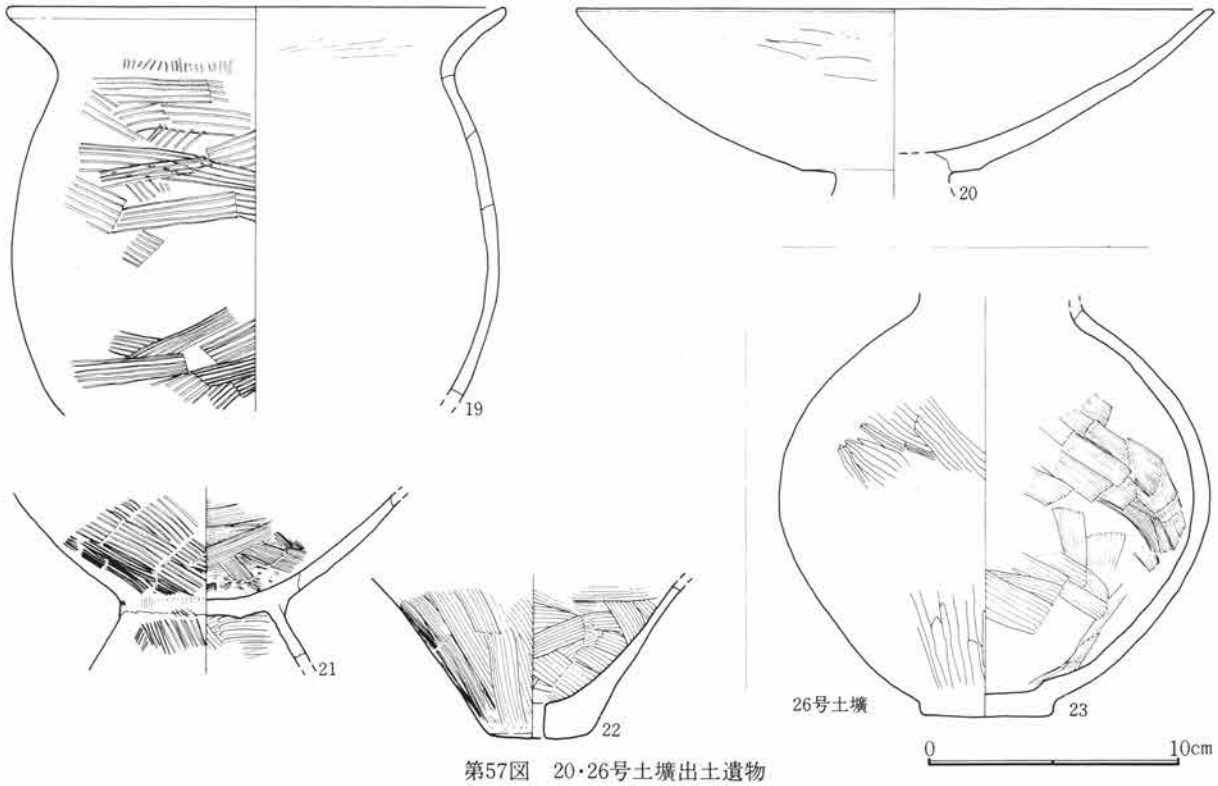


第55図　2・3・4・13・16号土壙出土遺物

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
7	甕	口径（18.0） 器高 —— 底径 ——	なだらかな肩部から頸部でやや締まり、口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	16号土壙
8	甕	口　17.2 高 —— 底 ——	肩部なだらかに立ち上がる。頸部でやや締まり、口縁部外反する。	口縁部　端部横撫で、口唇部連続刻み。 外面　頸部斜め、肩部以下横刷毛目。 内面　肩部以下篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	20号土壙
9	甕	口　17.0 高 —— 底 ——	胴部丸みを持ち、なだらかな肩部から頸部やや締まり、口縁部外反する。	口縁部　横撫で、口唇部連続刻み。 外面　肩部以下不定方向刷毛目。 内面　頸部撫で、肩部以下篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色一部黒褐色	20号土壙 胴部黒斑
10	甕	口　（18.0） 高 —— 底 ——	肩部丸みを持ち、口縁部外反する。	口縁部　端部横撫で、口唇部連続刻み。 外面　刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	20号土壙
11	壺	口　（21.0） 高 —— 底 ——	口縁部直線的に開く。口縁端部折り返し。	口縁部　端部横撫で。 外面　刷毛目。 内面　斜め刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	20号土壙
12	甕	口　（12.5） 高 —— 底 ——	口縁部外反する。	口縁部　横撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	20号土壙
13	甕	口　（13.0） 高 —— 底 ——	肩部なだらかで頸部弱く、「く」の字に折れ、口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目、肩部横線。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	20号土壙

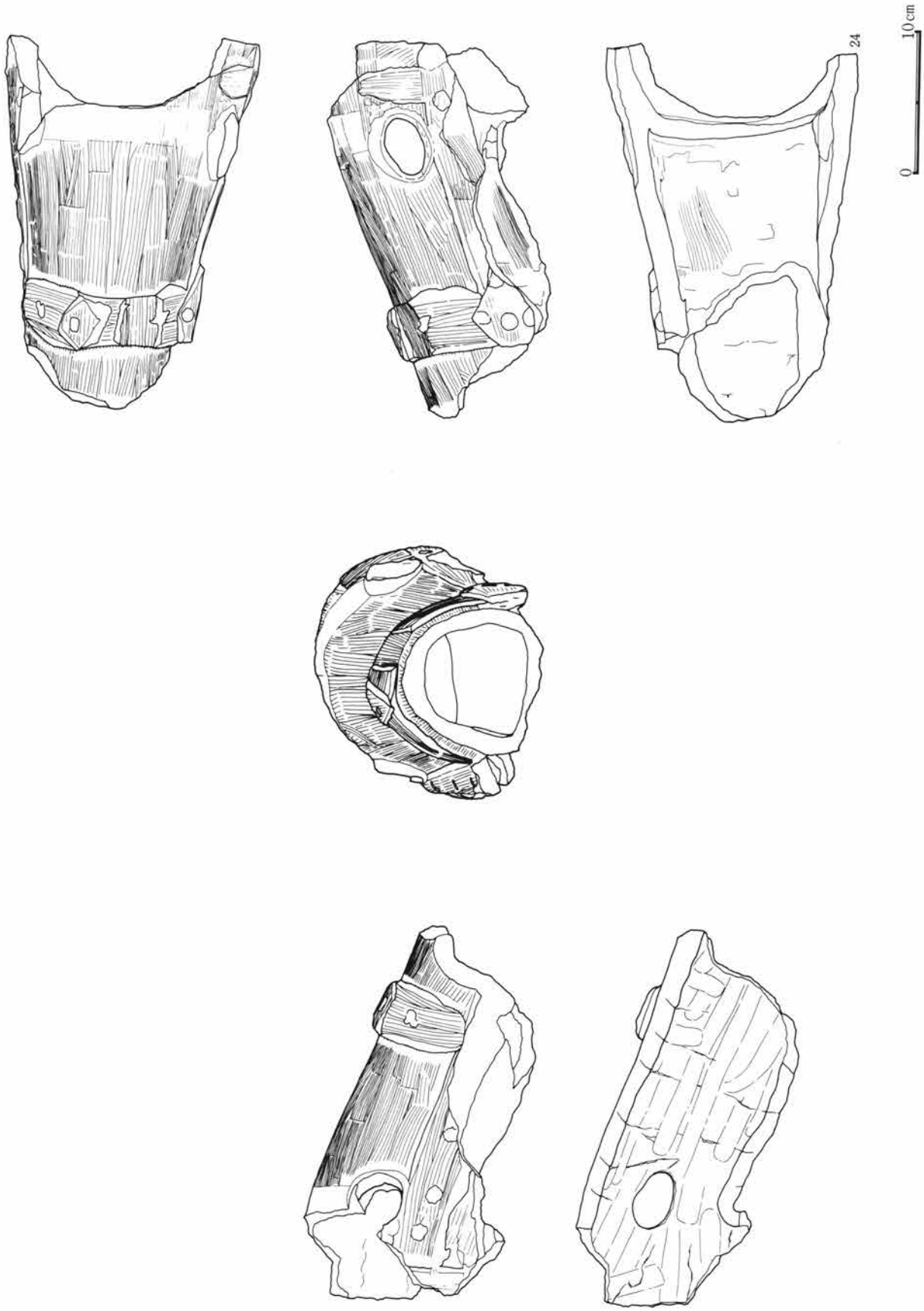


第56図　20号土壙出土遺物

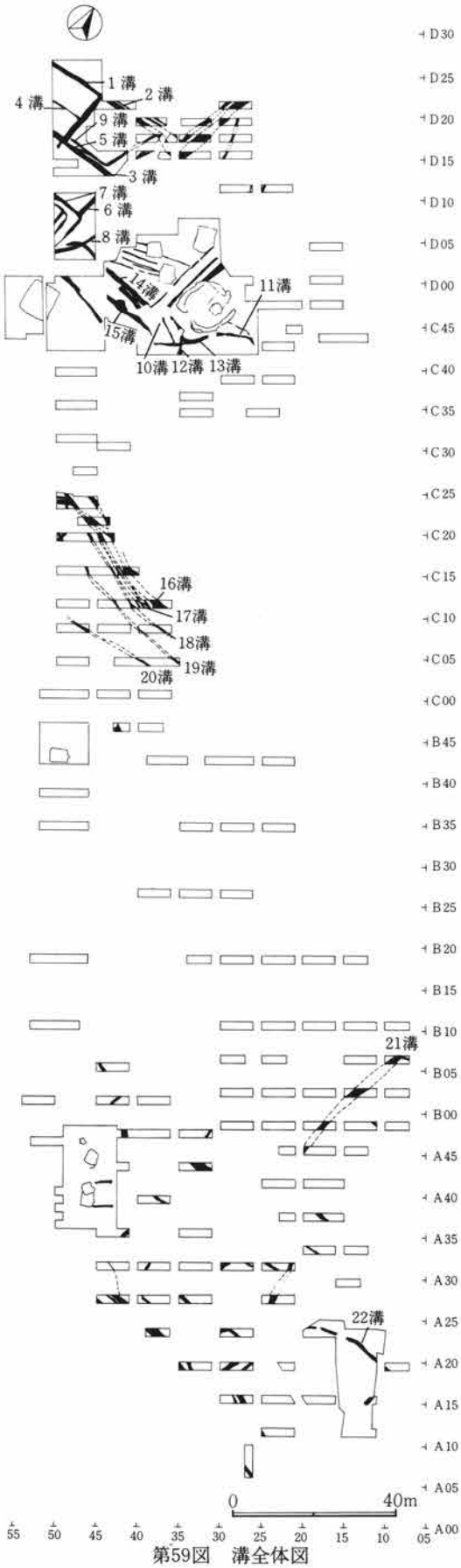


第57図　20・26号土壙出土遺物

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
14	甕	口径 15.4 器高 —— 底径 ——	胴部膨らみ中位に最大径を持つ。頸部「く」の字に折れ、口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　肩部横刷毛目、胴部篦撫で。	砂粒をわずかに混入 良	橙色～灰褐色	20号土壙
15	壺	口 —— 高 —— 底 ——	胴部中位で最大径を持つ。肩部はなだらかに立つ。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　上半部刷毛目後篦磨き、下半部篦撫で肩部に指押え痕。	砂粒を含む 良	にぶい橙色一部黒褐色	20号土壙
16	甕	口 —— 高 —— 底 （9.0）	底面端部外へ張る。胴部やや内彎気味に立ち上がる。	外面　横刷毛目後縦篦磨き。 内面　篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色	20号土壙
17	甕	口 —— 高 —— 底 5.6	底部からやや内彎気味に立ち上がる。	外面　縦刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	20号土壙
18	椀	口 （12.4） 高 —— 底 ——	やや内彎気味に立ち上がる。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	明褐色一部黒褐色	20号土壙
19	甕	口 （20.0） 高 —— 底 ——	なだらかな肩部から頸部で「く」の字に折れ、口縁部外反する。端部丸くなる。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	20号土壙
20	高坏	口 （25.0） 高 —— 底 ——	やや膨らみを持って開く。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　篦磨き。	砂粒・石粒多く含む 良	橙色	20号土壙 坏部のみ器面やや荒れている
21	台付甕	口 —— 高 —— 底 ——	台部「ハ」の字に開き、胴部はやや直線的に立ち上がる。	外面　刷毛目。 内面　体部刷毛目（密）　台部天井部指撫で、以下刷毛目（粗）。	細砂粒わずかに混入 良	にぶい褐色	20号土壙
22	甑	口 —— 高 —— 底 4.0	ほぼ直線的に開いて立ち上がる。孔は1個中央にあけられている。	外面　縦刷毛目。 内面　横刷毛目。	砂粒・石粒を混入 堅緻	橙色	20号土壙 胴下部
23	壺	口 —— 高 —— 底 5.2	胴部丸みを持って立ち上がり、胴上半で最大径となる。	外面　篦磨き。 内面　刷毛目後指撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	26号土壙
24	馬形埴輪頭部	長さ 26.4 幅 17.5	口、後頭部分を欠く。	目より口にかけては輪積成形、首の付け根部分は横方向の輪積。表面刷毛状工具による成形。内面輪積、指撫で痕。	砂粒・石粒（1～5mm）混入 堅緻	橙色	29号土壙 赤彩痕



第58図　29号土壙出土遺物



第59図　溝全体図

(5) 溝

溝については、時期不詳また近世以降のものが数多く、トレンチ調査時点で確認されたものは、平安期、または近世に比定され覆土中にはＢ軽石、Ａ軽石が確認されるものが多かった。Ａ区、Ｂ区では全体を確認しえたものは無く、トレンチにおいて幅、走行方向を確認したにとどまったが、いずれも近世以降に比定される。ここでは時期的な認定がある程度可能なもの、検出状況が良好なものを取り上げ説明を加えることとする。

１～８号溝は拡張区の北側において検出した。東西、南北に走るものが多く、トレンチ部分については遺構の重複が多く、部分的な検出に終わったものが多い。覆土にＡ軽石を含むものが多く、時期的には近世のものが主体を占める。

10～13号溝は拡張区の南側で検出されている。部分的に検出されており走行も不規則である。14・15号溝はほぼ平行するように東西に走るが形状、掘り込み面共に不明瞭である。14号溝の北側で平行して東西方向に走る細い数条の溝状遺構を検出した。覆土中にＣ軽石を含み、畑跡の可能性がある。

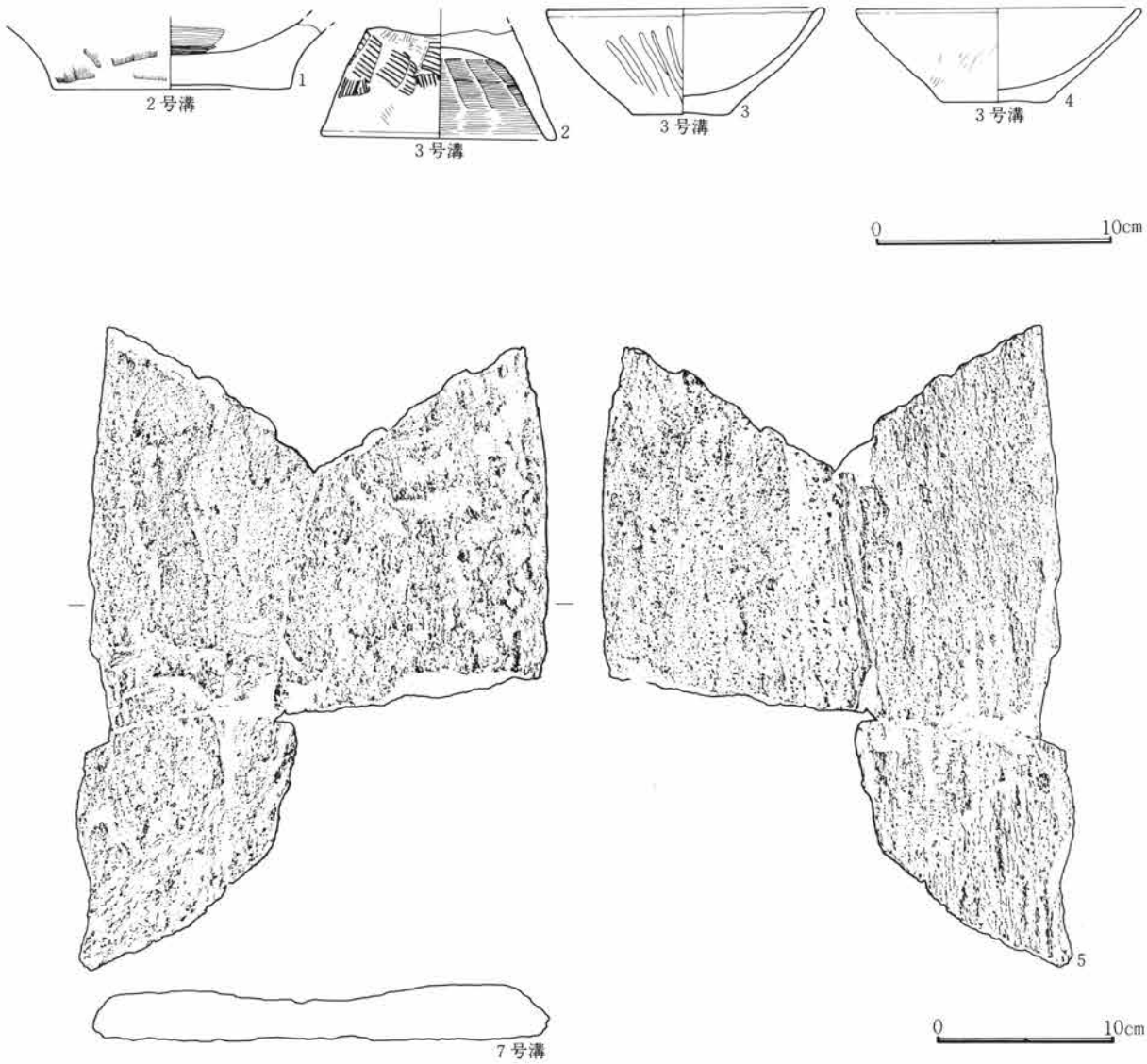
16～20号溝はいずれもＣ区のトレンチで確認されたものである。ほぼ東西に平行して走るが、やや曲がっている。時期的には近世以降のものである。

21号溝はＢ区のトレンチで検出されている。南北に走り幅は１ｍ程である。

22号溝は東西に走り、途中に土壙が重複している。その他Ａ区のトレンチでは、南北に走ると思われる溝が検出されているが掘り込み面の確認が難しく、またつながりが不明なものが多い。

(6) 水田祉

低地部分の各トレンチにおいて、浅間B軽石層下に粘性黒色土層を認めているが、調査時点では面的な拡張も行っていないこともあり、水田址の存在は確認し得なかった。調査時点では県内においても水田址の調査例は殆ど無く、調査においても水田についての認識が不十分であった事にもよる。後日行われた、周辺遺跡の調査では浅間Ｂ軽石層下の水田址が確認されており、下斉田遺跡においても水田が存在していた可能性は十分に考えられる。

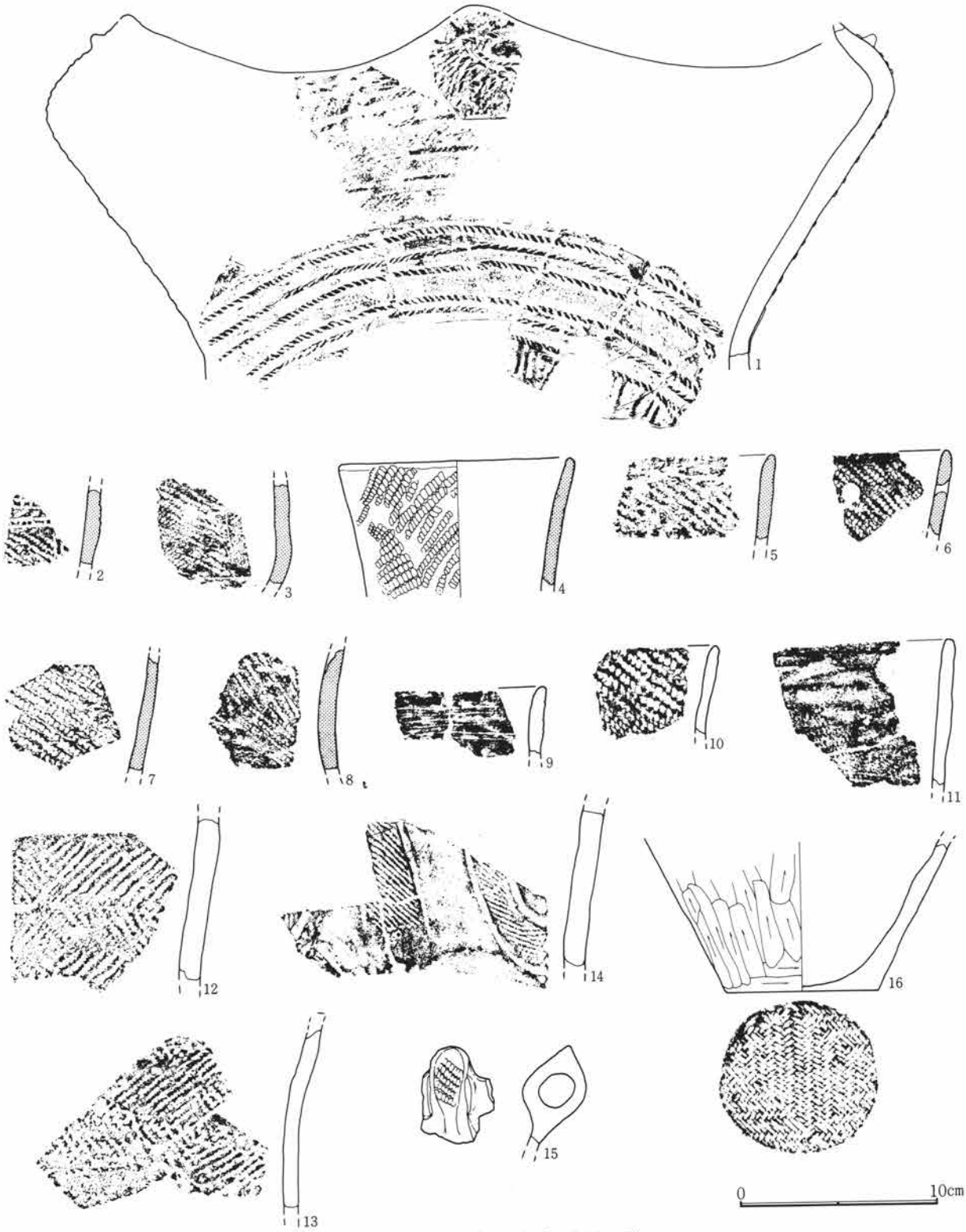


第60図　2・3・7号溝出土遺物

表 26　溝出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	甕	口径 —— 器高 —— 底径 10.0	厚手でしっかりした造りの平底、胴部は外反して立ち上がる。	外面 刷毛目後篦磨き。 内面 篦撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	黒色	2溝
2	台付甕	口 —— 高 —— 底 10.0	「ハ」の字に開く台部、端部やや丸みを持つ。	外面 刷毛目。端部横撫で。 内面 上面指撫で、側面横刷毛目。端部横撫で。	砂粒・石粒を含む 良	黒色一部にぶい黄橙色	脚部 3溝
3	坏	口 11.8 高 4.2 底 4.5	底部小さくやや膨みを持って逆「ハ」の字に立ち上がる。	外面 篦磨き。 内面 篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	3溝
4	坏	口 12.0 高 4.0 底 4.4	体部やや膨みを持って開く。	外面 体部、底部とも篦磨き。 内面 篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	3溝 内面荒れている

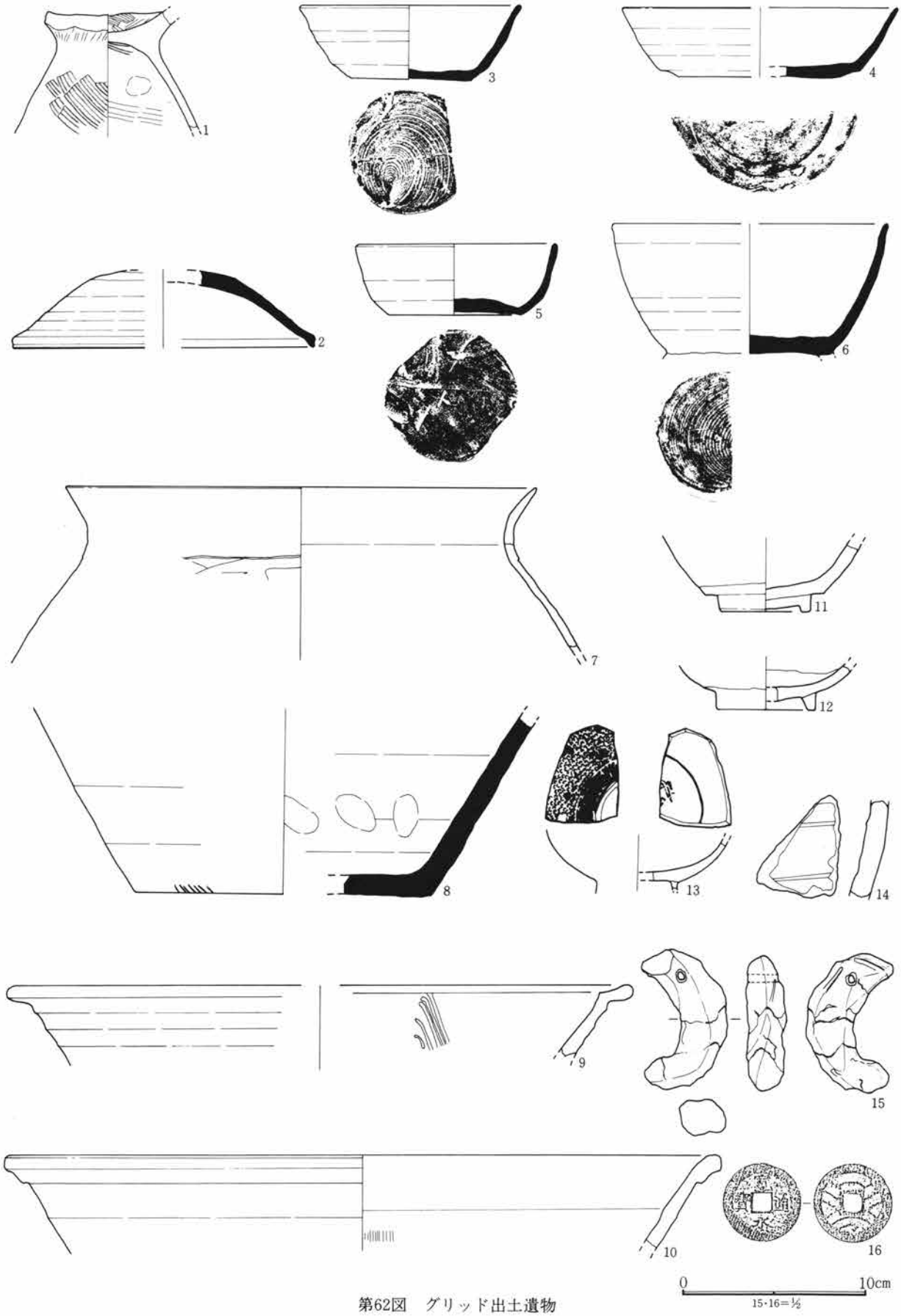
5	出土位置	器種	法量（cm・g）	石材	備考
	7号溝	板碑	35.5×26.5× 3.5　3480.0	緑色片岩	



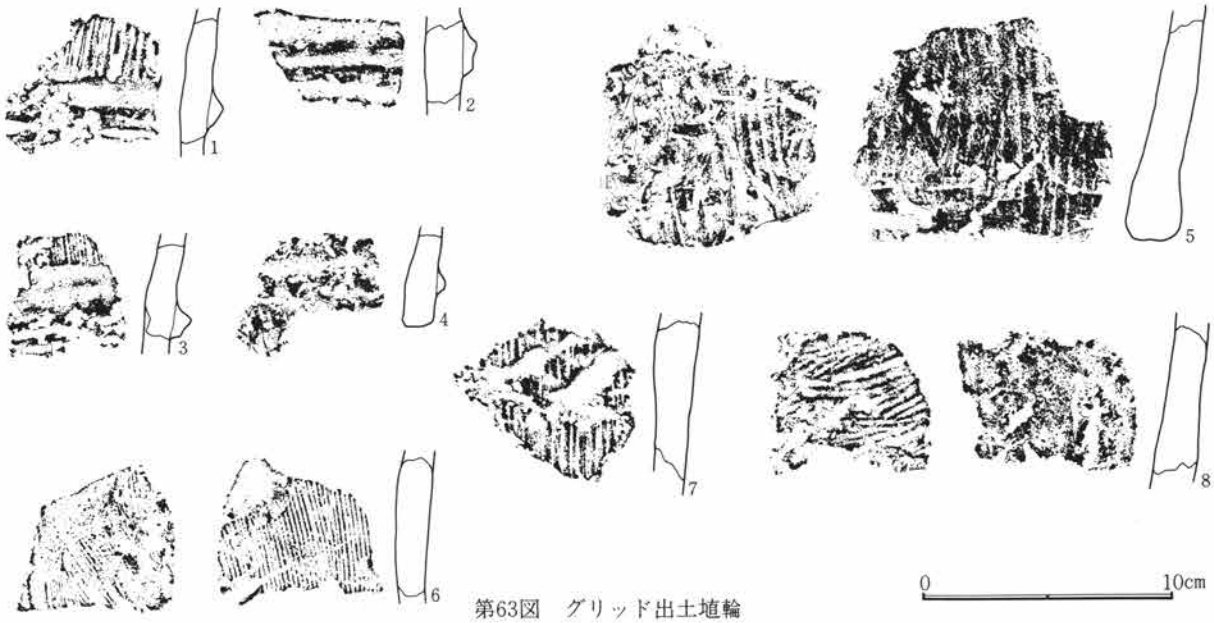
第61図　グリッド出土縄文土器

(7) グリッド出土遺物（第61～63図）

縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。多くはC区からで縄文土器はややまとまって出土している。（第63図）埴輪はいずれも小破片である。



第62図　グリッド出土遺物



第63図　グリッド出土埴輪

表 27　グリッド出土縄文土器観察表

番号	器種	法量（cm）	特徴
1	深鉢	最大径（42.8） 口径（36.0）	キャリバー状を呈し、口唇部内屈し、四単位の波状を呈す。波頂下に貼付文を持つ。胴部、縦篦削り。胴上部から口縁にかけて、横位の浮線文。浮線文上には矢羽根状の刻みを付す。口縁波頂部にはやはり浮線文で弧状のモチーフを描く。地文にはＲＬの縄文を施文するが、口縁部は無節Ｌを施文している。
2	深鉢	——	繊維を含む。連続爪形文を横に２条、直行するように平行沈線を描く。地文はＲＬ。
3	深鉢	——	繊維を含む。「Ｔ」状に平行沈線を描き、地文にＲＬを施文している。
4	深鉢	口径（11.6）	繊維を含む。ＬＲが施文される。方向がやや不規則である。
5	深鉢	——	繊維を含み無節Ｒが横位に施文される。
6	深鉢	——	繊維を含む。ＲＬが横位に施文される。補修孔を持つ。
7	深鉢	——	繊維を含む。ＲＬを横位に施文する。
8	深鉢	——	繊維を含む。ＲＬを横位に施文するが、不規則である。
9	深鉢	——	口縁に沿って３本の平行沈線を横に走らす。
10	深鉢	——	口唇以下にＲＬを横位に施文する。
11	深鉢	——	下部に浅い平行沈線を横位に付す。
12	深鉢	——	ＬＲ、ＲＬを用いて羽状縄文を施文。
13	深鉢	——	ＲＬ、ＬＲで羽状縄文が施文される。
14	深鉢	——	ＬＲを地文に縦位施文。縦の磨消帯を持つ。
15	深鉢	——	把手片、端部がやや尖り、橋部外面に浅く縄文が施文されている。
16	深鉢	底径　7.7	胴部、縦篦削り。底面網代圧痕。

表 28　グリッド出土遺物観察表

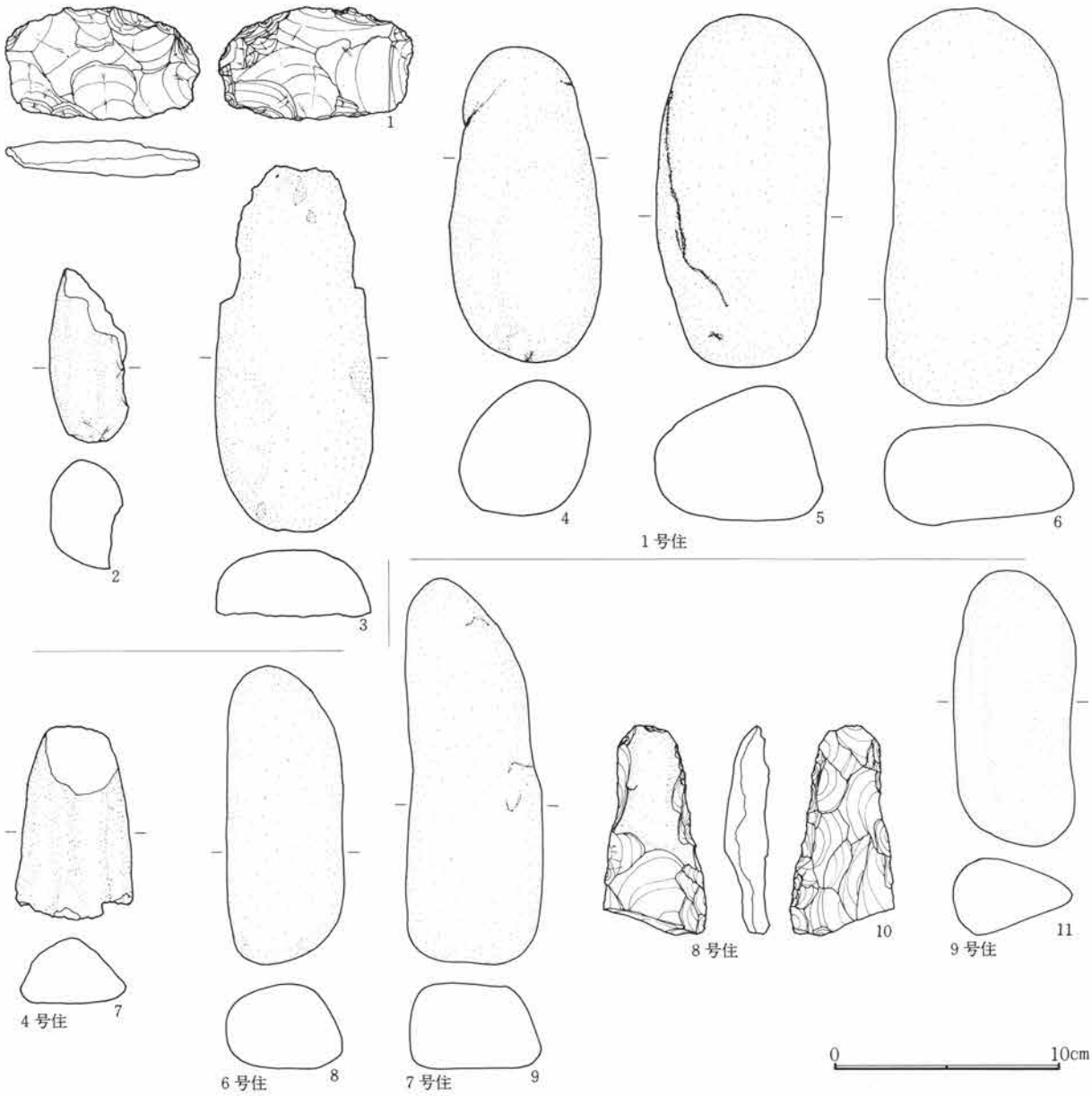
番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	台付甕	口径 —— 器高 —— 底径 ——	「ハ」の字に開く。	外面　斜め刷毛目。 内面　刷毛目、撫で、体部刷毛目後篦磨き。	砂粒を含む 良	明赤褐色	
2	須恵器 蓋	口　(1.64) 高　—— 底　——	なだらかに広がり端部でわずかに折れる。	外面　ロクロ成形、天井部回転篦調整。	砂粒を含む 良	灰黄褐色	
3	須恵器 坏	口　(12.1) 高　4.0 底　6.5	体部やや内彎気味に立ち上がり、口縁部やや外反する。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り。	細砂粒を含む やや軟質	灰黄色	
4	須恵器 坏	口　(15.0) 高　—— 底　——	体部外傾して立つ。口縁部薄くなる。	ロクロ成形。 底部　回転篦切り、外周撫で調整。	砂粒を含む 良	灰色	
5	須恵器 坏	口　(11.0) 高　3.9 底　7.1	体部下半にゆるい屈曲を持って立ち上がる。底部内側へ盛り上がる。	ロクロ成形。 底部　静止篦切り。	細砂粒を含む 良　堅緻	灰色	

Ⅲ．下斉田・滝川Ａ遺跡

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
6	須恵器 鉢	口径（15.0） 器高 —— 底径 ——	内彎気味に立ち上がる。やや深めの体部。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り。	砂粒・石粒を含む 良	褐灰色	高台部欠損
7	甕	口　（25.5） 高 —— 底 ——	なだらかな肩部から頸部やや締まり口縁部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　　篦削り。 内面　　篦撫で。	砂粒を含む 良	橙色	
8	須恵器 甕	口 —— 高 —— 底　（16.0）	胴部やや外傾して立ち上がる。	内・外面撫で成形。 底部　篦切り。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	
9	鉢	口　（34.0） 高 —— 底 ——	厚手で、やや屈曲を持つ。内面に浅い段を持つ。		砂粒を含む 良	にぶい黄橙色	
10	すり鉢	口　（39.0） 高 —— 底 ——	口縁部外側へ折り返し、口唇部肥厚しやや角張る。	ロクロ成形。	石粒を含む 良	淡黄茶色	
11	椀	口 —— 高 —— 高台径 5.0	腰に稜を持ち、体部外反して立ち上がる。	ロクロ成形。 削り出し高台。	精製砂 良	灰白色 釉薬発暗褐色	天目釉
12	椀	口 —— 高 —— 高台径(5.4)	体部やや丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。 削り出し高台。	石粒を含む 良	灰白色	天目釉
13	椀(染付)	口 —— 高 —— 底 ——	体部丸みを持って立ち上がる。		精製砂 良	白色	伊万里系
14	鉢	口 —— 高 —— 底 ——	内稜を持ち、口縁部外反する。口唇端部肥厚する。		狭雑物無し	灰白色 釉は黒茶色	体部片
15	土製勾玉	長さ　4.9 幅　2.9 厚さ　1.5	やや縦長のＣ字状を呈し、土の接合痕が見られる。孔はやや不正で径２㎜程である。	製作時の指痕が顕著に見られる。	細砂粒を含む	にぶい橙色	
16	寛永通寶	径　2.8 厚さ　0.12	銅製　裏面に波文有　1769（明和６）年鋳造		保存状態　良		

表 29　グリッド出土埴輪観察表

番号	出土位置	厚さ（cm）	成・整形の特徴	突帯	胎土	焼成	備考
1	20～21－Ａ11～14	1.7	外面　縦刷毛目。 内面　篦撫で。		砂粒含む	良	
2	48－Ｃ34～36	2.2	外面 —— 内面　篦撫で。	断面ややだれた「コ」の字状	小石を含む	普通	
3	42－Ｃ26	2.0	外面　縦刷毛目。 内面　篦撫で。	断面ややだれた「コ」の字状	砂粒を含む	良	
4	19－Ａ31	1.6	外面 —— 内面　篦撫で。	断面ややだれた三角	砂粒を若干含む	良	底部か
5	43－Ｃ46～48	2.4	外面　縦刷毛目。 内面　横篦撫で。		小石を含む	普通	底部片
6	01－Ｂ36	1.4	外面　縦刷毛目。 内面　刷毛目。		石粒を若干含む	良	
7	15－Ｄ41～45	1.7	外面　縦刷毛目。 内面　篦撫で。		砂粒を含む	良	
8	48－Ａ16～18	1.9	外面　刷毛目。 内面　刷毛目。		石粒を含む	普通	刷毛目粗い



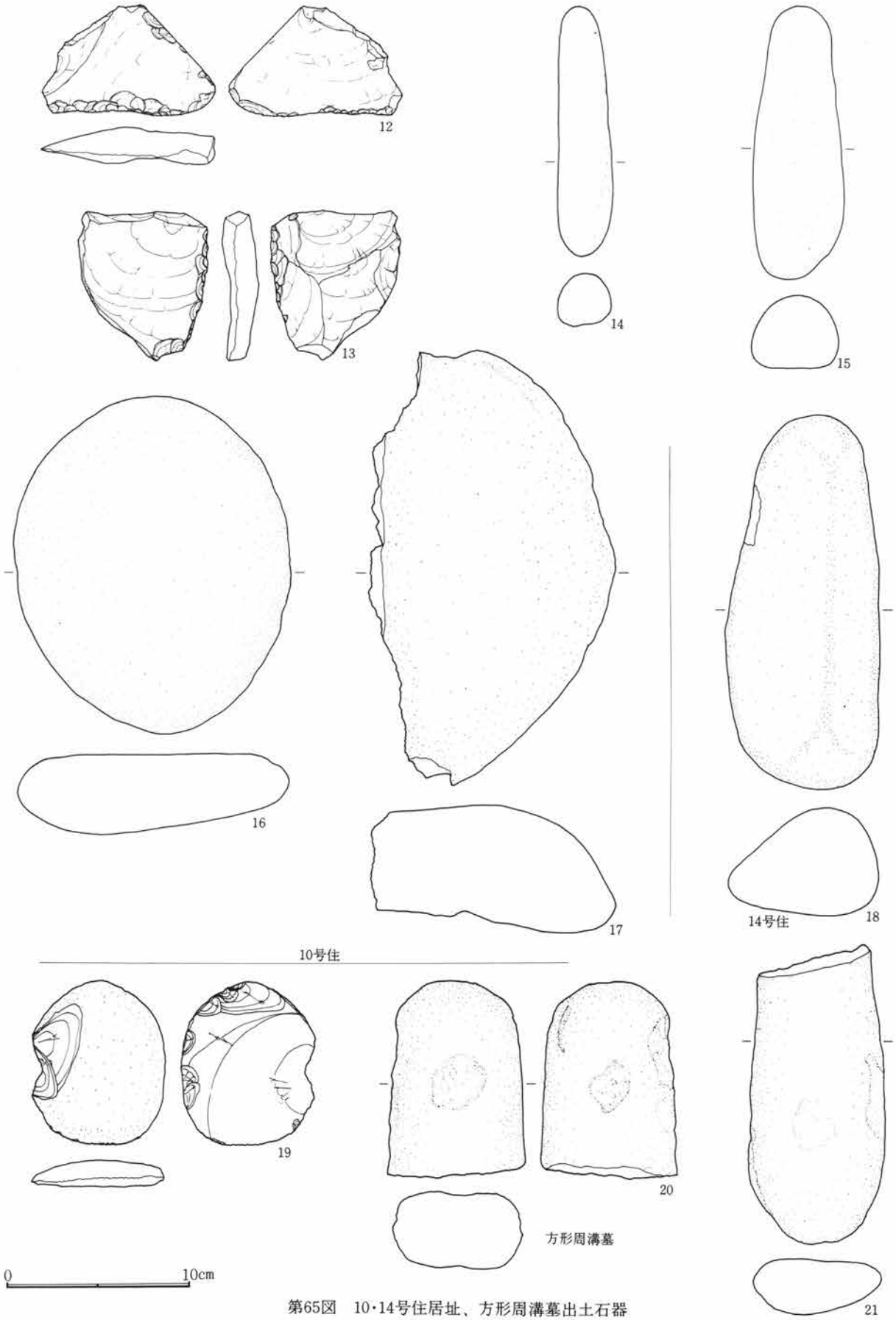
第64図　1・4・6・7・8・9号住居址出土石器

出土石器（第64～70図）

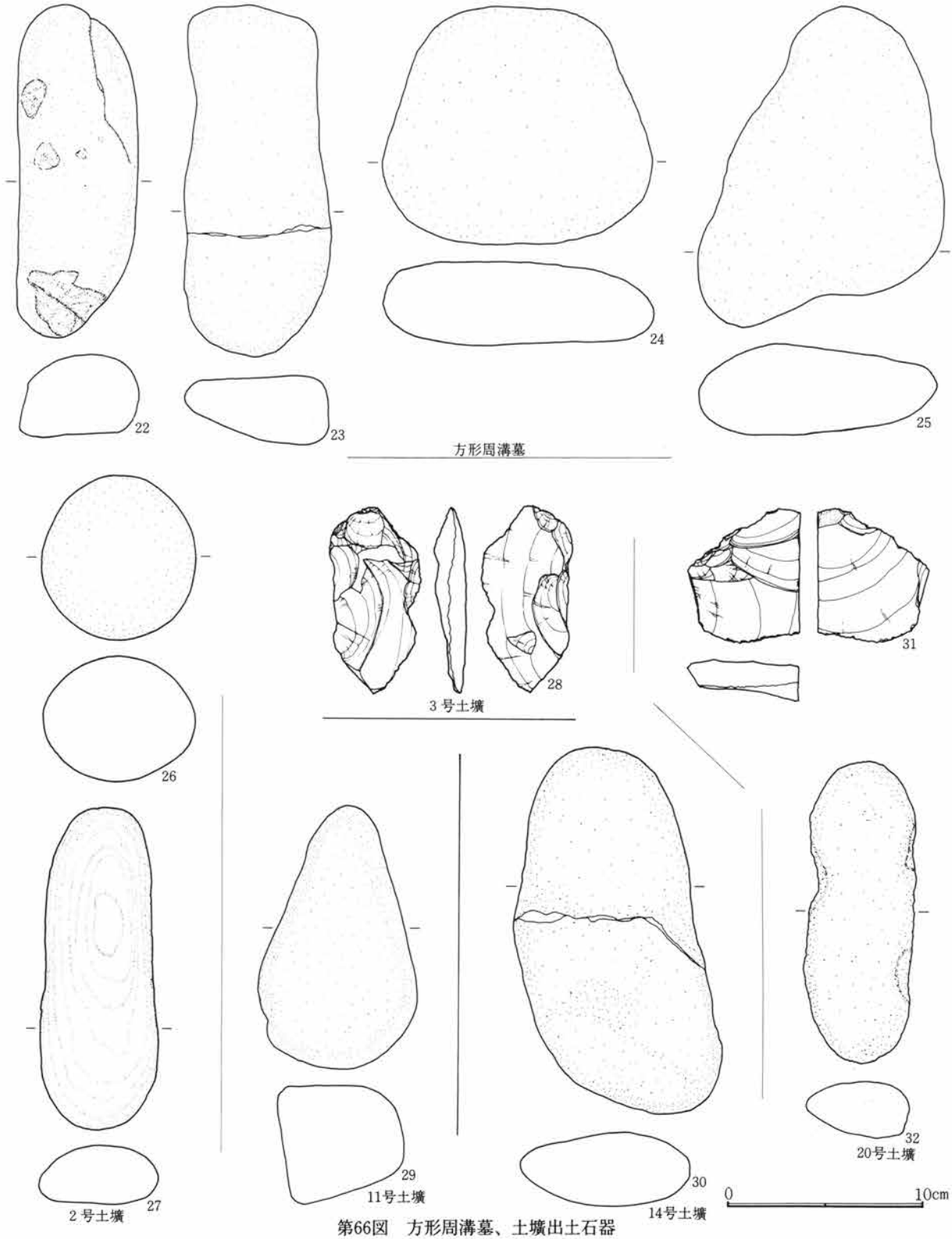
石器は総点数70点で各遺構から出土している。出土した遺構の時期に比定されるものもあるが縄文時代のものも多く混入していると考えられる。器種的には石鏃２点をはじめ、自然礫を利用した敲石の他、石斧、スクレイパー等の打製石器類が多い。砥石片３点、軽石製の紡錘車も１点出土しているが古墳時代以降のものであるとしか判らない。以下各出土遺構ごとに記載して説明を行う。

表 30　住居、土壙、溝出土石器観察表

番号	出土位置	器　種	法　量（cm・g）	石　材	備　考
1	1号住居	スクレイパー	8.7× 5.0× 1.6　66.2	黒色頁岩	両側縁に荒い刃部を作る。
2	1号住居	敲　石	7.7× 3.4× 4.8（131.6）	輝石安山岩	破損品。
3	1号住居	敲　石	16.2× 7.0× 3.7（506.0）	ひん岩	片面大きく破損する。
4	1号住居	敲　石	13.9× 6.8× 5.8　840.0	輝緑岩	端部に使用痕。
5	1号住居	敲　石	15.1× 7.5× 6.2 1248.0	石英閃緑岩	端部に若干の磨滅痕。
6	1号住居	敲　石	17.5× 8.3× 5.2 1281.0	石英閃緑岩	両面が平坦をなす。

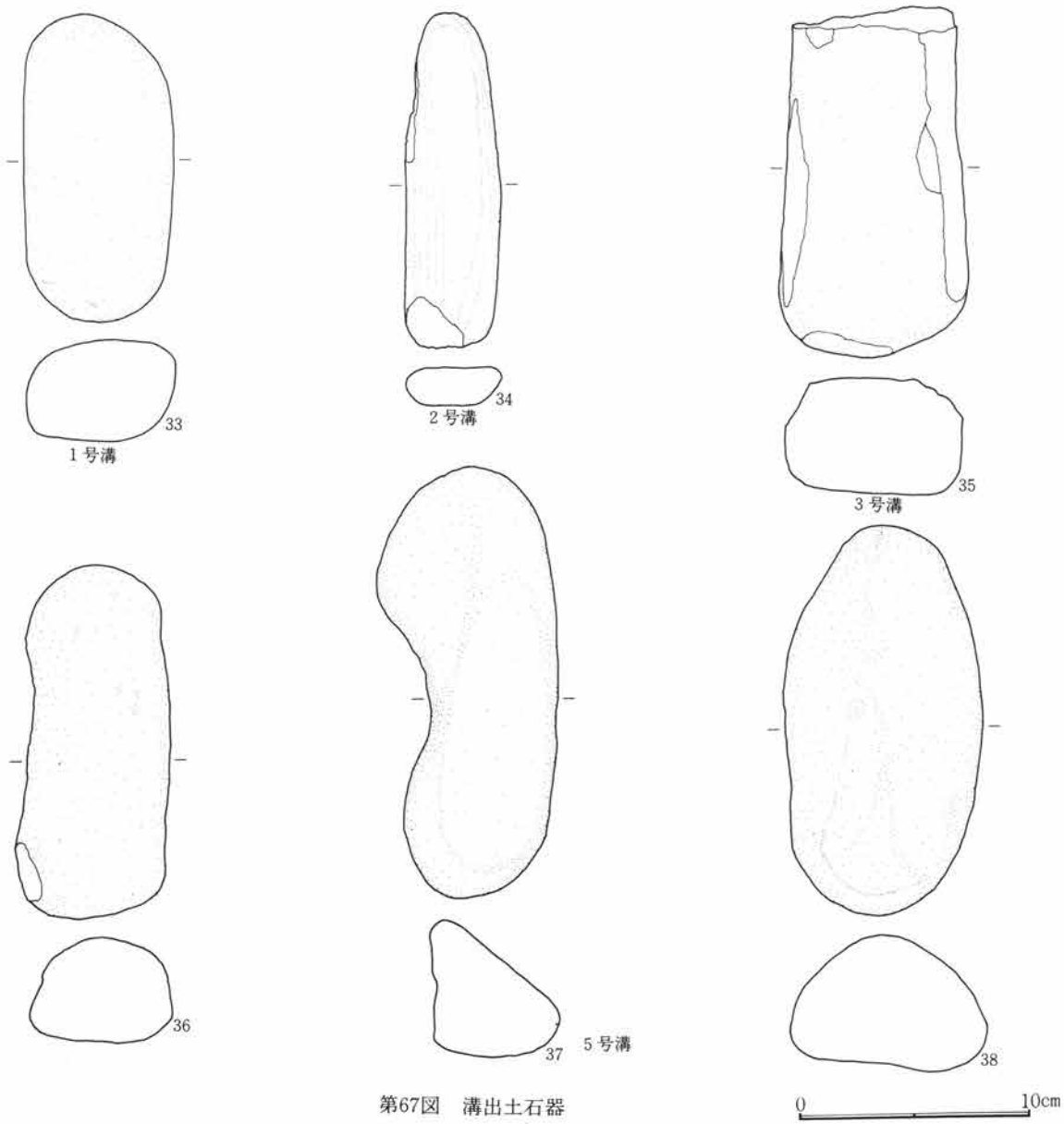


第65図　10・14号住居址、方形周溝墓出土石器

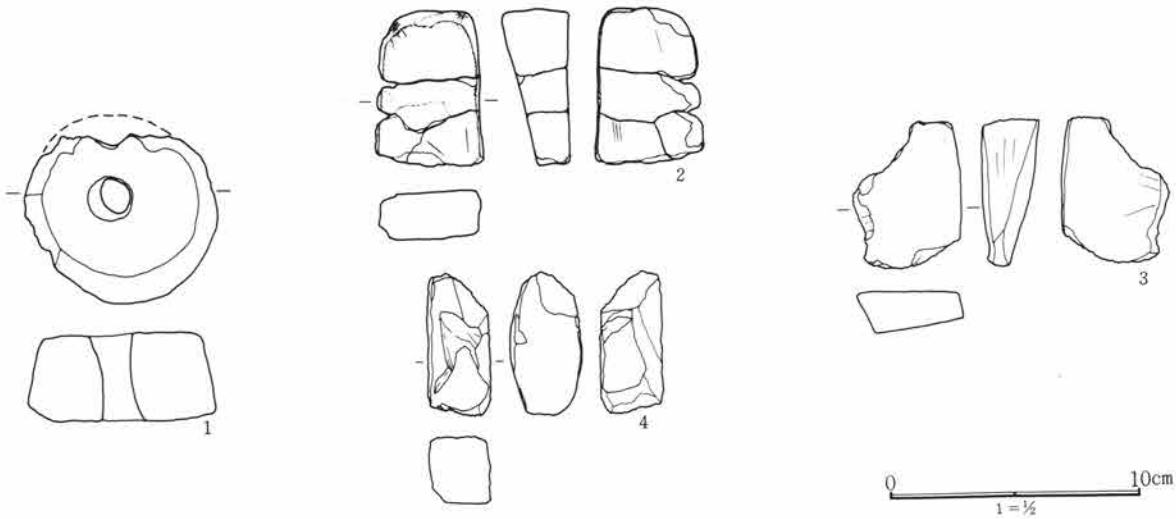


第66図　方形周溝墓、土壙出土石器

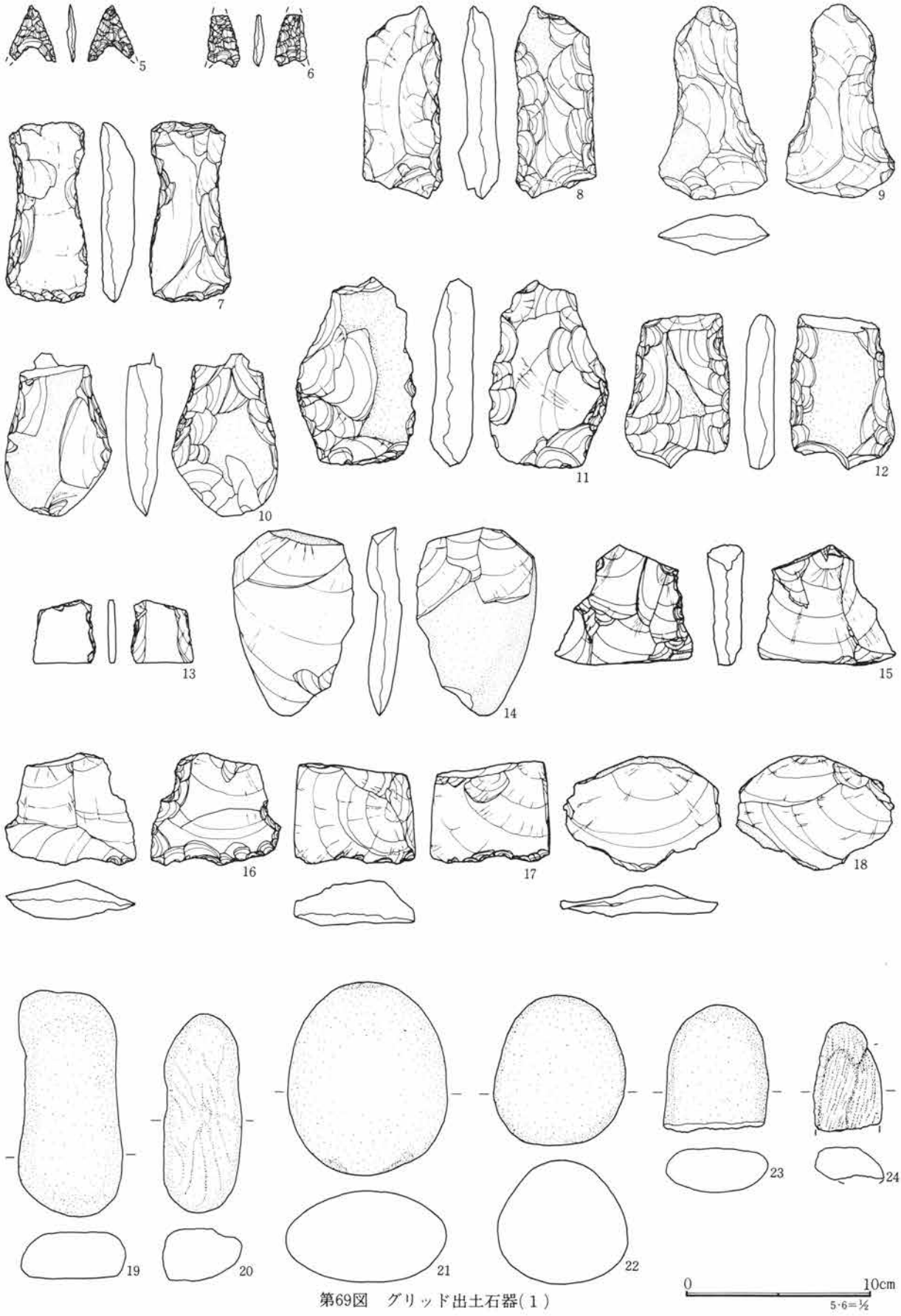
番号	出土位置	器　種	法　量（cm・g）	石　材	備　考
7	4号住居	敲　石	8.6× 5.2× 2.9　180.3	緑色凝灰岩	断面三角形を呈し、両端を破損する。
8	6号住居	敲　石	13.2× 5.2× 4.2　448.0	石英斑岩	両端部に若干の磨滅痕。
9	7号住居	敲　石	17.1× 6.2× 4.9　747.0	輝石安山岩	両端部、片面に使用痕。
10	8号住居	打製石斧	9.3× 4.7× 2.0　83.2	黒色頁岩	基部やや細く撥形を呈し、片面に自然面を持つ、刃部欠損。



第67図　溝出土石器



第68図　グリッド出土遺物

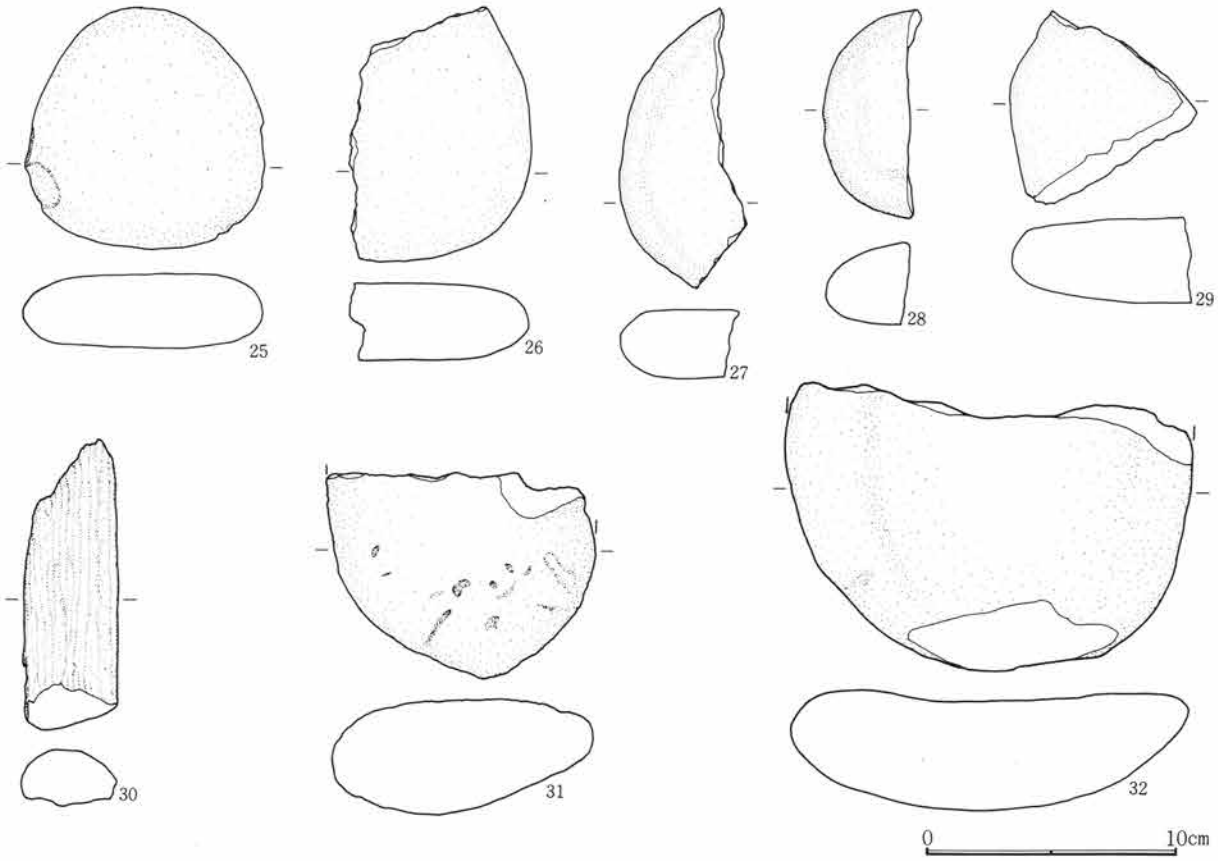


第69図　グリッド出土石器(１)

番号	出土位置	器　種	法　量（cm・g）	石　材	備　考
11	９号住居	敲　石	12.1× 5.2× 3.7　377.0	ひん岩	中央片縁が薄くなる。
12	10号住居	スクレイパー	9.4× 6.0× 1.8　78.3	黒色頁岩	三角形を呈し、長辺部に粗い刃部を持つ。
13	10号住居	スクレイパー	8.0× 8.7× 1.6　124.0	黒色頁岩	厚手の扇状を呈し、一側縁に粗い刃部を持つ。
14	10号住居	敲　石	13.4× 3.0× 2.8　188.3	雲母石英片岩	棒状を呈す。
15	10号住居	敲　石	14.7× 4.9× 3.3　468.7	輝石安山岩	端部側縁に使用痕。
16	10号住居	台　石	18.0×15.2× 4.5 1614.0	輝石安山岩	偏平な円礫、一面が使用により摩耗している。
17	10号住居	台　石	23.4×13.2× 6.7 2876.0	輝石安山岩	片面平坦で、約半分を欠損する。
18	14号住居	敲　石	20.1× 8.3× 5.9 1379.0	石英閃緑岩	端部に若干の打痕が認められる。大型品である。
19	方形周溝墓	スクレイパー	7.2× 8.8× 1.5　98.7	黒色頁岩	一時剥片、片面に自然面を持つ。刃の作りは細い。
20	方形周溝墓	敲　石	10.7× 7.5× 4.4　592.0	輝石安山岩	両面に使用による浅い凹穴を持つ。半分を欠く。
21	方形周溝墓	敲　石	16.1× 7.5× 3.2　558.0	雲母石英片岩	端部に使用痕。
22	方形周溝墓	敲　石	16.9× 6.2× 4.2　721.0	ひん岩	端部の一部を欠損する。
23	方形周溝墓	敲　石	17.8× 7.4× 5.1　960.0	輝石安山岩	一方の端部が薄くなり、使用痕を持つ。
24	方形周溝墓	台　石	12.1×13.8× 4.5 1225.0	輝石安山岩	両面平坦をなす。
25	方形周溝墓	台　石	16.3×12.6× 4.7 1086.0	輝石安山岩	不定形、自然礫か。
26	２号土壙	丸　石	8.3× 7.9× 6.5　569.5	輝石安山岩	球形を呈し、表面は平滑である。
27	２号土壙	敲　石	16.4× 6.0× 3.3　510.0	雲母石英片岩	端部に打痕。
28	３号土壙	スクレイパー	9.5× 4.7× 1.6　57.0	黒色頁岩	不定形を呈し、刃部もやや波打つ。
29	11号土壙	敲　石	13.4× 8.3× 6.3　838.0	輝石安山岩	三角形を呈す。
30	14号土壙	敲　石	18.5×10.7× 4.8 1100.0	輝石安山岩	自然礫か。
31	20号土壙	スクレイパー	6.3× 5.7× 2.1　60.0	黒色頁岩	扇状を呈し、凸状の刃を持つ。
32	20号土壙	敲　石	15.3× 5.4× 3.3　382.0	輝石安山岩	端部、側縁に使用痕。
33	１号溝	敲　石	13.1× 6.5× 4.4　620.0	輝石安山岩	端部に若干の使用痕。
34	２号溝	敲　石	14.3× 4.1× 1.8　197.3	緑色片岩	棒状を呈し、端部僅かに欠く。
35	３号溝	敲　石	15.0× 8.2× 5.5　118.7	輝石安山岩	端部に使用痕、両面平坦で平滑、一端を欠損する。
36	５号溝	敲　石	15.6× 6.8× 4.7　642.0	輝石安山岩	端部側面に使用痕。
37	５号溝	敲　石	18.4× 7.7× 6.9 1174.0	溶結凝灰岩	中央でえぐれる不定形を呈す。
38	５号溝	敲　石	16.7× 8.5× 6.8　988.0	輝石安山岩	端部に使用痕。

表 31　グリッド出土石器観察表

番号	出土位置	器　種	法　量（cm・g）	石　材	備　考
1	33－C45	紡錘車	5.1×(5.0)× 2.4　28.8	軽石	両面、周辺部磨かれている。鼓状を呈す。
2	48－C42	砥石	6.2× 4.3× 2.6　85.9	流紋岩	４面を使用、中央は薄くなる。
3	46～47－C49～50	砥石	5.8× 4.3× 2.2　55.5	流紋岩	４面を使用、かなり磨滅している。
4	23～24－C34	砥石	5.7× 2.6× 2.9　55.7	流紋岩	断面方形で、２面に使用面を持つ。
5	45～46－D01	石鏃	2.1× 1.7× 0.3　0.7	黒曜石	凹基鏃、基部の抉りは深く先端部、脚端部を欠く。
6	32－D05	石鏃	1.8× 1.2× 0.4　0.7	黒曜石	凹基鏃、先端部、片側縁を欠損している。
7	26～29－C50	打製石斧	9.7× 4.4× 1.8　91.8	黒色頁岩	両端縁が僅かにくびれる。
8	15－A26	打製石斧	10.4× 4.3× 2.2　100.6	黒色頁岩	刃部を欠く、両側縁は粗く歯潰しがなされる。
9	18～19－A33	打製石斧	10.3× 5.8× 2.2　109.8	黒色頁岩	撥形を呈す、刃部の作りは粗くかなり磨耗している。
10	21－A41	打製石斧	8.7× 5.7× 2.0　100.0	黒色頁岩	刃部丸みを持ち、かなり磨耗している。基部欠損。
11	28～29－C42～43	打製石斧	10.1× 6.4× 2.3　175.3	黒色頁岩	作りは粗く、片面一部に自然面。
12	西拡張区	打製石斧	8.3× 5.2× 1.6　101.3	黒色頁岩	刃部はかなり磨耗している。基部欠損。
13	07－A19	打製石斧	3.4× 3.4× 0.4　8.4	頁岩	両面、端部に磨痕。
14	11－A11	スクレイパー	10.0× 6.5× 1.9　108.8	黒色頁岩	片面に自然面、一側縁に粗い刃部。
15	36－C43	スクレイパー	6.5× 7.5× 2.0　68.7	黒色頁岩	不定台形を呈し一側縁に刃を作る。上端に自然面。
16	西拡張区	スクレイパー	7.0× 6.0× 2.1　77.3	黒色頁岩	不定台形を呈し、刃部の作りは粗い。
17	36－C46	スクレイパー	6.4× 5.4× 2.5　87.7	黒色頁岩	四辺形を呈し、下辺に刃部を持つ。片面は平ら。
18	46～49－C04	スクレイパー	8.5× 6.2× 1.8　56.0	黒色頁岩	明瞭な刃部を持たない。一側縁に自然面を持つ。
19	30－C46	敲石	12.2× 5.7× 2.6　321.4	石英斑岩	両面平坦でかなり平滑である。
20	28～29－C42～43	敲石	10.6× 4.3× 3.1　237.5	変輝緑岩	一端に若干の使用痕。
21	14－A19	磨石	10.4× 8.7× 4.9　606.0	輝石安山岩	端部に打痕を持つ。
22	30－C44	丸石	8.1× 7.2× 6.7　453.3	輝石安山岩	若干の使用痕を持つ。
23	34－C48	敲石	6.9× 5.5× 2.4　160.7	石英閃緑岩	やや偏平で、一端を欠いている。
24	30－42～43	敲石	5.8× 3.6× 1.7　53.6	黒色片岩	欠損品。
25	西拡張区	敲石	9.6× 9.6× 3.0　410.0	輝石安山岩	やや偏平な石で、側縁に打痕を持つ。
26	29－C38	台石	10.0× 7.3× 3.1　360.3	輝石安山岩	両面は平坦、欠損品である。
27	33～34－C44～45	台石	11.1× 5.0× 2.8　217.9	輝石安山岩	偏平な石で半分以上欠損している。
28	41－A42	磨石	8.2× 3.4× 3.7　121.5	流紋岩	円形を呈すと思われるが、半分以上を欠く。
29	48～50－C46	台石	7.6× 7.4× 3.4　201.3	輝石安山岩	偏平な石、破損品である。
30	28～29－C42～43	敲石	11.5× 3.7× 2.3　143.4	黒色片岩	棒状を呈すと思われるが、両端を欠く。
31	２区	敲石	8.2×10.4× 4.6　430.5	輝石安山岩	不定形な礫で、欠損している。
32	西拡張区	石皿	11.3×15.6× 4.5 1287.0	石英閃緑岩	使用面やや凹み、約半分を欠いている。



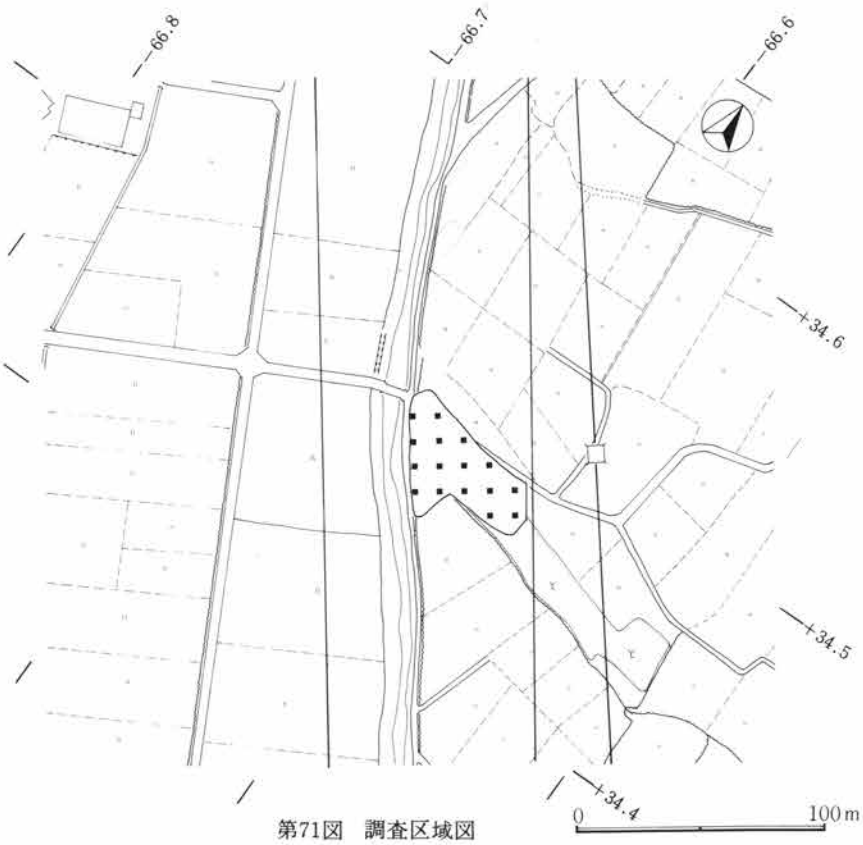
第70図　グリッド出土石器(２)

Ⅳ．滝川Ｂ遺跡

１．調査の方法と経過

本遺跡は、分布調査を行った際、少量の土器片を採集したため、遺跡として登録されたものである。下斉田・滝川Ａ遺跡・同Ｃ遺跡の調査終了後、発掘調査に入ることになり、昭和51年６月19日から30日まで実施した。遺跡地の面積が狭いため、全体にグリッドを設け掘開を行う。遺構、遺物が検出されないため、試掘調査をもって終了することとした。

路線が滝川を含んでおり、発掘対象地は、左岸の微高地上にある。面積が1,900㎡と少ないため、グリッド調査を実施することになった。台地の南東隅にグリッドの原点を置き、南北をＸ軸、東西をＹ軸とし、２ｍ単位に数字を配した。発掘調査は10ｍ単位の大グリッドに対し２×２ｍのグリッドを開けるように設定した。

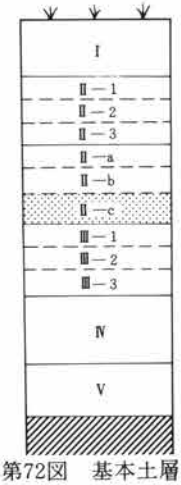


第71図　調査区域図

２．基本土層

本遺跡の層序は基本的には大きくⅠ～Ⅲの３層に分けられ、さらにⅡ層は６層に、Ⅲ層は３層に細分可能である。以下に各層の説明を示す。

Ⅰ．表土。Ⅱ－１　黒褐色土。Ⅱ－２　灰色を帯びた褐色土、粘性が有り、鉄分（黄色）の凝集塊を含む。Ⅱ－３　鉄分凝集の黄褐色土、やや砂質である。Ⅱ－ａ　鉄分凝集の赤黄色土、Ｂ軽石混入。Ⅱ－ｂ　黒色土でＢ軽石混入。Ⅱ－ｃ　Ｂ軽石層。Ⅲ－１　粘質黒色土であるがやや灰色を呈す。Ⅲ－２　灰色粘質土、黄褐色鉄分凝集粒を混入。Ⅲ－３　粘質黒色土鉄分凝集を多く混入、やや灰色を帯びる。地山ブロックを若干混入する。　Ⅳ　ローム漸移層。Ⅴ　ローム層



第72図　基本土層図

３．遺跡の概要

下斉田遺跡に続いてトレンチ調査を行ったが、遺構遺物に関しては検出されなかった。

Ⅴ．滝川Ｃ遺跡

1．調査の方法と経過

下斉田遺跡調査終了後の昭和51年３月１日から６月19日まで実施した。

本遺跡は、滝川と広沢川に挟まれた桑畑の微高地上に立地する。広沢川の左岸を南北に延びる台地上に展開するものであるが、関越道の路線が、台地西側の縁辺から水田地帯を通過することになったため、微高地に対する発掘のみ実施した。従って、グリッド調査で試掘を行うこととした。グリッドの原点を南東隅に置き、南北をＸ軸、東西をＹ軸とし、呼称は（Ｘ軸、Ｙ軸）とした。試掘は、10ｍ単位の大グリッドに対し２×２ｍの１グリッドを開けることとし、微高地全体に設定した。その結果、主な遺構として土壙30基、溝19条その他性格不明のピット、落ち込みを検出した。遺物は古墳時代初頭の土器類が多く出土したが遺構に伴うものは少なかった。遺構、遺物の検出した部分を中心に順次拡張を行った。

第73図　調査区域図

2．基本土層

本遺跡の基本層序は大きくⅠ～Ⅴ層に分けることができるが、さらにⅡ層は３層に、Ⅲ層は５層に細分でき、部分的には僅かではあるが二ツ岳の軽石（Ｆ・Ｐ）も確認されている。土器は主にⅢ層中より出土している。

V．滝川C遺跡

Ⅰ層　表土

Ⅱ層　B軽石層混入土

Ⅱ－a　B軽石混入の褐色土層、鉄分を含み褐色みが強い。

Ⅱ－b　B軽石混入の黒色土。

Ⅱ－c　B軽石層4層に細分可能な部分もある。

Ⅲ層　黒色土層

Ⅲ－1a　黒色粘土層。

Ⅲ－2a　灰色粘土層。

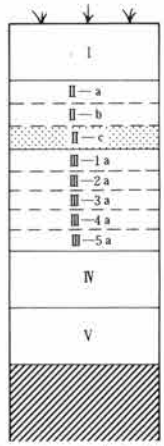
Ⅲ－3a　灰褐色粘土層。

Ⅲ－4a　灰色粘土層（鉄分含有）。

Ⅲ－5a　黒色粘土層（非常に黒みが強い）。

Ⅳ層　ローム漸移層

Ⅴ層　ローム層



第74図　基本土層図

3．遺構と遺物

(1) 土　壙

本遺跡で検出した土壙は総数30基である。時期的には古墳時代前期に比定されるものが多い。分布の状況は特に規則性は無く、規模、形状共に多種多様である。

1号土壙

31－B06グリッドに位置する。平面形は円形を呈し断面漏斗状となる。規模は117×(110)cm、深さ63cmである。溝と重複する。遺物はS字甕2点が出土している。

2号土壙

24～25－B05～06グリッドに位置する。長方形を呈し規模は266×76cm、深さ58cmである。掘り込みは比較的垂直に近い。底はやや凹凸が見られる。S字甕と高坏の破片が出土している。

3号土壙

29～31－B11～13グリッドに位置し、形状は不定長円形を呈す。規模は（315)×120cm、深さ74cmを測る。底は凹凸が目立つ。南西隅を1号溝が切る。

4号土壙

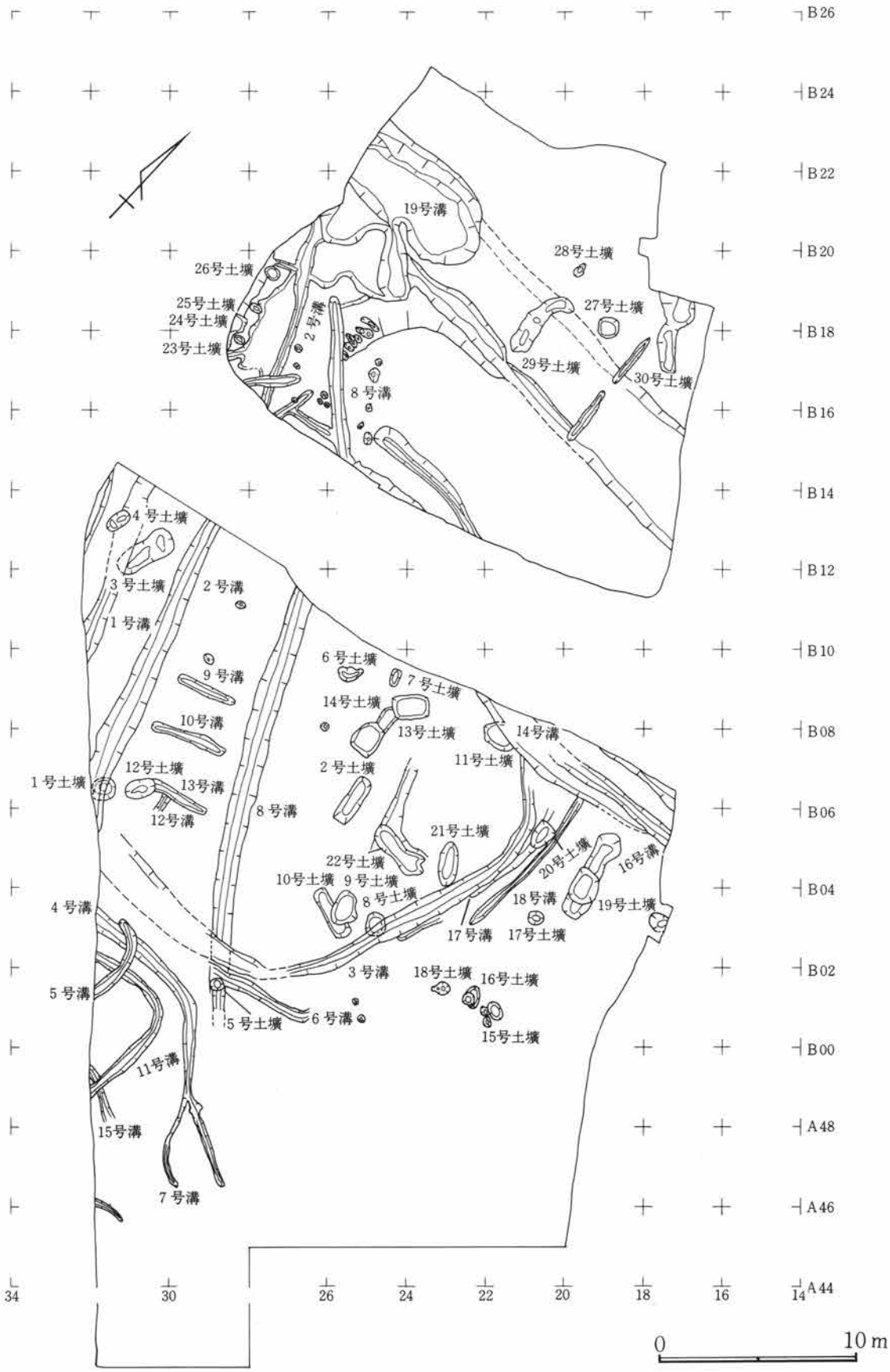
30～31－B12～13グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は133×84cm、深さ25cmである。浅いすり鉢状である。壺片1点が出土している。

5号土壙

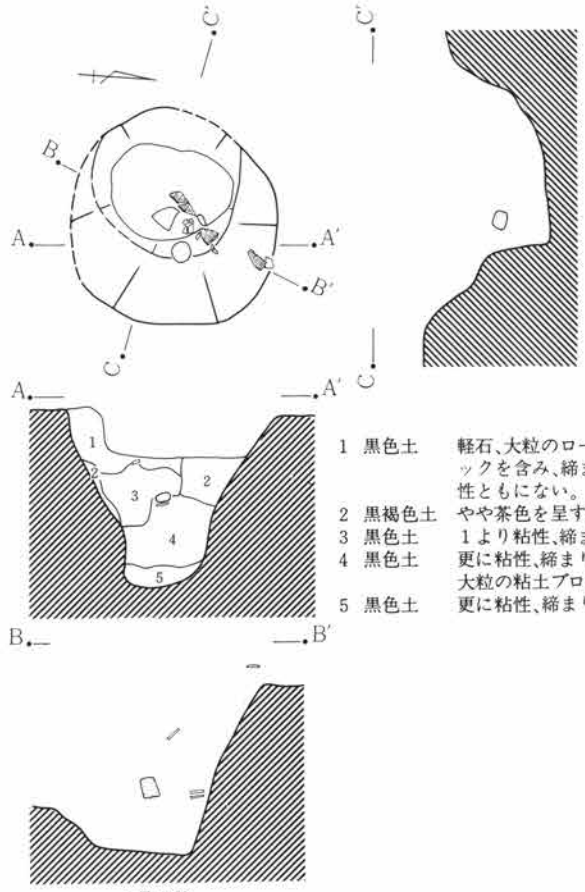
28－B01グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し規模は43×43cm、深さ60cmを測る。垂直に掘り込まれており、底は平坦である。中位やや上層よりS字甕、ほぼ完形の小型壺・器台が出土、さらにその下位には偏平な石が検出されている。

6号土壙

25－B09グリッドに位置する。半月形を呈し、規模は114×60cm、深さ40cmである。掘り込みは不規則で、底は狭まる。

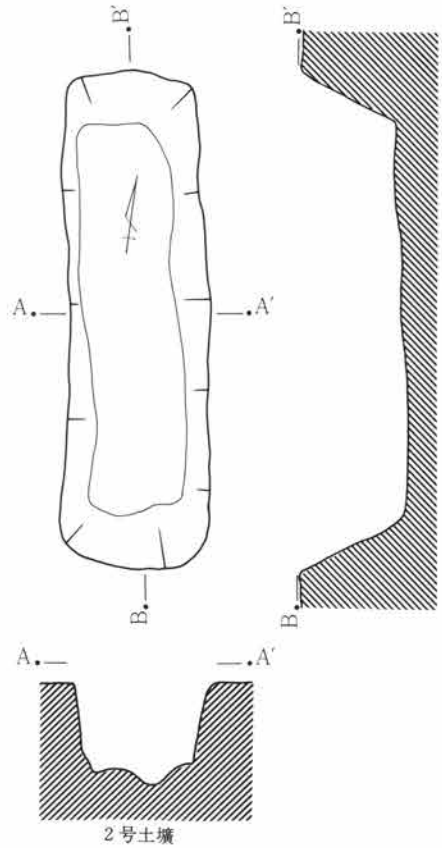

B26
B24
B22
B20
B18
B16
B14
B12
B10
B08
B06
B04
B02
B00
A48
A46
A44
34
30
26
24
22
20
18
16
14
19号溝
28号土壙
26号土壙
25号土壙
24号土壙
23号土壙
2号溝
27号土壙
29号土壙
30号土壙
8号溝
4号土壙
3号土壙
2号溝
1号溝
6号土壙
7号土壙
9号溝
14号土壙
13号土壙
14号溝
10号溝
11号土壙
1号土壙
12号土壙
13号溝
2号土壙
12号溝
8号溝
21号土壙
22号土壙
20号土壙
16号溝
10号土壙
9号土壙
8号土壙
18号溝
19号土壙
4号溝
17号溝
17号土壙
3号溝
18号土壙
16号土壙
5号溝
5号土壙
6号溝
15号土壙
11号溝
15号溝
7号溝
0
10m

第75図　遺構全体図

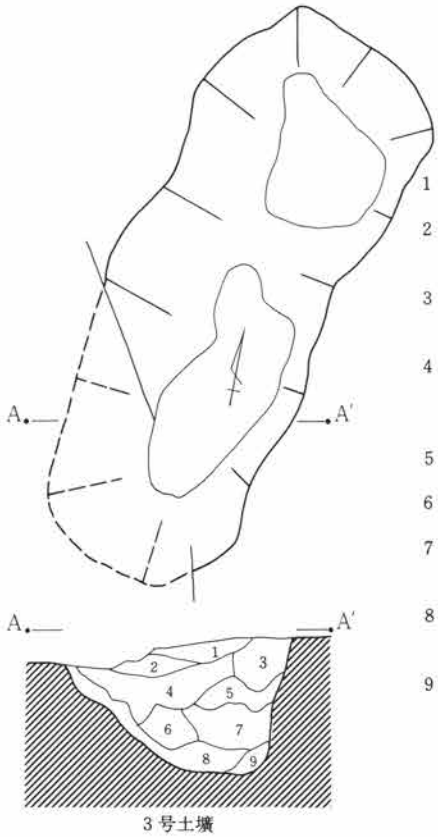


1 黒色土　軽石、大粒のロームブロックを含み、締まり、粘性ともにない。
2 黒褐色土　やや茶色を呈する。
3 黒色土　1より粘性、締まりあり。
4 黒色土　更に粘性、締まりを増す。大粒の粘土ブロック含む。
5 黒色土　更に粘性、締まりを増す。

1号土壙

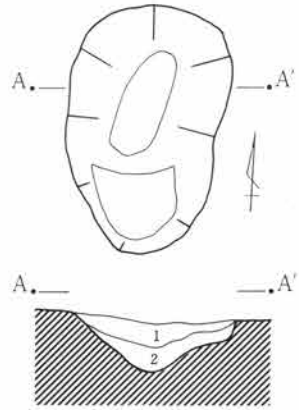


2号土壙



3号土壙

1 黒色土
黒色土とローム崩れが混合。
2 黒色土
1と同じであるが、灰褐色気みが強い、小石を多く含む、粘性強い。
3 褐色土
ローム崩れと灰色の強い褐色土との混合。
4 黒色土
粘性が極めて強い、灰色を帯びた黒色土鉄分の凝集が大小のブロック状に混じる。
5 褐色土
砂利とローム崩れの混合土。
6 褐色土
3よりローム崩れが多く混じる。
7 褐色土
粘性のほとんどない、灰色を帯びた褐色土鉄を多量に含む。
8 黒色土
粘性が強いが固くしまっていない、灰色の強い黒色土、鉄分が混じる。
9 灰色土
粘性の強い灰色土、上部はやや粘性が少い、鉄分の凝集がブロック状にはいる。

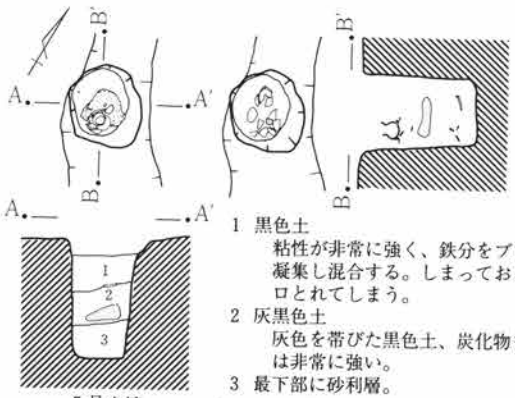


4号土壙

1 黒色土
黒色土と砂質の灰色土との混合土。
2 黒色土
黒色土が地山の崩れの中に混合し、木の根であろう状態に近い。

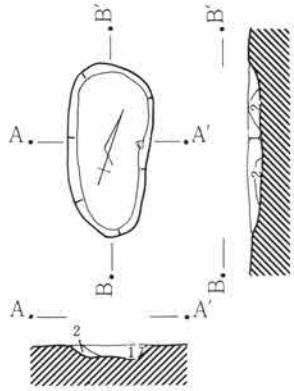
0　1m

第76図1～4号土壙(1)



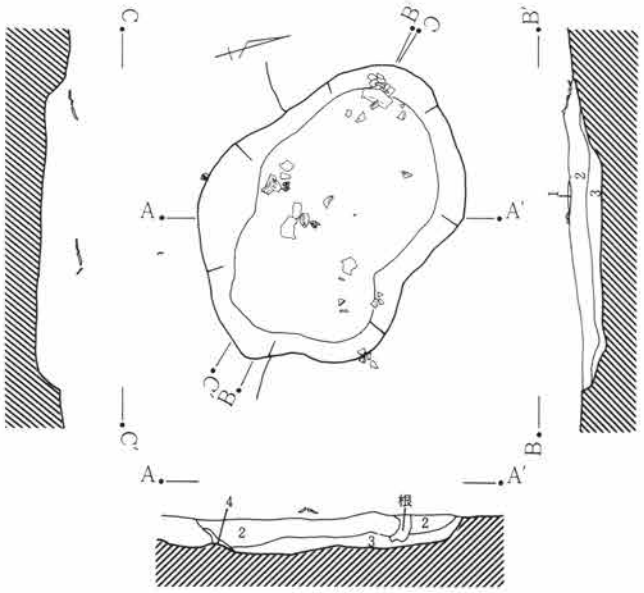
5号土壙

1 黒色土
粘性が非常に強く、鉄分をブロック状に凝集し混合する。しまっておらずボロボロとれてしまう。
2 灰黒色土
灰色を帯びた黒色土、炭化物を含み粘性は非常に強い。
3 最下部に砂利層。



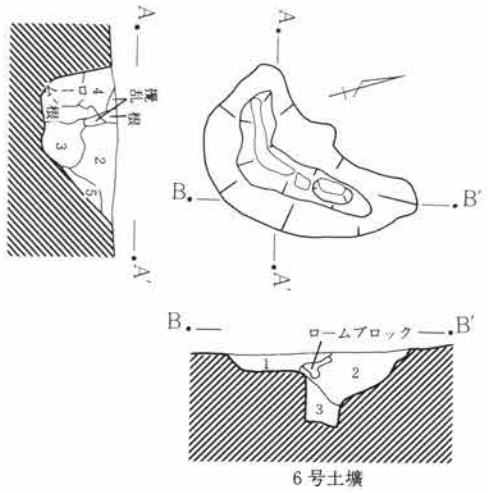
7号土壙

1 黒色土
Ⅲ—2a層(軽石混入)。
2 褐色土
1よりやや明るく、Ⅲ—2a層に近似するが、軽石を含有する。



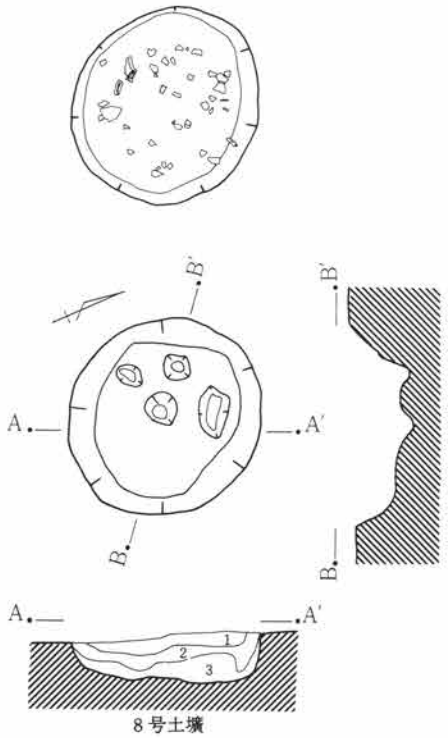
9号土壙

1 黒褐色土　茶色の強い黒色土で軽石を少量含む。粘性が少なく、しまりが少なくザラつく。
2 黒褐色土　やや茶色を帯びる(鉄分の含有による) 軽石を上部にごく少量含む。粘性あってしまる。
3 黒色土　黒色土と地山の混合土ブロック状に互層を成す。粘性は少しあるが全体にザラつく。
4 黒褐色土　2に近い茶色を帯びた黒色土、褐色土がややブロック状に混入。



6号土壙

1 黒褐色土　若干の炭化物を含み、2より褐色みが強い、軽石の含有あり。
2 黒色土　炭化物の含有多し、1より黒い軽石の含有も少い。
3 黒色土　炭化物の含有がきわめて多い。1、2よりフカフカしている。
4 黄色土　ロームを混入する、締まりがない、細かい炭化物含む。
5 黒褐色土　黒色土を含むローム層、壁面からのくずれと思われる。

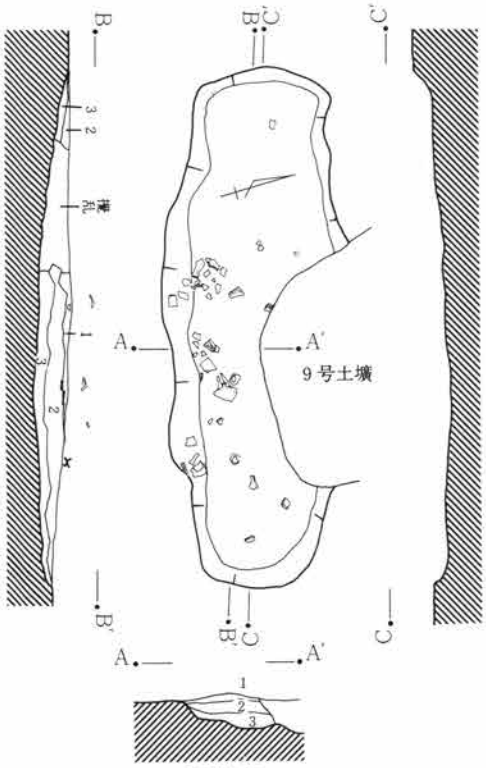


8号土壙

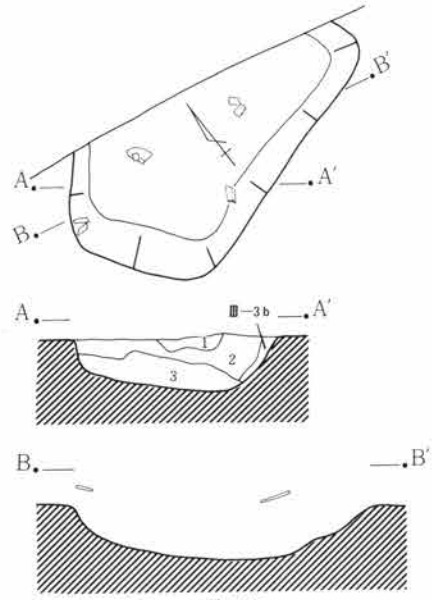
1 黒褐色土　軽石混入の黒色土、全体的に鉄分が含まれ茶色を帯びる、粘性あり。
2 黒色土　炭化物を含み黒色が強い、軽石を含みⅢ—2a層が主体であるようだ。粘性はあるがしまりがなく砂っぽくザラつく。
3 黒褐色土　粘性がありややしまっている、茶色を帯びる軽石はほとんど含まれない。

0　1m

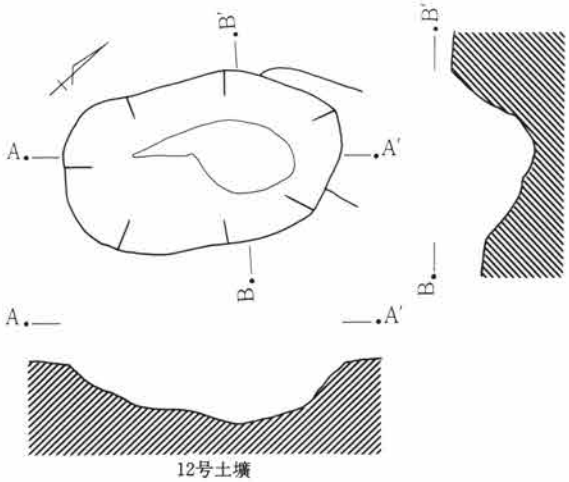
第77図　5～9号土壙(2)

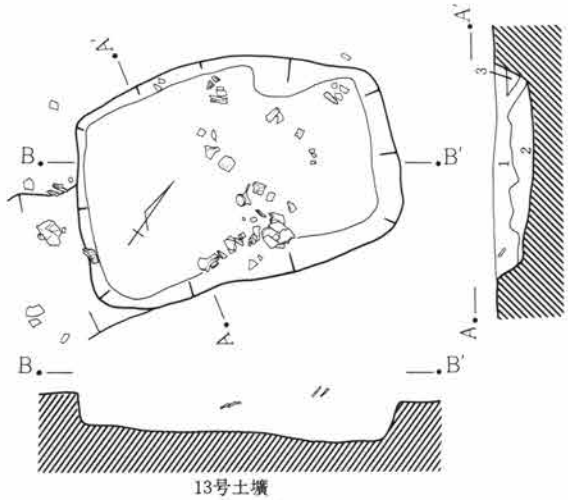


1 黒褐色土　鉄分を含みやや茶色、軽石を含みⅢ—2a層が主体であると考えられる。やや粘性あってしまる。
2 黒色土　軽石をごく少量混入する。粘性はあるがしまりがない。
3 黒褐色土　やや褐色を帯びる。地山の混合であると思われる。粘性あってややしまっている。



1 黒色土　軽石を混入し2に比べ非常に砂っぽい。
2 黒色土　軽石混入の黒色土に比定される。軽石の含有多し若干のロームブロック混入。
3 黒褐色土　こぶし大位までのロームブロックを多量に含む。基本的には2との混合である。軽石の含有は少ない。

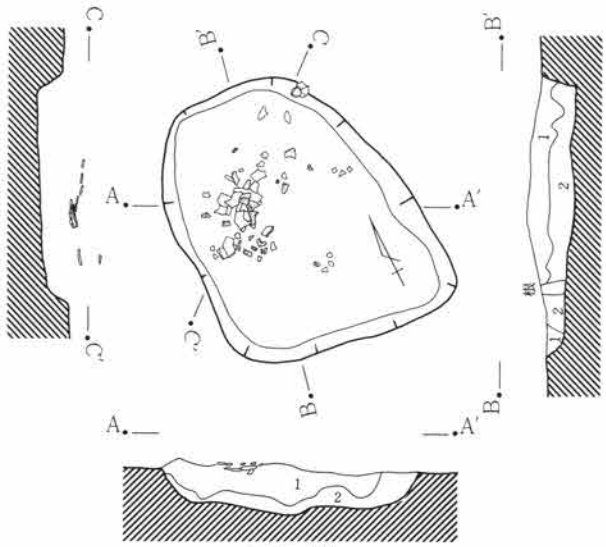




1 黒色土　軽石混入の黒色土にロームブロック混入。
2 黒褐色土　1にこぶし大位までのロームブロックを多量に含む。
3 黒色土　1に近似、軽石を少量含む。

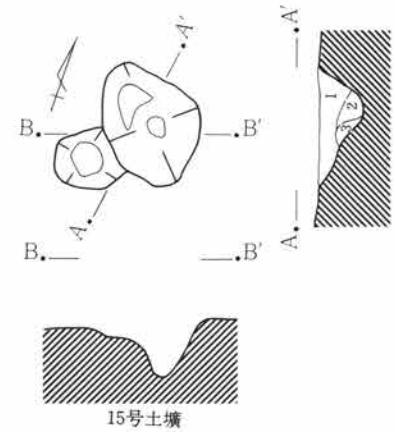
0　1 m

第78図　10～13号土壙(3)



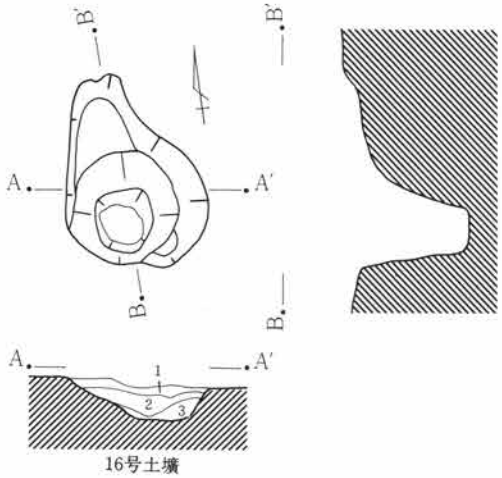
14号土壙

1 黒色土　Ⅲ－2 a層（軽石混入の黒色土）。
2 黒褐色土　軽石混入の黒色土より褐色みが強い、こぶし大位までのロームブロックを含む、1より軽石の含有少ない。



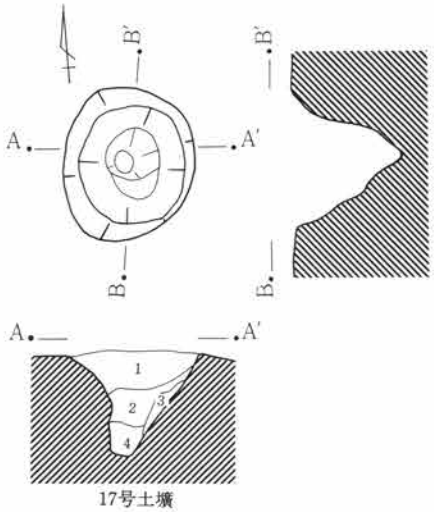
15号土壙

1 黒色土　Ⅲ－5 a層に近似軽石を少量含む、色調はⅢ－5 a層より黒い。
2 黒色土　非常に砂質に富む黒色土、小粒の粘土ブロックを含む。
3 黒色土　2に紋状に粘土ブロックを含む。



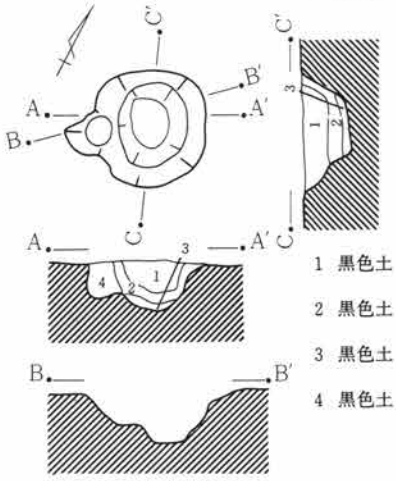
16号土壙

1 黒色土
　Ⅲ－5 a層に近似軽石少量含むが色調はⅢ－5 a層より黒い。
2 黒色土
　1と近似するが軽石は含まない。
3 褐色土
　2と似ているが粘土ブロックを含む。やや黄色みがかる。



17号土壙

1 黒色土　粘性が強い、上部に鉄分、C軽石を含むⅢ－5 a層のくずれであろう。
2 黒色土　灰色を帯びた黒色土、粘性は強い、地山のシルト化したロームを混ぜている。
3 黒色土　地山の崩れ流入。
4 黒色土　地山のシルトと黒色土がブロック状に混じる。



18号土壙

1 黒色土　粘性黒色土層、鉄分ブロック縞状に含む。
2 黒色土　1に大粒の粘土ブロックを含む、南側にのみ存在しない。
3 黒色土　1よりも粘性の強い更に黒みを増す、小粒の粘土ブロック含む。
4 黒色土　1に近似するが粘性は弱い。鉄分ブロックは小粒となり多量に含む。

0　1m

第79図　14～18号土壙（4）

７号土壙

24－B09グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は90×43㎝、深さ８㎝と浅い。３号溝に切られる。

８号土壙

24～25－B02～03グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、規模は106×100㎝、深さ33㎝である。底は凹凸が目立つ。遺物はＳ字甕の破片が２点出土している。

９号土壙

25－B03グリッドに位置する。平面形状は不正円形で南側は10号土壙と重複する。規模は173×120㎝、深さは15㎝である。底はやや凹凸が認められる。Ｓ字甕片２点が出土している。

10号土壙

25～26－B02～04グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、規模は226×(97)㎝、深さ15㎝を測る。底は中央に向かって緩やかに落ちる。遺物は上層よりＳ字甕片５点、壺片１点が出土。

11号土壙

21～22－B07～08グリッドに位置する。北側の一部が未調査である。不正方形を呈すと思われる。現状での規模は155×(95)㎝、深さ32㎝である。掘り込みはレンズ状を呈す。遺物はＳ字甕、壺、小型壺等である。

12号土壙

30～31－B06グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し、規模は152×88㎝、深さ32㎝である。
13号溝と重複する。

13号土壙

23～24－B08グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、規模は175×120㎝、深さ21㎝である。遺物は底から20㎝程浮いた状態でＳ字甕６点、壺１点が出土している。

14号土壙

24～25－B07～08グリッドに位置する。平面形は不定方形を呈し、規模は150×120㎝、深さ14㎝である。遺物はＳ字甕が浮いた状態で出土している。

15号土壙

21～22－B00～01グリッドに位置する。平面形は不定円形を呈し、規模は79×71㎝、深さ31㎝で小ピット状を呈す。人為的なものとは考えがたい。

16号土壙

22－B00～01グリッドに位置する。平面形はやや長円形を呈し、規模は100×74㎝、深さ60㎝である。

17号土壙

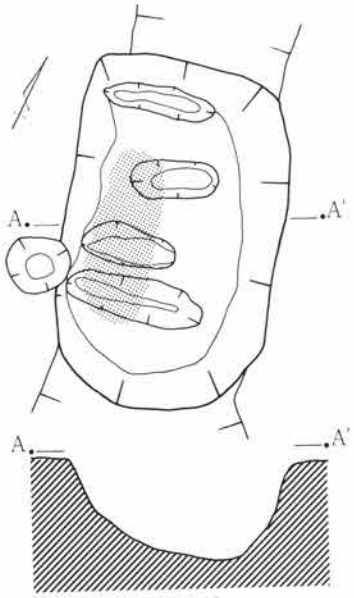
20－B03グリッドに位置する。平面形はやや長円形を呈し、断面ロート状を呈す。規模は81×65㎝、深さ60㎝である。

18号土壙

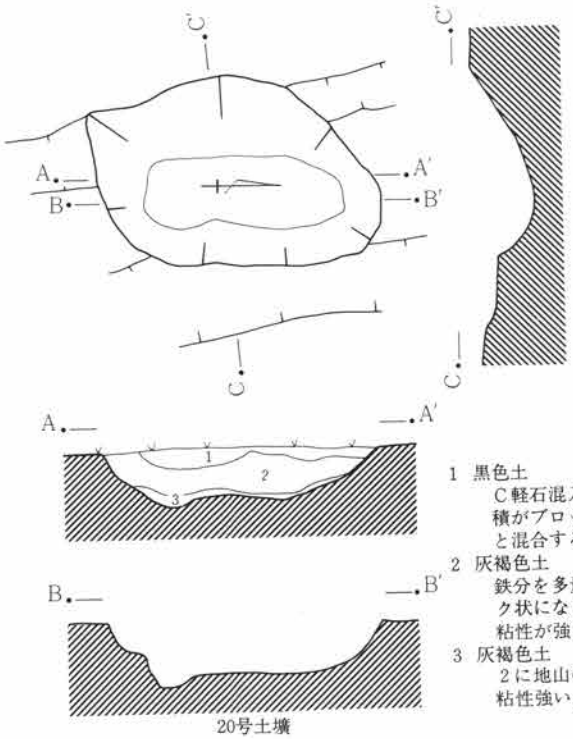
22～23－B01グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、底面凹凸が目立つ、規模は77×62㎝、深さ26㎝である。

19号土壙

19－B03～04グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し、規模は185×97㎝、深さ52㎝である。覆土中に焼土の堆積が見られる。遺物は小型壺が１点出土している。



19号土壙

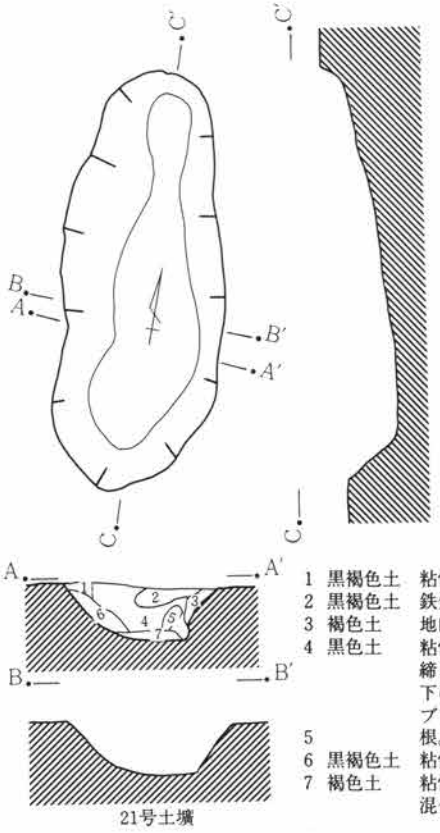


1 黒色土
C軽石混入の黒色土の再堆積がブロック状になり、2と混合する。

2 灰褐色土
鉄分を多量に含み、ブロック状になり斑状に混じる、粘性が強い。

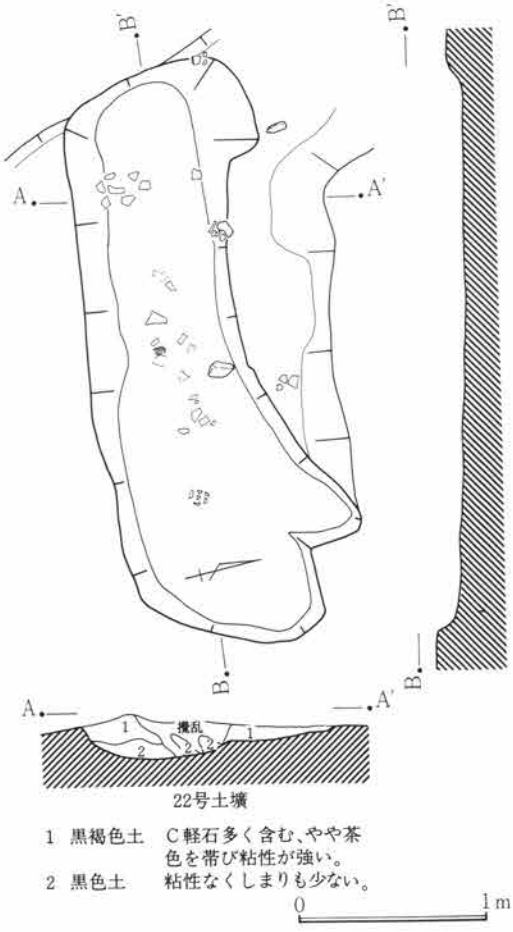
3 灰褐色土
2に地山のロームを含む、粘性強い。

20号土壙



1 黒褐色土　粘性あり全体的に茶色を帯びる。
2 黒褐色土　鉄分多めに含み、褐色土が混入。
3 褐色土　地山ローム粒多量に含む。
4 黒色土　粘性強いが気胞が多量にあり、締まりがない。やや灰色を帯び下に黒い堆積がある。褐色状にブロック（根の跡）散在する。
5　根。
6 黒褐色土　粘性の黒みの強い褐色土。
7 褐色土　粘性の褐色土。下のロームとの混合と考えられる。

21号土壙

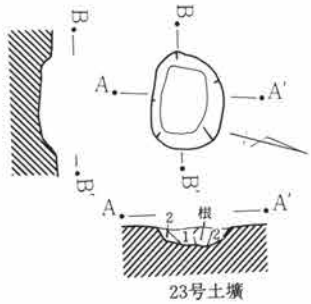


22号土壙

1 黒褐色土　C軽石多く含む、やや茶色を帯び粘性が強い。
2 黒色土　粘性なくしまりも少ない。

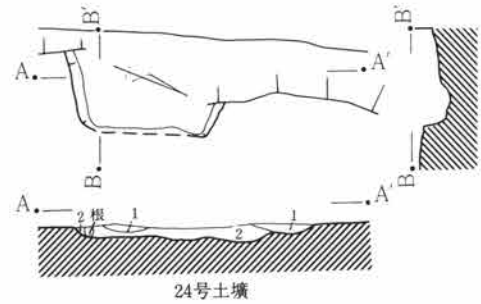
0　1m

第80図　19～22号土壙（５）



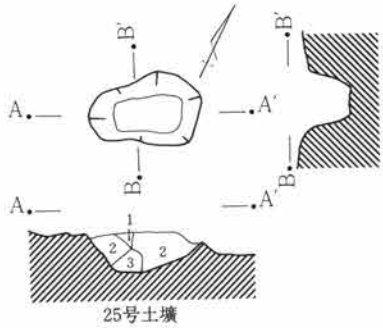
23号土壙

1 淡黒色土　Ⅲ－2a層に近似。粘性、締まり有り小粒の粘土ブロック含む。
2 淡黒色土　1と性質は近似するが、粘土ブロックの含有が多い。



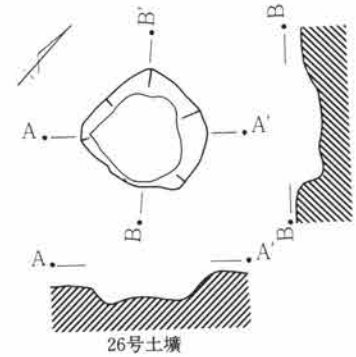
24号土壙

1 黒色土　Ⅲ－1a層近似、軽石を若干含む。
2 褐色土　1に比べ、軽石の含有なし、小粒のロームブロック、鉄分ブロックを含む。

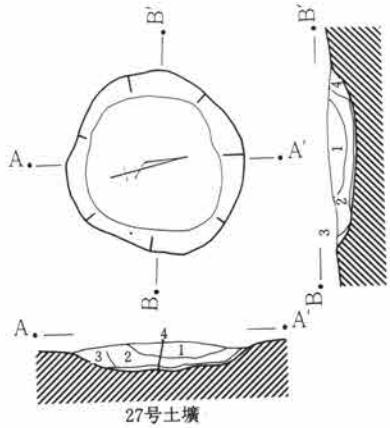


25号土壙

1 淡黒色土　Ⅲ－1a層に類似、軽石含有、鉄分ブロック（小粒）を含む、粘性、締まりに富む。
2 淡黒色土　1に近似するが、軽石の含有が少なくなる。大粒の粘土ブロックを大量に含む。粘性、締まりあり、色調は1より白くなる。
3 淡黒色土　2に近似するが、やや黒っぽい。小粒の粘土ブロックを含む。締まりがなく砂質っぽいが粘性はある。

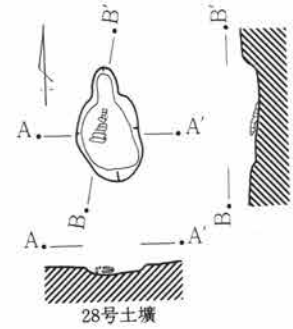


26号土壙



27号土壙

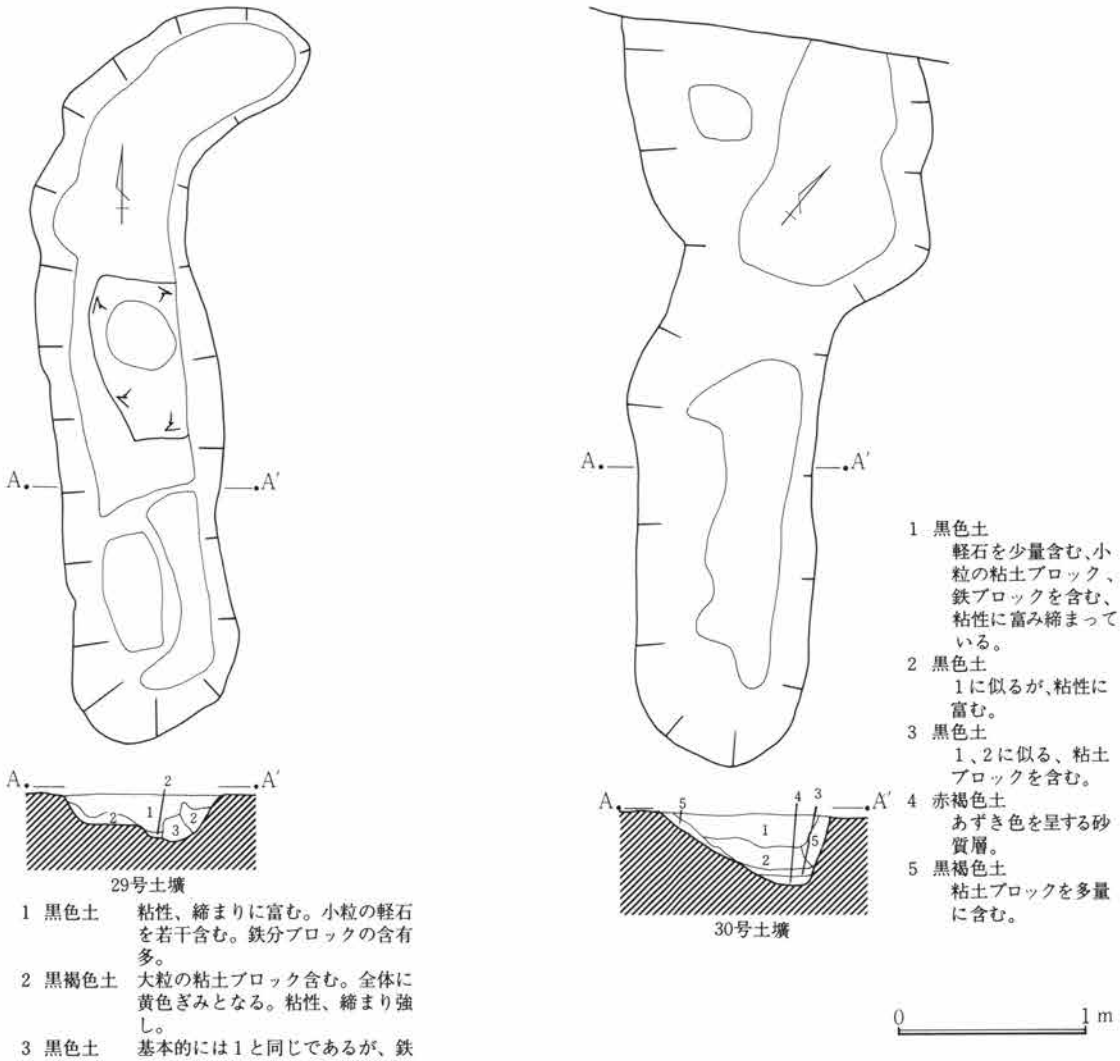
1 黒色土　粘性、締まりは強いが2程ではない。小粒の焼土粒を含む。下部に薄く炭化物の層が存在する。
2 黒色土　1より粘性、締まりに富む。焼土、ブロック等の混入は認められない。
3 黒色土　2より黒く、小粒の粘土ブロックを含む。
4 黒褐色土　砂層、基盤の粘土層の上に薄く存在する。



28号土壙

0　1m

第81図　23～28号土壙（6）



第82図　29・30号土壙(７)

20号土壙

20－B05グリッドに位置する。平面形は不定長円形を呈し、規模は148×100㎝、深さ30㎝である。18号溝と重複する。

21号土壙

22～23－B04～05グリッドに位置する。平面形は長円形を呈す。規模は223×90㎝、深さ30㎝である。

22号土壙

23～24－B04～06グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し、規模は310×80㎝、深さ12㎝で規模の割に浅い土壙である。

23号土壙

24号土壙の南に近接、28－B17グリッドに位置する。平面形は長円形である。規模は52×37㎝、深さ８㎝である。

24号土壙

28－B17～18グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は（80)×(33)㎝、深さ13㎝である。西側約半

分は未調査である。

25号土壙

27－B18グリッドに位置する。平面形は不定長円形で、規模は60×29㎝、深さ24㎝である。

26号土壙

27－B19グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は68×62㎝、深さ14㎝で底面は凹凸がある。

27号土壙

18～19－B17～18グリッドに位置する。平面形は円形で掘り込みはややなだらかである。規模は96×95㎝、深さ９㎝である。

28号土壙

19－B19グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し北側部分が突出する。規模は62×35㎝、深さ６㎝である。馬の下歯および下顎骨の一部が出土している。

29号土壙

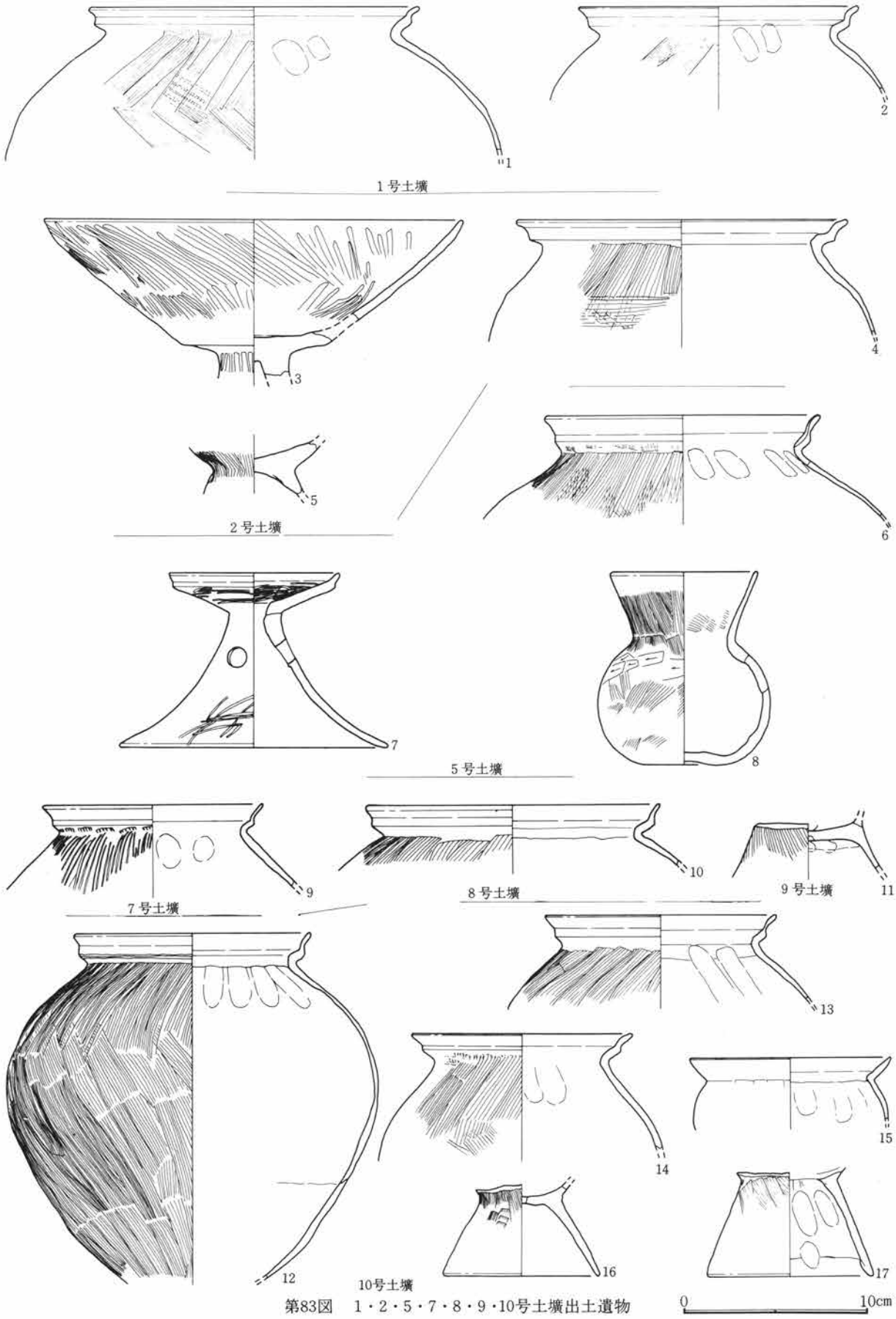
19～21－B17～18グリッドに位置する。平面形は溝状を呈し一端が折れる。規模は288×89㎝、深さ25㎝である。大溝と重複する。

30号土壙

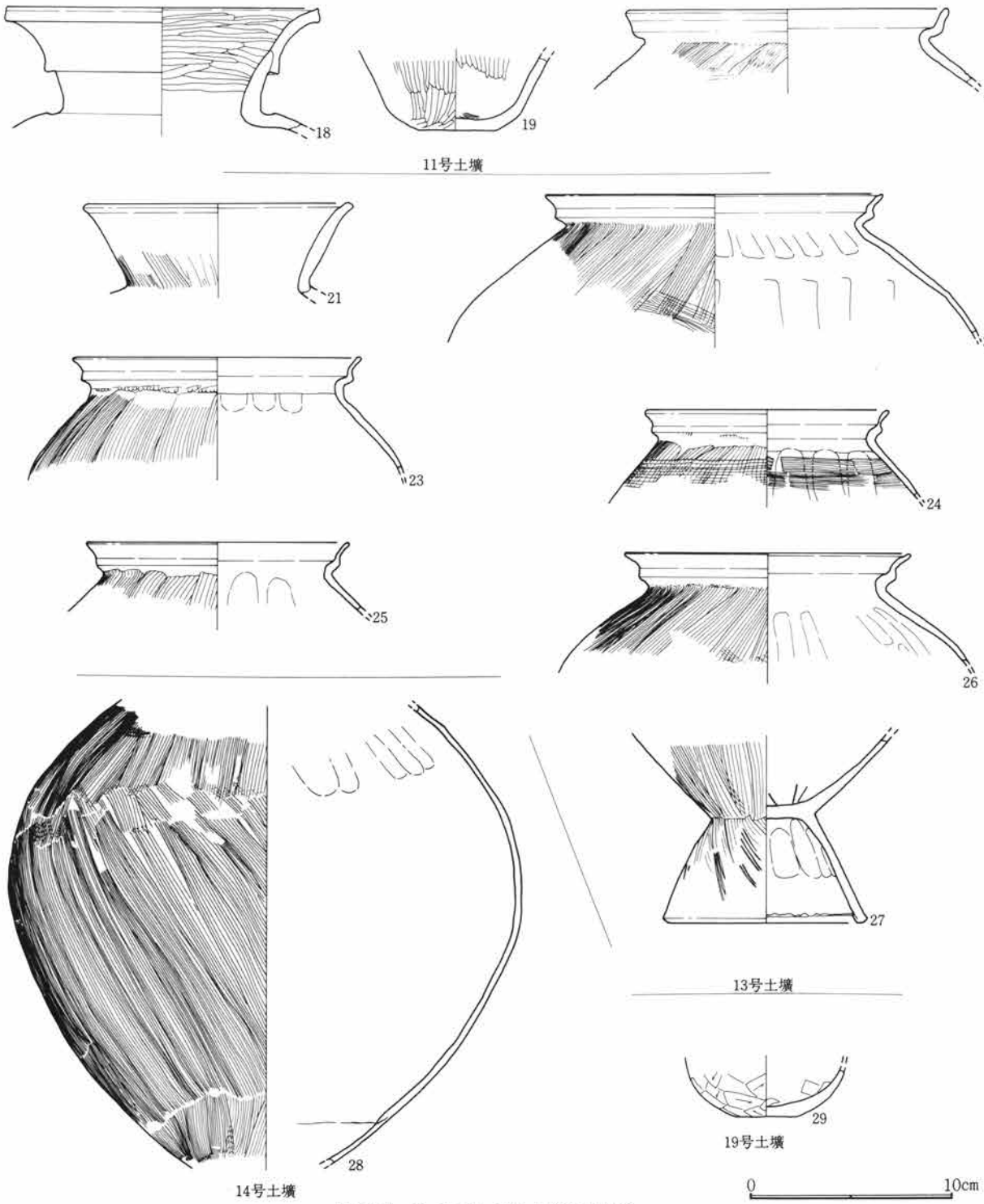
16～17－B16～18グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し、規模は393×90㎝、深さ35㎝である。

表 32　土壙計測値

番号	規模（㎝）長軸×短軸×深さ	位置	形状	方位	出土遺物	備考
1号土壙	117×(110)×63	31－B06	円形		S字甕2	2号溝に切られる
2号土壙	266× 76×58	24～25－B05～06	長円形	N－2°－E	S字甕2　高坏1	
3号土壙	(315)×120×74	29～31－B11～13	不正長円形	N－12°30′－W		1号溝に切られる
4号土壙	133× 84×25	30～31－B12～13	長円形	N－1°－E	壺1	1号溝を切る
5号土壙	43× 43×60	28－B01	円形		S字甕1　小型壺1　器台1	8号溝を切る
6号土壙	114× 60×40	25－B09	―			
7号土壙	90× 43× 8	24－B09	長円形	N－1°30′－E	S字甕1	
8号土壙	106×100×33	24～25－B02～03	円形		S字甕2	3号溝に切られる
9号土壙	173×120×15	25－B03	不正円形		S字甕2	10号土壙を切る
10号土壙	226×(97)×15	25～26－B02～04	長方形	N－13°－E	S字甕5　壺1	9号土壙に切られる
11号土壙	155×(95)×32	21～22－B07～08	不正方形		S字甕1　壺1　坩1	14号溝に切られる
12号土壙	152× 88×32	30～31－B06	長円形	N－42°－W		13号溝を切る
13号土壙	175×120×21	23～24－B08	長方形	N－44°－W	S字甕6　壺1	溝を切る
14号土壙	150×120×14	24～25－B07～08	不正方形	N－1°30′－E	S字甕1	溝を切る
15号土壙	79× 71×31	21～22－B00～01	不正円形			
16号土壙	100× 74×60	22－B00～01	長円形			
17号土壙	81× 65×60	20－B03	長円形			
18号土壙	77× 62×26	22～23－B01	円形			
19号土壙	185× 97×52	19－B03～04	長円形	N－18°－E	坩1	16号溝を切る
20号土壙	148×100×30	20－B05	不正長円形	N－0°		18号溝を切る
21号土壙	223× 90×30	22～23－B04～05	長円形	N－2°30′－E		
22号土壙	310× 80×12	23～24－B04～06	長円形	N－91°－E		溝を切る
23号土壙	52× 37× 8	28－B17	長円形			
24号土壙	(80)×(33)×13	28－B17～18	長方形	N－19°－E		
25号土壙	60× 29×24	27－B18	不正長円形	N－119°－E		
26号土壙	68× 62×14	27－B19	円形			
27号土壙	96× 95× 9	18～19－B17～18	円形			
28号土壙	62× 35× 6	19－B19	長円形	N－7°－E		
29号土壙	288× 89×25	19～21－B17～18	溝状	N－0°		大溝を切る
30号土壙	393× 90×35	16～17－B16～18	長円形	N－37°－E		



第83図　1・2・5・7・8・9・10号土壙出土遺物



第84図　11・13・14・19号土壙出土遺物

表 33　土壙遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	S字甕	口径（18.0） 器高 —— 底径 ——	肩部でやや張る。頸部「く」の字に屈曲し、口縁部下段はやや外傾、上段は大きく外反。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	暗褐色～にぶい黄橙色	1号土壙
2	S字甕	口　（15.0） 高 —— 底 ——	頸部くびれ、口縁部下段は外傾、上段は直から外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	黒褐色	1号土壙

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
3	高坏	口径（22.7） 器高 —— 底径 ——	坏部下部に弱い屈曲を持ち口縁に向かってやや内彎気味に立ち上がる。	外面　篦磨き。 内面　篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	2号土壙
4	S字甕	口　（17.9） 高 —— 底 ——	肩部やや屈曲する。頸部「く」の字に折れ、口縁部下段外傾し、上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目、肩部横線。 内面　撫で。	石粒を含む 普通	にぶい橙色～灰褐色	2号土壙 8号土壙と接合
5	S字甕	口 —— 高 —— 底 ——	台部との接合部、「く」の字に屈曲。	外面　刷毛目。 内面　胴部篦撫で、台部指撫で。	石粒を含む 普通	黒褐色	2号土壙
6	S字甕	口　（15.0） 高 —— 底 ——	頸部「く」の字に折れ、口縁部下段外傾し上段は直から外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　頸部篦撫で、肩部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	灰黄褐色	5号土壙 口縁接合面で剝離
7	器台	口　9.3 高　9.4 底　14.6	脚は裾が大きく開く。器受け部は逆「ハ」の字に広がり端部は短く立ち、外側に凹線。	外面　篦磨き、口縁端部横撫で。 内面　器受け部篦磨き。 脚部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい赤褐色	5号土壙 透し孔3個
8	小型壺	口　8.1 高　10.4 底　4.4	底部は凹み、脚部丸みを持ち、頸やや締まり口縁部はやや外傾して長く立つ。	口縁部　端部横撫で。 外面　口縁部刷毛目。胴部刷毛目後撫で。　内面　篦撫で。頸部刷毛目。	砂粒を含む 良	にぶい褐色	5号土壙
9	S字甕	口　（12.1） 高 —— 底 ——	肩部やや直線的で、口縁部下段は短かく開く。上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目、単位粗い。 内面　撫で。	砂粒を含む 良	にぶい褐色	7号土壙
10	S字甕	口　（16.2） 高 —— 底 ——	頸部強く「く」の字に折れ、口縁部下段は水平に近く開き、上段は直から外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　頸部篦撫で。撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	8号土壙
11	S字甕	口 —— 高 —— 底 ——	「ハ」の字に開く台部。	外面　刷毛目。 内面　胴部篦撫で、台部指撫で。	砂粒を含む 良	にぶい橙色	9号土壙 台部片
12	S字甕	口　12.9 高 —— 底 ——	肩部に最大径、口縁部下段はやや上向きに立ち、上段は直から外反する。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目、下から上への順。 内面　胴、頸部篦撫で、肩部縦指撫で。	砂粒を含む 良	褐色	9号土壙 10号土壙 台部を欠く
13	S字甕	口　12.6 高 —— 底 ——	頸部「く」の字に折れ、口縁部下段は外傾してたつ。上段は外反する。端部やや肥厚する。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　肩部指撫で。	砂粒を含む 良	にぶい橙色	10号土壙
14	S字甕	口　（12.0） 高 —— 底 ——	肩部なだらかで頸部ゆるく「く」の字に折れる。口縁部の屈曲は弱い。口唇内側に凹線。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒を含む 良	にぶい黄橙色～暗褐色	10号土壙
15	壺	口　（10.8） 高 —— 底 ——	肩部丸みを持ち、頸部「く」の字に折れる。口縁部内彎気味に外傾して開く。	口縁部　横撫で。 外面　肩部縦篦撫で。 内面　指撫で。	砂粒を含む 良	橙色～にぶい橙色	10号土壙
16	S字甕	口 —— 高 —— 底　8.6	「ハ」の字に開く台部。	外面　刷毛目後撫で。 内面　撫で。	砂粒を含む 良	にぶい赤褐色	10号土壙 台部
17	S字甕	口 —— 高 —— 底　9.0	「ハ」の字に開く台部。端部内側へ折り返し。	外面　斜め刷毛目後撫で。 内面　指撫で、折り返し部指押え痕。	砂粒・石粒を含む 良	浅黄橙色	10号土壙 台部
18	壺	口　（15.4） 高 —— 底 ——	二重口縁、下段は直気味に立ち、上段は外反、端部上下に尖る。	口縁部　横撫で。 外面　撫で後篦磨き。 内面　横篦磨き。	細砂粒多く含む 普通	橙色	4号土壙 11号土壙と接合
19	小型壺	口 —— 高 —— 底　3.6	平底から丸みを持って立ち上がりやや外反する。	外面　縦篦磨き。 内面　篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	11号土壙
20	S字甕	口　16.0 高 —— 底 ——	頸部「く」の字に折れる。口縁外側の屈曲は丸みを持ち、内側は明瞭、口縁上段に外反。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目、肩部横線。 内面　撫で。	砂粒・石粒多量に含む 普通	にぶい橙色	11号土壙
21	壺	口　（13.6） 高 —— 底 ——	口縁部やや外傾し、口唇部外反して端部は丸みを持つ。	口縁部　端部横撫で、下部刷毛目。 外面　刷毛目。 内面　撫で。	石粒を含む 普通	橙色	13号土壙
22	S字甕	口　（16.5） 高 —— 底 ——	肩部なだらかで、頸部「く」の字に折れる。口縁部下段ややや外傾し、上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　篦撫で、肩部指押え。	砂粒を含む 良	にぶい橙色～暗褐色	13号土壙

V．滝川C遺跡

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
23	S字甕	口径（14.0） 器高 —— 底径 ——	肩部直線的、頸部で「く」の字に折れ、口縁部下段外傾して立ち、上段は直から外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目、単位は粗い。 内面　撫で。	石粒を含む 良	にぶい黄橙色～黒褐色	13号土壙
24	S字甕	口　（12.0） 高　—— 底　——	肩部張らず、頸部で「く」の字に折れ、口縁部下段外傾し、外側丸みを持って上段は外反。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目、肩部横線。 内面　篦撫で後指押え。	砂粒を含む 良	にぶい橙色	13号土壙
25	S字甕	口　（13.0） 高　—— 底　——	頸部「く」の字に折れ、口縁部下段は外傾、上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目、単位は粗い。 内面　肩部指撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	橙色	13号土壙
26	S字甕	口　（14.0） 高　—— 底　——	肩部余り張らず、「く」の字に折れて口縁となる。上段は大きく外反。口唇内側に凹線。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒を含む 良	にぶい橙色～暗褐色	13号土壙
27	S字甕	口　—— 高　—— 底　10.0	台部「ハ」の字に開く。胴部は外傾して立ち上がる。台端部折り返し。	外面　刷毛目。 内面　胴部篦撫で。台部指撫で、折り返し部横撫で。	砂粒を含む 良	にぶい黄橙色～灰褐色	13号土壙
28	S字甕	最大径25.1	胴部中位上で最大径を持つ。下部はやや締まる。	外面　刷毛目、下から上への順。 内面　下部篦撫で、肩部指押え痕。	細砂粒を含む 普通	暗赤灰色	14号土壙 外面炭化物 内面有機物
29	坩	口　—— 高　—— 底　3.0	平底から内彎気味に立ち上がる。	外面　篦撫で。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒多量に含む 普通	にぶい橙色一部黒色	19号土壙

(2) 溝

検出した溝の総数は時期不詳のものを含めて20条程であるが、沖積地のために掘り込み面の検出は困難を極め、正確な掘りかたを露呈せしめたものはほとんど無かった。また他の遺構との重複も甚だしく整理番号を付けたものの、実際の全体像は把握仕切れなかったのが現状である。

1号溝

道路南側の調査区西端で検出した。長さは10mほどで幅80cm、深さ15cmである。溝の走行方向はN－25°－Wである。出土遺物は無い。3号土壙よりも新しく、4号土壙よりも旧い。

2号溝

1号溝の東側2m程離れてほぼ平行する。幅120cmで、深さ60cm程である。断面形は「V」字状を呈し、覆土中にB軽石の堆積が見られる。走行方向はN－20°－Wである。

3号溝

28－B02グリッドから東へ延び、やや曲がって北に方向を変え、さらに西に向きを変えて14号溝にぶつかる。幅は50～80cmで深さは10cm程である。掘り込みが不明確で時期的には新しいと考えられる。

4号溝

調査区西壁31－B03グリッドから東に延び先は狭くなり二又になる。近世以降のものである。

5号溝

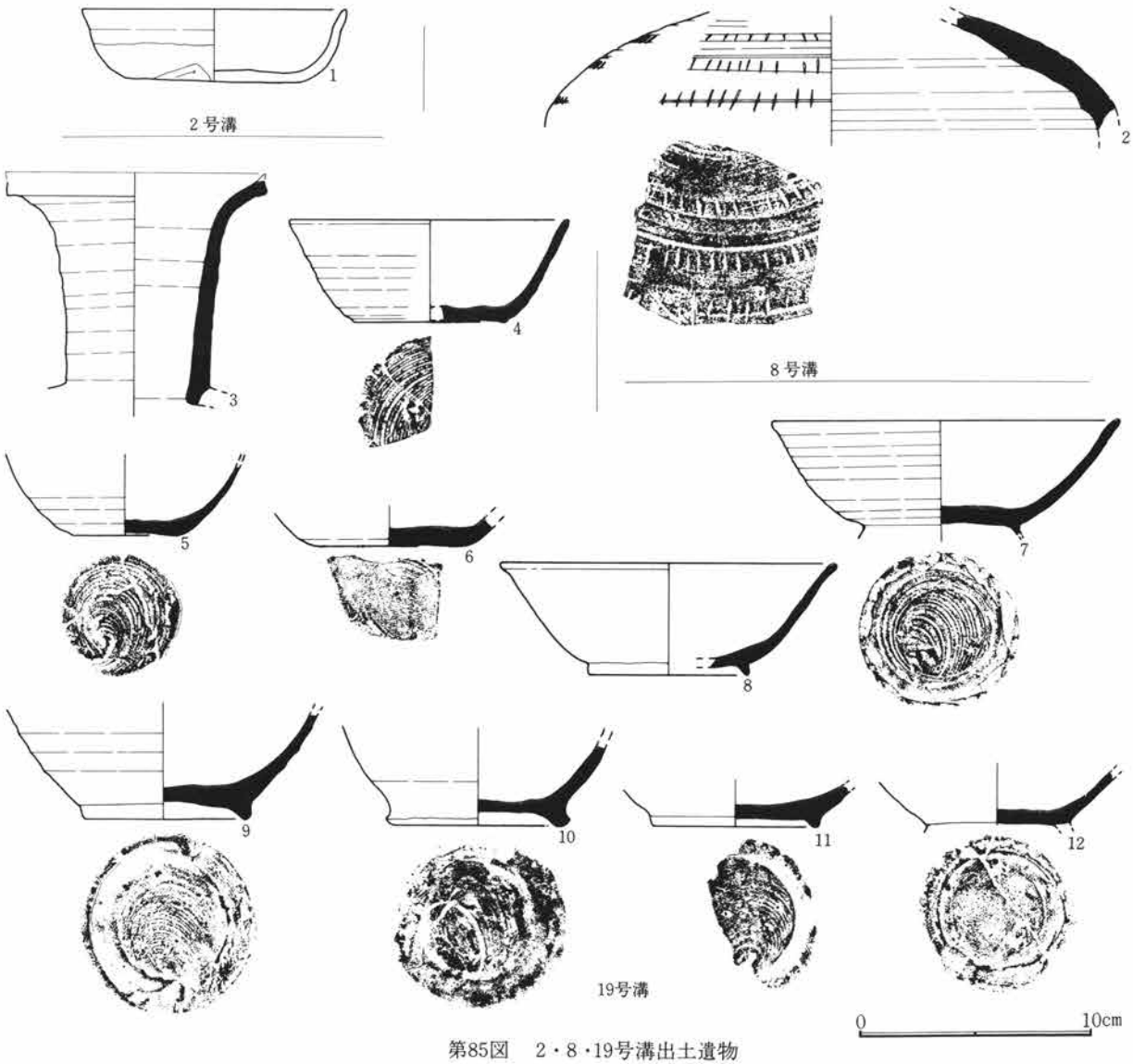
西壁から北に延びるが先は西に振れる。幅40cm程で4・11号溝を横切っている。

6号溝

28－B01グリッドから東に延びるが検出した長さは5m程度である。幅80cm程の浅い溝である。B軽石を堆積する。

7号溝

4号溝に交わる。幅25cm程の小さな溝である。



第85図　2・8・19号溝出土遺物

8号溝

28－B01グリッドから北に向かって延びる。幅1.3mで深さは40cm程である。走行方向はN－30°－Wであるが僅かに右に曲がっている。覆土中にB軽石を堆積する。

9・10・13号溝

2号・8号溝の間にあって3条が東西に並列する。いづれも長さ3m、幅50cmほどで短い。

11号溝

西壁から出て「く」の字に曲がり再び西壁に入る。幅40cmで深さは約15cmである。

12号溝

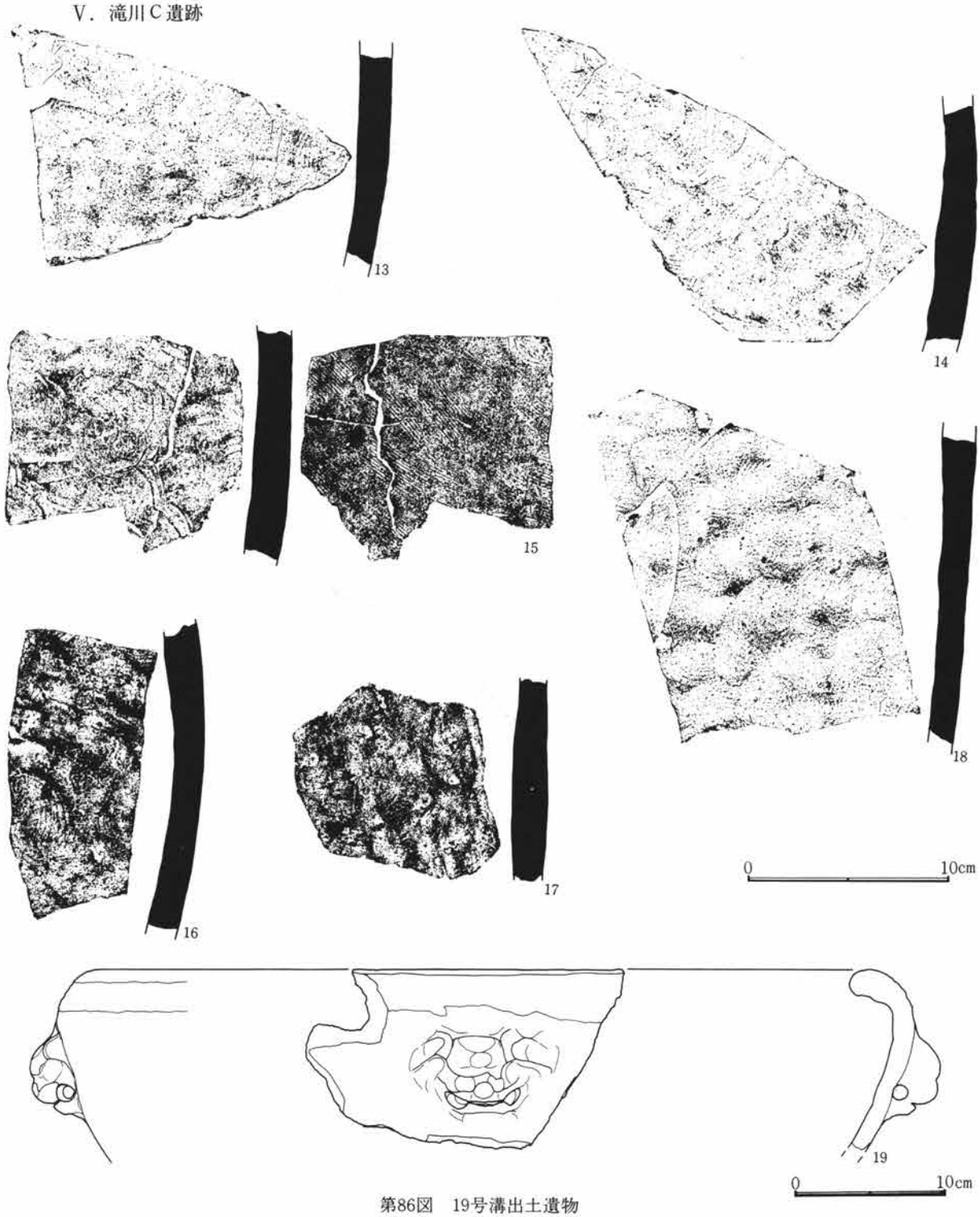
13号溝の南に接して位置するが、極めて短く、溝とするには疑問がある。

14号溝

道路に平行するように東西方向に走る。何条かの溝が重複するものと思われるが断面からは判断できない。覆土中にA軽石を含む。

15号溝

西壁から東に僅かに延びている。掘り込みは不明瞭である。



第86図　19号溝出土遺物

16号溝

調査区東側に位置する。長さは4ｍ、幅70cmで19号土壙が重複する。

17・18号溝

ほぼ平行して南北に走る。幅40cm深さ8cmで時期的には新しい。

19号溝

道路北側の調査区に在り、東西に走る。走行方向はN－85°－Wである。幅は約5mで西壁際は広がる。深さ20～30cm程である。出土遺物は西壁寄りで須恵器の坏、甕、壺などが若干出土している。

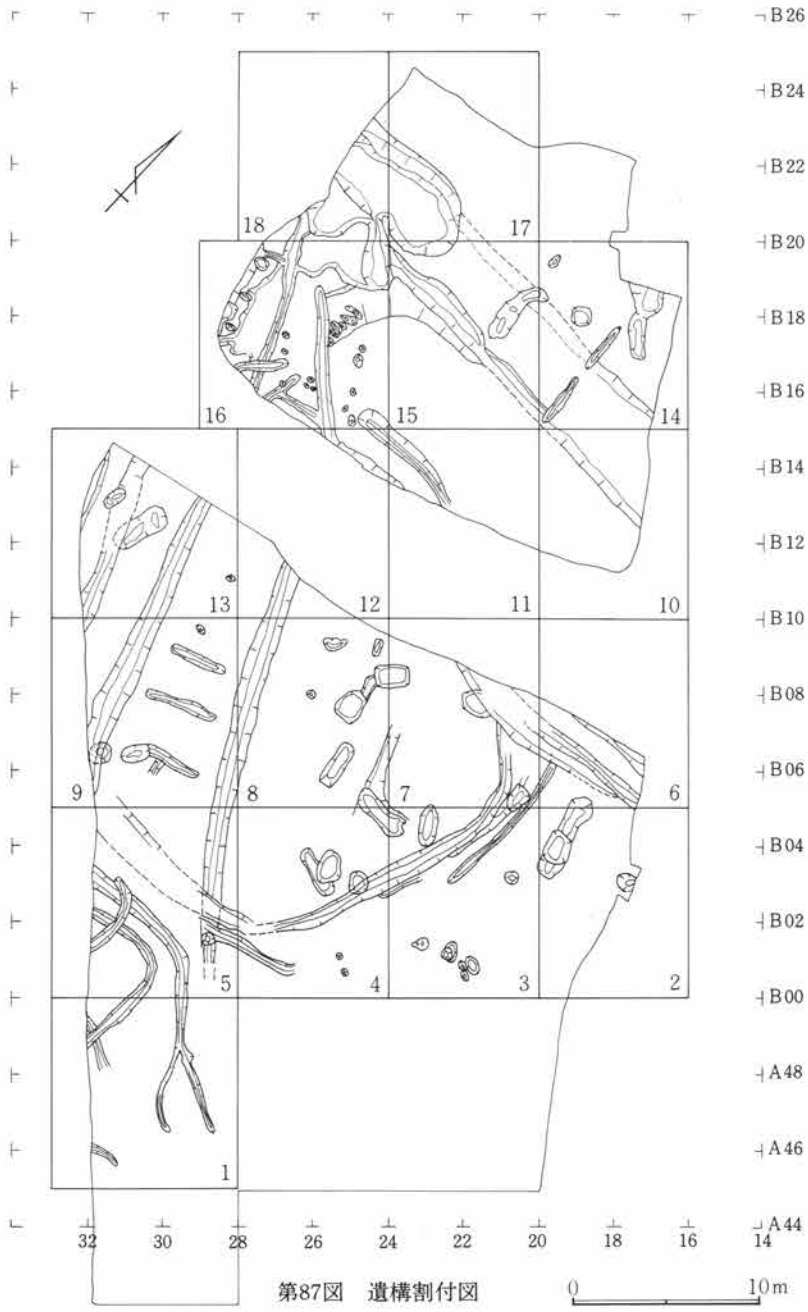
表 34　溝遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	坏	口径 11.4 器高 3.0 底径 7.5	ほぼ平底で丸みを持って立ち上がる。口縁部は外傾する。	口縁部　横撫で。 体部　篦撫で、底部篦削り。 内面　撫で。	砂粒を含む 良	橙色	2号溝
2	須恵器 長頸壺	口 —— 高 —— 底 ——	なで肩の肩部片でやや丸みを持つ。	ロクロ成形。 外面　平行沈線、連続刻み目文を多段に廻らす。	砂粒を含む 良	灰色	8号溝
3	須恵器 長頸壺	口 (11.4) 高 —— 底 ——	頸部長く立ち上がり、口縁部外反する。	ロクロ成形。 内面　頸部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	灰白色	19号溝 頸部から口縁部
4	須恵器 坏	口 (12.0) 高 4.4 底 6.6	口縁部外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り。	砂粒を含む 良	褐灰色	19号溝
5	須恵器 坏	口 —— 高 —— 底 4.7	体部丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り。	砂粒・石粒を含む 良	暗褐色	19号溝
6	須恵器 坏	口 —— 高 —— 底 (6.6)	体部丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。 底部　糸切り後手持ち篦削り。	砂粒を含む 良	灰白色	19号溝
7	須恵器 高台付坏	口 (14.8) 高 —— 底 ——	体部丸みを持って立ち上がる。高台端部は細くなる。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り、付け高台。	石粒を含む 普通	灰色	19号溝 内面重ね焼き痕。
8	須恵器 高台付坏	口 14.6 高 (4.8) 底 (7.3)	体部丸みを持って外へやや大きく開く。高台の断面三角。	ロクロ成形。 付け高台。	石粒を含む 普通	褐灰色	19号溝
9	須恵器 高台付坏	口 —— 高 —— 底 7.2	体部やや内彎気味に外へ開く。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り、付け高台。	砂粒を含む 良	灰白色～明褐色	19号溝
10	須恵器 高台付坏	口 —— 高 —— 底 8.0	体部僅かに内彎して立つ。高台端部潰れて外へ開く。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り、付け高台。	石粒を含む 普通	浅黄色～暗灰黄色	19号溝
11	須恵器 高台付坏	口 —— 高 —— 底 (7.0)	低い高台から体部やや丸みを持って開く。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り、付け高台。	石粒を含む 普通	黄灰色	19号溝
12	須恵器 坏	口 —— 高 —— 底 ——	体部僅かに内彎気味に外へ開く。高台を欠く。	ロクロ成形。 底部　ロクロ右回転糸切り、付け高台。	砂粒を含む 良	灰白色	19号溝
13	須恵器 甕	口 —— 高 —— 底 ——	僅かに丸みを持つ、厚さ1.4cm。	外面　撫で。 内面　青海波文様の当て目後撫で消し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	19号溝
14	須恵器 甕	口 —— 高 —— 底 ——	僅かに丸みを持つ、厚さ1.9cm。	外面　撫で。 内面　青海波文様の当て目後撫で消し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	19号溝
15	須恵器 甕	口 —— 高 —— 底 ——	僅かに丸みを持つ、厚さ1.7cm。	外面　平行叩き後撫で。 内面　青海波文様の当て目後撫で消し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	19号溝
16	須恵器 甕	口 —— 高 —— 底 ——	僅かに丸みを持つ、厚さ1.4cm。	外面　撫で。 内面　青海波文様の当て目後撫で消し。	砂粒・石粒を含む 良	褐灰色	19号溝
17	須恵器 甕	口 —— 高 —— 底 ——	板状で厚さ1.5cm。	外面　撫で。 内面　青海波文様の当て目後撫で消し。	砂粒・石粒を含む 良	黄灰色	19号溝
18	須恵器 甕	口 —— 高 —— 底 ——	僅かに丸みを持つ、厚さ1.3cm。	外面　撫で。 内面　青海波文様の当て目後撫で消し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	19号溝
19	火鉢	口 (52.0) 高 —— 底 ——	口縁部内側へ彎曲し、端部やや肥厚する。胴部に獅子頭を持つ。4ケ所か？	撫で成形、器外面剥落痕目立つ。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	黒色	19号溝

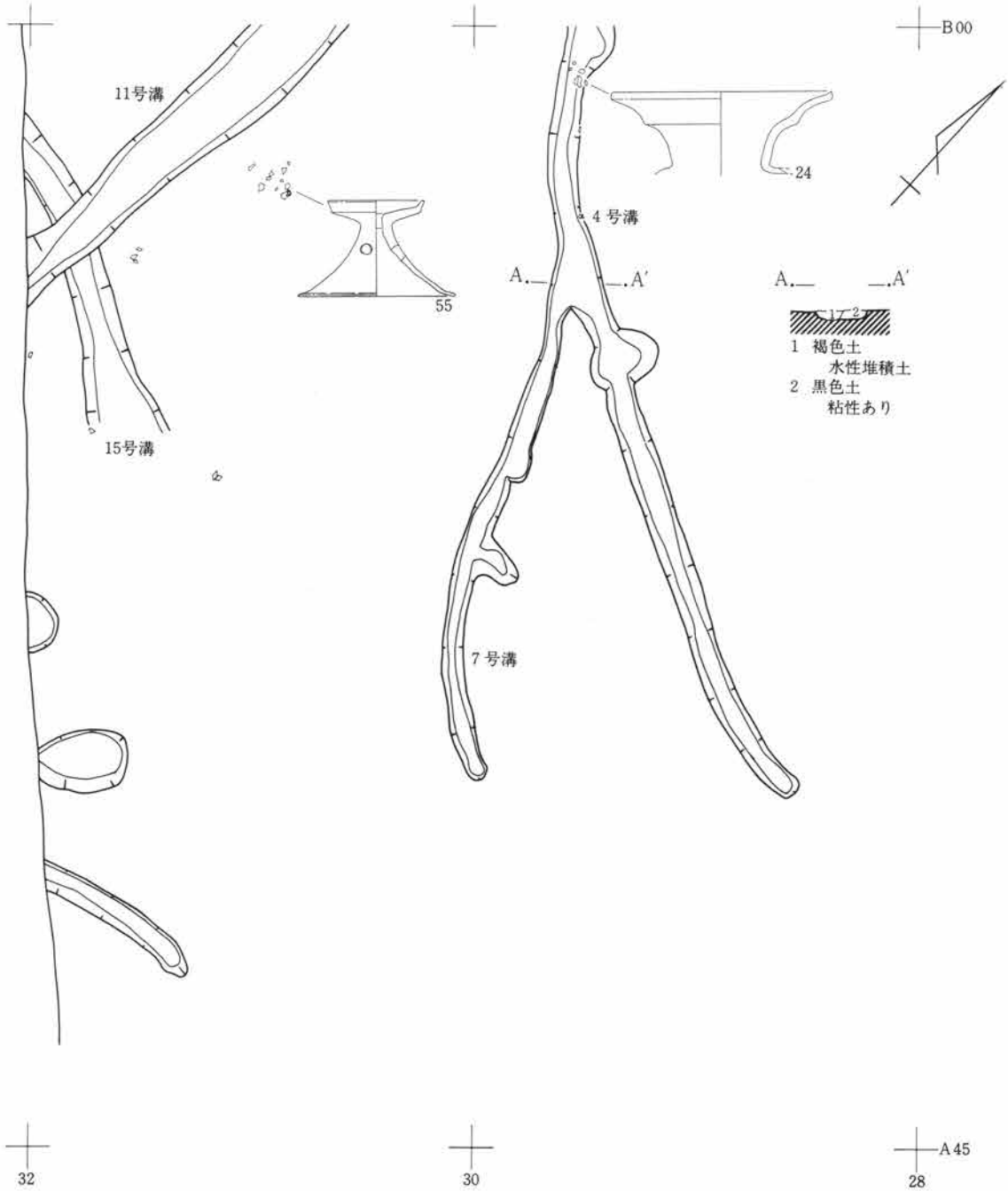
4．グリッド出土遺物

本遺跡内で検出した遺構は前述した通りであるが、各遺構の掘り込み面の確認が困難であったこともあり、これらの遺構に伴わずに出土した遺物も多く、また遺構の掘り込み面が黒色土中に在ったために遺構の検出状況は極めて悪く、このために多くの遺物がグリッド出土として記載せざるを得ない状況である。そのためここでは調査区を縦５グリッド（10m）、横４グリッド（８ｍ）の大きさを基本に１～18の遺構図に区分けして図示することとし（第87図）、出土遺物はそれぞれ区分けしたグリッド毎に取りあげ説明を行うこととする。なお土壙の出土遺物については各土壙の項で説明しているために除いてある。

なお調査区の呼称については東西に走る道路を境にして、南側をⅠ区、北側をⅡ区とする。（第87図）



第87図　遺構割付図

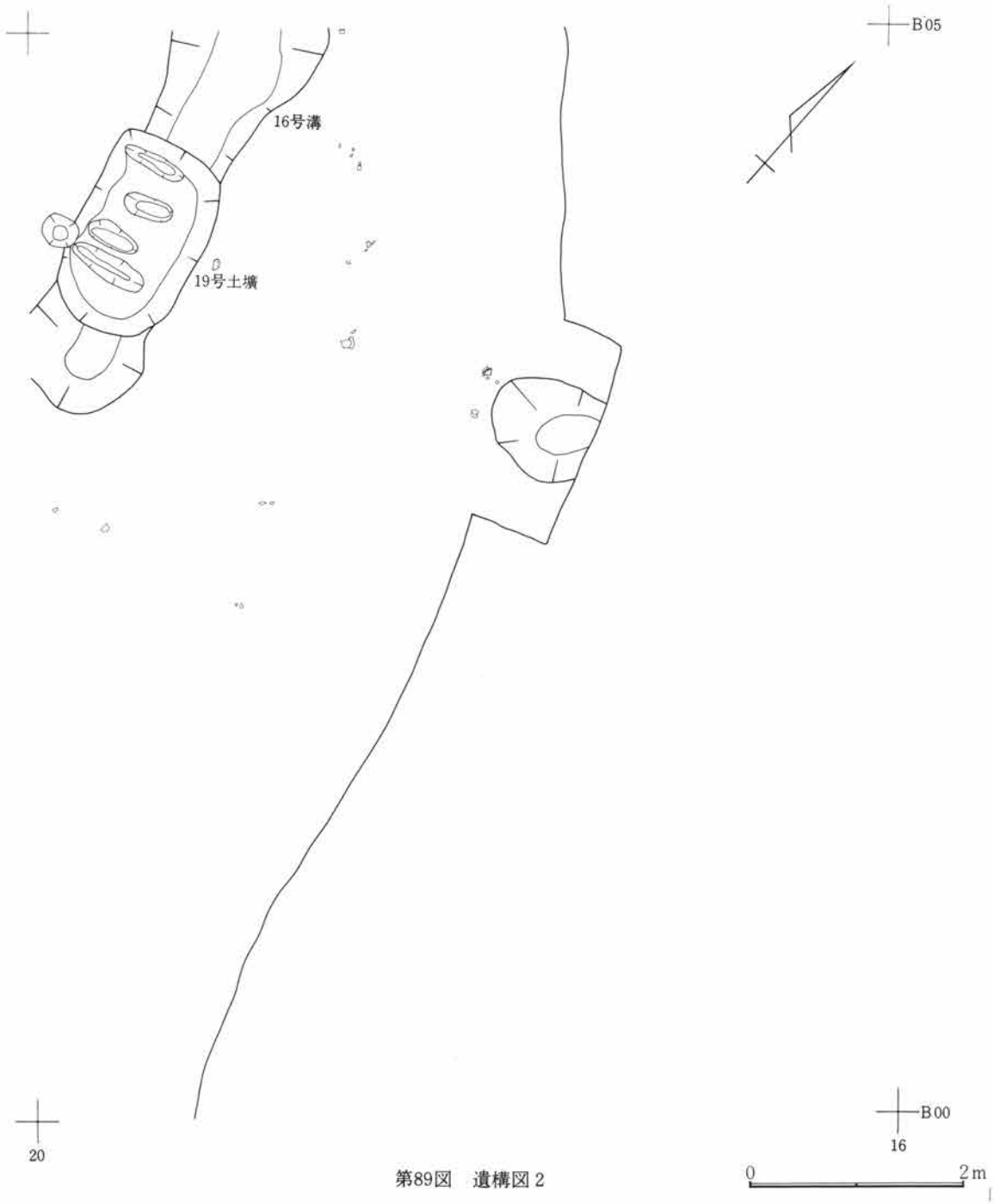


第88図　遺構図1

遺構図1（28～32－A45～00グリッド）（第88図）

Ⅰ区の南部分にあたる。7号溝が4号溝と交わるが新旧関係は不明である。南壁際には15号溝が11号溝と重複している。その他壁際に掛かってピット2、および浅い溝が検出されている。

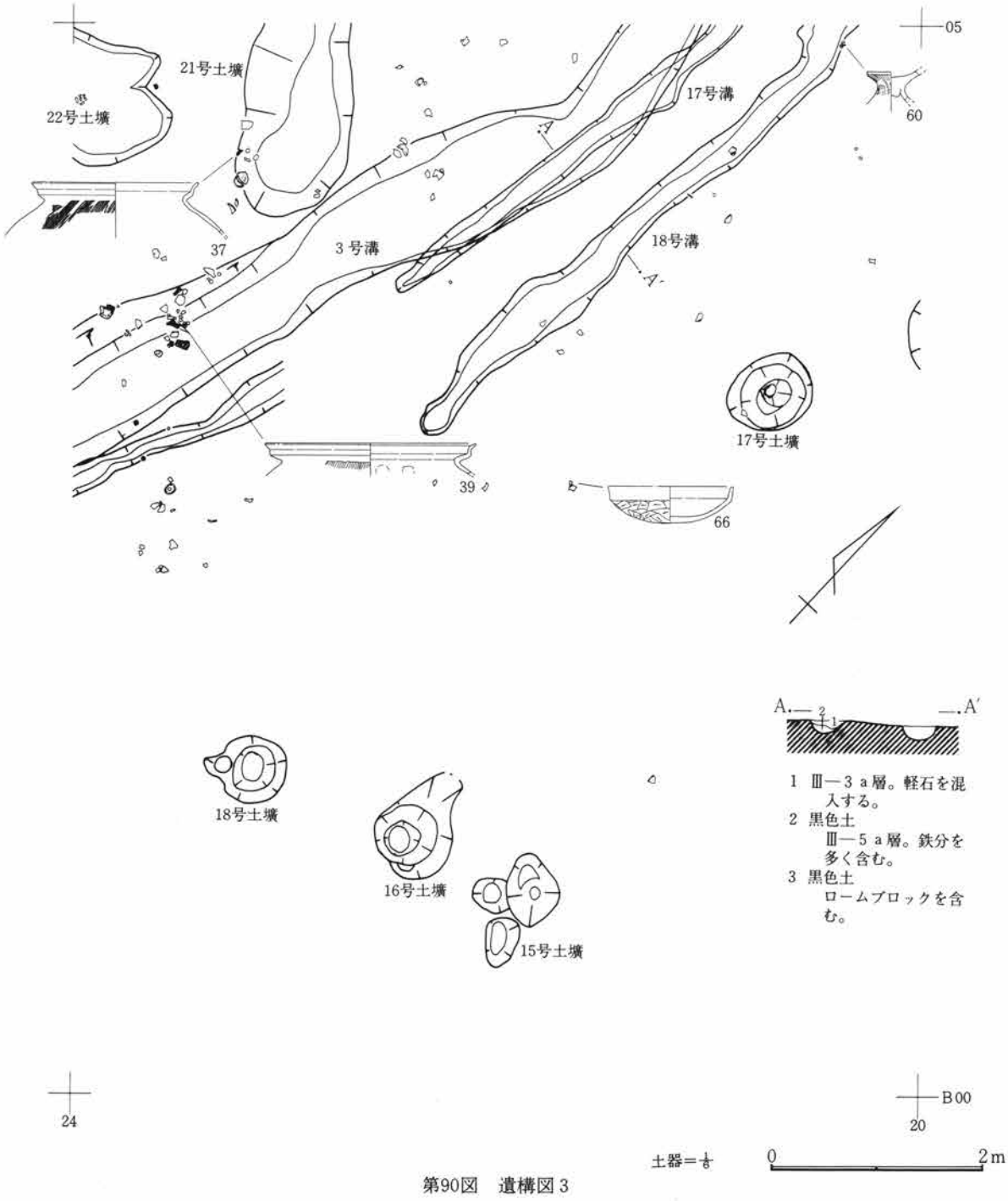
遺物は11号溝の東側で器台が、4号溝の肩部で壺の口縁部片が出土している。その他にはあまり遺物の出土は見られない。



第89図　遺構図２

遺構図２（16～20－B00～05グリッド）（第89図）

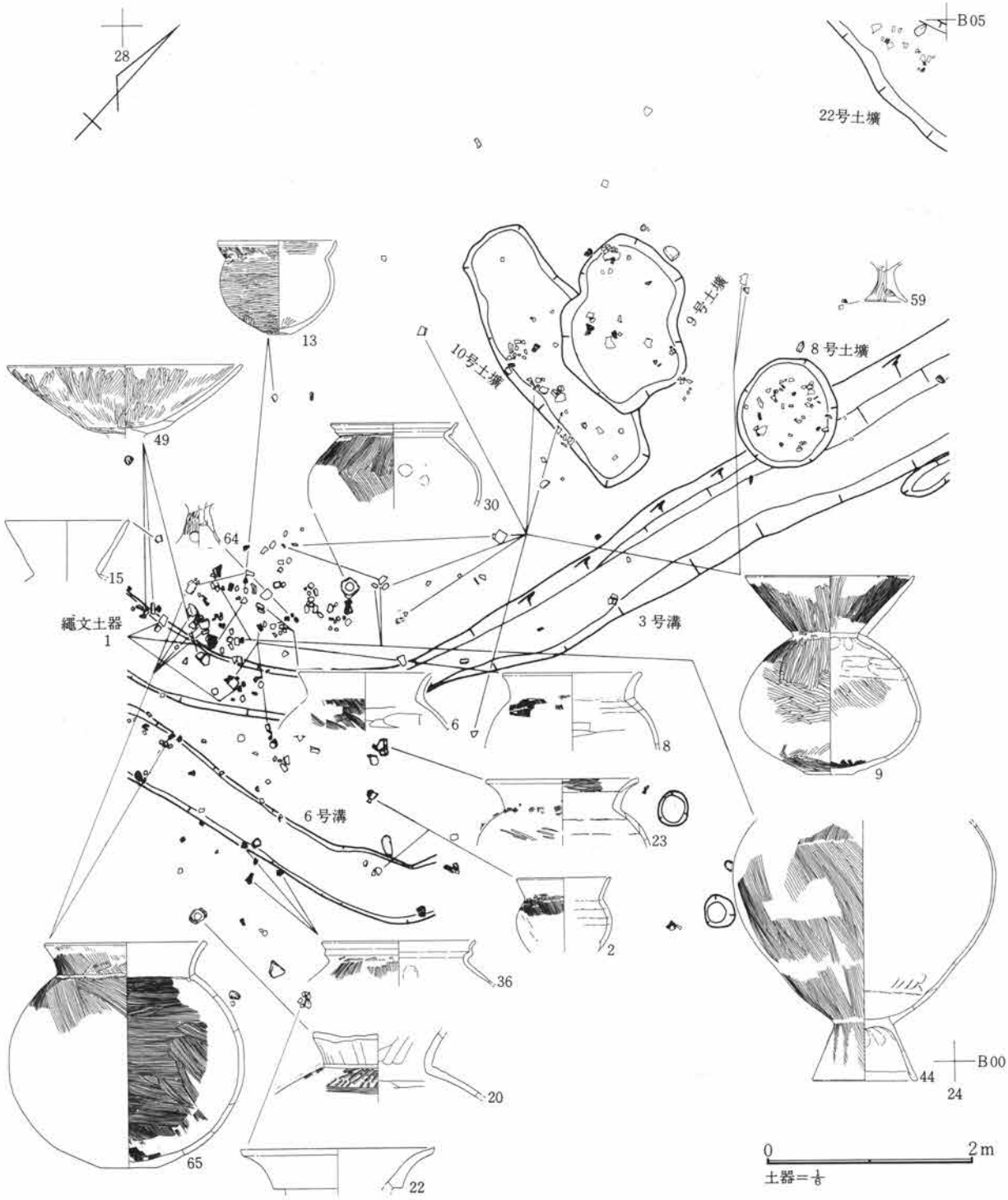
Ⅰ区東壁際で、16号溝と19号土壙が重複している。19号土壙が在ったところに16号溝が切って作られたものである。東壁際に落ち込みが見られる。遺物は破片が若干見られたのみである。



第90図　遺構図3

遺構図3（20～24－B00～05グリッド）（第90図）

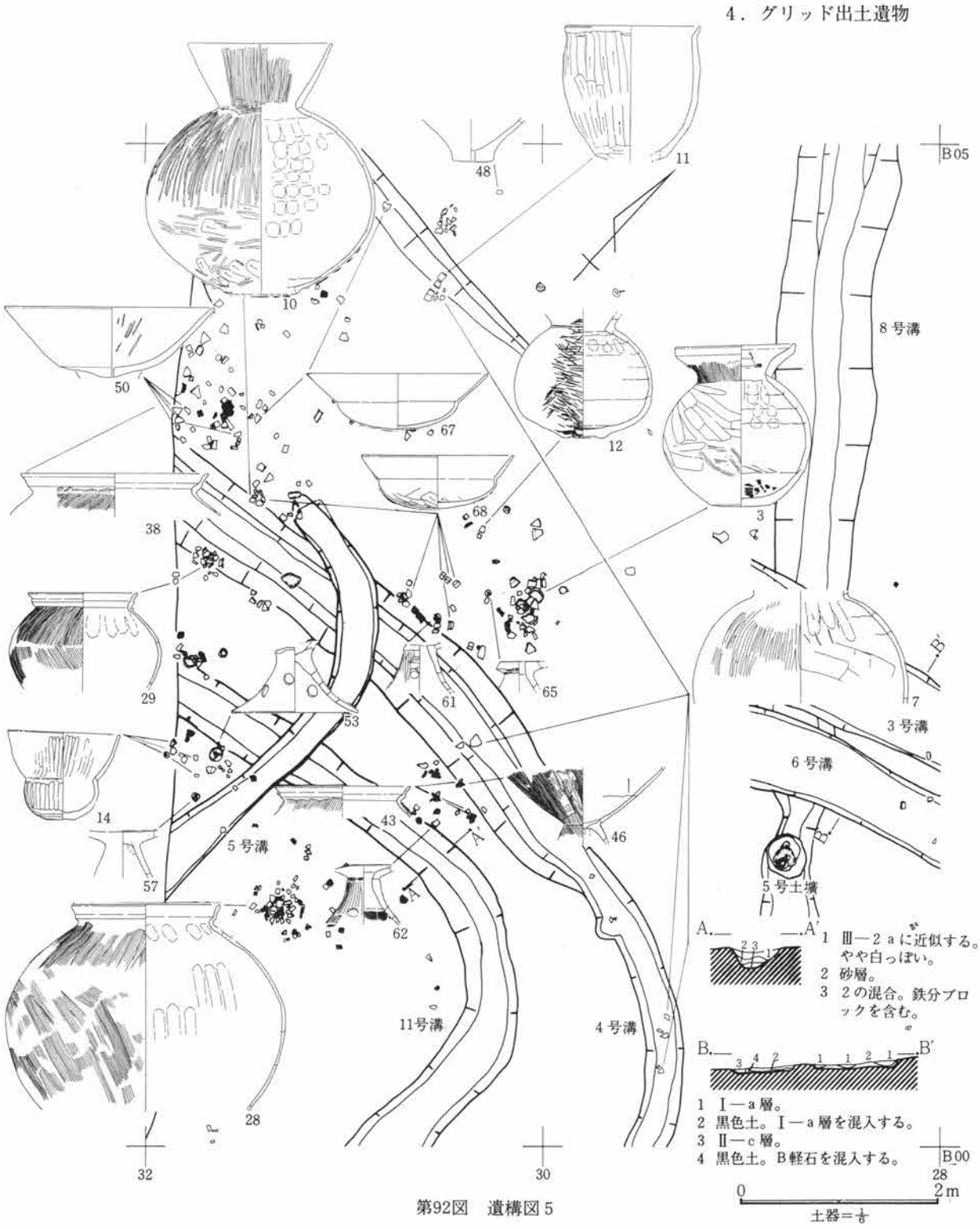
3号溝、17・18号溝が平行してほぼ南北に走る。3号・17号溝は重複しており、あまり明確な掘り方は確認しえなかった。いずれの溝も非常に浅く、かつ幅も不揃いである。恐らく溝の底の部分であって上部を既に掘り下げてしまったものであろうと思われる。3号溝の西には21・22号土壙が近接している。また溝の東側に15～18号土壙が見られるがいずれも規模は小さく出土遺物も見られない。遺物は溝および土壙の周辺からS字甕の口縁部片、17号土壙の南に坏が、さらに18号溝の肩部より高坏の脚部片が出土している。



第91図　遺構図4

遺構図4（24～28－B00～05グリッド）（第91図）

Ⅰ区のほぼ中央部にあたる。3号溝が曲がりながら南北に走るが西端部分は掘り込みが不明瞭となる。本溝はセクションの観察より、下部のみが残ったものと考えられ覆土の状況、地形に沿って走る事などから近世の水路と考えられる。さらに溝に重複して8号土壙が、その西側には9・10号土壙がやはり重なって検出されている。3号溝の下に6号溝が在るが、浅く両端が途切れている。時期的にも新しいものである。遺物は3号溝が曲がる当たりの周辺にかなり集中して出土している。多くは壺、甕の口縁部片であるが、9・13・

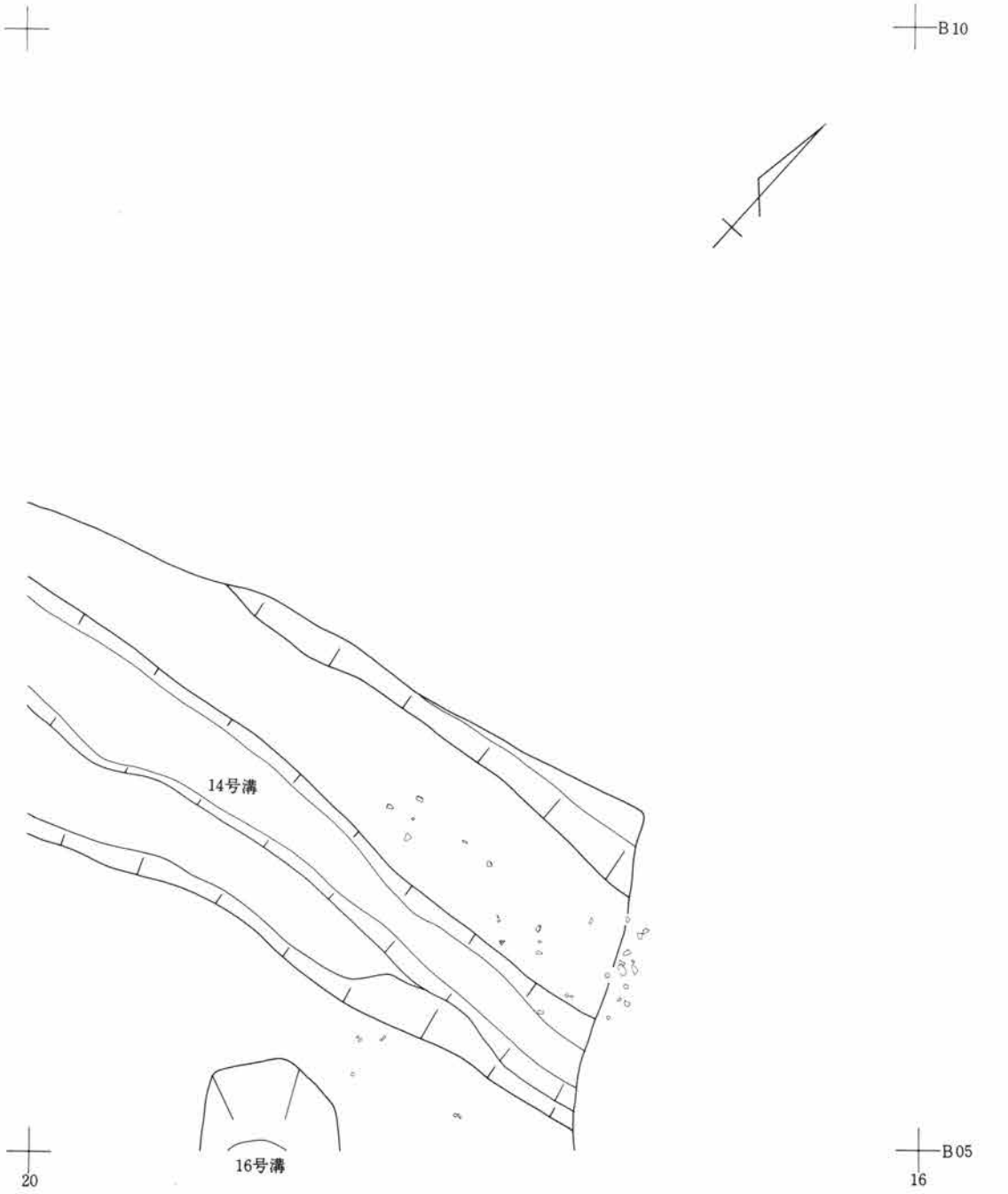


第92図　遺構図5

65は完形に近い。その他高坏、器台片、S字甕等も見られる。遺物はいずれも黒色土中よりの出土ではっきりと遺構に伴うと判断されるものは見られない。

遺構図5（28～32－B00～05グリッド）（第92図）

Ⅰ区の中央西側部分にあたる。3～6・8・11号溝が集中して重なっているためにそれぞれの掘り方等は極めて不明瞭である。1・4号溝は西壁から東に弧を描いてほぼ平行に走り、東西に走る3号溝はその掘り

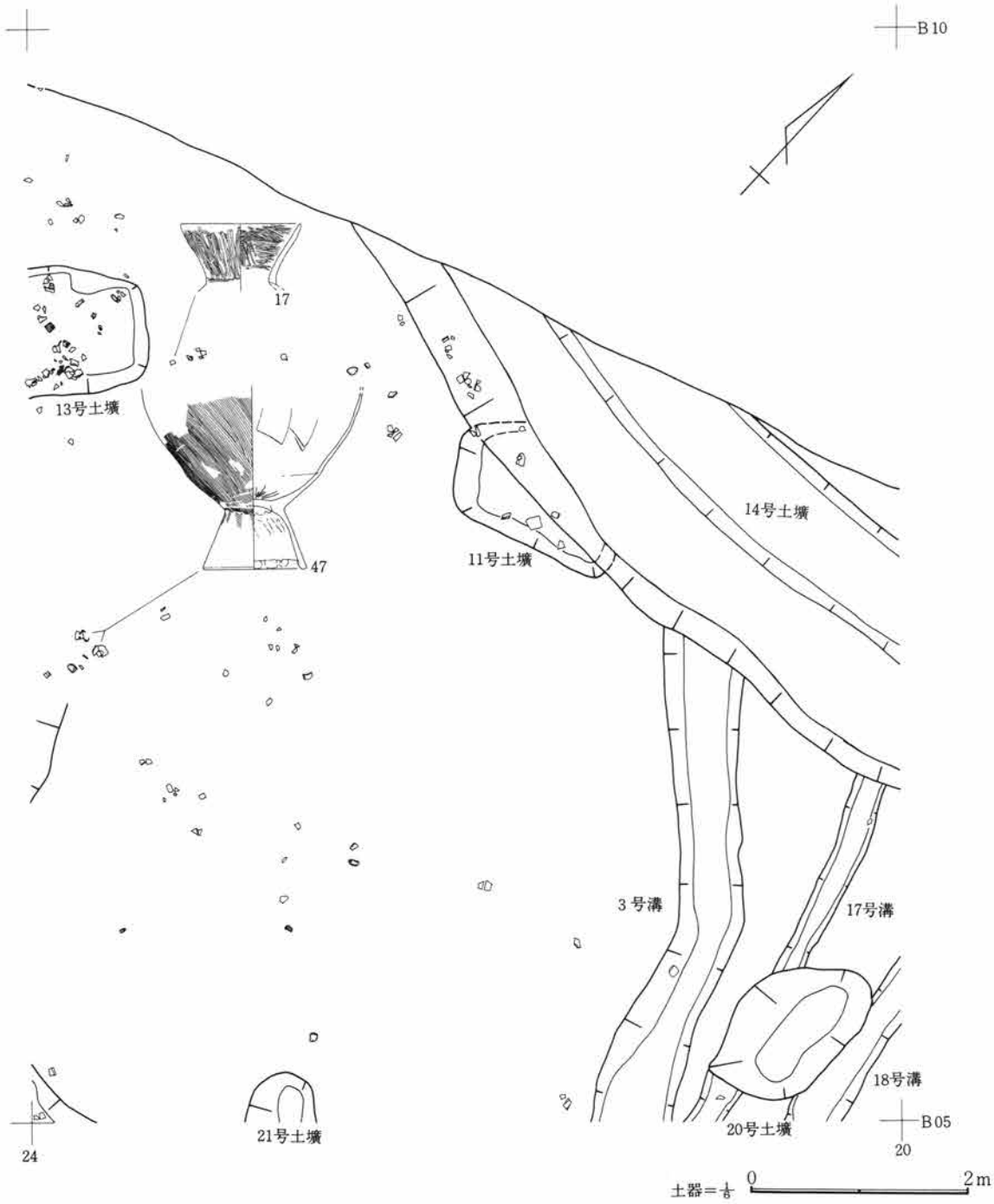


第93図　遺構図6

込み面、形状共に確認できない状況である。5号溝は4・11号溝を横切る形であるが極めて新しいと判断される。遺物は溝の集中する壁際付近に多く見られ、壺、S字甕、器台等が出土している。いずれも黒色土中からの出土で遺構に伴って出土したものは無い。

遺構図6（16～20－B05～10グリッド）（第93図）

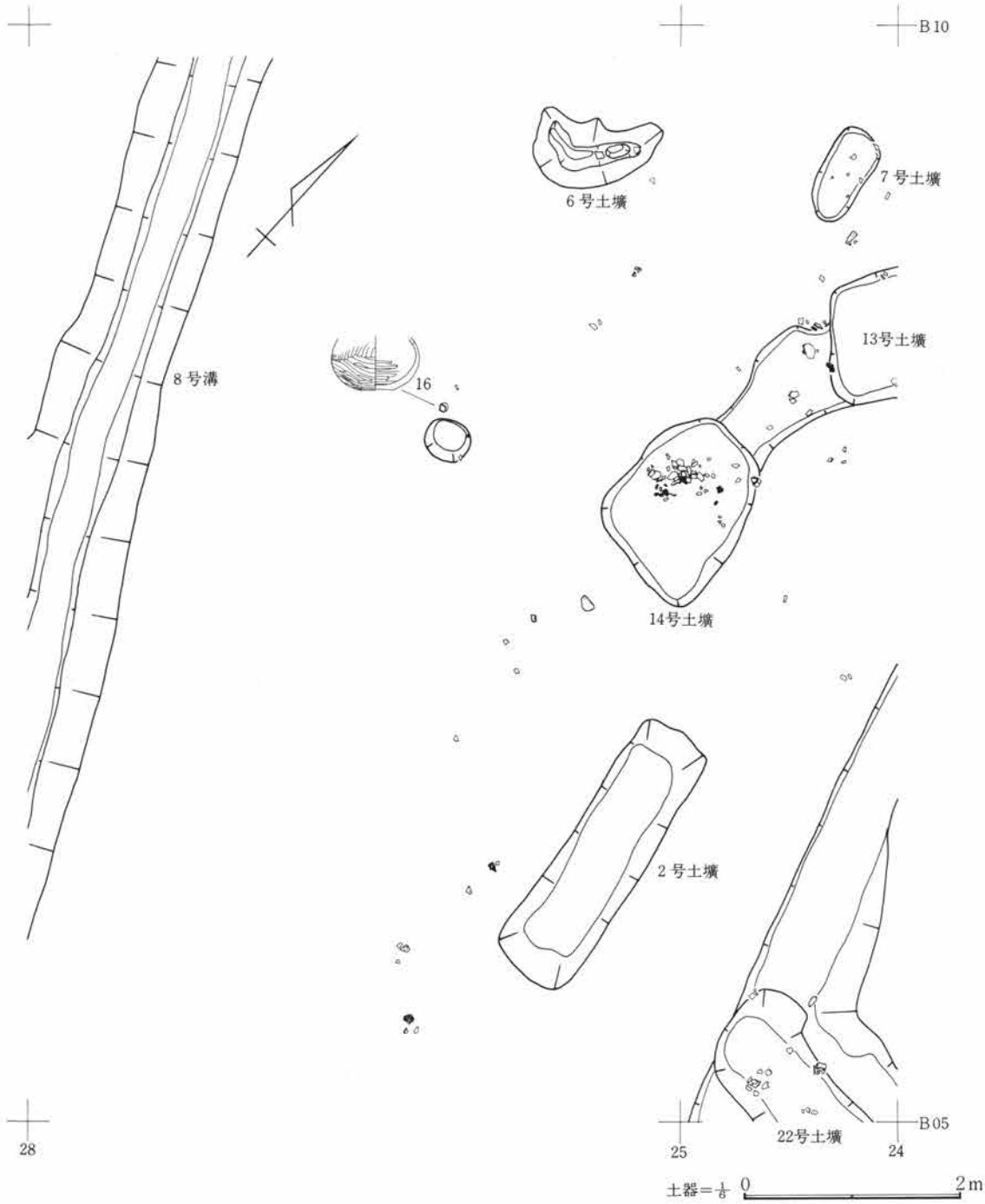
Ⅰ区の北隅にあたる。14号溝が壁に平行して走る。段をもって北に落ち込んでいるがあまり深くない。溝の東側に土器の破片が見られたが量的には少なく、器形を復元し得るようなものは見られなかった。



第94図　遺構図7

遺構図7（20～24－B05～10グリッド）（第94図）

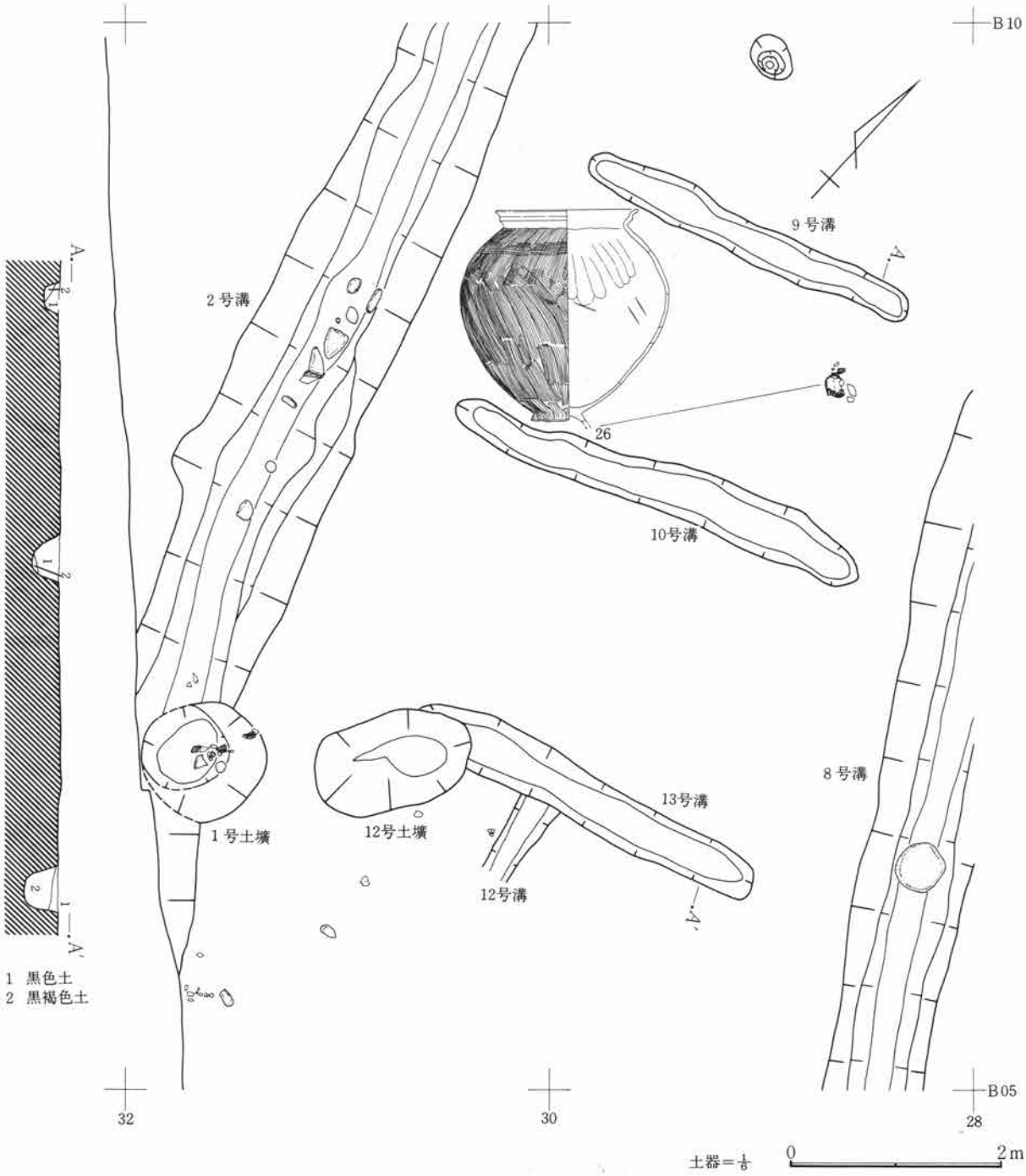
Ⅰ区のやや北東寄りにあたる。北壁際に14号溝があり、これにぶつかる形で3・17・18号溝が平行している。14号溝の縁には11号土壙が掛かっており、また17・18号溝と20号土壙が重複する。北西部には13号土壙が見られる。遺物は破片が散在する程度で、主なものとして壺の口縁部、S字甕の胴下半部片などが出土している。



第95図　遺構図８

遺構図８（24～28－B05～10グリッド）（第95図）

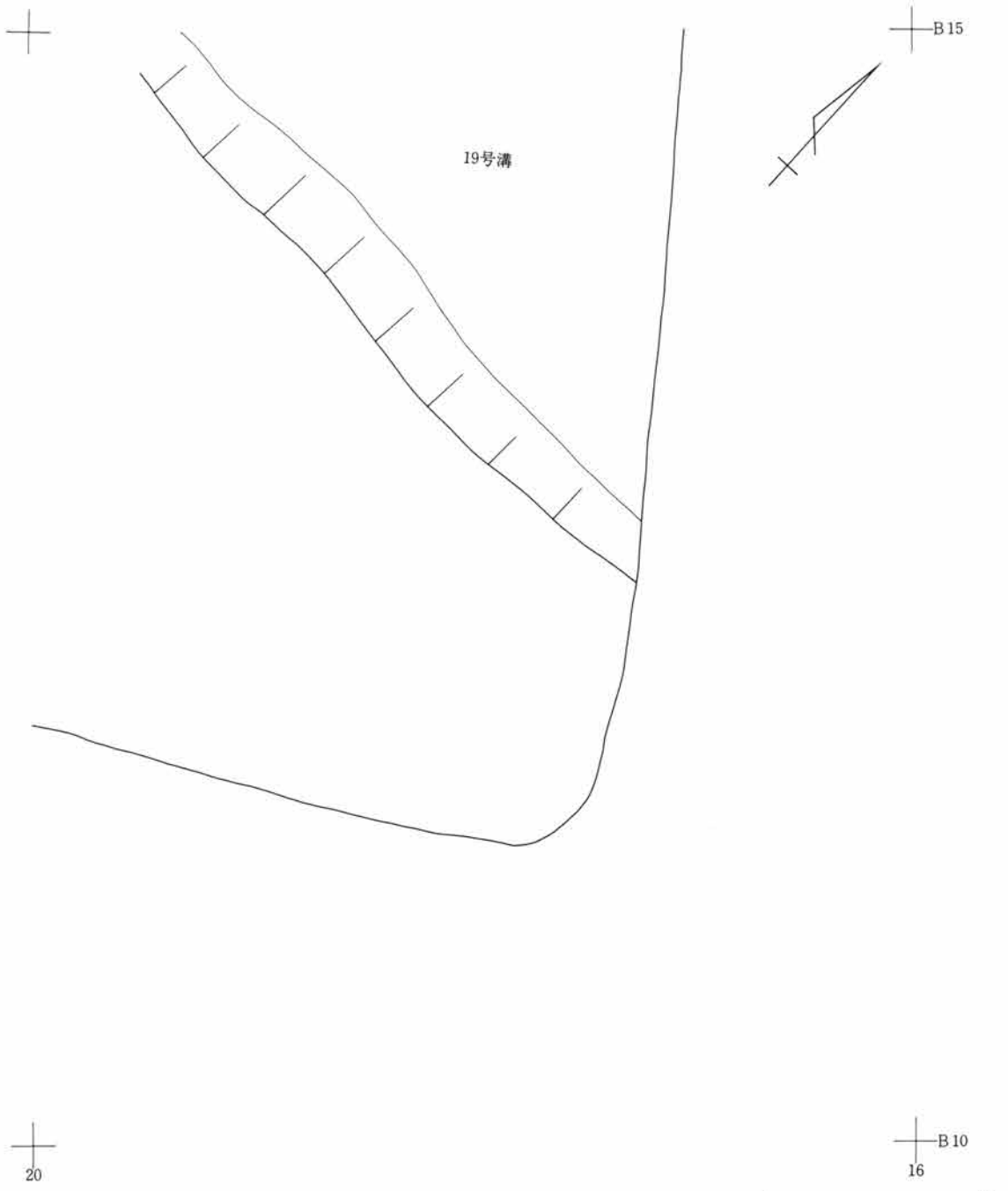
Ⅰ区の中央北より西部にあたる。８号溝が北西から南東に走る。断面は下部が「U」字状で上部が外へ開く。溝の北と南におけるレベル差は殆ど見られない。その東側には２・６・７・13・14号土壙が見られる。６・７号土壙は掘り方もはっきりせず、人為的な土壙とは考えにくい。遺物はこれらの土壙周辺に僅かに見られたに過ぎず、主なものとしては小型壺の胴部が出土している。



第96図　遺構図９

遺構図９（28～32－B05～10グリッド）（第96図）

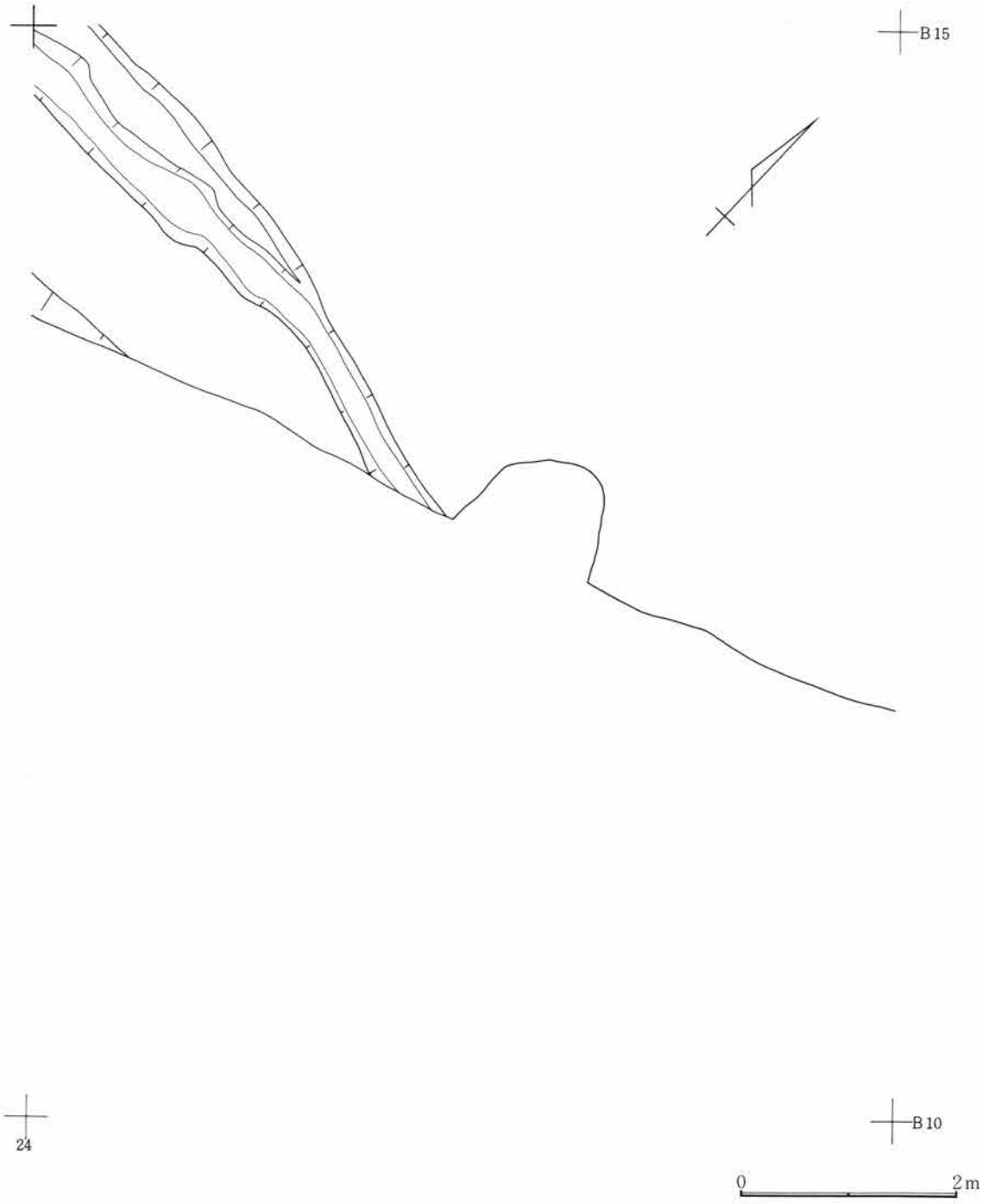
Ⅰ区西側部にあたる。２号溝と８号溝が平行して走りその間に９・10・13号溝が平行して見られるが、いずれも長さ４ｍ程度で、幅は約50㎝である。いずれも正確な掘り込み面はつかめなかった。出土遺物は13号溝中よりＳ字甕の口縁部片が見られるのみで他には無い。西壁際に１号土壙が在り、２号溝と重複する。その東側に12号土壙があるが時期的に新しいと考えられる。２・８号溝の中には多くの礫が出土しており、特に８号溝中には偏平な石が底面に置かれた状態で出土している。遺物は殆ど見られなかったが、台部を欠くＳ字甕が１点出土している。



第97図　遺構図10

遺構図10（16～20－B10～15グリッド）（第97図）

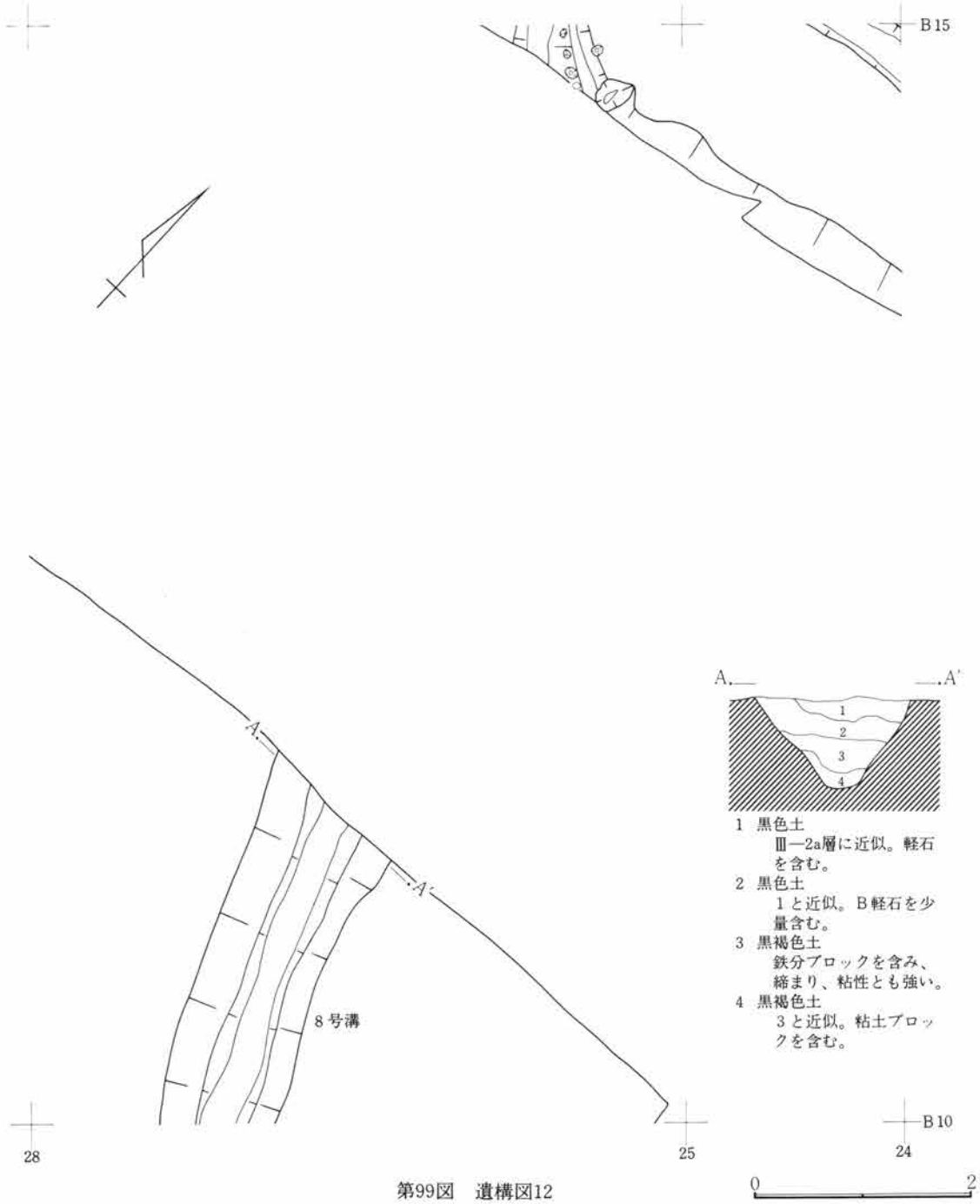
Ⅱ区の東隅にあたる。19号溝が北に向かって緩やかに落ち込んでいる。他に遺構は検出されず、出土遺物も見られない。



第98図　遺構図11

遺構図11（20～24－B10～15グリッド）（第98図）

Ⅱ区の南壁寄りにあたる。東西に走る溝状の遺構が見られる外には遺構は検出されていない。この溝は掘り込みがやや不明瞭である。



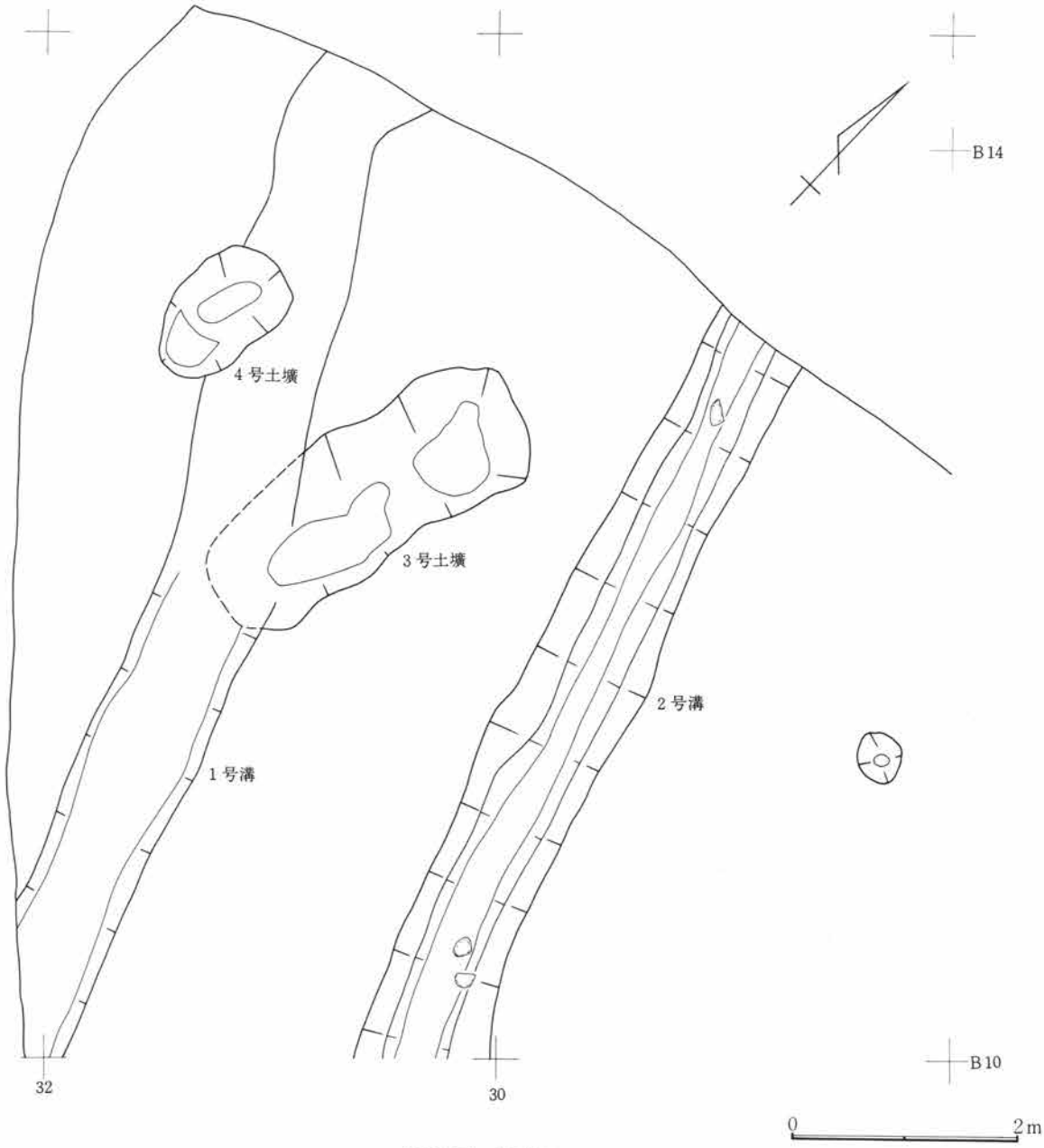
第99図　遺構図12

遺構図12（24～28－B10～15グリッド）（第99図）

中央に道路が東西に走る。南側で検出された８号溝は道路下部分については未調査であるが、北側の調査区に北側部分が検出されている。溝の覆土上層には、Ｂ軽石の堆積が認められている。周辺に出土遺物は殆ど見られない。

遺構図13（28～32－B10～15グリッド）（第100図）

Ⅰ区の西隅部分にあたる。１・２号溝が平行して南北に走るが、１号溝は覆土中にＢ軽石がレンズ状に堆積する。また途中で掘り方が不明瞭となり、その部分に３・４号土壙が位置する。３号土壙は形状、覆土の

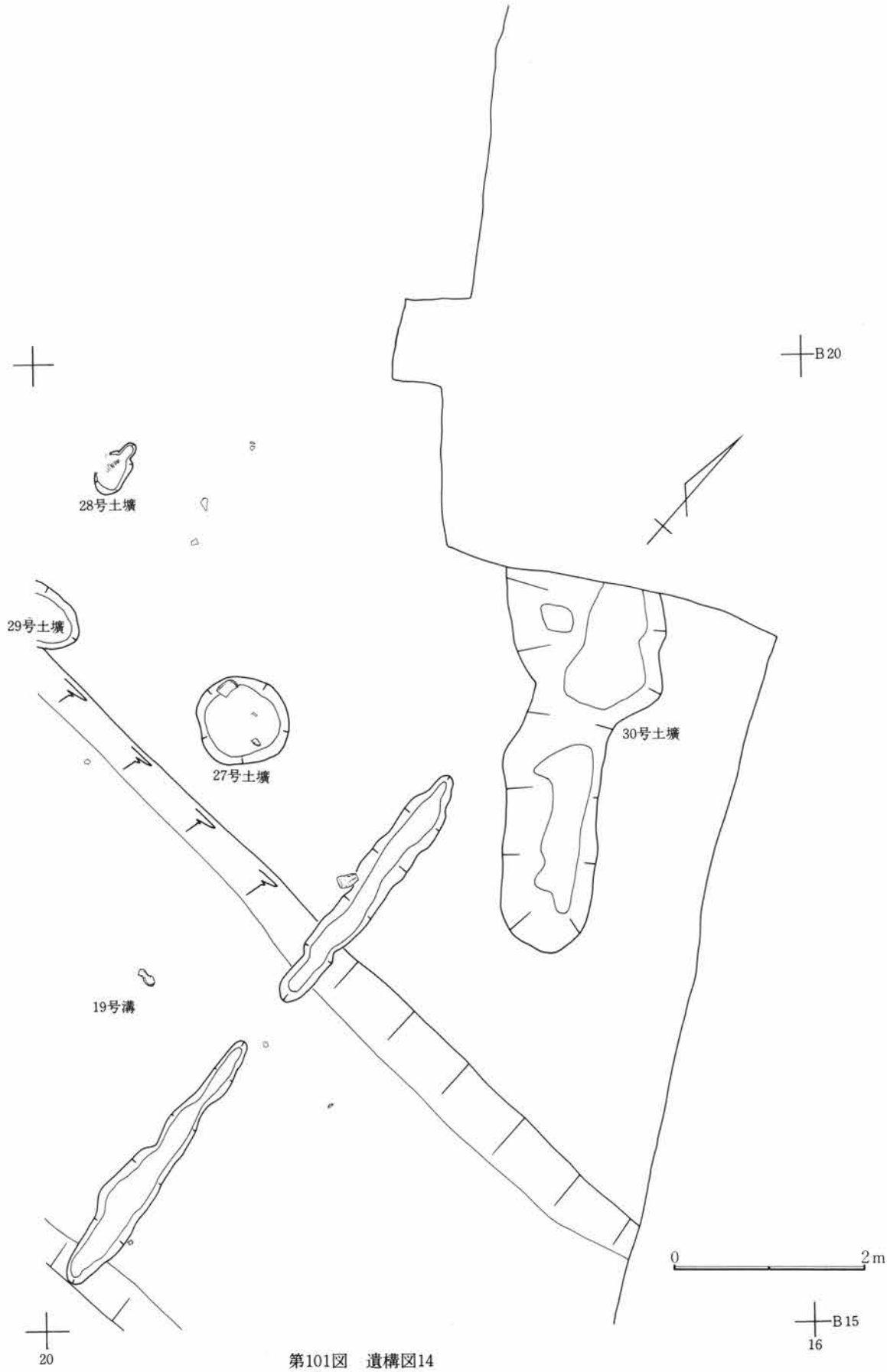


第100図　遺構図13

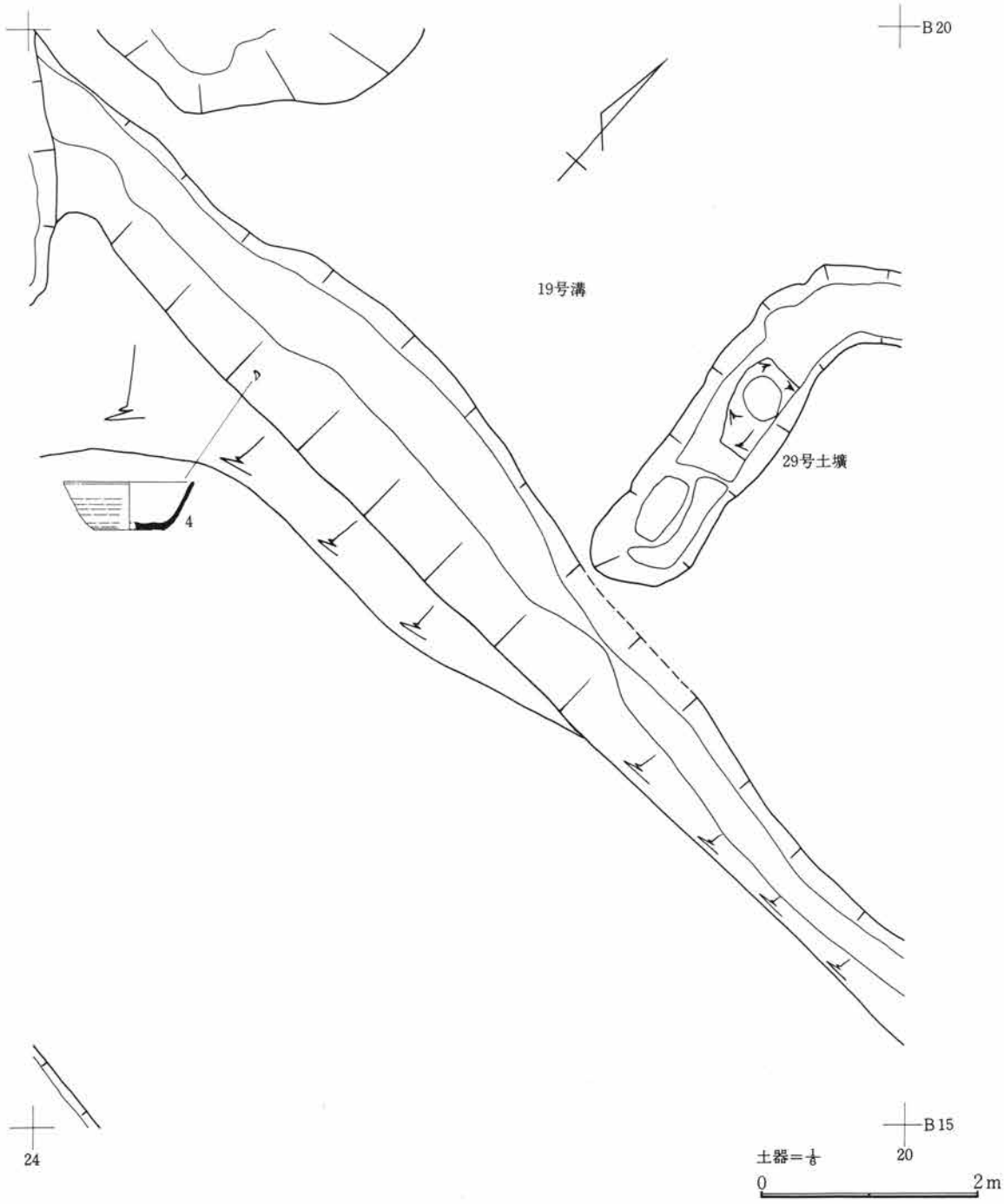
様子などから見て人為的なものとは考え難い。2号溝は断面「U」字状で上幅がやや広くなる。中位に段を有している。土師器の坏が1点出土した他には出土遺物は殆ど見られない。周辺部にも出土遺物は殆ど見られず、破片が僅かに見られた程度である。

遺構図14（16～20－B15～21グリッド）（第101図）

Ⅱ区の東壁際にあたる。19号溝が東西に走るが落ち込みの様子は緩やかで底は平坦である。この溝を横断するように幅50㎝、長さ8ｍ程の溝状の落ち込みが見られるが新しいものである。また19号溝の北側には27～30号土壙が見られる。30号土壙は大形で不定形を呈す。他はいずれも径1ｍ以内である。28号土壙からは馬の歯が出土している。



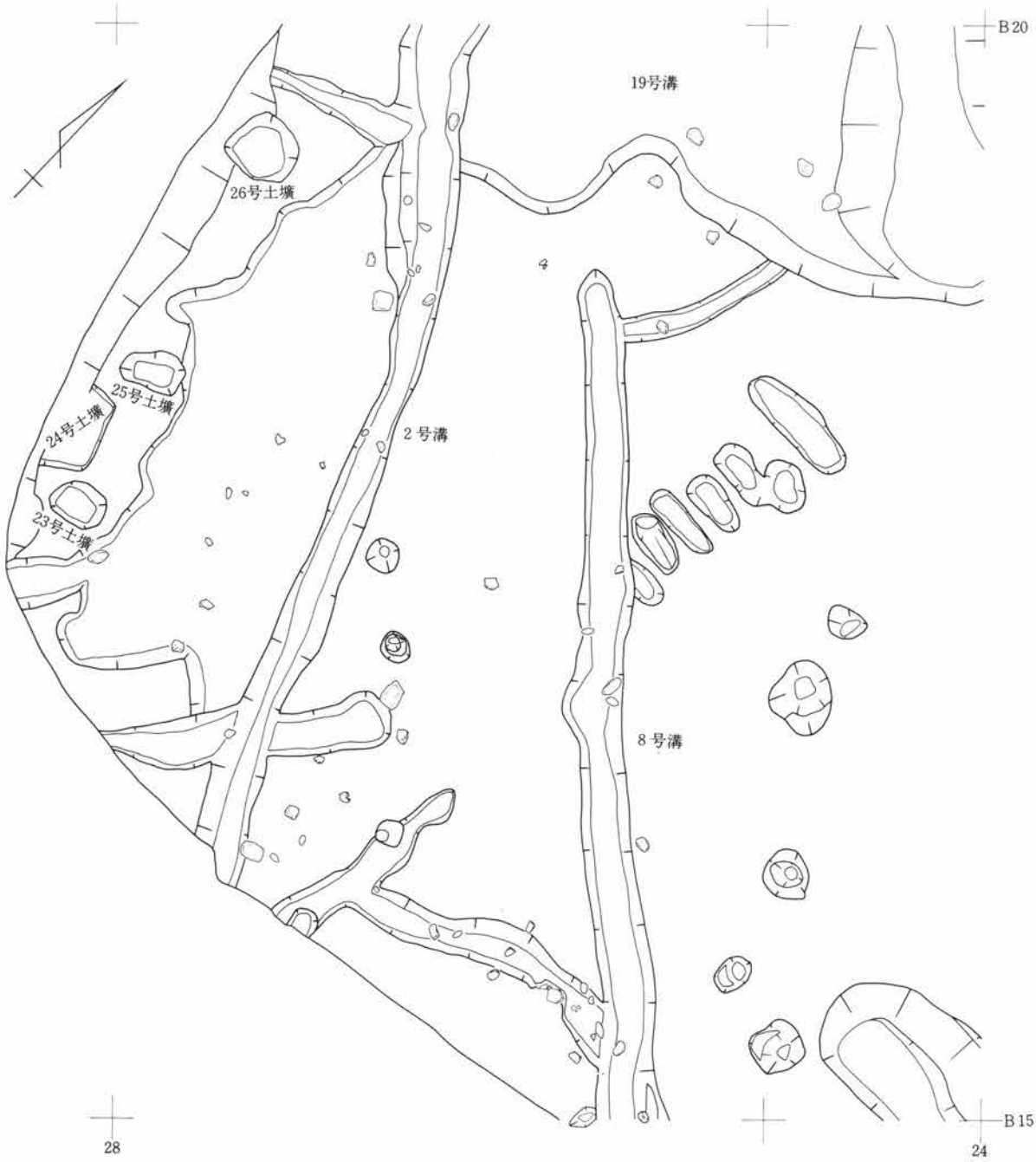
第101図　遺構図14



第102図　遺構図15

遺構図15（20～24－B15～20グリッド）（第102図）

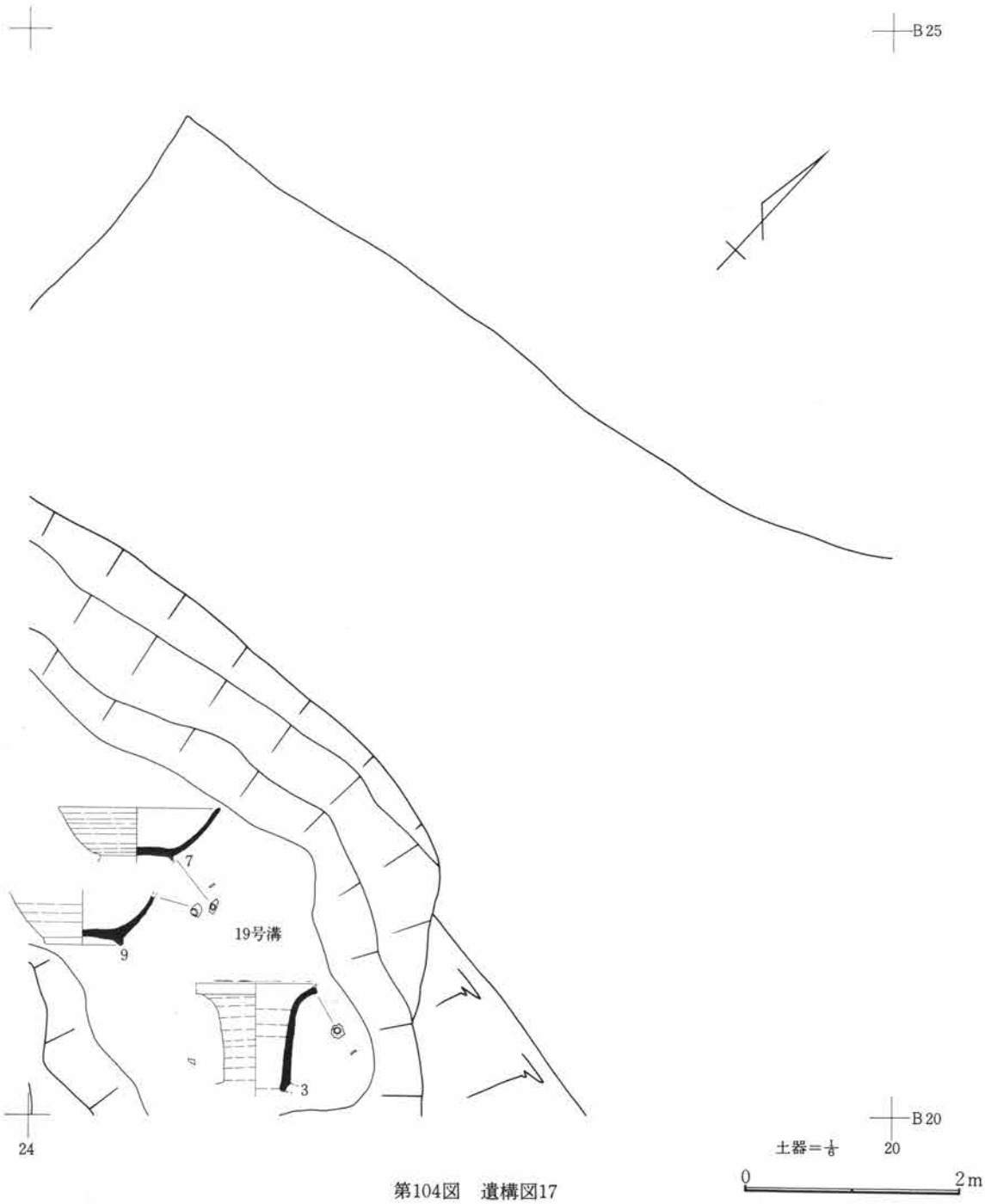
Ⅱ区のほぼ中央にあたる。19号溝が東西に走るが、その落ち込みは殆ど確認されない状況である。南側の肩部分に沿って落ち込みが続くが19号溝の一部なのか、極めて不明瞭である。29号土壙が溝に重複するが形状、掘り方共に不自然である。遺物は少なく、溝の上端付近に須恵器坏の破片が出土している。



第103図　遺構図16

遺構図16（24～28－B15～20グリッド）（第103図）

Ⅱ区の西端部分にあたる。南から続く２・８号溝が延びる。土壙は壁際に23～26号土壙が見られる他、グリッド中央の８号溝の北側に並んで7基の土壙群が検出されている。いずれの覆土も砂利質の灰色土である。その他性格不明の落ち込みや、溝状の遺構が検出され、かなり荒れた状況を示している。また北側には19号溝に向かって緩やかに下る部分が認められる。土器は余り多くは検出されず、礫の出土が目立つ。



第104図　遺構図17

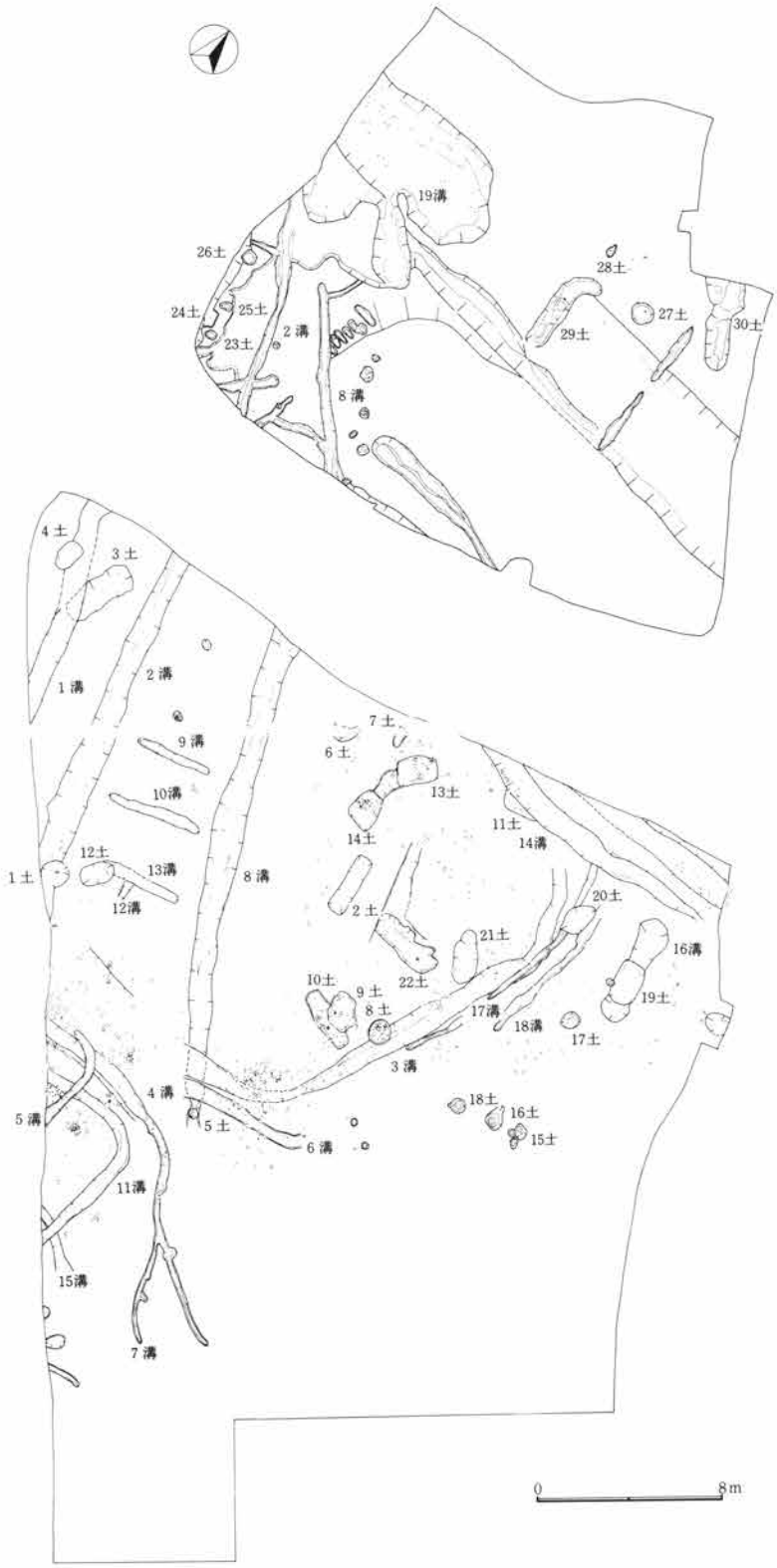
遺構図17（20～24－B20～25グリッド）（第104図）

Ⅱ区の北端にあたる。19号溝の北側肩部分が見られる。2～3段になって落ち込んでいる。底の部分は東側に比べれば下がっているが、溝の両上端ははっきりと捉えられず、かなり攪乱した状況を示している。溝の底近くより須恵器の坏、長頸壺などが出土しているがいずれも破片で、かなり摩滅しているものも見られる。

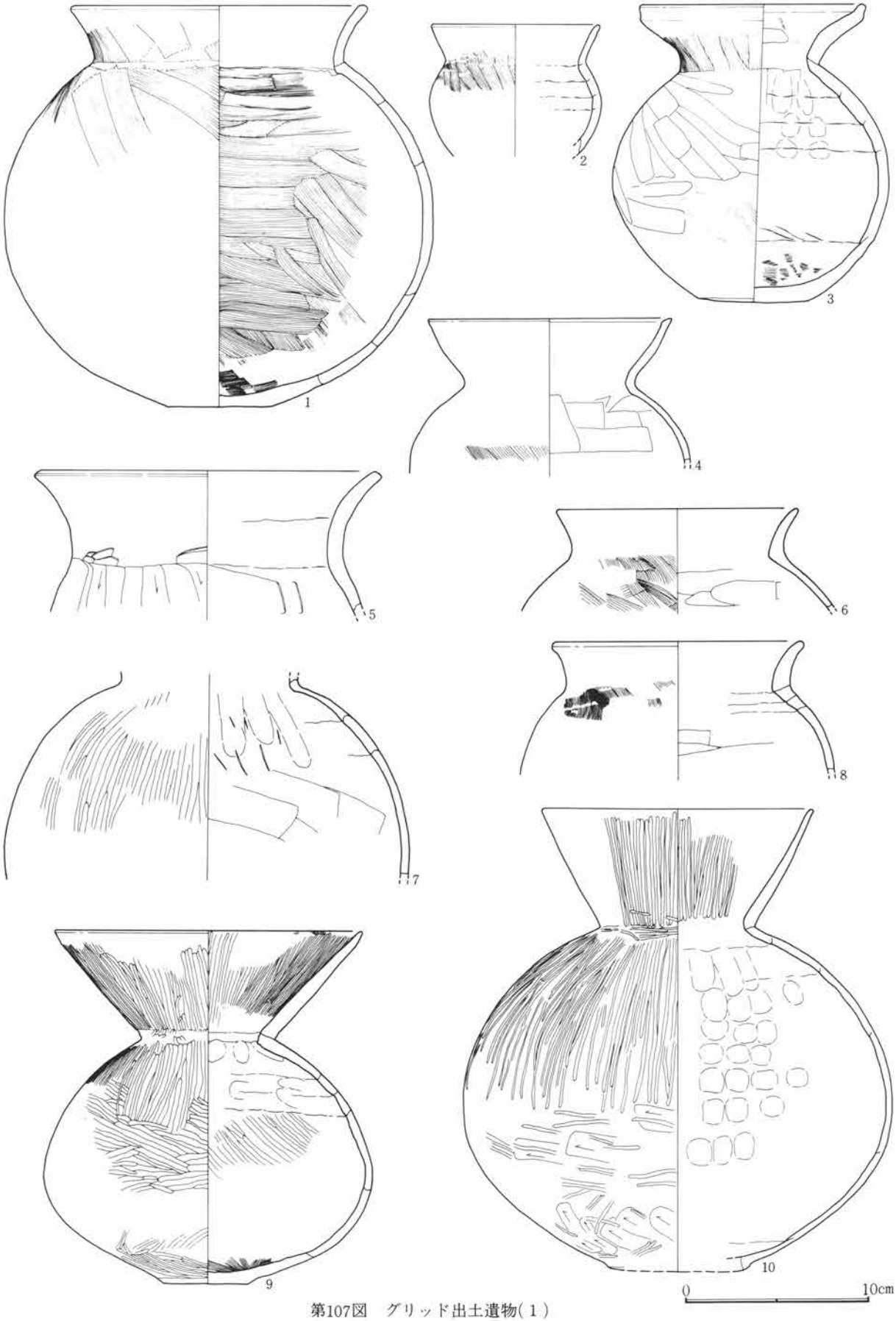
第105図　遺構図18

遺構図18（24～28－B20～25グリッド）（第105図）

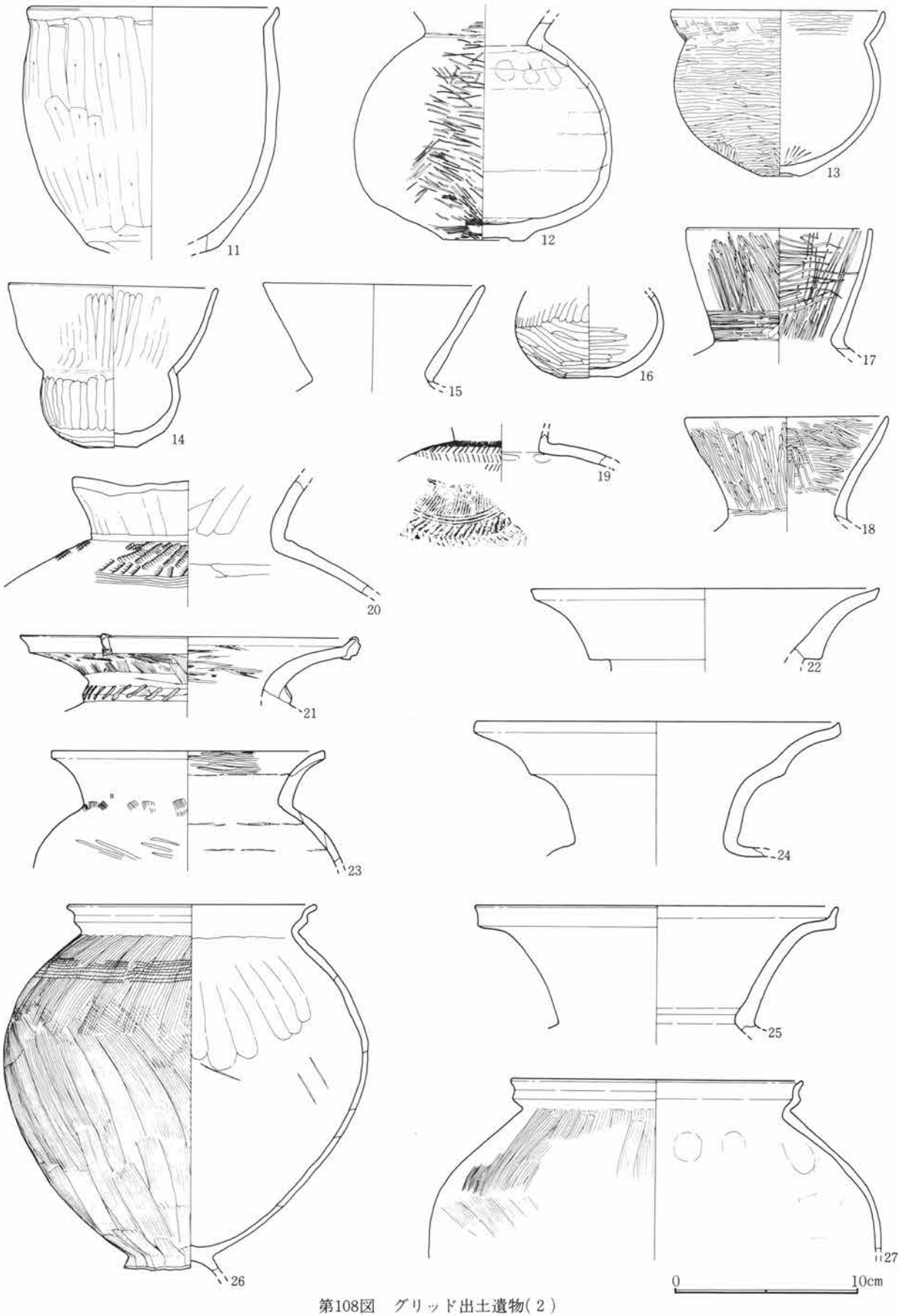
Ⅱ区の西壁寄りにあたり、19号溝が壁に接する部分である。溝の上端は両側へ不自然に広がり、はっきりとしなくなるが、掘り込み自体はやや深くなる。覆土中からは多くの礫に混じり須恵器の坏類が出土しているが、かなり摩滅しており底部片が多い。


19溝
26土
28土
24土
25土
2溝
27土
30土
23土
29土
8溝
4土
3土
1溝
2溝
7土
9溝
6土
13土
10溝
11土
14土
14溝
1土
12土
13溝
8溝
20土
12溝
2土
21土
16溝
10土
9土
22土
19土
8土
17溝
18溝
17土
3溝
4溝
18土
16土
5溝
5土
15土
6溝
11溝
15溝
7溝
0
8m

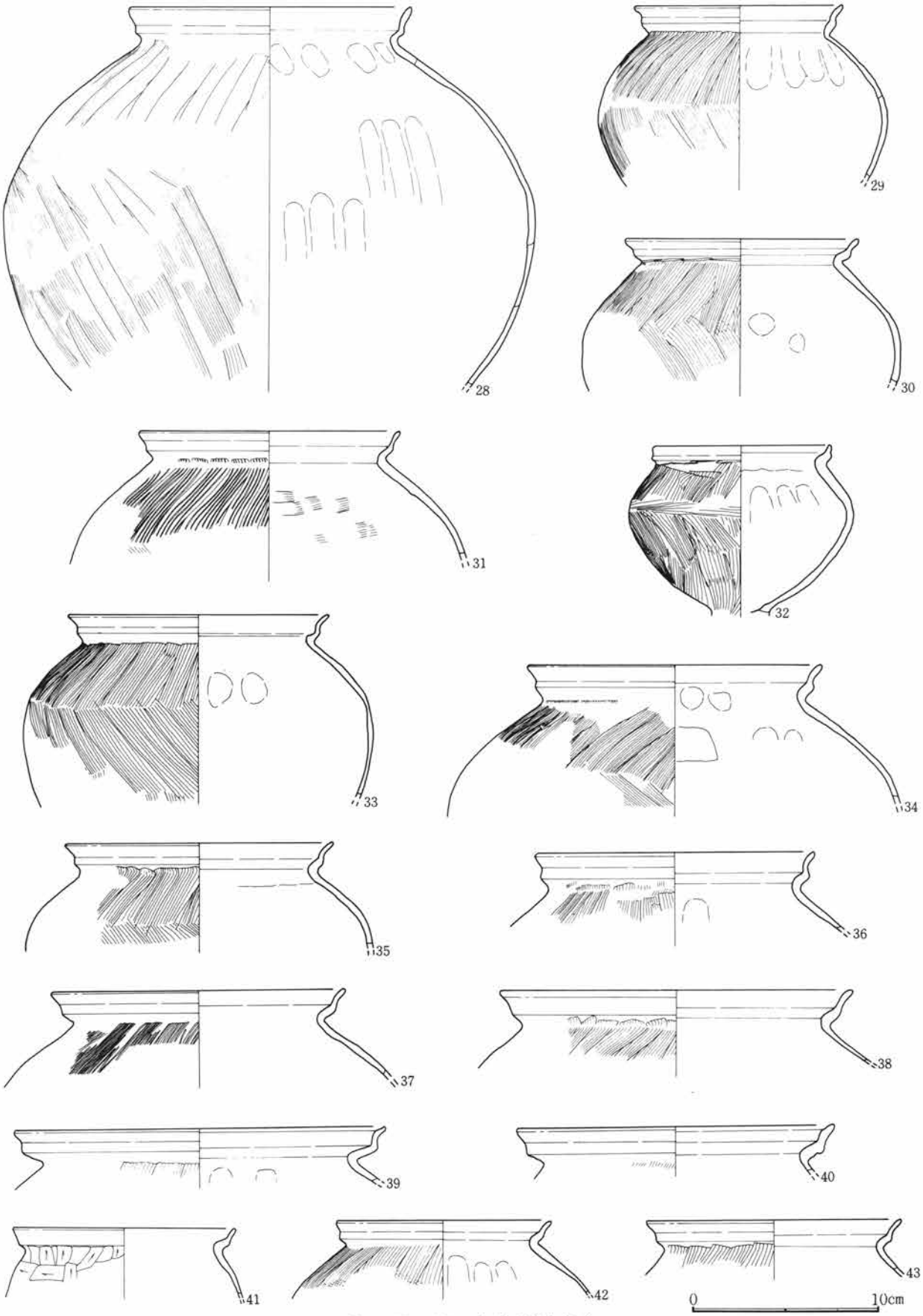
第106図　遺物分布図



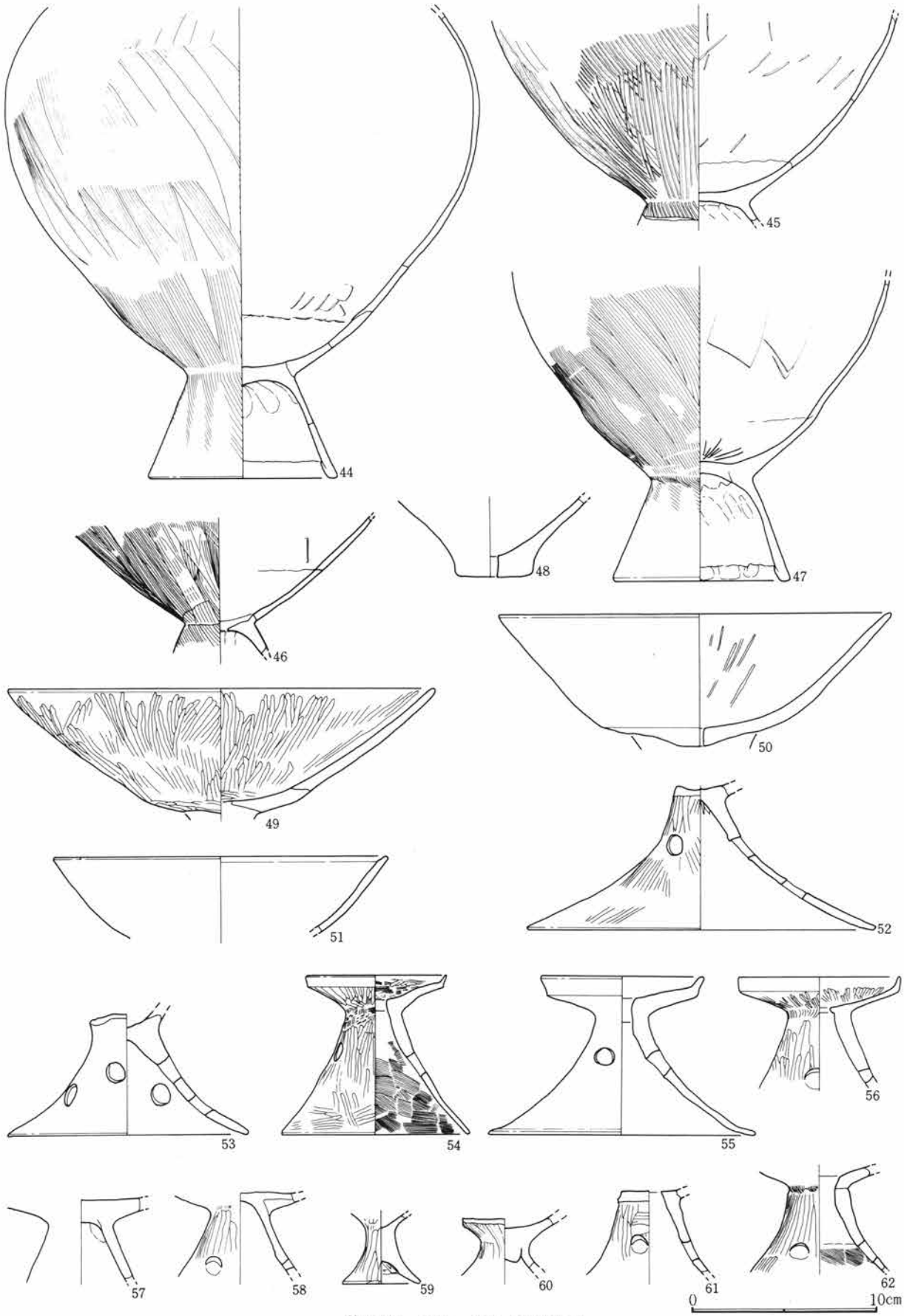
第107図　グリッド出土遺物(１)



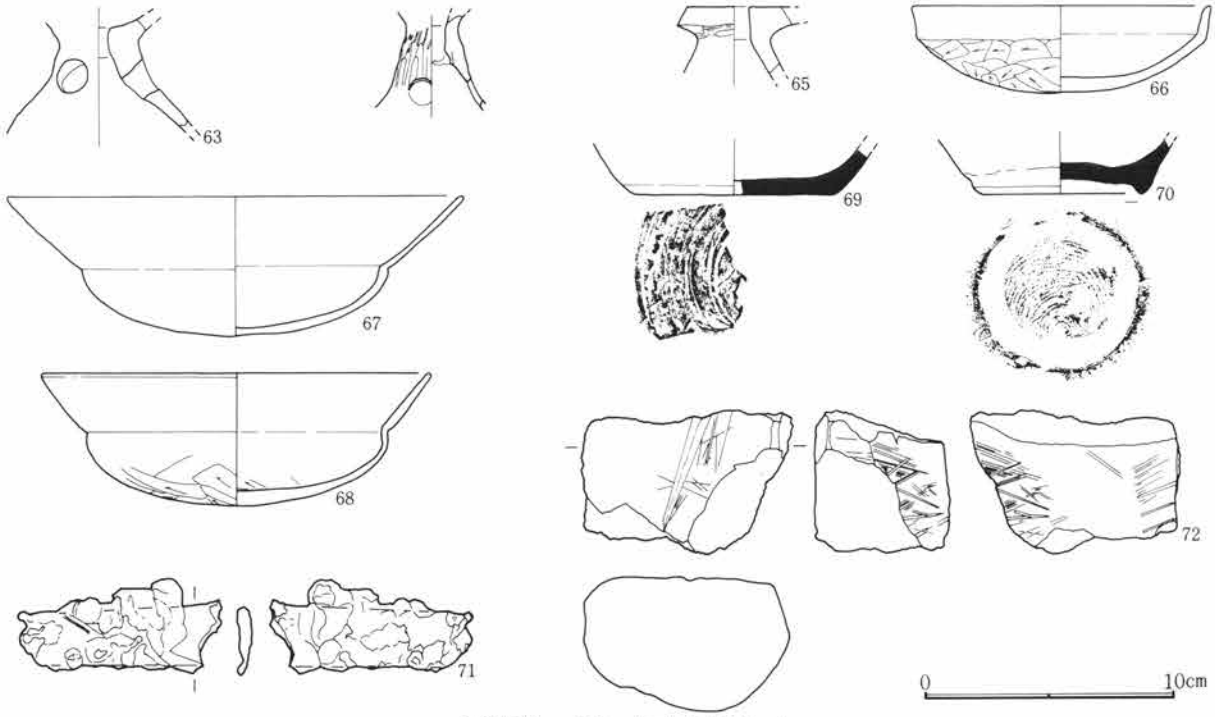
第108図　グリッド出土遺物(２)



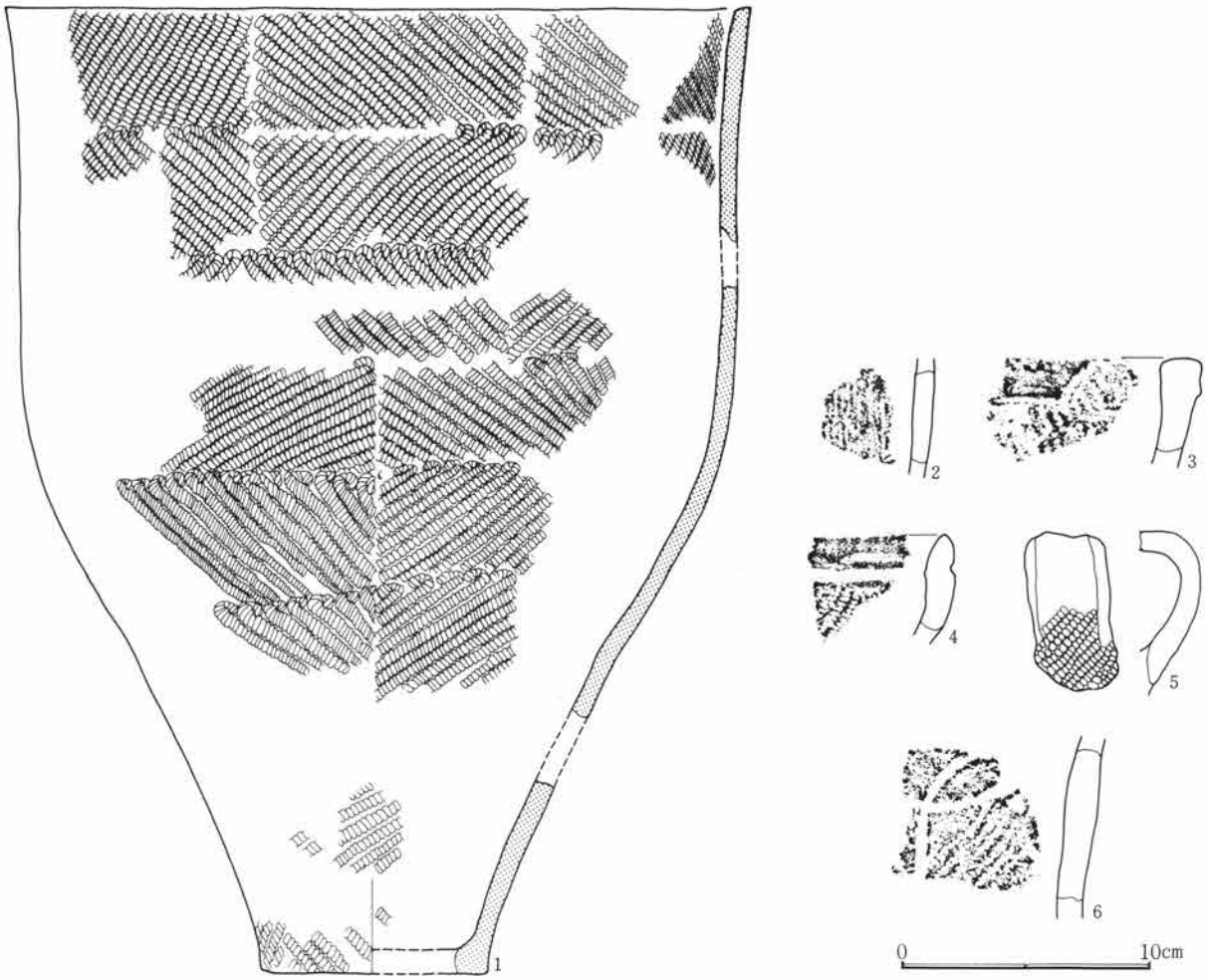
第109図　グリッド出土遺物(３)



第110図　グリッド出土遺物(４)



第111図　グリッド出土遺物(５)



第112図　グリッド出土縄文土器

表 35　グリッド遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	甕	口径 16.0 器高 21.5 底径 5.5	胴部丸みを持って膨み、中位に最大径を持つ。口縁部はやや外反する。平底。	口縁部　端部横撫で。 外面　肩部刷毛目、胴下半部撫で。 内面　刷毛目。	砂粒・石粒多量に含む 普通	灰黄および黒褐色	
2	小型壺	口 (9.2) 高 —— 底 ——	胴中位で丸く膨み、頸部でゆるく「く」の字にくびれる。口縁部は外傾する。	口縁部　横撫で。 外面　頸部から肩部刷毛目以下篦撫で。 内面　指撫で、接合痕明瞭。	砂粒・石粒少量含む 良	橙色	胴部に黒斑
3	壺	口 12.2 高 6.5 底 16.0	球形の胴部を呈し、口縁部外反する。端部は直気味に立ちやや外反する。	口縁部　横撫で。 外面　頸部刷毛目、胴部篦撫で。 内面　下部刷毛目、中、上部篦撫で。	細砂粒・石粒を含む 良	にぶい黄橙色	完形 胴下部に黒斑
4	甕	口 (13.2) 高 —— 底 ——	肩部丸みを持つ。頸部「く」の字に折れ、口縁部内彎して開く。口唇部平らで内側に張る。	口縁部　横撫で。 外面　肩部横撫で、斜め刷毛目。 内面　胴部横篦削り。頸部篦撫で。	石粒を混入 良　堅緻	明褐色～黒褐色	布留式
5	甕	口 18.0 高 —— 底 ——	頸部ややくびれ口縁部外反する。口縁端部角張る。	口縁部　横撫で。 外面　肩部縦篦削り。 内面　肩部篦撫で。	石粒を含む 良	明褐色	
6	甕	口 (13.0) 高 —— 底 ——	肩部丸みを持ち頸部がやや締まる。口縁部直気味に立ち、端部は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい褐色	
7	壺	口 —— 高 —— 底 ——	肩部は丸みを呈す。	外面　縦篦磨き。 内面　篦撫で、肩部縦指撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
8	甕	口 13.6 高 —— 底 ——	なだらかな肩部から「く」の字に折れて立ち上がり、口唇端部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目後撫で。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	橙色～にぶい橙色	
9	壺	口 16.6 高 18.9 底 4.6	胴部やや偏平で中位で膨む。頸部は締まり、口縁部は大きく開く。	外面　口縁部縦篦磨き。胴部上半縦下半横篦磨き。底部篦磨き。 内部　口縁部縦篦磨き。胴部刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい黄橙一部褐灰色	
10	壺	口 (14.8) 高 (24.9) 底 (7.7)	胴部は下膨れ、頸部で締まり口縁部外傾して立ち上がる。	外面　口縁部、胴上半部縦篦磨き。下半部、削り後篦磨き。 内面　口縁部篦磨き。胴部篦撫で。	粗砂粒混入 良	赤褐色	
11	甕	口 13.8 高 (13.4) 底 (7.2)	胴部僅かに膨みを持って立ち上がり口縁部下でゆるく「く」の字に折れ口縁部は内彎する。	口縁部　横撫で。 外面　胴部縦篦削り。下部は横篦削り。 内面　篦撫で。	細砂粒・石粒を含む 良	暗褐色	
12	壺	口 —— 高 —— 底 4.5	下膨れの胴部。口縁は外傾する。底部外周が高まる。	外面　刷毛目後篦磨き。 内面　篦撫で。肩部指押え痕。	細砂粒・赤色石粒混入	橙色～にぶい橙色	
13	小型壺	口 (11.6) 高 9.0 底 2.2	底部は小さく中央が凹む。胴部は丸みを持って膨み中位上半で最大径、口縁部内彎気味。	口縁部　刷毛目後横撫で。 外面　横篦磨き。 内面　胴上半部篦磨き。下半部篦撫で。	砂粒混入 良　堅緻	にぶい黄橙色	胴下半に黒斑
14	坩	口 11.4 高 8.7 底 2.7	平底から丸みを持って立ち上がりゆるく「く」の字に折れて口縁部内彎気味に立ち上がる。	外面　篦磨き、底部篦撫で。 内面　口縁部篦磨き。胴部篦撫で。	細砂粒混入 良　堅緻	にぶい黄橙色	胴部黒斑
15	壺	口 (12.0) 高 —— 底 ——	口縁部　逆「ハ」の字に開く。	器内外面荒れており、調整は不明。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
16	小型壺	口 —— 高 —— 底 3.0	平底から胴部丸みを持って立ち上がる。胴中位に最大径	外面　胴上位縦篦磨き。 内面　横篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
17	壺	口 (10.0) 高 —— 底 ——	口縁部やや内彎気味に開く。	外面　縦篦磨き、口縁下部横篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい褐色	
18	壺	口 (11.0) 高 —— 底 ——	口縁部やや内彎気味に開く。	口縁部　端部横撫で。 内面　縦篦磨き。 外面　刷毛目後篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色	
19	壺	口 —— 高 —— 底 ——	やや丸みを持った肩部から頸部締まり口縁部は直立気味となる。	外面　肩部に櫛状工具による、放射状文、横線文、矢羽根状の櫛歯刺突文を巡らす。内面　指撫で。	細砂粒を含む 良	明赤褐色	
20	壺	口 —— 高 —— 底 ——	肩部開き、頸部から口縁にかけて外傾して立ち上がる。	外面　口縁部撫で、肩部に簾状刺突文を巡らす。 内面　指撫で。	砂粒を含む 良	にぶい橙色	

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
21	壺	口径（18.2） 器高 —— 底径 ——	大きく外屈して、端部屈曲して立ち、端部外半する。口唇部に刻みを持った棒状浮文。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目、篦磨き。 内面　刷毛目後篦磨き。	砂粒を含む 良	にぶい黄橙色～灰黄褐色	
22	壺	口　19.0 高 —— 底 ——	二重口縁。口縁上段のみ、大きく外反し、端部やや尖る。	口縁部　横撫で。 外面　篦磨き。 内面　篦磨き。	石粒を含む 普通	橙色	二重口縁 器面荒れている
23	甕	口　（15.0） 高 —— 底 ——	肩部やや丸みを持つ、口縁部直立気味に立ち上がり、端部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目後篦磨き。 内面　篦撫で、輪積痕残る。	石粒を含む 普通	にぶい黄褐色	
24	壺	口　（20.0） 高 —— 底 ——	二重口縁、上段、下段ともに大きく外反する。口唇部はやや尖り気味に短く立つ。	口縁部　横撫で。 外面　篦磨き。 内面　篦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	二重口縁
25	壺	口　（19.5） 高 —— 底 ——	外反して立ち上がり、上端部は大きく開き、端部は外反気味に短く立つ。	口縁部　横撫で。	細砂粒混入 軟質	にぶい黄橙色	
26	S字甕	口　13.6 高 —— 底 ——	胴部無花果形を呈し、口縁部下段は外傾し上段強く外反する。台部を欠く。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目、肩部横線描き継ぎ。 内面　篦撫で、肩部縦指撫で。	砂粒・石粒を含む 良	暗褐色	胴下半煤付着
27	S字甕	口　15.8 高 —— 底 ——	肩部やや屈曲、頸部「く」の字に折れ、口縁部上段は直気味に立ち端部外反。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	黒褐色	
28	S字甕	口　15.3 高 —— 底 ——	胴部は球形を呈す。口縁部下段は短く立ち、上段は外反。	口縁部　横撫で。 外面　胴部斜め刷毛目。 内面　縦指撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	にぶい褐色	
29	S字甕	口　11.2 高 —— 底 ——	肩部やや丸みを持つ。頸部「く」の字に折れ、口縁部下段短く外傾して立ち上段は外反。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　撫で、肩部縦指撫で。	砂粒・石粒を含む 良	灰白色～褐灰色	
30	S字甕	口　12.4 高 —— 底 ——	肩部に最大径を持つ。口縁部下段は短く横へ張り、上段はやや外反して立ち上がる。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒・石粒を含む 良	灰褐色	
31	S字甕	口　14.0 高 —— 底 ——	ゆるやかな肩部から「く」の字に折れ、口縁部下段は外傾、上段外反して開く。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目、頸部横撫で。 内面　撫で。	砂粒を含む 良	暗赤灰色	
32	S字甕	口　（9.4） 高 —— 底 ——	脚上部で膨み最大径を持つ。口縁部の屈曲は弱い。口唇部は薄くなる。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目、肩部に横線。 内面　篦撫で、縦指撫で。	細砂粒を含む 良	にぶい橙色	
33	S字甕	口　（14.0） 高 —— 底 ——	肩部で張る。口縁部内側の段が顕著。上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　撫で、肩部縦指撫で。	砂粒を含む 良	暗褐色	
34	S字甕	口　（15.7） 高 —— 底 ——	肩部丸みを持つ。ゆるく「く」の字に折れ、口縁部、上段、下段の屈曲は弱い。	口縁部　横撫で。 外面　細い刷毛目。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	灰白色一部にぶい黄褐色	
35	S字甕	口　14.2 高 —— 底 ——	肩部で張り、頸部はゆるく「く」の字に屈曲、口縁部下段は短く外傾、上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　撫で。	砂粒を含む 良	暗褐色	
36	S字甕	口　（15.0） 高 —— 底 ——	頸部ゆるく「く」の字に折れ、口縁部下段は短く立ち、上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
37	S字甕	口　（15.8） 高 —— 底 ——	頸部屈曲部やや丸みを持ち口縁下段は外傾、上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色	
38	S字甕	口　（19.0） 高 —— 底 ——	頸部「く」の字に屈曲し、口縁部外傾して立つ。口縁部の曲がりは弱い。口唇部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　斜め刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒を含む 良	浅黄橙色	
39	S字甕	口　（20.0） 高 —— 底 ——	頸部強く屈曲し、口縁部下段は水平に開き、上段は直立気味に立ち、端部外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	灰褐色	
40	S字甕	口　（17.0） 高 —— 底 ——	口縁部、上段、下段ともに幅を持つ、上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　胴部刷毛目。 内面　撫で。	粗砂粒を混入 良	灰黄褐色	

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
41	S字甕	口径 12.0 器高 —— 底径 ——	頸部「く」の字に折れ、口縁下段短く外傾、上段はやや外反気味に立ち上がる。	口縁部　横撫で。 外面　縦篦削り。 内面　篦撫で。	砂粒を含む 良	にぶい橙色	
42	S字甕	口 11.6 高 —— 底 ——	肩部は「ハ」の字に開く。頸部「く」の字に屈曲し、口縁部下段は短く、上段外反して開く。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　頸部刷毛目後撫で。胴部撫で。	砂粒を多く含む 良　堅緻	にぶい褐色	
43	S字甕	口 13.6 高 —— 底 ——	頸部「く」の字に折れ、口縁部下段は外傾、上段は外反する。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目。 内面　篦撫で。	砂粒を含む 良	明褐灰色	
44	S字甕	口 —— 高 —— 底 10.0	胴部は無花果形を呈す。台部「ハ」の字に開き、下端折り返し。	外面　胴部刷毛目。台部刷毛目後縦指撫で。 内面　胴部篦撫で、台部指撫で。	石粒（2㎜）含む 良	黒褐色	胴上半部炭化物付着
45	S字甕	口 —— 高 —— 底 ——	胴部やや内彎気味に立ち上がる。台部は上部のみで、欠け口は磨滅している。	外面　刷毛目。 内面　胴部篦撫で、台部指撫で。	砂粒・石粒を含む 良	灰褐色	
46	S字甕	口 —— 高 —— 底 ——	台部から「く」の字に折れて外傾する胴部となる。	外面　刷毛目。 内面　胴部篦撫で、台部指撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
47	S字甕	口 —— 高 —— 底 （9.6）	胴部やや内彎気味に開く。台部「ハ」の字に開き、端部内側へ折り返し。	外面　刷毛目、台部刷毛目後撫で。 内面　胴部篦撫で、台部指撫で、折り返し部に指押え痕。	砂粒を含む	にぶい橙色	
48	甑	口 —— 高 —— 底 4.2	小さめの底から胴部外反して立ち上がる。孔の径8㎜。	外面　篦撫で。 内面　篦撫で。	細砂粒含む 良	にぶい赤褐色一部黒色	
49	高坏	口 23.0 高 —— 底 ——	坏部下半で、ゆるく折れ、大きく開く。	口縁部　横撫で。 外面　篦磨き。 内面　篦磨き。	砂粒を含む 良	にぶい橙色一部黒色	坏部のみ
50	高坏	口 21.2 高 —— 底 ——	坏部のみ、下部でゆるく折れて大きく逆「ハ」の字に開く。底部に径3㎜の焼成後穿孔。	外面　篦磨き。 内面　篦磨き、器面荒れている。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
51	高坏	口 （18.0） 高 —— 底 ——	やや内彎気味に逆「ハ」の字に開く。口唇部内削ぎ状となる。	外面　篦磨き。 内面　篦磨き。	細砂粒を含む 普通	橙色	
52	高坏	口 —— 高 —— 底 （18.9）	脚部裾が大きく開く。円形の透し孔3個。	外面　縦篦磨き。 内面　撫で。	砂粒・石粒少量含む 普通	橙色	
53	高坏	口 —— 高 —— 底 （12.9）	裾部大きく外へ開く。円形の透し孔6個。	外面　篦磨き。 内面　刷毛目後撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色黒斑有り	脚部
54	器台	口 7.6 高 8.5 底 10.2	脚部は「ハ」の字に開き、坏部は浅く、大きく横へ開く。端部薄くなる。	口縁部　横撫で。 外面　刷毛目後縦篦磨き。 内面　坏部刷毛目後篦磨き、脚部刷毛目。	細砂粒を含む 良	橙色	
55	器台	口 （8.8） 高 8.5 底 14.4	脚部は裾が大きく開く、坏部はほぼ水平に横へ開き、端部がやや外反して短く立つ。	口縁部　横撫で。 外面　篦磨き。 内面　坏部篦磨き。	砂粒・石粒（2㎜）含む	赤褐色	
56	器台	口 （8.6） 高 —— 底 ——	器受け部大きく横へ開き、端部は短く立つ、脚部に円形の透し孔。	外面　器受け部端部は横撫で、以下篦磨き。 内面　器受け部篦磨き、脚部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
57	高坏	口 —— 高 —— 底 ——	坏部は横へ開く。脚はやや「ハ」の字に開く。	外面　篦磨き。 内面　坏部篦磨き、脚部指撫で。	砂粒・石粒多量に含む 良	にぶい橙色または灰白色	
58	高坏	口 —— 高 —— 底 ——	脚部は「ハ」の字に開く。坏部は大きく横へ開く。	外面　篦磨き。 内面　坏部篦磨き、脚部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
59	高坏	口 —— 高 —— 底 （4.2）	小型の脚部、裾部は短く開く、中央が凹む。	外面　縦篦磨き。 内面　脚部指撫で。	細砂粒含む 良	にぶい橙色	ミニチュア土器
60	高坏	口 —— 器 —— 底 ——	坏部やや内彎気味に立ち上がる。	外面　縦刷毛目後磨き。 内面　坏部篦撫で、脚部撫で、臍明瞭に観察される。	砂粒・石粒少量含む 良	灰黄褐色一部橙色	

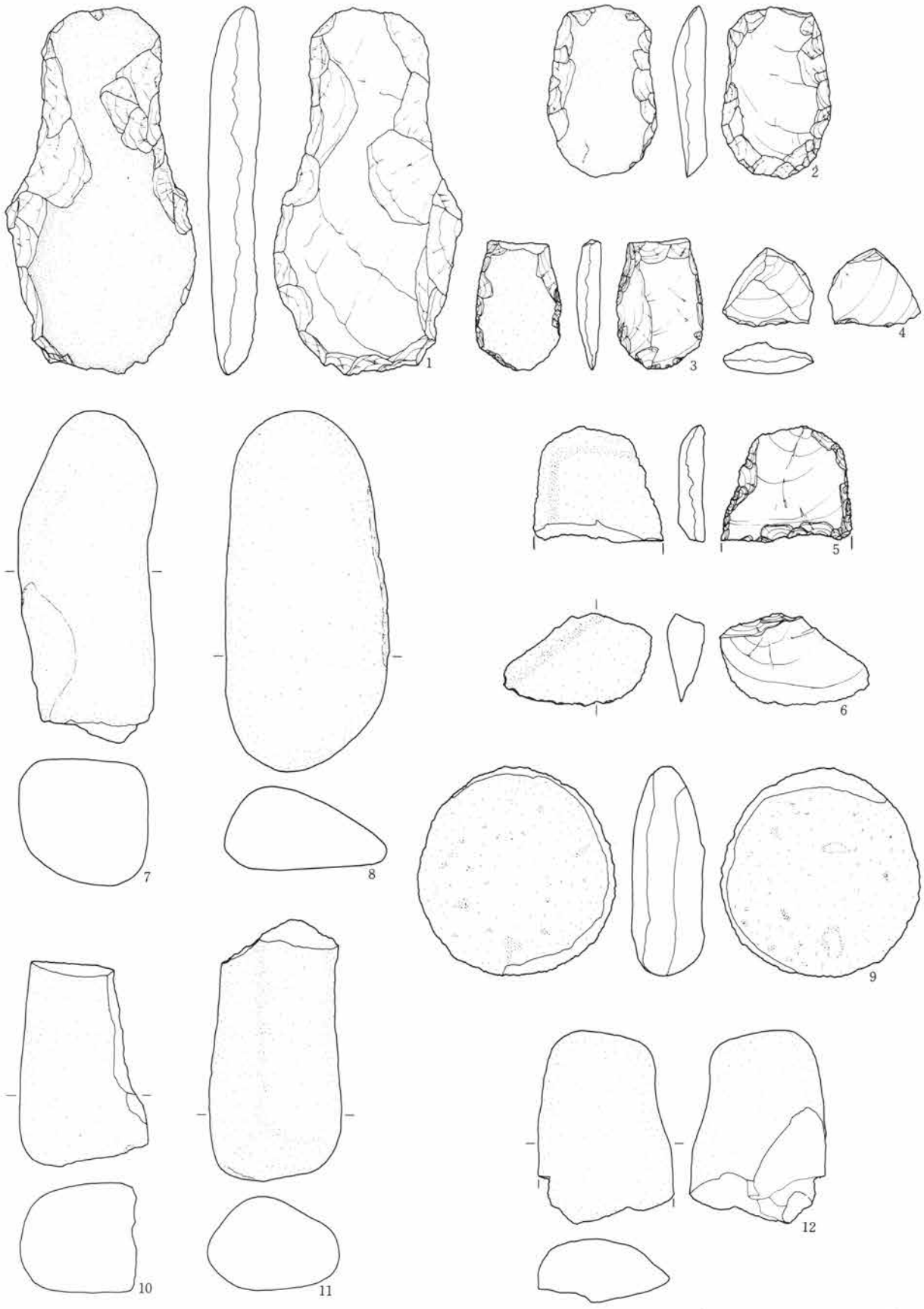
番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
61	器台	口径 —— 器高 —— 底径 ——	「ハ」の字を呈し、裾部やや開く。円形の透し孔３個。	外面　縦篦磨き。 内面　指撫で。	砂粒・石粒少量含む 良	にぶい黄橙色	
62	器台	口 —— 高 —— 底 ——	脚部は「ハ」の字を呈し、裾はやや開く、円形の透し孔３個。	外面　縦篦磨き。 内面　上半部指撫で、下半部刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
63	器台	口 —— 高 —— 底 ——	脚部「ハ」の字に開く。円形の透し孔３個。	外面　篦磨き。 内面　撫で。	細砂粒を含む 良	橙色	
64	器台	口 —— 高 —— 底 ——	小型の脚で開きは弱い。円形の透し孔。	外面　縦篦磨き。 内面　指撫で。	砂粒・石粒少量含む 良	にぶい黄橙色	
65	器台	口 —— 高 —— 底 ——	器受け部、水平に開く。	外面　篦磨き。 内面　器受け部撫で。 脚部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
66	坏	口 11.9 高 3.4 底 ——	丸底を呈す体部から口縁部直立気味に立ち端部やや外反。	口縁部　横撫で。 外面　体部篦削り。 内面　撫で。	砂粒を含む 良	橙色	
67	坏	口 18.2 高 5.5 底 ——	浅く丸底から「く」の字に屈曲して口縁部やや内彎気味に大きく開く。	口縁部　横撫で。 外面　体部篦削り。 内面　撫で。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色 黄褐色	
68	坏	口 15.5 高 5.2 底 ——	浅い丸底から強く内彎して屈曲し、口縁部に外傾して開く。	口縁部　横撫で。 外面　体部篦削り。 内面　篦撫で。	砂粒・小石粒多量に含む　良	にぶい橙色または褐灰色	
69	須恵器 坏	口 —— 高 —— 底 （8.0）	体部やや丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。 底部　回転篦切り。	砂粒・石粒を含む 良	黄灰色	
70	須恵器 坏	口 —— 高 —— 底 6.5	かなりくずれた高台が付く。	ロクロ成形。 底部ロクロ右回転糸切り。	砂粒・石粒を含む 良	灰黄色	かなり磨滅している。

番号	出土位置	器種	法量（cm・g）	備考
71	表採	刀子	7.8× 2.5× 0.3　34.0	錆化がかなり進んでいる。先端はやや狭くなる。

番号	出土位置	器種	法量（cm・g）	石材	備考
72	23－B04	砥石	5.7× 8.4× 5.4　189.7	黒色頁岩	破損品、表面に研ぎ溝あり。

表 36　グリッド出土縄文土器観察表

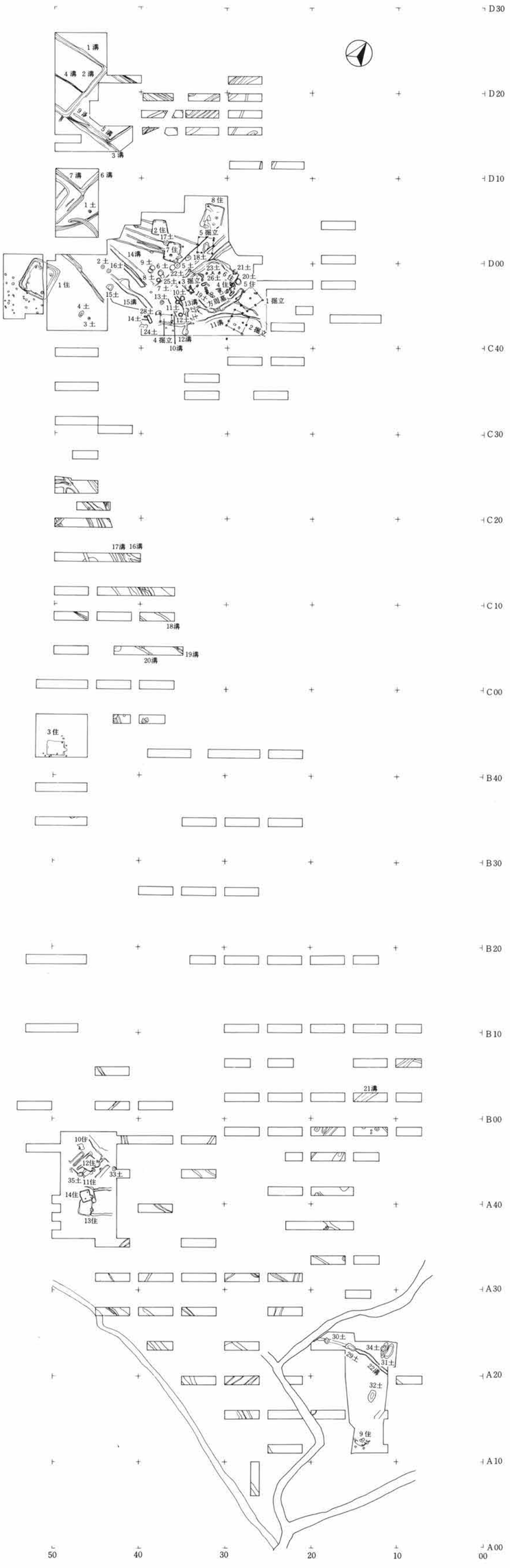
番号	器種	法量(cm)	特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	深鉢	口径 30.3 器高（38.2） 底径（9.0）	底部平底、胴下部から外反して立ち上がり中位で丸みを持つ。口縁部ほぼ垂直に立つ。口唇部やや内削ぎ状を呈す。 施文は０段多条の閉端環付ＲＬ・ＬＲで菱形羽状を全面施文する。	小石を含む 普通	淡茶褐色	繊維土器
2	深鉢	口 —— 高 —— 底 ——	細いＲＬが施文される。	砂粒を含む 普通	赤褐色	
3	深鉢	口 —— 高 —— 底 ——	口縁部平らで外側に肥厚し凹線が廻る。以下ＲＬの縄文。	砂粒を含む 普通	赤褐色	
4	深鉢	口 —— 高 —— 底 ——	口縁部片。横に沈線、以下ＬＲの縄文を施文。口唇部やや薄くなる。	砂粒を含む 普通	黄橙色	
5	把手	口 —— 高 —— 底 ——	橋状を呈す深鉢型土器の把手であろう。外面ＬＲの縄文が施文され一部磨り消されている。	砂粒を含む 普通	黄橙色	
6	深鉢	口 —— 高 —— 底 ——	∩状の沈線内にＲＬを縦位施文する。	砂粒を含む 普通	黄橙色	



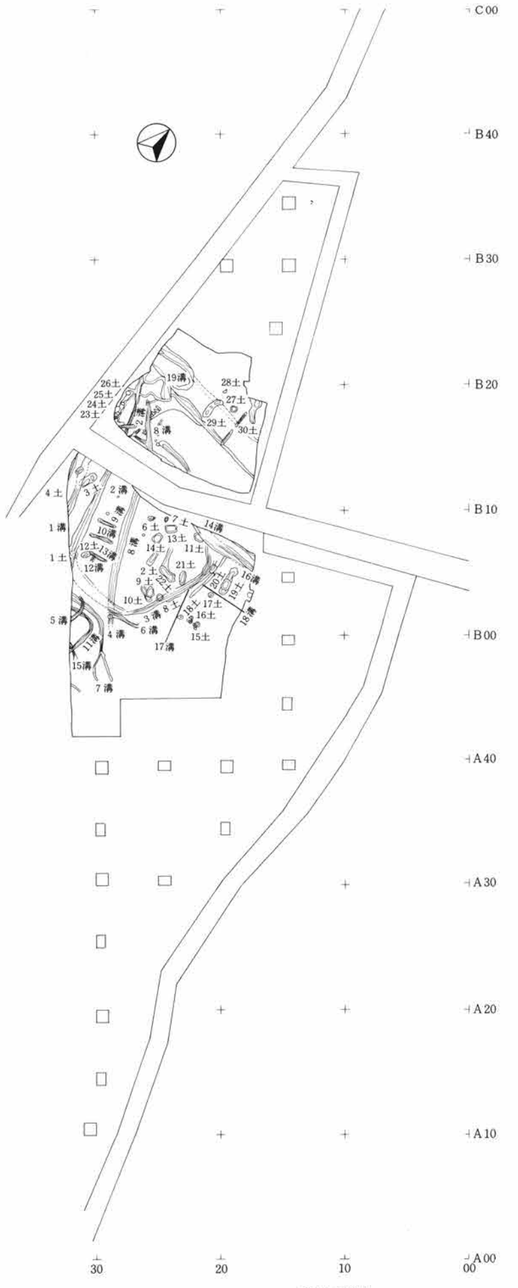
第113図　グリッド出土石器

表 37　グリッド出土石器観察表

番号	出土位置	器種	法量（cm・g）	石材	備考
1	16－B19	石鏃	19.2×10.0× 2.6　630.0	変質安山岩	大形で刃部広がる。片面に自然面を持つ。
2	20－B18	打製石斧	9.0× 5.7× 1.8　119.9	黒色頁岩	厚手で歯は鈍角、片面に自然面を持つ。
3	19－B18	打製石斧	6.8× 4.5× 1.3　46.4	黒色頁岩	撥形打製石斧、刃部丸みを持ち磨耗している。基部欠損。
4	08－D02	スクレイパー	4.8× 4.0× 1.6　26.9	黒色頁岩	三角形を呈し、一側縁に刃を作り出す。
5	22－B05	スクレイパー	6.1× 6.9× 1.4　69.5	黒色頁岩	片面に自然面を持つ。下部を欠いている。
6	27－B02	スクレイパー	7.8× 4.9× 2.0　55.6	黒色頁岩	片面に自然面を持つ。側縁に弧状の刃部を作り出す。
7	27－A45	敲石	17.3× 6.8× 6.7　1500.0	輝石安山岩	一端を欠き、側縁に剝離。
8	23－B07	敲石	18.8× 8.6× 4.4　923.0	デイサイト	両端に使用痕。
9	25－B00	敲石	10.9×10.4× 3.8　572.8	凝灰岩質砂岩	円形を呈す。側縁に打痕。
10	31－B03	敲石	10.7× 6.8× 6.3　668.4	石英閃緑岩	断面隅丸方形となるが、側面、端部を欠いている。
11	30～31－B05	敲石	13.7× 7.0× 5.3　687.0	輝石安山岩	端部に使用痕、一端を欠く。
12	20－B17～19	敲石	10.1× 7.1× 3.4　324.6	黒色頁岩	一端を欠いている。



下斉田・滝川A遺跡



滝川C遺跡

0　40 m

第114図　遺構全体図

Ⅵ．まとめ

1．遺　構

下斉田遺跡及び滝川Ｃ遺跡では、縄文時代から中世までの遺構と遺物が出土している。時代毎に若干の考察を行いたい。

1．縄文時代

縄文時代の遺構は下斉田遺跡で土壙を１基（21号土壙）確認したのみである。土壙内からは中期加曽利Ｅ式終末期の破片が数片出土したのみであった。しかし、Ｄ地区の１号住居址周辺からは、縄文前期諸磯式を中心に黒浜式と中期加曽利Ｅ式の土器が、石器とともに遺構を伴わず出土している。また、滝川Ｃ遺跡からは黒浜式の土器が台地の縁辺部から遺構を伴わず一括出土した。

前橋台地における縄文時代の遺跡の実態は明らかになっていない。本遺跡を中心とする当地域でも、発掘調査で明らかなのは、烏川左岸の高崎市八幡原遺跡（註１）から出土している中期の遺物と、下郷遺跡（註２）の前期から中期にかけての僅かな遺物群、及び八幡原Ａ遺跡（註３）の前期諸磯式の住居址の検出例等があるのみである。群馬県の縄文時代は、赤城山の南麓及び西麓に広がる台地上の遺跡群で代表されるが、実は下斉田遺跡が存在する前橋台地にも潜在的に多くの遺跡があるものと考えられる。特に烏川等の前橋台地の縁辺部を流れる大きな河川だけでなく、台地上を流れる滝川や広沢川等の小河川の縁辺でも縄文時代の遺跡が存在することが判明したことは重要であると言えよう。赤城山の台地上に築かれる大集落との関係を考える意味においても、本遺跡をはじめとする周辺の縄文時代の遺跡は貴重なものといえる。

2．弥生時代から古墳時代初頭

弥生時代から古墳時代初頭の遺構のひとつに、下斉田遺跡Ｄ地区の微高地上から検出された溝群がある。

この溝群は形態によって２種類に分類できる。１つは７号住居址の西で発見された小溝群である。幅30cmの溝が１～1.5m間隔で６本平行して走っている。溝のなかの土壌は、浅間Ｃ軽石混入の黒色土である。発見当時は、他遺跡に類似遺構が無かったため、単純に溝状遺構として処理したが、現在の研究水準から弥生時代の畑跡であった可能性が強い。他の３本の溝の内３号溝からは浅鉢が出土している。（第60図３・４）小溝群の覆土と同様に浅間Ｃ軽石を含む黒色土を主体としており、同時期のものである可能性が強い。

この時期のＤ地区の微高地に展開する遺構群の中心となるものは、方形周溝墓１基と、１・２・８号住居址の３軒、13・15・16・20号土壙の４基である。遺構の配置は、微高地の中心部に方形周溝墓を１基配し、縁辺の北から西にかけて住居址群、西から南にかけて土壙群という展開を示す。なお、20号土壙は、方形周溝墓の北辺に位置しており、方形周溝墓の一部を形成するものと考えられる。周辺からは、本遺跡と同時期に形成された遺跡群がいくつか見られる。南1.7kmに位置する玉村町の下郷遺跡は（註２）、烏川の左岸につくられた遺跡で、27基の方形周溝墓を中心に前方後円墳（天神塚古墳）や土壙等を検出している。また、北西2.5kmには４世紀初頭の全長90mを測る前方後方墳である将軍塚古墳（註４）と、石田川式の集落が発見された上滝遺跡があり、北西４kmの広沢川の左岸にある高崎市の鈴ノ宮遺跡（註５）でも11基の方形周溝墓と同時期の集落跡を検出している。更に、北７kmの染谷川の両岸に展開する高崎市新保遺跡（註６）でも、弥

Ⅵ. ま と め

生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓と大集落跡が発見されている。いずれも複数の方形周溝墓を検出しているものであり、本遺跡のように、1基の周溝墓に数軒の住居址を展開するというパターンではない。その意味でも特異性のあるものと言えよう。また、他の遺跡は、各々主要河川の縁辺部に立地しているのに対し、本遺跡は、滝川という小河川はあるものの、狭い微高地上に展開している点でも特異性を持っていると言える。

3．奈良・平安時代

奈良・平安時代は、下斉田遺跡のA地区から検出された5軒の住居址群と、C・D地区の竪穴住居址を中心とする遺構群がある。A地区の住居址群は微高地の西側に4軒、東側に1軒発見されたが、微高地の中心部には無く、井戸や土壙があるのみであった。C・D地区の遺構群は、竪穴住居址3軒と、同時期に比定される掘立柱建物址が5棟検出された。特に5号掘立遺構は棟内部に小鍛冶遺構があり、一体のものと考えられるものであり、特異なものと言える。下斉田遺跡の東側を流れる滝川は、前橋市下新田町付近で利根川から分岐し、玉村町で再び利根川に合流する小河川であるが、江戸時代初期慶長15年（1610）に河川改修されたものである。改修以前はかなり蛇行していたことが想像でき、周辺を微高地と低地の複雑な地形につくりあげている。周辺の古墳時代から平安時代にかけての遺跡は、井野川の左岸段丘面上に灰塚遺跡（註7）をはじめ天神山古墳や諏訪甲341号古墳などがある。両遺跡は、井野川の左岸段丘面の東側のはずれにあたり滝川及び広沢川の氾濫等の影響を受けながら微高地上に作られた集落跡であると言える。浅間B軽石下の水田遺構の状況とあわせて、前橋台地の中心部に向けての開発状況を考える上での好資料と言えよう。

（註1）八幡原遺跡	高崎市文化財調査報告書第3集	1974（昭49）
（註2）下郷遺跡	群馬県教育委員会	1980（昭55）
（註3）八幡原A遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	1981（昭56）
（註4）将軍塚古墳	高崎市教育委員会	1981（昭56）
（註5）鈴ノ宮遺跡	高崎市教育委員会	1978（昭53）
（註6）新保遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	1977（昭52）～1980（昭55）
（註7）灰塚遺跡	高崎市教育委員会	1975（昭50）

2．遺　　物

群馬県西部域における弥生時代後期は、北信系土器である樽式土器によって代表される土器文化圏である。一方、同時期の地方様相は、赤城山麓東南部地帯における赤井戸式、北武蔵地方においては縄文を施文とする岩鼻式土器群、相模湾、東京湾西部における久ケ原式、弥生町式土器文化圏が当地方と直接的な関係を持っている。

下斉田遺跡の周辺における弥生時代遺構の状況は、先に触れられているが、樽式土器を出土する遺跡は、新保田中、新保遺跡、日高遺跡、宿大類村西遺跡、大類万相寺遺跡、矢島鈴ノ宮遺跡、矢島竹ノ内遺跡と遺構を伴っての遺跡である。樽式土器を散布する地域は、上記の遺跡の分布が示すように染谷川、井野川流域には極めて多くの地点に認められる。下斉田遺跡は、樽式土器文化圏の中にすっぽりと入っている。この樽式文化と異質な土器群文化が、どの様な理由で存在するのであろうか。そして同種の遺跡は少ない。上大類北宅地に一例が認められるに過ぎないのである。また、弥生時代に続いて行く古墳時代の土器様相は、下斉田や北宅地遺跡とも、樽式文化とも異なるいわゆる石田川式という近畿地方の庄内式や布留式土器の強い影響下に成立する土器群であって、下斉田遺跡とは直接的な関係は見いだされない。

この様に、前にも後にも周辺の土器文化と全く関係が見いだされない下斉田遺跡の意味はなにを示してい

るのであろうか。旧来の弥生末から古式土師への変遷観に従えば、樽式文化と石田川式文化の対峙する（註１）中に偶然的に登場する遺跡として簡単に片付けてしまうであろう。しかし近年、群馬県を含めて関東、天竜川地方における、弥生後期後半代に属する伊勢湾系土器や大和盆地系土器の調査例が増加し、この時期の文化の交流が思ったより豊かで遠距離の移動を相互に行っている実態が明らかになりつつある。かつ、これら文化が各地の初期古墳成立と深い関係にある点注目されていて研究も進んでいる。（註２）この研究動向の中にあって、樽式文化から初期古墳への過渡期における、伊勢湾岸系、大和盆地系土器以外の土器文化の移動も注意をして取り扱わなければならない多くの課題を提示している。具体的に言えば、弥生後期末頃に発生をする赤井戸式文化の成立と経過は、この下斉田遺跡の経緯を考える上で重要な参考資料となるであろう。また下斉田遺跡の母胎となる東海東部域から東京湾西岸域に及ぶ土器文化圏は、近畿地方の文化の波及を受けても群馬県の樽式、茨城県の十王台式土器文化の様に急速に消滅してしまうということは無く、継続して行く特色を持つ強い性格を有する点も留意して行かねばならない。弥生後期樽式土器文化から石田川式土器文化へ変遷する過程を索る上で、下斉田遺跡、上大類北宅地遺跡の意味を再点検する必要性がある。

Ⅰ．下斉田遺跡出土遺物の点検

下斉田遺跡出土の遺物は、多少性格を異にする群より成立している。１号住居址出土遺物は石田川式土器と平行関係にある土器群であろう。これを下斉田遺物Ⅱ群と称する。方形周溝墓、２号住居址、８号住居址、20号土壙を下斉田遺物Ⅰ群と称しておきたい。

１．壺型土器（表38）

(1)　遺物Ⅰ群の壺型土器の特色

壺型土器の特色は、口縁部状況と胴部状況に集約される。口縁部の形状は、折り返し口縁と単口縁に大別ができる。また折り返し口縁は、口縁部を受け口状に設定する型と外反させた口縁外面に折り返しを付ける２種類に細分ができる。一方、胴部の特色は、最大径を下半に設定するａ種と、中位程に設定するｂ種として区分が可能である。また、単純な折り返し口縁の内に、樽式土器に共通する甕と壺の中間土器も含まれているので壺型土器ｃ種として設定して置く。以上の特色を体系的に分類すると２種６器形に分類可能である。単口縁壺型土器にａ種とｃ種が存在するとすれば２種９器形になる。

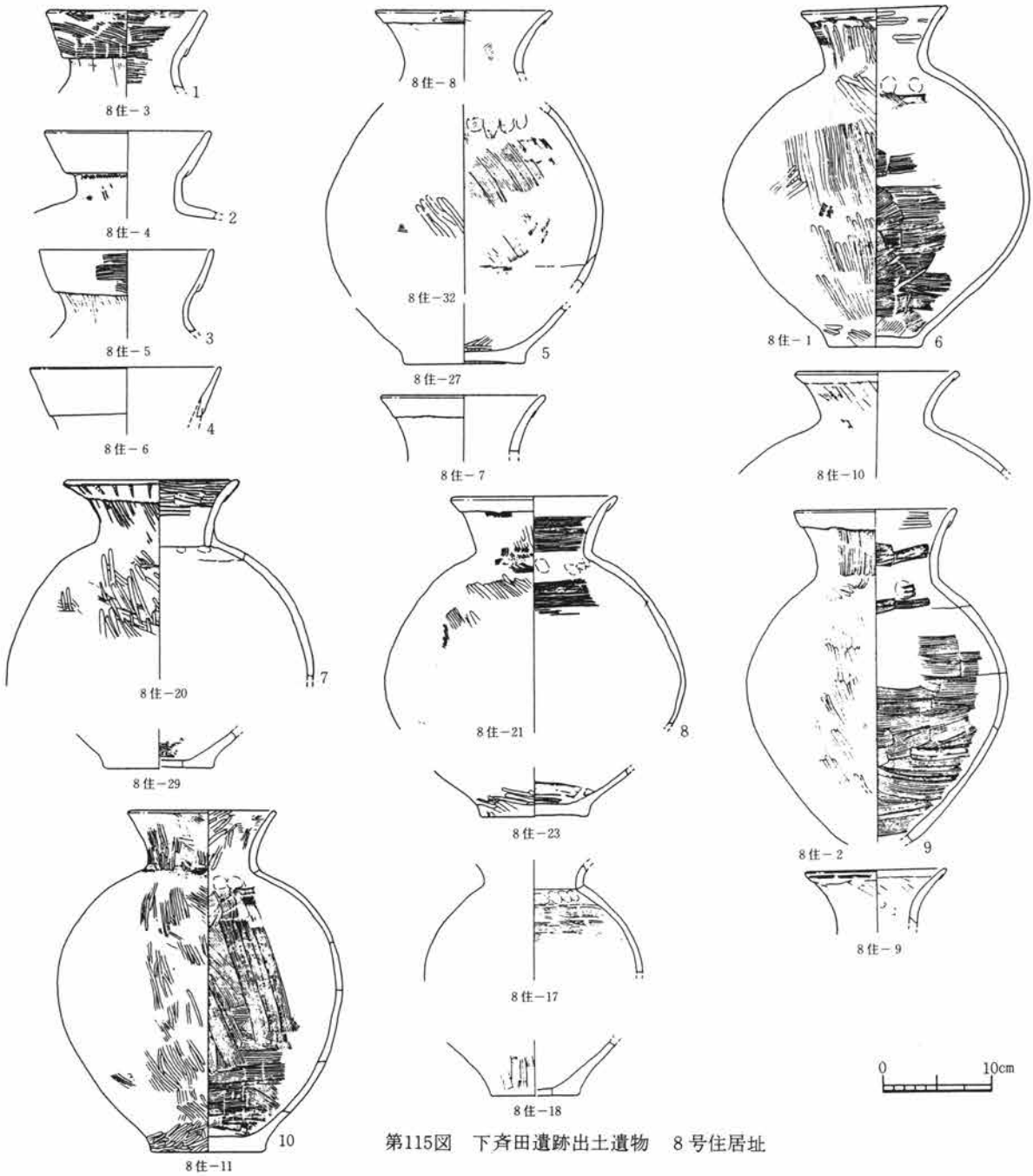
１．受け口状口縁壺型土器の特徴（第115図、１～４）

受け口状口縁壺型土器において普遍的に存在する器種である。（第24図、８住３～６）の壺型土器の様に幅を大きく持たせ垂直に近い角度で持ちあげる手法は、東海西部、東部、関東南部における弥生時代後期後半代に顕著なものである。最大径を下位に置く器種は、古い型であり、最大径を中位や上位に置く球型壺は後出的要素である。また、下斉田における壺型土器が無文である点については、施文の極めて少ない東海東部、駿河湾岸の弥生末頃の土器手法に共通性が認められる。通常、弥生町式土器にしろ、伊勢湾岸域の欠山式や元屋敷土器に認められる受け口状口縁壺は、口縁部・胴上半分櫛描文・櫛による刺突列点文・また山型文と刺突列点文等の装飾性の強い土器群がある。但し、駿河湾岸土器にしても、口縁の外平坦面には横沈線文や、棒状貼付文が多いことを考えると、下斉田受け口状壺が、駿河湾土器そのものでは無い点は留意して置きたい。また、受け口状と称する口縁部内側に受け部の稜を造らない点は、やや後出的要素であるか問題も残している。

２．単純折り返し口縁壺型土器の特徴（第115図、５～10）

この器種は、壺型土器の主流を成す器種である。13個体中の９体を占める。この器種で土器の系列や時期を検討するのは、胴部の形状である。３種の特色は概略次の様に整理できる。

折り返し口縁ａ種は、口縁部の８住－８、と胴部８住－32と底部８住－27の合成図（第115図－５）に示す



第115図　下斉田遺跡出土遺物　8号住居址

ことができるように、ゆるく外反する口縁、頸部径が比較的大きい、胴最大径を下半に持って来る。底部径が比較的大きい器形をなすこの器種は弥生後期壺型には共通する器形であって、関東南部域の土器分類では久ケ原期の形状をまだ残していると言えよう。手法的にも地は櫛状工具により、仕上げを箆状工具による平滑化を基調とするが、内壁は刷毛目を残す手法や、口縁・胴・底部を三区分して造る手法等にその特色が示されよう。

折り返し口縁b種は、この器種の主体的な土器である。8住－20（第115図－7）、8住－21（第115図－8）、8住－1（第115図－6）に示す器形と手法をなす。胴部最大径を中位程に置き球形の胴をなし、底部は絞って径の小さい底をつける。頸部は、低くやや立ち上がり気味で張った肩に接続する。調整手法はa類と同様

に櫛状工具と箆状工具であるが、内面外面ともに平滑化し刷毛目が残らなくなる傾向が強い。折り返し口縁平面に施文する８住－20例は、これ等ｂ種内においても後出的器種と指摘できる。

折り返し口縁ｃ種は８住－２（第115図－９）の一例のようである。頸部径が比較的大きい。胴最大径が中～上位にありながら下半が極めて長く長胴型をなす。外面は丁寧に箆研磨するが内面は刷毛目を残している。

この器種については壺と甕の中間的土器で、樽式土器や岩鼻式土器の同種器種に共通する器形であろう。

単口縁壺型土器ｂ種（８住－11、第115図－10）球形に近い胴で頸部も比較的小さいが底部は平底で大きい。かつ内壁に刷毛目を残す手法をとっている、完全に球型壺に変化していない状況であろう。

下斉田Ⅰ群の壺型土器の形状の概略は上記の通りである。単純折り返しｃ種やａ種に認められる特色は関東南部の弥生時代後期の土器の中に類例を求めるとすれば、弥生町式土器群の内にあって、より古い形状を残す系列にある土器群に含まれると考えられる。（註３）一方、主体的な土器群である単純折り返しｂ種は、胴下半に重心を移しながら球型胴化している弥生町期の動向と同じであろうと考えられる。一方、弥生町期のこの動向は、一方において口縁部及び胴部に櫛状工具による施文が定着化する時期に当たる点において、差異を示している。下斉田Ⅰ群は全くといって良い程無文手法である。

これは、受け口状壺型土器の口縁の状況が受け口の基本型を停どめていず、外反気味である点において、その形式上後出的要素が強いように思えるが、弥生町式土器に続く弥生末の二重口縁系手法壺型土器の影響を強く受けない時期に限定できる土器群であろう。無文化の著しいのは、駿河湾岸の弥生後期後半にその特色とするところである点、また前野町期にも同傾向が認められる共通的な要素であろうか。

(2)　遺物Ⅱ群の壺型土器の特色

壺型土器として認められる例は明確ではない。受け口状口縁壺１住－１と単口縁壺型土器１住－３・６の中型球型壺と、１住－７～９の小型丸底壺型土器である。

その他、２号住居址では折り返し口縁ｂ種壺型土器２住－１・７、20号土壙では単口縁系と思われる球型胴の壺型土器20号土壙－15が見いだせる。20号土壙例は器壁内面も箆状工具による丁寧な仕上げ痕が残り、頸部内側に刷毛目痕を残すもので、下斉田遺跡Ⅰ群遺物の中にあっても最終的な要素の土器であると言える。分類の視点と傾向概略は表38「壺型土器の分類とその特徴」に示した。

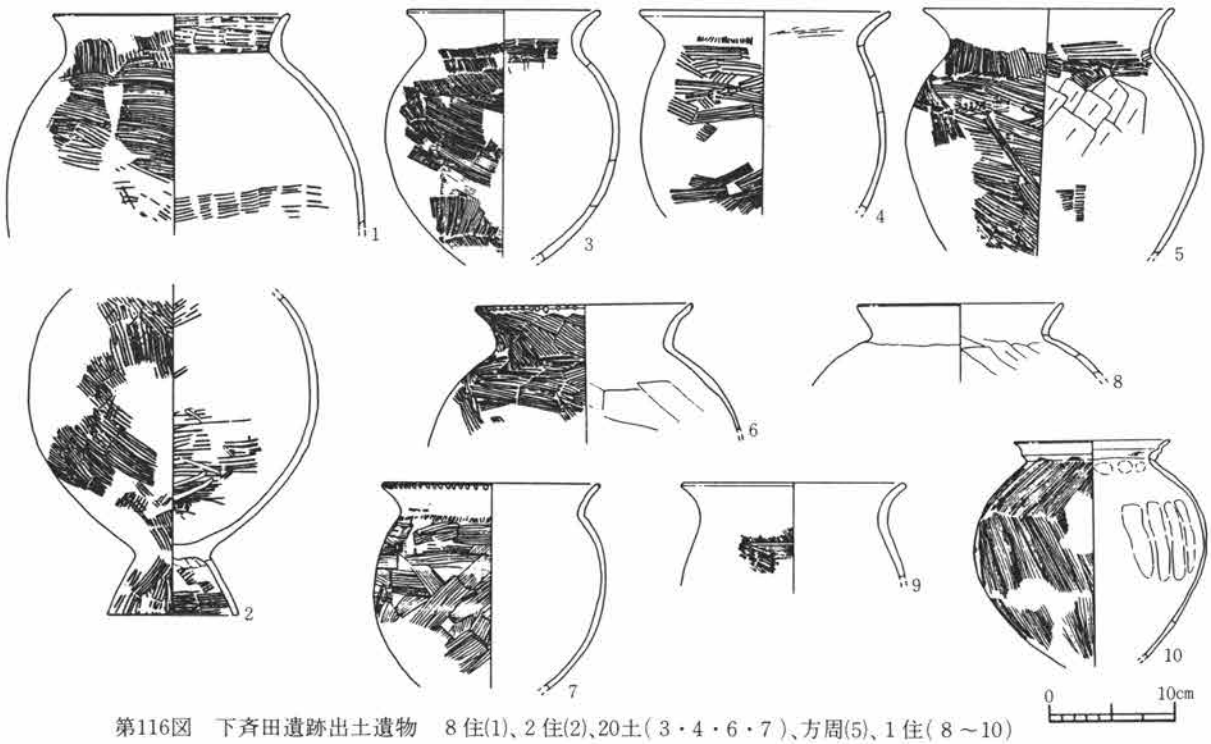
２．甕型土器（表39）

甕型土器は、１号住居址・２号住居址・８号住居址・20号土壙・方形周溝墓から出土している。甕型土器についても、壺型土器と同じくＳ字口縁台付甕を出土した１号住居址の甕群をⅡ群に、それ以外はⅠ群と設定した。この分類は大型甕についてのみ行った。Ⅰ、Ⅱ群の各甕を細部にわたり点検を行うと、第１は口唇部に施文の有無の差が存在すること、第２は口縁部径が胴径に比して大小の差があって、小さい器種はやや長胴化であり、大きい広口の甕の場合には球形の胴をなしていることであろう。この視点に従って分類すると、２群３系で６器種となる。

(1)　甕型土器の特色

Ⅰ群は、器形・調整方法等によって２系４器種に分類できた。その中で８号住居址及び２号住居址出土遺物群と、20号土壙及び方形周溝墓出土遺物群に大別できる。８号住居址及び２号住居址の遺物は、口唇部無施文ａ種（第116図－１・２）に限られるに対して、20号土壙は無施文ｂ種と施文ａ種とｂ種（第116図－３～７）の３種の土器を含んでいる。この内20号土壙の甕の特色とするところは、器形のｂ種が核となっていることと、大型化とともに内壁の平滑化手法と一部に板状工具による削りが認められる点である。（第116図

Ⅵ. ま と め



第116図　下斉田遺跡出土遺物　８住(1)、２住(2)、20土（３・４・６・７）、方周(5)、１住（８～10）

－20土－８、方形－１・２）この球形で広口のズングリした甕型は、いわゆる前野町式の特徴を示すことと、板状工具出現は東海地方に認められる手法（註４）の伝播を示していて、欠山期にその出現が認められるのであるから、20号土壙の甕は弥生時代末頃から古式土師の初頭頃に位置付けられて良いであろうし、埋土中にＣ軽石の混入する所見と時間的不一致さを感じさせない。これに対して８号及び２号住居址の甕は器形、刷毛目状調整痕を内外面に残している状況は、関東南部の弥生町式土器群に共通するところであろう。但し、口唇部の手法は櫛状工具等での刺突文が普遍的であるのにそれが認められない点問題がある。

甕Ⅱ群はＳ字甕を含み、長胴型の平底甕の器種（第116図－９）も登場する様である。

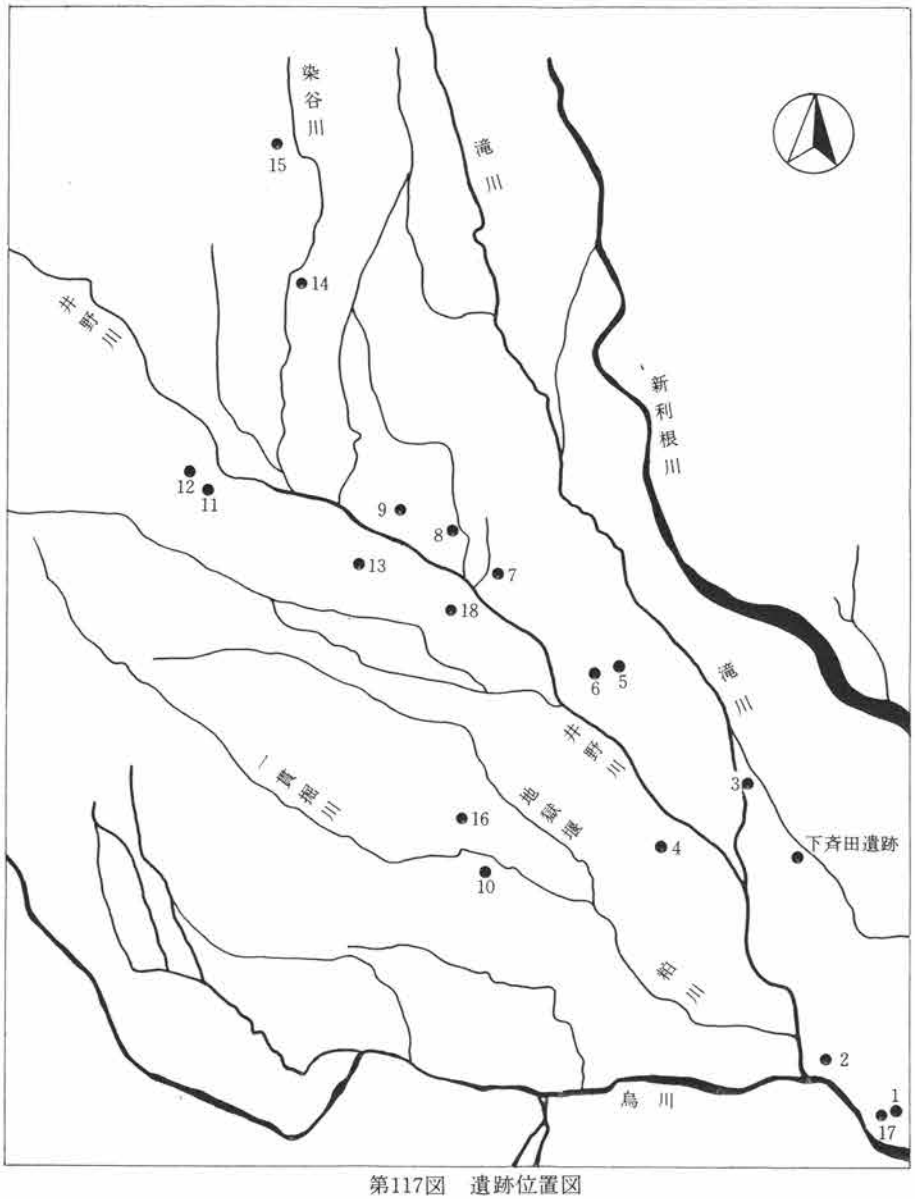
３．その他の遺物特徴

高坏型土器は方形周溝墓、８号住居址、１号住居址に検出されている。１号住居址では裾の大きく開く駒形大塚墳頂出土高坏（註５）例に類似する例（１住－36・39・42・43）や小型鼓状高坏（１住－16・20）の混在に注意したい。方形周溝墓、８号住居址例はやや深めで接合部に稜線を少し意識し、ハ状脚で有孔を特色としている。これをＡ種とするとＡ種は東海地方の元屋敷期（古）に相当させることが可能である。例（１住－42）をＢ種とするとＢ種高坏は、元屋敷期（中）以降で、脚を絞った大和系高坏（Ｃ種高坏、新保田中河道資料・第130図４～７）を混合する時期に当てられよう。

なお、器台、丸底小型壺等の古式土師器を代表するセットは、１号住居址に含まれている。１号住居址は器種のバラエティーに富んでいる特色を示し、その土器の斉一化とともに多様な交流を示す資料である。（註６）

４．下斉田遺跡出土土器の特色とその意味

出土遺物を器種を中心に点検してきたが、その特色とする所は、各々の遺物が弥生後期末頃から古式土師



1 下郷遺跡
2 八幡原遺跡
3 滝川Ｃ遺跡
4 綿貫遺跡
5 上滝遺跡
6 元島名将軍塚遺跡
7 元島名遺跡
8 鈴ノ宮遺跡
9 矢島竹ノ内遺跡
10 矢中遺跡群
11 上大類北宅地遺跡
12 貝沢柳町遺跡
13 宿大類村西遺跡
14 新保田中遺跡
15 下日高旧河道
16 柴崎蟹沢古墳
17 下郷天神山古墳
18 万相寺遺跡

第117図　遺跡位置図

初期の時代に連絡する遺物であり、その遺物の特色は関東南部から東海東部域系統の単独の遺物であることになろう。しかし土器細部を点検すれば、その土地の土器様相そのものではないことも明らかである。従って、下斉田土器群の母胎、また強い影響の元は、関東南部から東海東部にあるとしても、少なからず、その母胎の文化及び周辺の樽式文化からも適当な間隔をおいて独自に展開した土器文化であると言えよう。

下斉田の土器群を時期的にみると、Ｃ軽石を含む20号土壙及び方形周溝墓の遺物を基準としなければならない。20号土壙と方形周溝墓は甕型土器と高坏型土器で、他の遺構との対比に弱さを感じるが、口唇部に刺突を持つ広口台付甕は形態、手法の特色において、古式土師器に属する段階と判断して良いであろう。また、１号住居址のセットに認められるＳ字甕、小型丸底壺、器台、高坏Ｃ種の存在を考えると、１号住居址は群馬県でいう石田川式土器の完成期に対比できることであるから、20号土壙及び方形周溝墓は、その直前に位置付けることが可能であろう。また、Ｃ軽石を混在させない８号住居址、２号住居址においては、壺型土器に示せる無花果状器種と球型器種との混在が示すように弥生時代後期終末に近い時期であると考えられよう。

Ⅵ. ま と め

ここでも、器種、器形の全体的感じは、関東南部から東海東部の土器様相であるが、やはり独自性が強いと考えられる。緩やかな曲線で表現する無花果状の器種は、弥生中期の壺型土器の伝統を残すものであり、8号住居址、2号住居址がまだ弥生時代に属させるべき根拠となろう。

この様に下斉田遺跡の遺物の変遷が示す事実は、当地方が弥生時代後期の樽式土器文化圏の中で弥生時代末から古墳造りという斉一性の強い統一的な社会に入るまでの年月を独自に歩み続けた小規模な集落社会であったことを明らかにすることとなった。

Ⅱ. 井野川下流域における土器様相から見た下斉田遺跡出土遺物群の意味

井野川及び染谷川という榛名山東南麓地方の平坦地を潤す二大河川は、弥生時代中期以降のこの地方の文化を担う重要条件である。弥生時代中期の文化は諏訪、松本平の栗林式土器の強い影響下に発展する竜見町式土器文化がこの平坦地を開墾するのに始まる。後期樽式土器文化は、時として丘陵、扇状地帯の高地に文化圏の中心を置きつつも、この両河川域は樽式土器文化の支根的な地帯となり中部山岳系の弥生文化を展開する。一方、この地域は群馬県西部域の古墳時代幕開けを告げる元島名将軍塚古墳、柴崎蟹沢古墳、下郷天神山古墳等の古式古墳を成立させる。この古墳文化の定着した時代を代表するのは石田川式土器文化であって、この平坦地に定着し多くの遺跡を展開する。

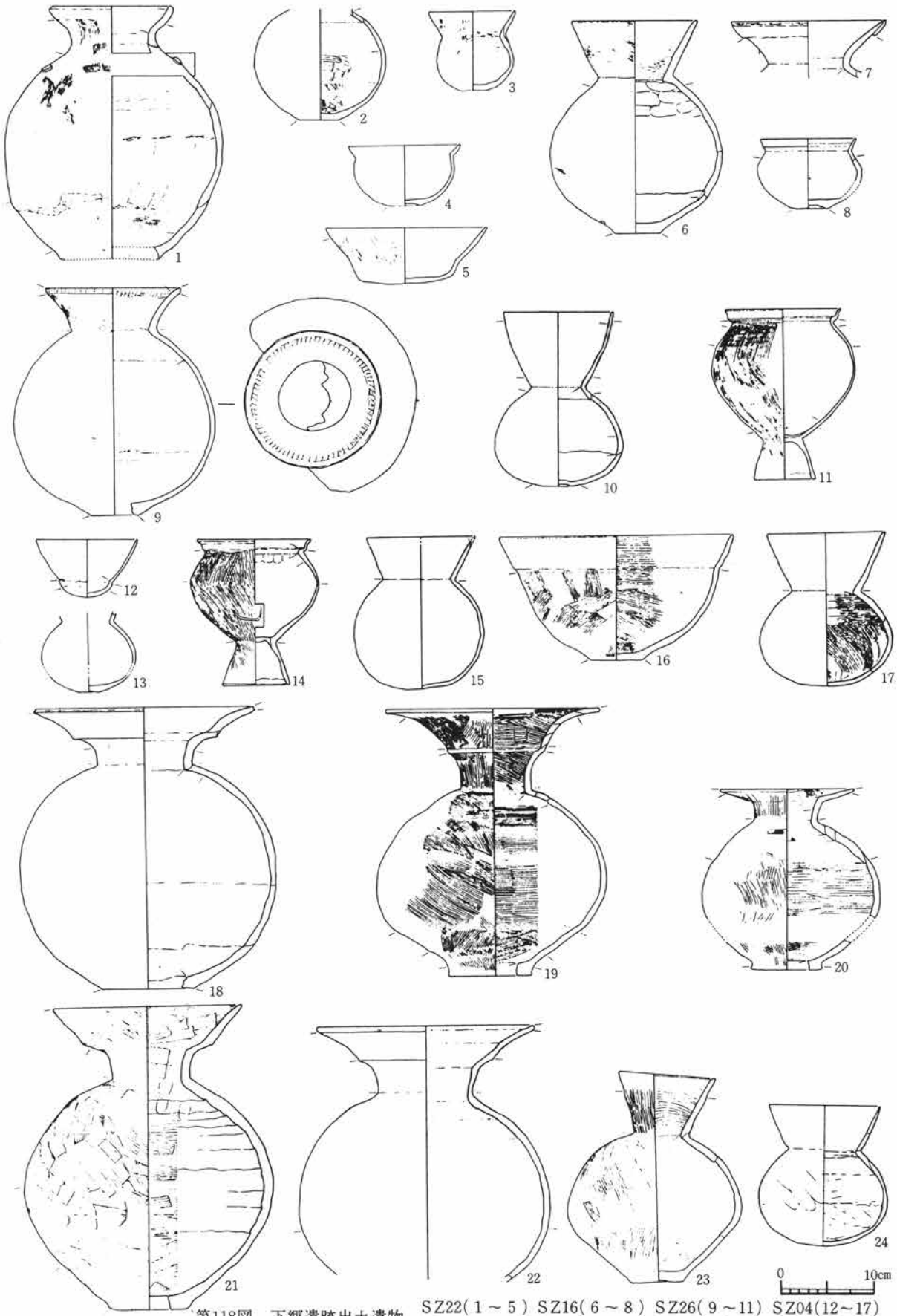
この様な弥生時代末から古墳文化への変遷状況から、例えば茨城県地方の弥生時代後期十王台式土器文化に木に竹を継いだ様に土師式文化が登場するという様な概論的展開、即ち樽式土器文化から石田川式土器文化へと、異質な文化が継続するという変遷観が大勢を占めていた。しかし、下斉田遺跡及び上大類北宅地遺跡のような、関東南部、東海東部土器文化の進出、また貝沢柳町遺跡のような伊勢湾岸土器文化の進出は、従来の簡便な変遷図式では、この時期の複雑な社会変化は表現できないことを良く示している。特に無視されがちであった関東南部域からの土器文化の在り方を再点検する必要があろう。この点において下斉田遺跡の在り方は、北武蔵から上野東南部域の利根川両岸の同種遺跡の動向を背景にしつつ井野川中、下流域の開発の在り方を索す重要な資料であると言えるのである。

そこで、まず第一に、元島名将軍塚古墳で示される様な石田川式土器文化の定着がどの様な土器文化の変遷の結果として現れるのかを分析しておかねばならない。そのために周辺遺跡の土器様相をまず示さねばならない。

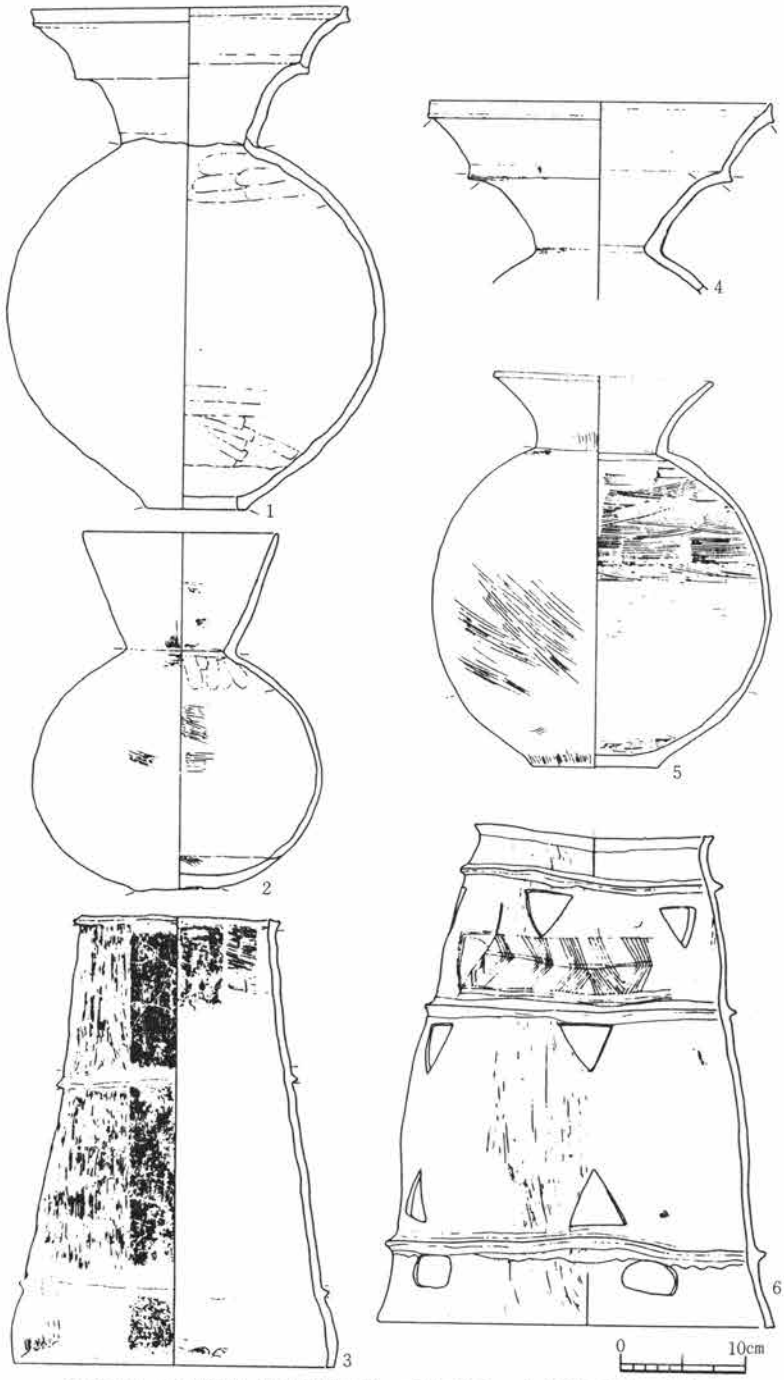
1．井野川下流に点在する各遺跡における土器様相

(1) 下郷遺跡における土器様相（第118図－1～23）（第119図－1～6）

下郷遺跡は、佐波郡玉村町下郷（旧群馬郡八幡原村）に所在する方形周溝墓と古墳を中心とした遺跡である。井野川が烏川に合流する地点、井野川左岸にあたる。S字状口縁台付甕と複合口縁壺の組み合わせによる。いわゆる石田川式土器文化中心に属する遺跡地である。本稿ではその内SZ22（第118図－1～5）、SZ16（6～8）、SZ26（9～11）、SZ04（12～14）、SZ01（18～20）、SZ09（24）、SZ42（21～23）、前方後方状周溝墓、及びSK39（特種器台と壺 第119図－1～3）、SZ46（天神山古墳 第119図－4～6）を取り上げている。SZ04は溝下部にF・A堆積層が認められ、かつ東に接し、SZ04に先行するSZは封土に葺石を築いているようだ。また、SZ46、SK39の遺物は特種器台と複合口縁壺の組み合わせであって、SK39は壺を乗せたまま転倒した状況であり、内に長頸壺を入れ重石に使用していた状況であり、明らかに墓域を画する埴輪である。当遺跡西側約0.5kmが八幡原遺跡群であるが、当遺跡と一連と考えて良いであろう。



第118図　下郷遺跡出土遺物　SZ22(1～5) SZ16(6～8) SZ26(9～11) SZ04(12～17) SZ01(18～20) SZ42(21～23) SZ09(24)



第119図　下郷遺跡古墳関連遺物　SZ39(1～3)SZ46(4～6)

(2) 八幡原遺跡（第120図）

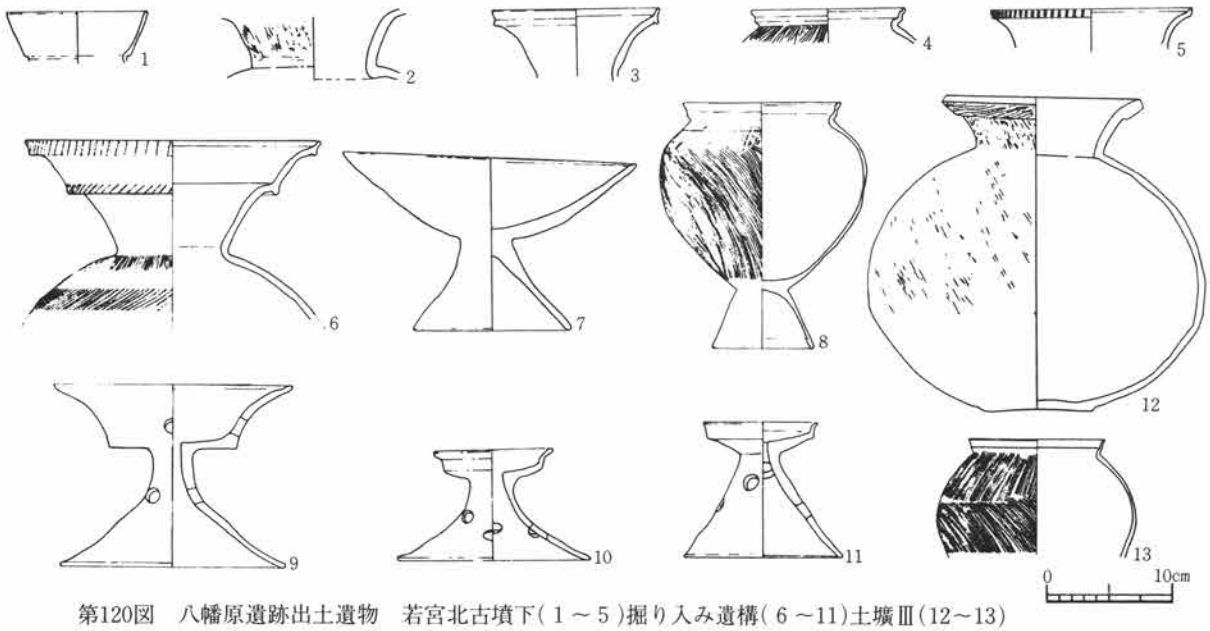
八幡原遺跡は、下郷遺跡に続く烏川左岸崖上の古墳群と、その西井野川左岸崖上の古墳群と集落址等の遺跡群を言う。本稿で扱う資料は、井野川左岸にある遺跡で、滝川南部土地改良事業で調査した資料(註7)である。若宮北古墳東西トレンチとは、若宮神社北にある小型の前方後円墳の墳丘断ち割り資料で墳丘下黒色土中より出土したもの。当古墳は舟形石棺を主体部としていて小型造り出しを有する。土壙Ⅲは、同古墳周溝内で検出したものである。また掘り込み遺構とは、この若宮北古墳より北約400m地点において検出された。土器放棄、土器溜りの如き遺構で、一部にローム層への掘り込みが認められたが性格不明。掘り込み内に土壙も検出されている。

(3) 滝川C遺跡（第121図）

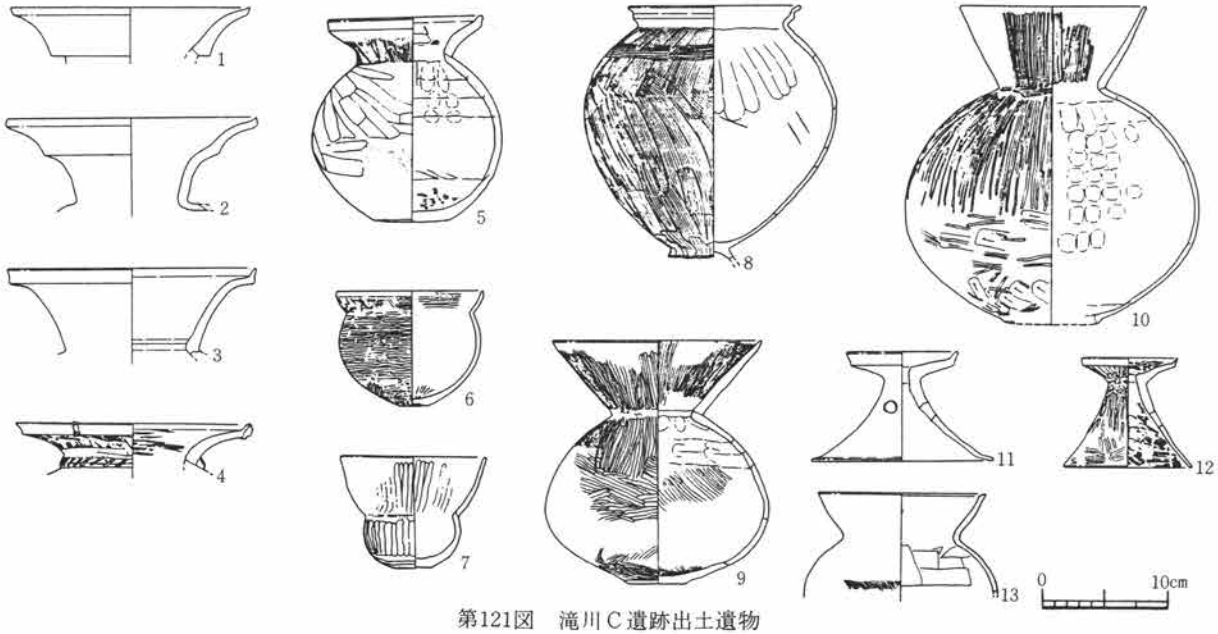
これは、本書において報告するので詳細は省くが、注意するべき点について列挙しておきたい。遺物の多くはF・A堆積層下の黒色土表面に散在した資料である。一部には小型土壙がありS字甕が埋納されていた。また、内彎させて口唇部端をやや肥厚した小型壺（第121図－13）は明らかに布留式土器（新）に属するものであって、S字甕の下限を示す資料にもなろう。

(4) 綿貫遺跡（第122図）

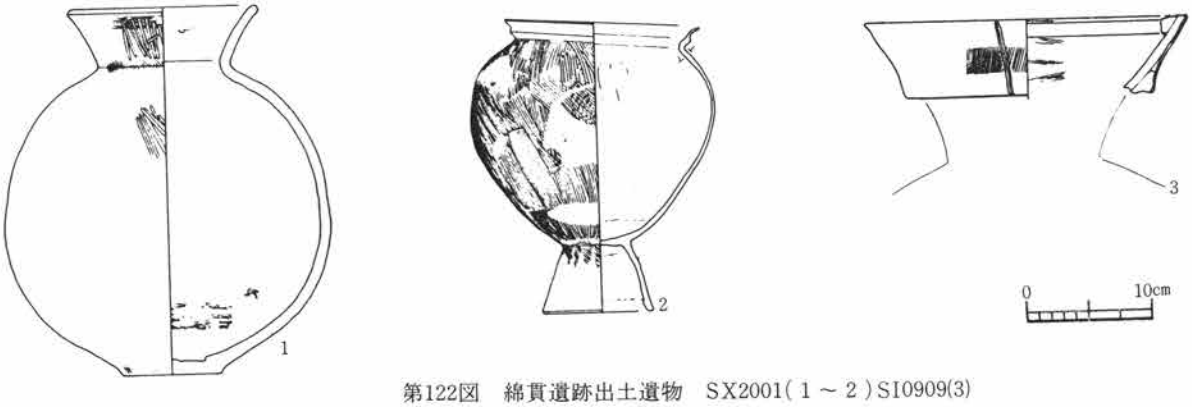
綿貫遺跡は井野川が烏川に合流する地点より奥に約2.5km程入った地点である。東西幅約1.1kmの沖積地地内自然堤防上微高地にある。両岸は3～5mの段丘崖をなしている。八幡原遺跡の西北約2km程である。この微高地は綿貫観音山古墳、不動山古墳（大型前方後円墳、箱型石棺、造り出し）、二子山古墳（竪穴系主体部、前方後円墳、平夷）を核とする大古墳群域にあたる。古墳の間をぬって、集落址が点在している。本稿は観音山古墳の北側を土地改良事業した折りの調査資料である。(註8) 方形周溝墓2001、住居址0909とも



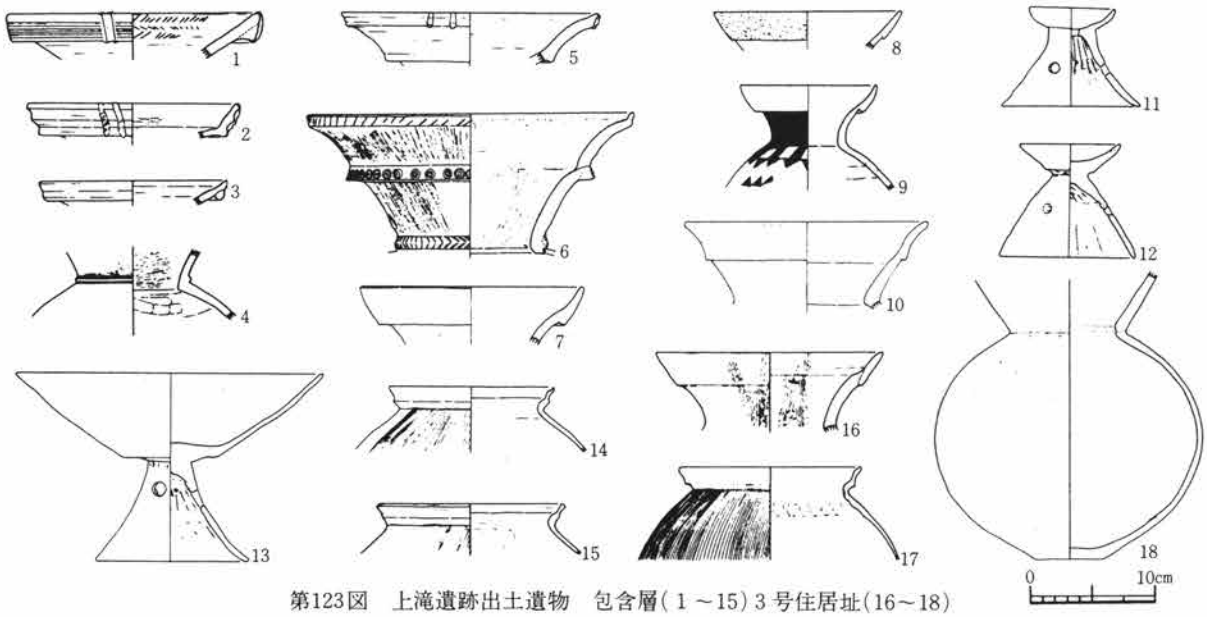
第120図　八幡原遺跡出土遺物　若宮北古墳下(１～５)掘り入み遺構(６～11)土壙Ⅲ(12～13)



第121図　滝川Ｃ遺跡出土遺物

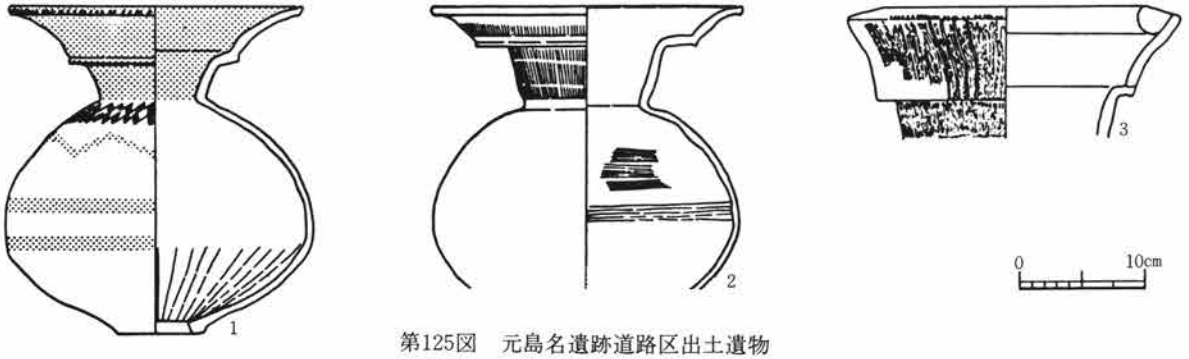


第122図　綿貫遺跡出土遺物　SX2001(１～２)SI0909(3)



第123図　上滝遺跡出土遺物　包含層(1～15)3号住居址(16～18)

第124図　元島名将軍塚古墳出土遺物(K—L)トレンチ



第125図　元島名遺跡道路区出土遺物

に観音山古墳より北方約70ｍ程の地点で、井野川右岸崖上に当たる。

集落址、方形周溝墓ともにＳ字甕を伴う石田川式土器の時期である。３号住居址内に（第122図－３）の様な口唇部内側を肥厚させる特殊な壺型土器を含んでいる。駿河湾岸の古墳時代初期遺物（註３）に含まれていることから、即断は許されないが、布留式土器の影響を受けたものではなかろうか。

(5) 上滝遺跡（第123図）

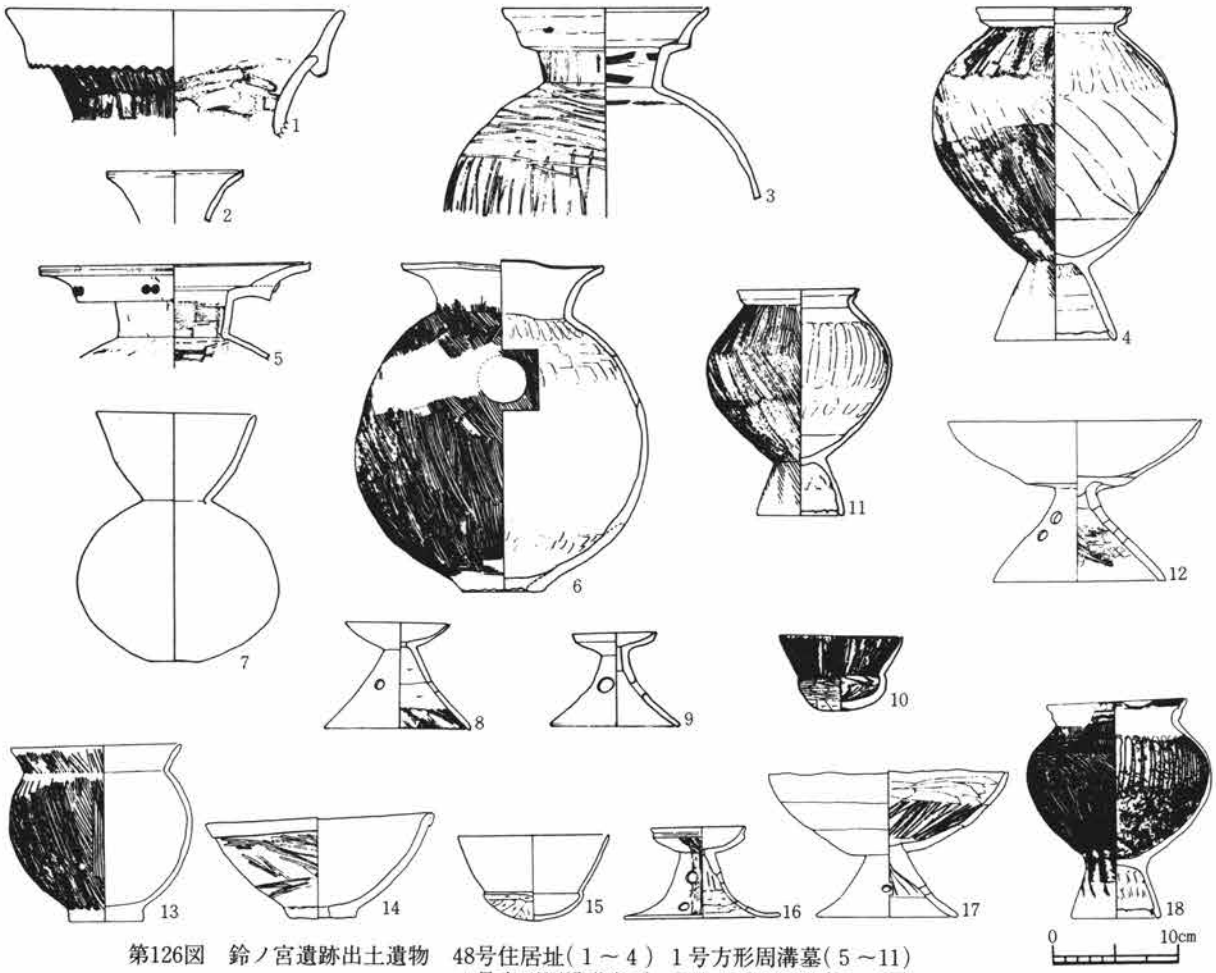
上滝遺跡は、元島名将軍塚古墳の東約100ｍの地点である。この遺構は遺物包含層と住居址、溝遺構とであった。溝遺構は鬼高Ⅰ式土器群を多量に入れている。包含層及び住居址の一部は石田川式土器を含めて、その多少前後の時期に属する土器が混在している。関越自動車道用地内の遺跡である。（註10）

(6) 元島名将軍塚古墳（第124図）

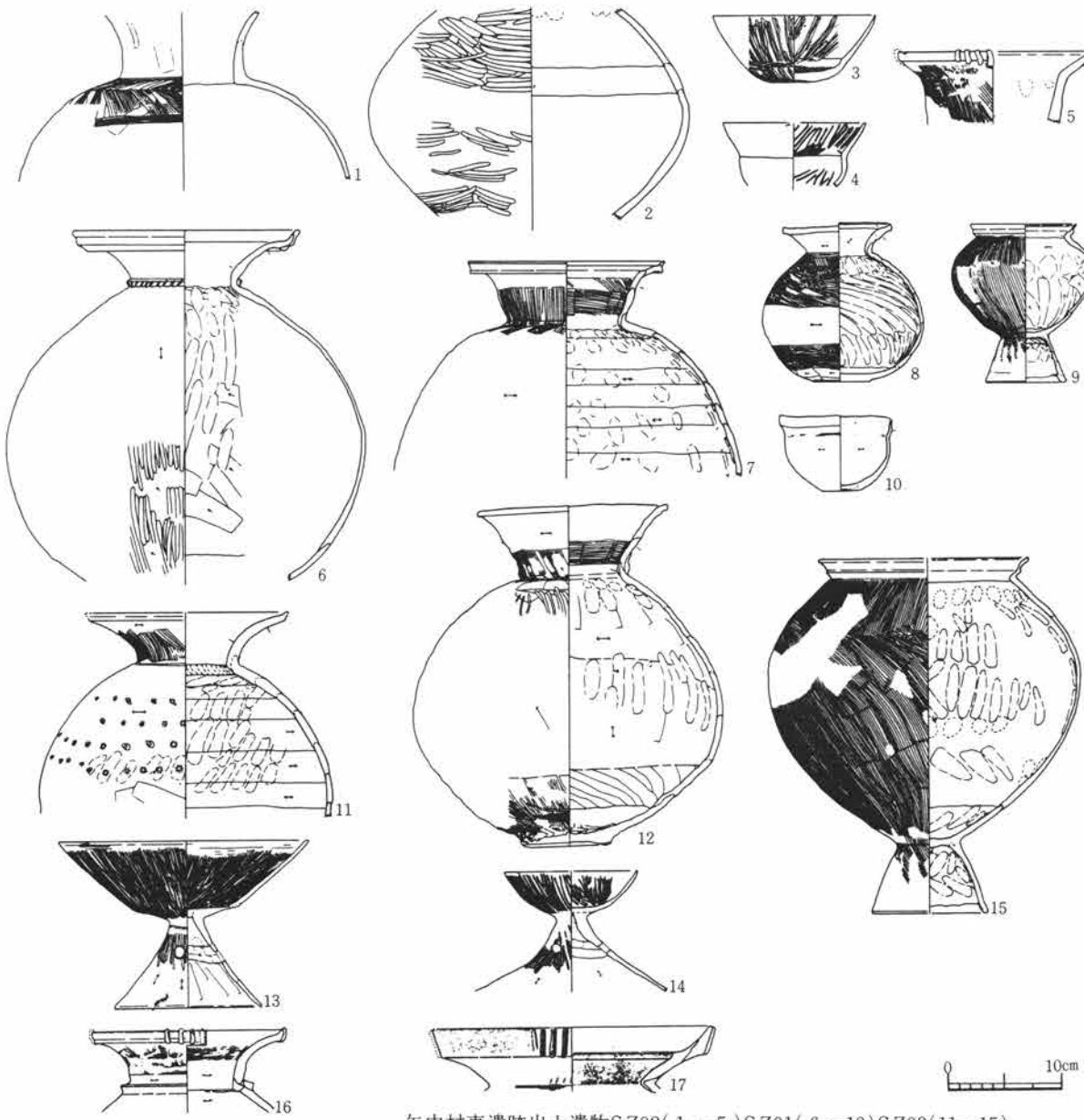
元島名将軍塚古墳は、昭和54年に周濠部を含めた小規模圃場整備事業の折りに、周濠と墳丘の一部について発掘調査を実施した。（註11）前方後方墳の墳形の確認とともに、不規則な周溝を確認し、周溝外に溝や土壙等古墳に付属すると思われる遺構も検出している。本稿の資料は、周溝に設置したトレンチ出土遺物に限り提示した。なお、主体部はすでに掘られ、遺物は東京国立博物館に、遺骨は岩鼻町観音寺に納められたというが今は紛失して無い。

(7) 元島名遺跡（第125図）

井野川左岸、元島名将軍塚古墳北西約1.2㎞付近に位置する。４～５ｍ程の段丘崖直上の遺跡である。対岸は縄文時代、弥生時代後期、古墳時代の各遺構の存在する万相寺遺跡である。元島名土地改良事業関連の発



第126図　鈴ノ宮遺跡出土遺物　48号住居址（１～４）１号方形周溝墓（５～11）
４号方形周溝墓(12)　７号方形周溝墓(13～18)

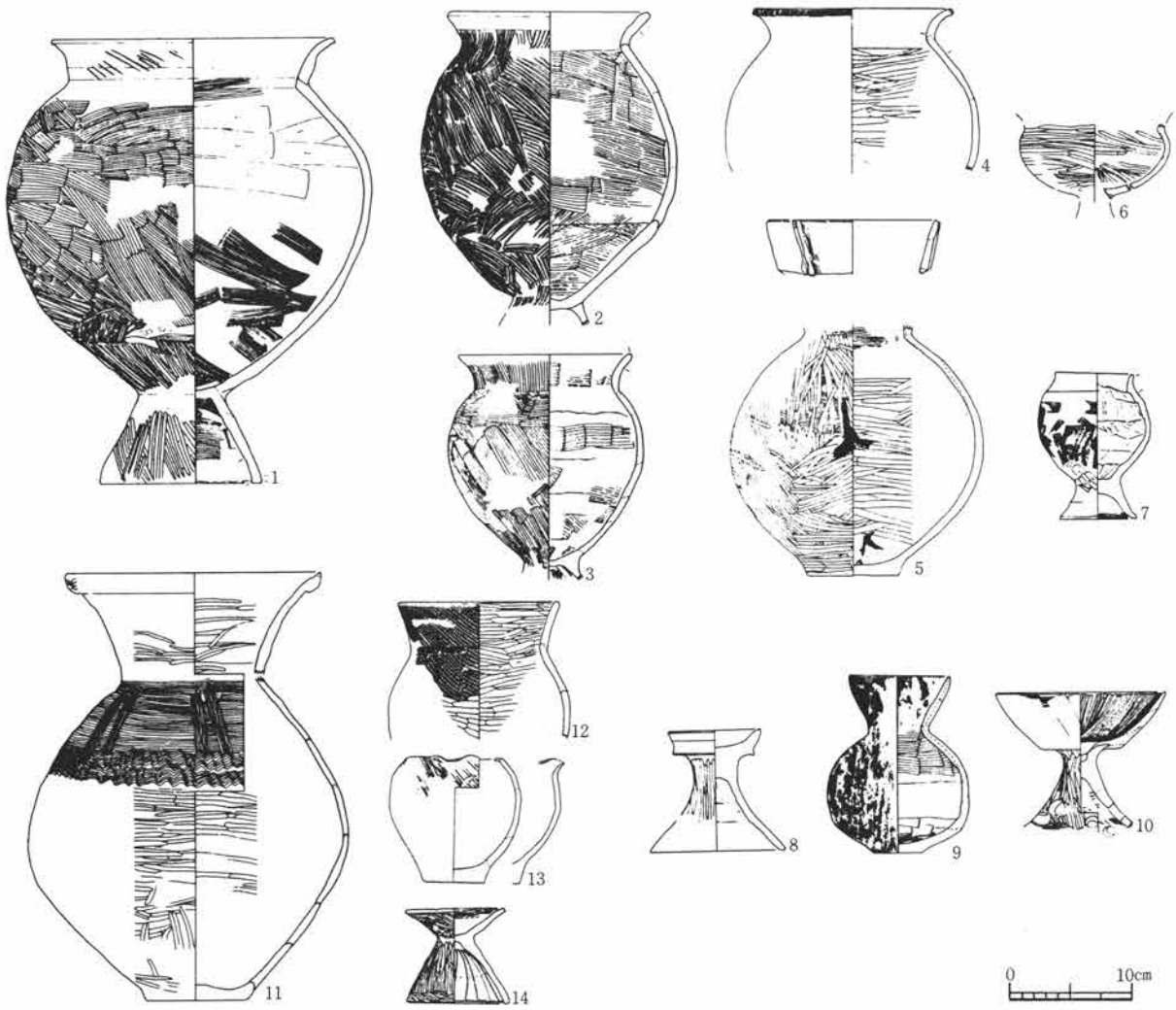


第127図　矢中村東遺跡出土遺物ＳＺ02(１～５)ＳＺ01(６～10)ＳＺ03(11～15)
矢中下村北遺跡出土遺物(16･17)

掘調査資料である。(註12) 道路Ⅰ区調査区における掘り込み状遺構内出土の遺物であるが、掘り込み状況を考えると大形の前方後方状周溝墓ではないかと考えられる。大和盆地系壺型土器と受け口状口縁と口唇部を肥厚する壺型土器が出土している。鈴ノ宮遺跡の方形周溝墓群に続くのかも知れない。

(8) 鈴ノ宮遺跡（第126図）

井野川左岸で元島名遺跡の西約0.4kmにある。５ｍ程の段丘崖上に展開する。この遺跡は弥生時代後期樽式住居址を始め、平安時代までの複合集落である。また、これ等住居址と重複しながら多数の方形周溝墓群が発見された。その内には、円形周溝墓、古墳址及び前方後方状周溝墓（１基）が含まれている。重要な遺跡であるが本報告書が未刊であるので、概報に提示された遺物で検討資料とする。(註13) 48号住居址（第126図）はＳ字甕と大和盆地系壺型土器（第126図－２、３）と折り返し系壺型土器の口縁よりなる。１号方形周溝墓（第126図－５～11）は、坩、器台型土器、複合口縁壺の組み合わせに代表される。壺型土器の装飾性と器台



第128図　上大類北宅地遺跡　３Ｘ１

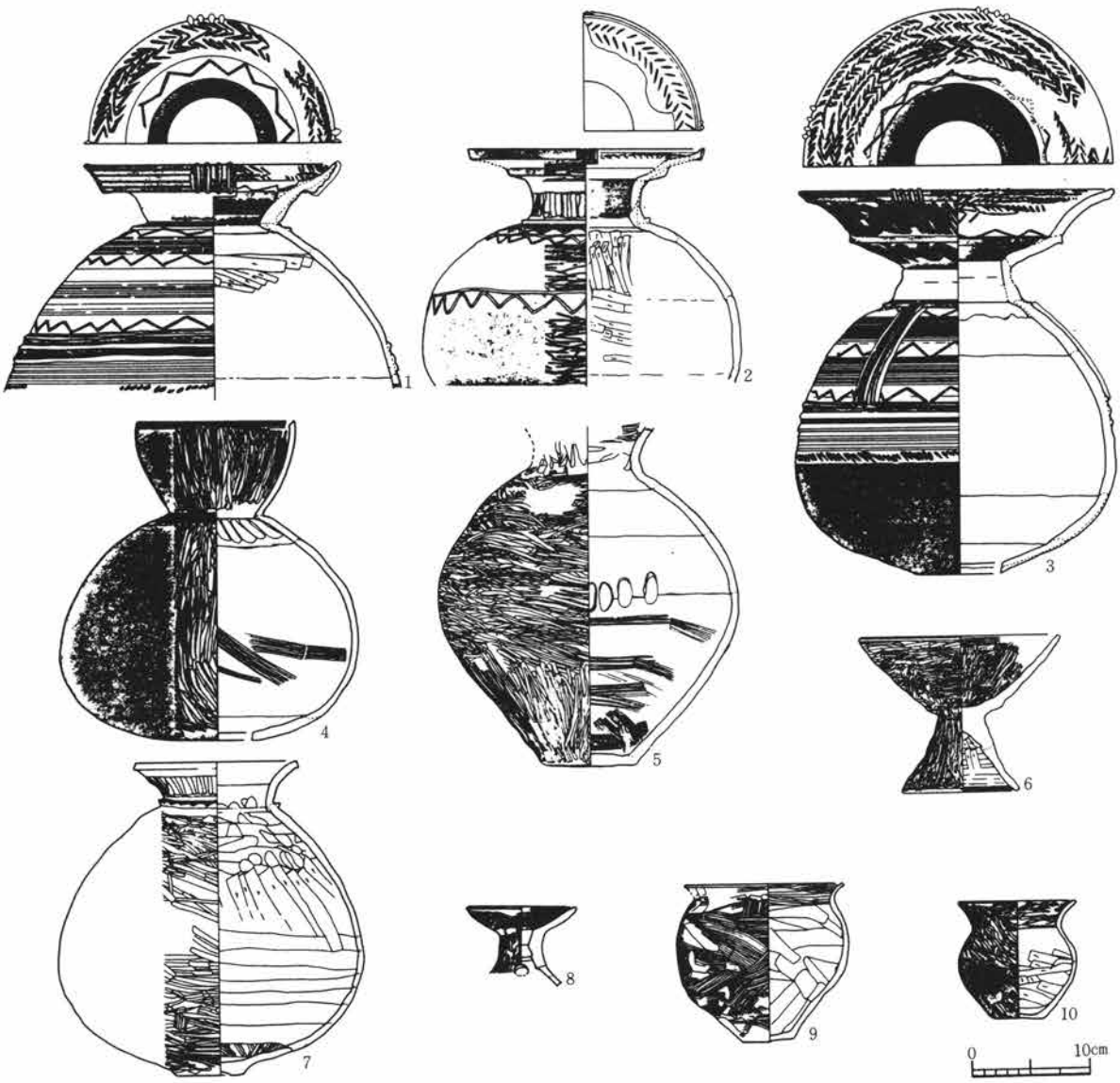
型土器の複合口縁化しない状況と瓢型壺（第126図－７）は時期決定上注意を必要とする。４号方形周溝墓は、高坏型土器一例である。但し、周溝中にＣ軽石の混入が指摘されている点を注意したい。７号方形周溝墓（第126図－13～18）は、前方後方状周溝墓である。坩、器台型土器の儀器化が進んだ状況を示す資料であり、各器種の口縁部はＳ字口縁か複合口縁か判別不可能な型（第126図－16）が定着した時期にも当てられる。

(9)　矢島竹ノ内遺跡（註14）

矢島竹ノ内遺跡は、鈴ノ宮遺跡より段丘崖に沿って約250ｍさか昇った地点にある。都市計画道路の16ｍ幅内に方形周溝墓群の一部３基が検出できた。方形周溝墓は、井野川段丘崖直上の自然堤防状微高地（幅20～30ｍ）上に弥生時代中期住居址等の遺構と重複して存在する。いずれも石田川式土器に分類できるものである。

(10)　矢中遺跡群（第127図）

矢中遺跡群は、井野川沖積地右岸に存在する。河岸段丘は２ｍ前後と小規模なものになっていて、この付近から川の侵食が目立つ地形となる。沖積地を横断すると約1.5㎞に元島名将軍塚古墳がある。この段丘上は、正始元年銘銅鏡を出土した柴崎蟹沢古墳を始めとする小形の古墳群となっている。検出遺構は方形周溝墓のみで約13基が確認できている。この内土地改良事業によって調査したものが９基であった。（註15）市立矢中中学校東側（註16）で発見された方形周溝墓の資料を提示した。その後確認できた方形周溝墓の遺物は、鈴



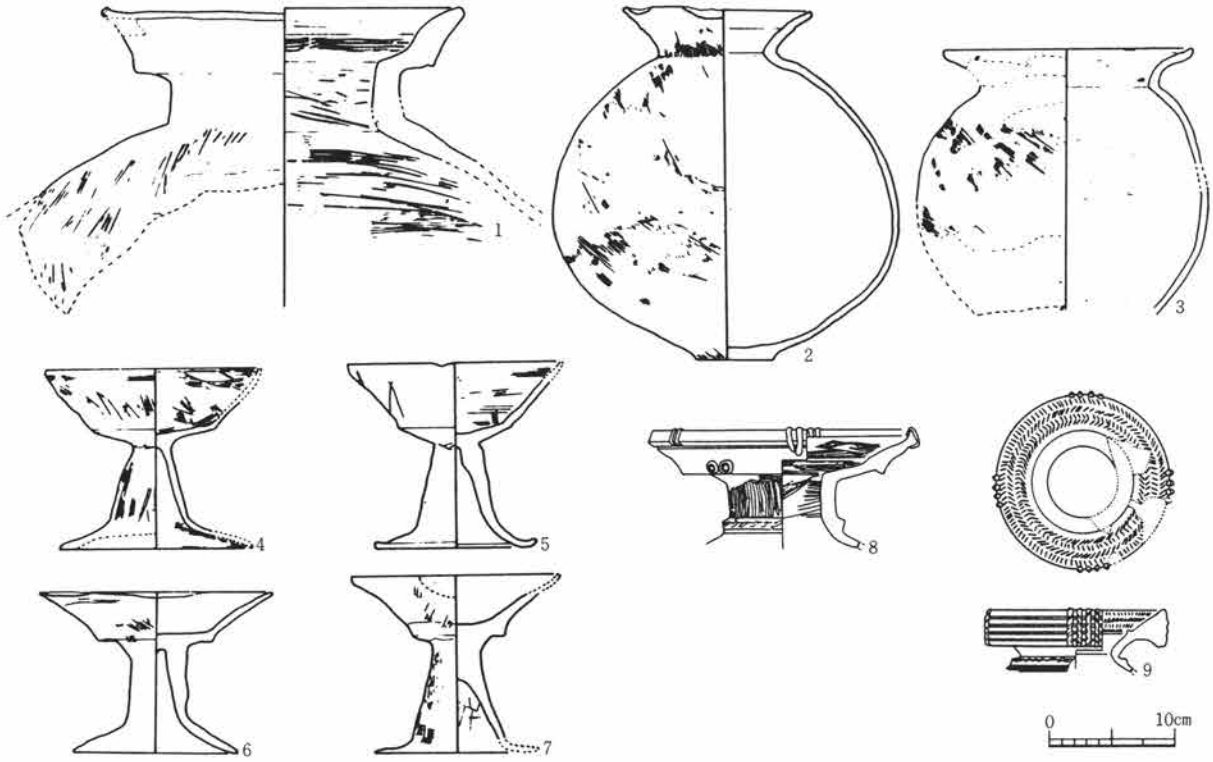
第129図　貝沢柳町遺跡出土遺物　1号方形周溝墓(1～4)3号方形周溝墓(5)2号方形周溝墓(6～8)

ノ宮7号方形周溝墓、下郷SX04相当の遺物を伴出している。本稿資料のSX03あたりの時期の方形周溝墓の数が多いようである。遺物はS字甕を中心としながら、伊勢湾岸の弥生時代末から古墳時代初期の土器群の影響下にあると認められる（第127図－3、4、6、7）遺物群と、大和盆地系というよりは、古墳時代初頭に位置する土器（第127図－2、8、10、11）が認められる。

(11) 上大類北宅地遺跡（第128図）

当遺跡は、井野川右岸、即ち井野川沖積地の北端の堤防上微高地に位置する。井野川左岸段丘は、この付近で消えてしまう。この微高地は南東の宿大類遺跡、下大類万相寺遺跡へと続いている。北は貝沢遺跡群へ続いて行き、当遺跡は地形からの区分をするとすれば、貝沢遺跡群の南限と考えても良いであろう。貝沢遺跡群は井野川右岸の自然堤防状微高地に位置するもので、5世紀代の聖天山古墳、前方後円墳五霊神社等の小形古墳群、貝沢柳町遺跡（方形周溝墓と埴輪棺墓）、上大類薬師遺跡（註17）及び当遺跡における弥生時代末頃より奈良・平安時代に及ぶ集落址が点在する。

当遺跡は市営住宅建築に際し偶然に発見され調査した遺跡である。古墳時代から平安時代の集落（これは



第130図　新保田中遺跡出土遺物　右岸旧河道（１～７），左岸小型水田址下資料（８・９）

上大類薬師遺跡に続く）とその南の方形周溝墓と弥生時代後期住居址に別れる。本稿では弥生末から古墳時代初期に係る方形周溝墓3X01を使用した。（註18）

⑿ 貝沢柳町遺跡（第129図）

上大類北宅地遺跡の北約380ｍで聖天山古墳に近接する。貝沢遺跡群のほぼ中央に位置すると言える。この付近の自然堤防状微高地は東西50～60ｍで、一番高い西寄りの土地に当遺跡は営まれている。16ｍ都市計画道路に４基の方形周溝墓と２本の円筒埴輪棺墓が検出された。（註19）各方形周溝墓から発見された遺物は伊勢湾岸における弥生時代末の土器様相に酷似する。特に１号方形周溝墓の壺型土器（第129図－１）は、施文及び器形が欠山期における大和盆地の複合口縁壺型土器との混合、中間土器としての形状を良く示す資料といえる。また、瓢型壺（第129図－２）高坏（第129図－３）も指標となると思える。また頸部に凸帯を巡らし櫛状工具による刺突をつける単口縁（口縁部端に平面をつける）壺（第129図－８）もその代表器種となる。また、これ等の壺型土器のフォルムや器台型の形状等は未だ弥生時代の状況を良く示している。但し、注意しなければならないのは、台付甕が共存していない点と、１号方形周溝墓の壺型土器（第129図－４）、３号方形周溝墓の小型甕型土器（第129図－５）は、当地方の樽式土器の要素に共通する部分が認められることであろう。

⒀ 宿大類村西遺跡（註20）

井野川右岸の沖積地内自然堤防上微高地に位置する。この付近から右岸の低地段丘が発達する様になる。右岸万相寺遺跡、上大類北宅地遺跡、左岸矢島竹ノ内遺跡、鈴ノ宮遺跡とはほぼ２㎞の等距離内にある。土地改良事業によって調査できた遺跡であるが、石田川式期に属する方形周溝墓が２基及び樽式土器伴出住居址、古墳時代住居址等が存在する。

⒁ 新保及び新保田中遺跡（第130図）

榛名山体より流出する染谷川が、山麓及び扇状地帯を流れ下り、平坦地へ流れ出て氾濫地帯を形成し始め

る地点が、日高、新保、新保田中町付近である。

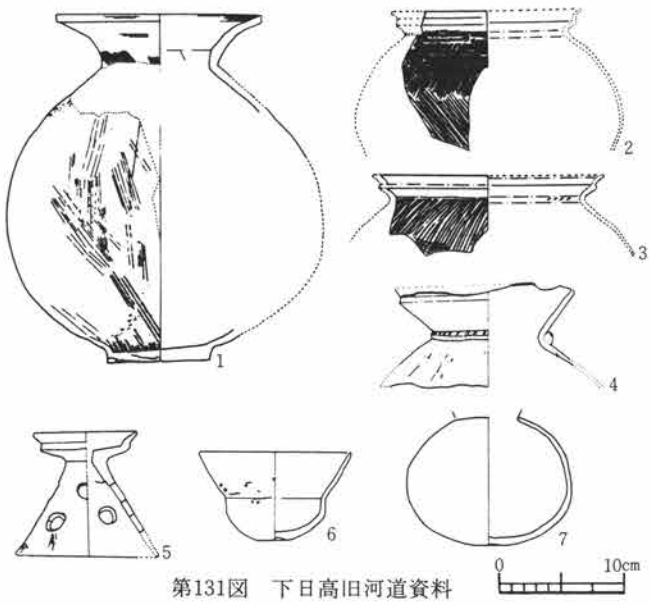
旧河道や開析谷及び小規模な低い沖積地と自然堤防が複雑に入り組んでおり、低地を水田に、微高地を居住域、墓域にしている。この地域が生活の場に利用され始めたのは中期末（註21）頃よりで後期になると方形周溝墓群、水田等が出現する。引き続いて古墳時代初期の村落へ続いてゆくが、6世紀初頭の榛名山二ッ岳瀑発によるF・Aの厚い降下と続発する洪水によるF・A泥流はこの扇状地先端の氾濫低地をほとんど埋め尽くしてしまうのである。遺跡は関越自動車道（註22）、染谷川改修工事（註23）、土地改良事業（註24）で競合しており、土地改良以外は報告書が刊行されていないので不明な点も多い。方形周溝墓は、土地改良新保田中遺跡の資料（註25）が示すように樽式土器の時期である。また、F・A被覆小型水田土壌となっているC軽石混合又はC軽石堆積上の黒色土に包含される遺物群は染谷川右岸の旧河道出土遺物（第130図－1～7）及び左岸小型水田下包含層出土資料（第130図－8・9）で概略示されるであろう。旧河道出土遺物は、S字甕の多数の破片と高坏型土器と器形復元の無理な壺型土器群（西岸）と受け口状口縁大型壺破片（東岸）は、F・A降下にも近い、和泉期にも入る遺物であろう。が、左岸小型水田址下では、伊勢湾岸の弥生時代末から古墳時代初期（欠山期～元屋敷期）及び畿内第Ⅴ様式後半期から庄内式時期に比定できる円形貼付文をつけた複合口縁壺及び手焙形土器破片等が相当数出土している。

⒂ 下日高旧河道資料（第131図）

日高弥生水田、集落の東南約0.2kmに位置する。染谷の旧河道と推定され、C軽石堆積層上に薄い黒色土層を挟んで土器、木材等多数を検出。F・A降下堆積層は厚い黒色土帯を挟んで上部に堆積する。日高遺跡水田址と同様。小型丸底壺、坩、B種器台のセットがある。壺は土師の単口縁系（第131図－1）に混じり、伊勢湾系固焼きの壺（第131図－4）を含んでいる。（註26）

以上の、15事例の出土遺物を観察すれば、いわゆる大和盆地にその母胎を見いだせる土器群（大和盆地系土器群）と、東海西部から伊勢にかけての伊勢湾岸域土器群（伊勢湾系土器群）及び東海東部、関東南部域の特色を示す土器群に大別できる。が、各々の地区の土器は多少の差はあっても互いに混在する傾向があり、それが石田川式土器で示せる斉一性の高い土器セットに近付けばその混合度が高い傾向にある。その中でS字甕と単口縁台付甕は相接する文化圏に共通するセットとして存在してしまっている器種である。

これらの条件を整理し土器様相を概念的に整理したのが表40である。



第131図　下日高旧河道資料

大和盆地系土器群では、壺型土器A種（二重口縁壺型土器）壺型土器B種（二重口縁の上段を取り除いた型で、口唇部をつまみ上げ、立ち上がり面を造る。外面に凹みが認められる）、小型丸底壺型土器、坩と二重口縁器台型土器に代表させ、やや後出的要素である特種高坏型土器を含めた。伊勢湾岸系土器としてはS字型口縁台付甕A種（肩部に横線のないもの）とS字型口縁台付甕B種（肩部に横線を付けるもの）、壺A（パレス型壺を示す。A種土器は口縁部の状況から更に2種に細分できる。第一は口縁を緩く外反させ端部に粘土帯を付け外平坦面に沈線をつけ、棒状浮文を

3本程度張り付け、口縁内側に櫛刺突による羽状文また頸部下位に凸帯を付け、上面に櫛による刺突文を付ける。第二は大和盆地系二重口縁型壺と伊勢湾パレスとの混合中間型である)、壺型土器B種（壺Aの1のパレス型口縁を基本としているが、口縁部をそのままつまみ上げて小さい平面を作り、棒状浮文を貼付する。全体的に固焼きで無文傾向にあり小型器が多い様である。後出的壺型土器か否かは検討の余地がある)。そして瓢型土器の組み合わせを代表させておきたい。東海東部（この分類は、考古学ジャーナル「入門講座弥生土器」また、1986年第3回東海埋蔵文化財研究会「欠山式土器とその前後」シンポジュームによる用語を利用）と関東南部は弥生後期土器様相の類似する点もあり広い意味での同一文化圏とした。台付甕は、単口縁台付甕（長胴、球胴）で東海西部の伊勢湾でも認められ、S字甕とも共存している。大和盆地系、樽系土器と対比できる器種である。壺型A種は、受け口状口縁壺をもって示す。幅広い直立する口縁を特色とする。南関東での弥生町時期以降に平行関係にある土器群。壺型B種は、折り返し口縁壺を代表的に取り上げた。壺A種には、口唇部端を内側に肥厚する特殊な器種（註27）も含めている（表40▲記号)。

この土器組み合わせの表の傾向を前述したように「石田川式土器文化の完成」という最終段階に至る経過を理解する資料とするには幾つかの視点とその特色を挙げねばならない。

まず、第一に挙げるのは、S字甕の存在状況である。出土遺物の各数が大和盆地系遺物という現状にあって、それに匹敵する量を大和盆地系土器群に混ざって出土するのがS字甕である。S字甕は、伊勢湾岸の中期末高蔵式土器の派生発展した器種であり、本来的に伊勢湾岸の土器とセットとすべきであるが、現実の土器混入傾向にあっては、S字台付甕のみが非常に多量に出土するのである。それは、尾崎が設定した石田川式セットがS字甕と大和盆地系土器の混合体であるように、(註28）群馬県西部におけるS字甕は、伊勢湾岸土器群としてセットで伝播したのではなく、「大和盆地系土器＋S字甕」というセット関係において伝播したものと理解するのが妥当と考える。S字甕と大和盆地系土器の混在については、すでに昭和49年の考古学雑誌（第60巻第2号）等において安達、木下の整理発表しているところであり、接触上限は庄内式土器の古段階と欠山式土器の新段階を結ぶ資料として提示されている。

第二に挙げるのは伊勢湾岸系土器群の動向である。まずS字甕は、大和盆地系土器群に吸収されていて論外にして置かねばなるまい。次ぎは壺型土器B種の混在度が高いということと、その一部において伊勢湾岸系土器群を代表する壺型土器A種が混入している特色である。壺型土器A種とB種を見比べると、壺型B種は小型器種が多いこと、固焼き仕上げ、球形胴、全体的な無文化現象、口唇部手法がS字口縁なのか二重口縁なのかパレス型口縁の退化型なのか不明確、等の特徴が見られ器種自体の母胎は伊勢湾岸にあったとしても大和盆地系の強い影響下に成立しているという後出的要素がある土器である。次ぎに、壺型A種は伊勢湾岸のパレス型壺の特色をよく残している。そしてA種は伊勢湾本来型との中間型土器の混在が認められる時期があることも特徴である。但し、この系統の内に含ませた貝沢柳町出土遺物は第129図で示すようにその壺型土器は、伊勢湾岸の特色を良く出しているし、高坏型土器、瓢型土器等の組み合わせは大和盆地の強い影響力は認め難い。一口に伊勢湾系の土器と言うが、その組み合わせに微妙な差異が認められることに注意せねばならない。

第三に指摘するのは、関東南部、東海東部土器に類似する土器群である。群馬県においては、東部の太田市、邑楽郡域に出土例が認められるが伊勢崎市以西においては激減してしまっている。但し、いわゆる関東南部の土器文化は、近畿からの土器文化伝播の中にあっても独自性を守りながら前野町、五領式という土器文化を造りあげ、石田川式の様に近畿地方の土器様相に全面的に属さない傾向があろう。また弥生町期土器と北武蔵の吉ケ谷、岩鼻式土器群との関係、また赤井戸式土器の成立等、関東地方における弥生時代後期の動向

も注意しなければならない。

この状況を類別化し、該当する遺跡を挙げると

Ⅰ類……大和盆地系土器＋S字甕を基本として、少量の折り返し口縁壺を含む。

下郷遺跡（古墳）、八幡原遺跡、将軍塚古墳トレンチ、元島名遺跡、鈴ノ宮遺跡、下斉田遺跡1号住居址

Ⅰ類亜種…大和盆地系土器＋S字甕＋伊勢湾系壺B種の組み合わせを基本として、少量の折り返し口縁壺を含む。

下郷遺跡（方形周溝墓例）、矢中遺跡（方形周溝墓）、下日高河道資料

Ⅱ類……大和盆地系土器＋S字甕＋伊勢湾岸系土器を基本として、少量の折り返し口縁壺を含む。

滝川C遺跡、上滝遺跡、矢中下村北遺跡、新保田中遺跡及び新保遺跡

Ⅲ類……伊勢湾系土器セット、一部土器に岩鼻系また樽系土器と共通する要素が認められる。

貝沢柳町遺跡

Ⅳ類……東海東部また関東南部系土器を基本として、一部に岩鼻式土器、樽式土器を含む。

上大類北宅地遺跡、下斉田遺跡（Ⅰ群）2号住居址、8号住居址、20号土壙

この遺物群の分類は下斉田遺跡が当地方の弥生時代後期の変動期に突入する時期に当たる重要遺跡であることを示している。そして、近畿系土器文化の急激な進出と発展の谷間で、20号土壙、方形周溝墓を造り、石田川式土師の成立期には1号住居址が存在するように細々と伝統を守り、継続してゆく意味は何であろうか。

2．弥生時代末から古墳時代への過渡期における下斉田遺跡の位置付け

下斉田遺跡における土器の状況は前節で示したように、弥生時代の伝統を強く残しているⅠ群と、古墳時代初期の様相を示すⅡ群に大別できた。が、根底には、折り返し口縁壺型土器と、単口縁広口台付甕の組み合わせによる土器文化は変化していないという独自性を保持しつつ変化している特質を持っている。大和盆地系土器群が優勢を誇るこの変遷期においてこの遺跡が単独に歩んでいる状況を理解するには、この時期の社会変化のある部分を投影する土器様相の変化を理解して対比する必要があろう。

前節で示したように井野川下流域の、土器様相はⅠ類、Ⅰ類亜種、Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅳ類の5種に大別できる。この分類の内、Ⅰ類、Ⅰ類亜種は、次代の古墳時代へ直接接続して行く、というよりは、古墳時代社会へ突入してしまった時代の土器群にほかならない。遺跡数と遺跡の内容を考えてもこの地方が大和盆地系土器が代表する文化が極めて強い力で広範囲に定着していることを示すものであって、墓制に限定して各遺跡の状況を検討しても、元島名将軍塚古墳や、下郷天神山古墳及び柴崎蟹沢古墳が示すような大小の首長墓を頂点とする方形周溝墓群を成立させるほどに氏族内が充実していることが認められ、その発展の基盤はその土器が示す大和地方の強大な政治力を推定せざるを得ない。F・A降下までにはまだ幾らかの時間的な空白期が存在する時期である。Ⅰ類やⅠ類亜種の土器文化に対してⅡ群、Ⅲ群が示す伊勢湾岸系土器の混在は東国開発に係わる大和盆地系文化が単独の力ではその事業の遂行が不可能であり、伊勢湾岸系文化との結合を持って初めて成立したとの経緯を反映していると見ることが可能であろう。即ち東国の開発に際して伊勢湾岸地域が基地として重要な位置を占めていたことを示すものである。但し、Ⅱ類に該当する遺跡がいづれも包含層という、土器セットを分析する上での欠点を持っていることを忘れてはならない。が、次に示すⅢ類の内容のように大和盆地系土器文化と伊勢湾岸系土器の融合した中間土器が存在せず両土器文化がそのままの形で一団となっている状況は、大和盆地系土器群の絶対的優位性は存在するとしても、まだ伊勢湾岸系土器文

化を吸収する形でないと東国の経営が成立しないことを物語る。

一方、貝沢柳町遺跡における遺物セット（Ⅲ群）では、その文化母胎が伊勢湾岸土器文化にあることは明らかである。貝沢柳町の土器は、壺A種において、純粋なパレス型壺型土器（第129図－１）と大和盆地系壺型にパレスの施文を施す中間型土器（第129図－３）が認められて伊勢湾岸系土器文化に大和盆地系文化の影響が及んで伊勢湾のそれと同化する時期、壺型土器に見るならば欠山式後半頃から元屋敷式の古段階に比定することが可能であろう。（註29）また、当遺跡がC軽石降下時に極めて近い状況を示している点留意して置かねばならないし、一部に樽式土器文化の影を見いだせる土器（第129図－５・10）に注意したい。

この５種の土器群の様相は、浅間山が爆発してC軽石が降下する時期よりやや古い時期に、伊勢湾岸系土器造りの極めて強い影響下にある人々によって井野川中流に開発が開始され、古墳造りが本格化する時期までの井野川流域の開発史を投影していると言える。

その概念的な変遷を示すとすれば、

◇　最終段階

大和盆地系土器群の圧倒的な増加と遺跡の広がり、それに伴って初期的古墳が各地に営まれる。この時期にS字甕が必ず伴出するが、これは大和盆地へ移入したS字甕が、大和盆地土器群を構成する一器種として同化されてしまった段階であると理解するのが妥当であろう。この段階では大和盆地政権の直接的指導下に古墳造りの様な具体的行為を通して井野川流域の社会が再編成され、大和盆地政権の支配下へ各々が組み込まれて行く時期であろう。

◇　前段階

圧倒的な大和盆地系土器群を核としながらも、伊勢湾岸系土器の混在が認められる時期、伊勢湾岸系と言っても壺B種が主であって、装飾性の低い壺型土器と言え、大和盆地系複合口縁壺に比べて精神的価値感は低いものであろう。大和盆地系政権による東国経営において、伊勢湾岸系地方が果たしてきた役割の一部が未だ残っている段階を示す。即ち大和盆地系政権が東国経営を行うに当たり、その門戸である伊勢湾岸地域の人々の力を借り、東国進出の基地とする価値が減少してきたと考えられる。

◇　前々段階

大和盆地系土器群と伊勢湾岸系土器群の混在時期であるが、土器文化の混在ではなく、大和盆地系土器群に伊勢湾岸系土器群が共伴する形をとっており、東国経営に当たり、伊勢湾岸系文化を取り組んで、その地を基地化しての結果と考える。弥生時代末の関東地方は、各文化圏が安定した相互関係を保っていて、大規模な移動の認められない社会状況である中に、大和盆地系勢力が進出するには、伊勢湾岸文化の力を利用しなければならない状況にあったと解せよう。貝沢柳町遺跡の例はその先触れとして理解しておきたい。

◇　初期段階

樽式土器文化圏に接する土器文化の進出時期。下斉田遺跡の８号住居址、２号住居址が示す土器様相である。が、弥生町期の土器その物でも無く、静岡県地方の土器その物でも無い。井野川流域に至る間に変容する時期と場所が存在したことを想定しなければならない。

貝沢柳町遺跡に代表される新顔の開墾者が井野川流域に進出する要因は、関東地方の弥生時代後期後半頃の内部的要因と、近畿地方の文化が地方へ進出してゆく要因の二面を考えねばならない。その内後者である要因は近畿地方、瀬戸内内部地方における統一国家成立という政治的活動による地方進出でもあった。その進出は群馬県西部への進出を含めて、東京湾東岸、常総台地へも同様な進出を試みているのである。（註30）

Ⅵ. ま と め

では、関東地方において近畿地方の土器文化を受け入れざるを得ない地方的要因は何であろうか。それは当然、下斉田遺跡を含めた、弥生後期の各文化圏の動向と性格を考えねばならない。

関東南部地域の久ケ原、弥生町期の影響を、利根川、赤城南麓地域がどの様に受けているかの概観をしておかねばならない。

1．利根川中流域

利根川左岸の沖積平野部における弥生後期後半期よりの土器様相の特色は、S字甕と大和盆地系土器群の強い進出が特色で、当地域と類似した状況を示し、古墳時代へと同様な歩調を示す。これに先行する状況は、境町西林遺跡例、新田町重殿遺跡4号住居址の様にS字甕と折り返し口縁、口唇部に刻みを持つ台付甕、複合口縁壺型土器等を組み合わせに持つ混合形の状況を示す時期が設定できる。またこれに先行する状況としては、S字甕を含まず、関東南部系様相を示す大泉町御正作遺跡23号住居址、関東南部系土器と伊勢湾岸系壺B種を組み合わせる太田市運動公園遺跡6号住居址の例の様な、各遺跡に独自性を持つ時期が設定可能であろう。

2．赤城山麓東部域

新里村天笠南遺跡、笠懸村神社裏遺跡例が示すように赤井戸式土器圏を形成する。赤城山麓扇状地上に展開をする赤井戸式土器様相は、北武蔵を中心とした吉ケ谷式土器の強い影響下に成立する土器であるが、土器の形状と施文の特色を分類すると、吉ケ谷式系土器群を代表する縄文の有段施文を特色とする共通点は存在するものの、器種、器形を分類すれば、久ケ原系の形状を示すもの、樽式系、近畿系土器の形状を示すものが混在する。

北武蔵に展開する弥生時代後期の岩鼻式土器は長野県の箱清水式土器の南進の結果としての土器様相とする考え（註31）もあるように、この観点から、赤井戸式土器をみれば、久ケ原式系文化を母胎としたと吉ケ谷式文化を基として、後出的な近畿系土器の混入体と表現できるがS字甕を含まないことには注意が必要であろう。また、西大室上縄引遺跡の方形周溝墓群の一部にC軽石が認められるので時期設定の基準になろう。

3．荒砥川流域

赤井戸式土器圏の西に接して荒砥川流域は、一部赤井戸式の影響を受けながらも、やや独自な展開をしている。S字甕を含む前橋市鶴谷遺跡においては、赤井戸式土器は他遺跡と共通しながらも、複合口縁、受け口状口縁、折り返し口縁壺型土器が混在し、上大類北宅地に近い状況を示している。S字甕を含まない場合は、単口縁台付甕があって、赤井戸系土器（樽式土器を含む）を組み合わせに持つ様で、荒砥上ノ坊遺跡2区89号住居址例のように伊勢湾系壺A種も含む。

下斉田遺跡、上大類北宅地、貝沢柳町遺跡に始まり、C軽石降下期を経て元島名将軍塚古墳、柴崎蟹沢古墳築造時期に至る時代と並行する時期に該当する状況を概観したが、赤井戸式土器文化圏を除き、S字甕の進出を契機にその様相に差があることが指摘できる。S字甕の進出時期以降は、器種セット型は各種混合タイプ時期（鶴谷遺跡例）を経て斉一性の強い大和盆地系土器群に統一されてしまう。

S字甕進出以前は折り返し口縁＋台付甕（口唇部に刺突タイプ）御正作遺跡23号住居址、重殿遺跡4号住居址と、樽式土器か伊勢湾岸系壺型土器＋台付甕（口唇部無施文タイプ）荒砥上ノ坊2区89号住居址、太田運動公園6号住居址の2系列に分類可能かもしれない。遺跡例が少なく、かつ広範囲である。体系的に把握することは避けねばならないが、その動向は把握可能であろう。

一方、赤井戸式土器群域は、赤城山麓の小地域であるが、その土器様相からみれば、久ケ原式土器文化が吉ケ谷式土器文化に変化定着し、赤城南麓へ移動し一形式を成立させていると推定できる。

弥生中期後半から伝統的な文化圏を形成しない群馬県東部域における弥生後期末の土器様相は、樽式土器、久ケ原式、弥生町式土器、また岩鼻式土器文化の影響を直接的に受けない時間と地域を内在させて進行していき、元屋敷式に属させるべきパレス系土器が関東南部に進出する時期に至り、新たな斉一的変化が認められるのである。この地方の土器様相の在り方が示すことは、弥生後期における関東南部域の文化圏の緩衝地帯として不斉一で弱小の独自性を継続し続けることを示していよう。

この変化の時期は、井野川流域の展開に対比すれば、開発第２段階になり、下斉田遺跡20号土壙の成立期に概略は当てはめることができよう。Ｓ字甕を含んだ土器群が進出する時期に極めて近い時期に当たり、Ｃ軽石降下時期に接する時期を設定できるのである。

そこで、再び下斉田遺跡の土器様相の変遷を、樽式土器文化圏周辺部における、東海、関東南部系土器群遺跡としてどの様に位置付けたら良いかということになろう。

まず、下斉田遺跡土器群が、樽式土器と並行期にあたる弥生町式土器様相そのものかを問題としなければならない。８号住居址、２号住居址の甕型土器、壺型土器は前述した通り、弥生町式土器を含まない。静岡県地方の後期中頃の登呂式～目黒身式時期の特色を残していて、関東南部の土器様相その物ではない。独自性の強い弥生町、岩鼻式土器群の先端部の土器群として判定はできない。また、箱清水系の樽式土器でもない。

視点を変えて、箱清水土器文化圏と近畿系文化圏との交渉のうちに、この下斉田遺跡土器群を置くことが可能ではなかろうか。即ち、長野県における箱清水式土器文化は、久ケ原、弥生町期に南下し、その土器文化を各地に展開してゆく反面、南信地域における土器様相は、天竜川流域の土器様相が示すように東海地方やそれに続く近畿地方の文化の窓口という性格を有するからであろうと判断できるからである。このことは樽式土器文化圏の周辺部においては、それに接する文化圏とのバランスの上に変動、変容せざるを得ない地域性を持つようである。井野川流域はまさに樽式土器文化圏の周辺部に当たるのである。そして、樽式文化圏にあって、強い影響を受けるのは、関東南部の土器文化ではなく、東海地方及び近畿地方の土器文化である。従って、樽式文化圏の周辺部に東海系土器群が関東南部の土器を介在させずに展開するとしても何の不自然さは無いと考えるのである。

この様に仮説立てを行えば、下斉田遺跡を始め周辺域の土器様相の変遷の在り方に解決の糸口が得られるのである。

1．井野川域、烏川流域に、樽式土器文化圏における、南信地域土器の混入する遺跡が出現する。（註32）
2．南信に接する東海東部域の土器文化の影響のある土器文化が樽式土器文化圏の周辺部に出現する。下斉田遺跡
3．伊勢湾系土器と大和盆地系土器の組み合わせ形態が樽式土器文化圏の周辺部に出現する。貝沢柳町遺跡、上大類北宅地遺跡、新保・新保田中遺跡等
4．Ｓ字甕と大和盆地系土器群の進出とともに土器様相の斉一化が始まる。石田川式土器の成立ということになるであろうか。

以上の様に、下斉田遺跡の一例の土器群の分析という点において多少の問題は残るものの、弥生後期の土器様相の変遷を見渡して見るならば、井野川流域の開発と、古墳時代の発展を支える第１段階としての重要な位置づけがなされるのがこの下斉田遺跡ということになろう。

Ⅵ. ま と め

表38　壺型土器の分類とその特徴
下斉田遺物Ⅰ群

器種	特徴		形　状	口縁部の特徴	体部の特徴	土器分類の分析視点
折り返し口縁	受け口状口縁	a種	8住3、5、6	①垂直に立ち上がる受け口状であるが、内面は無段。	下半に最大径。肩はなで肩、下部を急にしぼる。	Ⅰ．折り返し口縁の分類 1．受け口状口縁系―受け口状口縁は、弥生時代後期後半代に東海地方から関東南部に至るまでに普辺的に存在している。内側に段を有しない器種は、やゝ後出的、目黒身、尾ノ上式に共通する。施文しないのは伊勢湾岸の影響があまり強くないことを示すか。 2．単純な折り返し口縁―この手法は、弥生後期の壺型土器及び甕型土器に普辺的に認められた手法である。 Ⅱ．胴の形態の分類 1．a種の胴 緩く絞った頸部から緩く開いた胴と、その下端を急に絞り込んだいわゆる瓢型または無果実型の胴である。この形態は、弥生後期の壺型土器に共通する。 2．b種の胴 肩が張って、口径に比して大きい胴径を有する。a種胴を上下から圧縮した型で、ソロバン玉風にした型。この球形胴器種は、本来的に近畿地方の第Ⅴ様式に認められ後期中葉以降に顕著に認められる（西ノ辻1－D）。また、長野県天竜川流域（座光寺原、中島式）や弥生町期に一部認められる。 3．C種の胴 樽式土器、岩鼻式土器に共通する。壺型と甕型との中間タイプ土器である。
		b種	8住4	②粘土帯を幅広に貼付け受け口状口縁を模す。	中位に最大径。肩が張り頸部直立ぎみ。	
	単純折り返し口縁	a種	8住7、8、9	①緩く外反する口縁に粘土帯を折り返す。やや幅広く取り、櫛の刺突の例もある。 ②外反する口縁部端に少量の粘土帯で折り返しをつける。	下半に最大径。なで肩、下部は急にしぼる。	
		b種	8住1、10、20、21 2住1		中位に最大径。やや肩が張りぎみ。	
		c種	8住2		長胴形、胴径が口径に比してさほど大きくない。	
単口縁		b種	8住11	口径は小さく緩く外反。	丸みを持つ胴、内面は刷毛目、底部が大きい。	

表39　単口縁系甕型土器の分類とその特徴

器種	特徴		形　状	口縁部の特徴	体部の特徴	土器分類の分析視点
Ⅰ群単口縁台付甕	無施文	a種	8住12、13、14、15、16、22 2住3、8	低く外反 口径が小規模 刷毛目仕上げ	やや長胴、小型台、内外面に刷毛目を残す	Ⅰ．口唇部無施文群 1．口縁部が低く小さく外反するタイプ 口縁径が胴径に比して小さい。口縁は立ち上がり気味で端部で外反する。胴外面は刷毛目を残すが、内面は平滑化が進む。口縁内面は、横刷毛目を残す。台は絞られていて小さい。 2．「く」の字型に大きく外反するタイプ 口縁部径は、胴部径に等しくなる程に大型化する。大型、中型に区分できる。刷毛目を消す手法が大勢を占め、胴内面に板削りの出現がある。胴は球形となり大型化する。台部も大型。 1と2のタイプは、セットとして共存する傾向にある。弥生町期には存在する。板材による調整は後出的特徴である。 Ⅱ．口唇部に刻みを施文する土器群 口唇部に刻みをつけるのは、広口で球形胴の器種に認められる。また、内面の板状工具による仕上げ方法は後出的要素である。この器種では、「く」の字に外反する広口甕が主体となっている。関東南部資料は前野町期の遺物として確認できる。東海東部域では、浜松市椿野遺跡での欠山期遺物に含まれ退化したパレス型壺に混じっている。また、東三河欠山遺跡ではS字甕と共存するようになる。 Ⅲ．S字甕と共存する甕　――1号住居址出土遺物―― S字甕と共存するのは、単口縁台付甕と平底の長胴型甕の2種が存在する。台付甕は広口で球形胴になり、内外とも平滑化する傾向にある。平底甕の出現も注目される。
		b種	20土14 方周1、3	大きく外反 広口形甕 研磨、すり消し	球形胴、大型台、肩を張る、外面ヘラ、内面平滑化	
	口唇部刻	a種	20土8	低く外反 口唇部に刺突 研磨、すり消し	やや長胴、 外面刷毛目 内面板状工具	
		b種	20土9、10、11	大きく外反、広口形甕、口唇部刺突、研磨、平滑	球形胴、大型台、内面平滑	
Ⅱ群S字甕共存	無施文	1種	1住3、6	広口形甕、無施文、すり消し	内面ケズリ 外面平滑	
		2種	1住4、5	長胴型、平底中間型	内面平滑	

表40　井野川下流域における関連遺跡での土器組み合わせ状況

内容		大和盆地系土器群				伊勢湾岸系土器群					東海東部・関東南部土器群			その他
遺構名		壺A	壺B	坩・器台	特高坏	S甕A	S甕B	壺A	壺B	瓢型壺	台甕	壺A	壺B	
下郷遺跡	SZ22			○					○					
	SZ16												○	
	SZ26						○			○			○	
	SZ04			○		○								F・A
	SZ01	○												
	SZ42(前方後方)	○												
	SK39・46	○												特器台
八幡原遺跡	若宮北古墳Tr	○	○			○						○		
	掘り込み遺構			○	○									
	土壙Ⅲ					○							○	
滝川C遺跡包含層		○		○			○		○	○				F・A
綿貫遺跡SX2001						○								
同　上　SI 0909												○▲		
上滝遺跡包含層		○	○					○	○				○	
同　上　3号住居址						○				○			○	
将軍塚古墳周濠Tr		○		○	○	○	○				○			前方後方
元島名遺跡(道路Ⅰ)		○										○▲		前方後方
鈴ノ宮遺跡	48号住居址	○	○			○						○		
	4号方形周溝墓													C軽石
	1号方形周溝墓	○		○		○				○				
	7号方形周溝墓			○			○							前方後方
矢島竹ノ内遺跡				○										
矢中遺跡	方形周溝墓02			○										
	同　上　01		○			○			○					前方後方
	同　上　03					○								前方後方
	同　上			○										
	下村北遺跡(包)							○	○					
上大類北宅地3X1				○							○	○		C軽石 岩鼻
貝沢柳町	1号方形周溝墓							○		○				C軽石
	2号　同　上								○					C軽石
	3号　同　上													C軽石
宿大類村西														
下日高旧河道				○		○	○		○					C軽石
新保田中河道						○	○					○		C軽石
新保遺跡包含層		○		○		○	○	○			○		○	C軽石

Ⅵ. ま と め

(註１) 弥生時代末から古墳時代への過渡期間は、尾崎喜左雄が櫛の甑、石田川の台付甕と対比に旧利根川流域をその境界とした説を踏襲する例が多い。ニューサイエンス社刊弥生土器入門の「北関東編」においても同様である。また、昭和58年再録の折、井上・柿沼は、西大室遺跡群、富田遺跡群出土土器をもって「弥生時代から古墳時代へと移行する時期の土器の様相、地域的在り方を分析検討する事態にきている」とするが、赤井戸の後出的要素をみての判断であって妥当ではない。

(註２)「関東における古墳出現期の諸問題」　1981　日本考古学協会
「三～四世紀の東国」　1983　八王子郷土資料館
「古墳出現期の地域性」　1983　第５回三県シンポジューム

(註３) 頸部が緩く、胴最大経を中位程に置く、久ケ原期から弥生町期への器種は中期的形状を残す。頸部が絞られるが肩が張らず、胴下位に最大経を置く弥生町期を代表する。

(註４) 顕微な例として、①愛知県春日井郡清州町、朝日遺跡、名古屋環状２号線、SZ 02 溝廃棄遺物Ｓ字甕を含む。　②静岡県浜松市　椿野遺跡　溝出土広口台付甕（口唇刻）内面調整手法に認められる。欠山期

(註５) 駒形大塚古墳　栃木県那須郡小川町所在　前方後方墳　墳頂より多量の古式土師出土　三木文雄他　「栃木県駒形大塚古墳出土の土師器」　大塚考古10　1972

(註６) 特にＳ字甕を含む土器群が大和盆地系土器群に酷似する状況を前提にすれば、受け口状口縁を持つ丸形小型壺のあり方についても、これを山陰系と単純に解するよりは、古式土師器の多様性の一現像として理解する必要があろう。

(註７) 鬼形芳夫　田島桂男　「八幡原遺跡」　高崎市教育委員会　1974

(註８) 田口恵子　金子智一　「綿貫遺跡」　高崎市教育委員会　1985

(註９) 東海地方では（註４）の椿野遺跡溝上層遺物でＢ類Ｓ字甕を混入している。幾内では纒向遺跡辻地区土壙４（５Ｆ８Ｗ）下層資料に認められ、口縁部Ｓ字形態の退化した器種（赤塚分類Ｄ類、安達分類Ⅲ）に共伴する。

(註10) 群馬県教育委員会　群馬県埋蔵文化財調査事業団　「上滝、八幡原Ａ・Ｂ、元島名Ａ」　1981

(註11) 田口一郎他　「元島名将軍塚古墳」　高崎市教育委員会　1981

(註12) 五十嵐至　白石修　「元島名遺跡」　高崎市教育委員会　1979

(註13) 飯塚恵子　五十嵐至　田口一郎　「鈴ノ宮遺跡」　高崎市教育委員会　1978

(註14) 都市計画道路南八幡京ケ島工事に係る事前調査　1986

(註15) 高橋　淳　結城千尋　「矢中遺跡群Ⅸ」　高崎市教育委員会　1986
白石修他　「矢中遺跡群Ⅶ矢中村東遺跡」　高崎市教育委員会　1984

(註16) 白石修他　「矢中村東遺跡」　高崎市教育委員会　1984

(註17) 久保泰博　篠原幹夫　「上大類薬師遺跡」　高崎市教育委員会　1986

(註18) 渡辺義泰　久保泰博　「上大類北宅地遺跡」　高崎市教育委員会　1983

(註19) 久保泰博　篠原幹夫　「貝沢柳町遺跡」　高崎市教育委員会　1986

(註20) 神戸聖語　福田啓一　「宿大類遺跡群　村西、村北遺跡」　高崎市教育委員会　1987

(註21) 関越自動車道内　新保遺跡　未報告

(註22) 群馬県教育委員会　群馬県埋蔵文化財調査事業団　「新保遺跡」1977～1980　「新保遺跡１」弥生、古墳時代大溝編　1986

(註23) 染谷川河川改修に係わる発掘調査　高崎市教育委員会　昭和58年　　群馬県埋蔵文化財調査事業団　昭和60～62年

(註24) 横倉興一他　日高土地改良事業関係「日高遺跡Ⅳ」　高崎市教育委員会　1982
中村　茂　篠原幹夫　西島土地改良事業関係　「西島遺跡群Ⅲ」高崎市教育委員会　1987

(註25) 横倉興一他「日高遺跡Ⅳ」　高崎市教育委員会　1982

(註26) 横倉興一他「日高遺跡Ⅲ」　Ｆ区市立新高尾小学校東側　高崎市教育委員会　1981

(註27) 当種土器は、東海地方及び関東地方において散見できる。出土遺構の時期判定の指標になる土器である。

(註28) Ｓ字甕は伊勢湾地方における欠山期に内存する手法が発展し完成し、元屋敷式土器群の甕型土器として定着するものである。元屋敷期は、大和盆地における庄内様式に相当し、纒向遺跡の出土例が示すようにＳ字甕Ａ種から混在することが指摘できる。が、関東地方においてはＡ種の出土例がない。このＳ字甕の動向と、群馬県西部域におけるＳ字甕と他の器種の組み合わせを具体的にみると小型丸底壺、器台、Ｂ種Ｓ字甕と複合口縁大型壺（装飾性の高い儀器的）という器種の共通性を持つものの、元屋敷期の土器群とは様相が異なり、大和盆地内の纒向遺跡にみえる土器組成に近いものである。従ってＳ字甕が混在するから伊勢湾、または東海系と簡単に判断すべきではない。尾崎の設定する石田川式土器は、尾張地方においてはすでに元屋敷式の中期７・８Ｃ（宮腰健治分類・第３回東海埋蔵文化財研究会「欠山式土器とその前後」）以降に相当するが、大和盆地においては、纒向地方の壺型土器と対比するなら、すでに元屋敷期（古）段階に比定すべきであり、その点でも石田川式土器は大和盆地系の土器群とすべきである。

(註29) 貝沢柳町遺跡報告書でいう「変形二重口縁パレススタイル壺」は、明らかに大和盆地における二重口縁壺型土器の影響下に成立している。この器種を伊勢湾在地のものとするか否か問題はあるが、Ｓ字甕Ａ種の大和西域へ進出する時期（欠山期）に派生する土器と判断しておきたい。

(註30) 小型丸底壺、小型器台、複合口縁壺の組み合わせに示すことのできる古式土師の関東地方における展開を基本とする。が、近年の東海西部域における欠山期、また元屋敷期のパレススタイル壺型土器の発見例の増加は、新たな展開をみせている。

(註31) 石岡憲雄　「吉ケ谷式と岩鼻式土器について」　埼玉県立歴史資料館研究紀要第４号　1982

(註32) 群馬県教育委員会　群馬県埋蔵文化財調査事業団　「熊野堂遺跡第Ⅲ地区　雨壺遺跡」　1984　雨壺遺跡67号住居址

結　　び

本書に報告した「下斉田・滝川A遺跡、滝川B・C遺跡」を調査してから、すでに十数年を経過した。この十年余の間に新たに加わった考古学上の知見は数多くある。特に、浅間山、榛名山という二つの火山による火山噴出物の堆積がみられる本県にあっては、その活動期にあたる弥生時代末から平安時代にかけての遺構については、新たな知見が相次ぎ、それに伴って調査方法もまた年々変化しつつあるのが現状である。

下斉田・滝川地区の各遺跡の調査時点にあっては追求のおよばなかった水田址の調査も、現状ではその有無の確認は調査の必要条件の1つとなり、その調査方法も確立されている。また、以前は、検出されても性格不明の遺構として処理されていたものも、現在では、その後の調査での類似遺構の増加、そして研究者の観察・追求の目によってその性格が明らかにされてきたものも多い。本報告書中にある下斉田遺跡D地区の小溝群もその1つである。すなわち、調査時点では、小溝群として処理したものが、現在の研究水準に照らして見ると、弥生時代の畑跡であった可能性が強いことが指摘されている。(Ⅵまとめ、1－2)。

このように進歩・発展の著しい情況をふまえつつ、ここに報告した4遺跡についてみると、概略次のような特色をあげることができよう。

1．遺跡地の面積に比して、住居址など集落に関する遺構、および方形周溝墓、古墳などの検出件数が少ない。

2．下斉田・滝川A遺跡にあっては、検出された14戸の住居址のうち3戸が古墳時代初頭、9戸が奈良・平安時代のものであることに象徴されるように、検出された遺構・遺物も古墳時代初頭および平安時代の頃に集中し、古墳時代最盛期の時期に属するものがほとんどみられない。

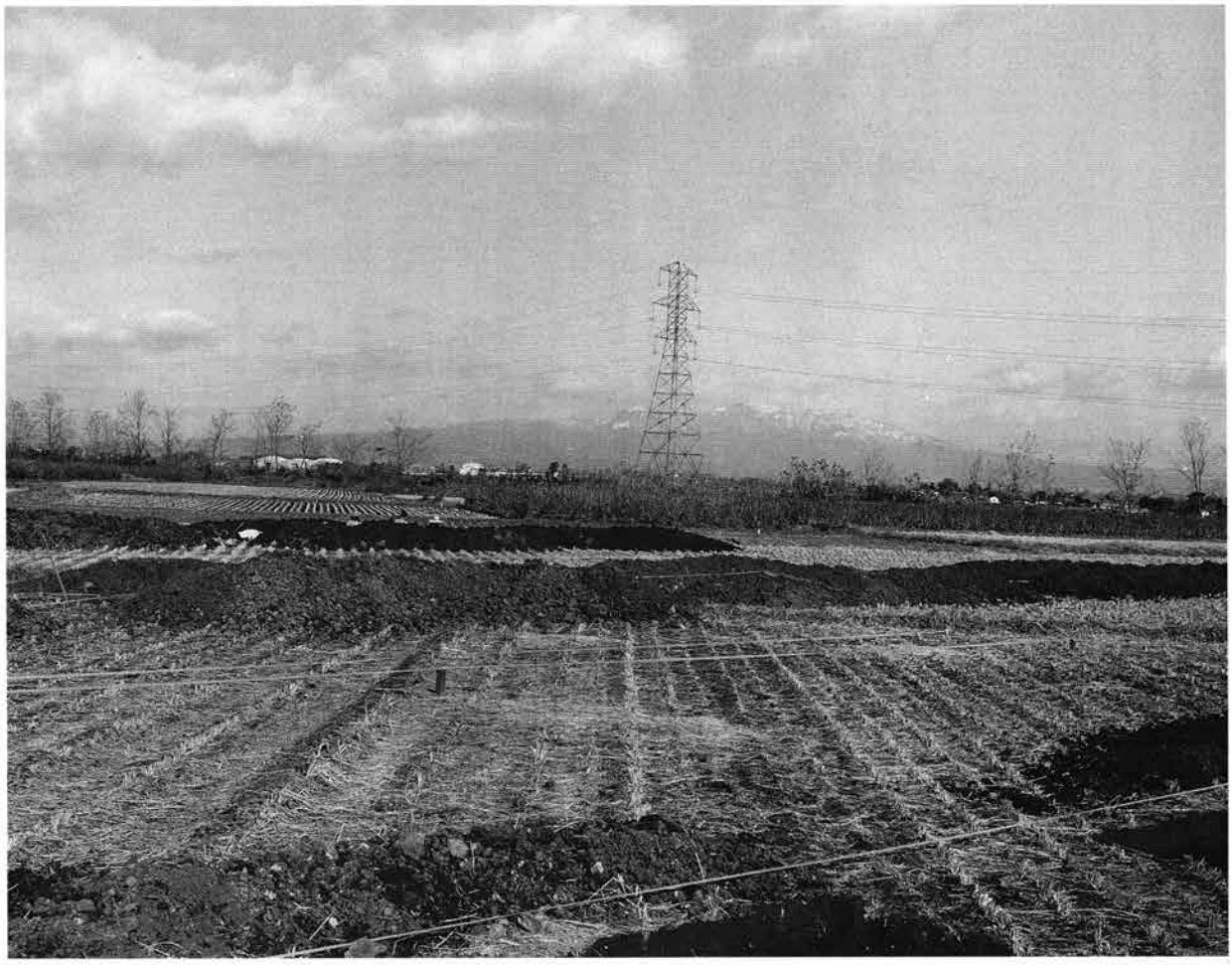
3．滝川C遺跡にあっても、土壙内出土遺物・遺構に直接結びつかないものの、黒色土中からの出土遺物の大半が古墳時代初頭のものであり、隣接地域に同時期の遺跡の存在が考えられる。

4．下斉田・滝川A遺跡の微高地上には、平安期の住居址の確認が多く、この時期に至って再び微高地上が集落地として利用されはじめている。

井野川下流域にあたるこの地域には，先に記されているように、古墳時代初頭の集落址、方形周溝墓群、そして、元島名将軍塚古墳をはじめとする古式古墳などの分布が認められ、この地域一帯が古墳時代初頭からの開発が盛んであったことを示している。さらに、本遺跡周辺には、若宮古墳群、角渕古墳群をはじめとして多くの古墳が分布しており、古墳時代を通してこの地が重要な生活区域であったことを示している。にもかかわらず、本遺跡地内で検出された遺構・遺物は、古墳時代初頭の時期に集中し、それ以降のものはほとんど見い出せないところに、この地域での古墳時代における本遺跡地の特色があり、ここが、この時期にあっては生産の場として機能していたのではないかとも推定されるのである。しかし前述のとおり、昭和49年の調査時点にあっては水田址の確認までは至っていない。それ故に資料を根拠とした明確な証明は困難であるが、遺跡地内における弥生時代末の畑跡の存在の可能性、および、その後の周辺遺跡での水田址の調査例と本遺跡地内でのトレンチによる土壌確認から、浅間B軽石下のではあるが水田址の存在の可能性も推測されており（Ⅱ－3）その可能性も全く否定されるものでもないと考えられる。

諸般の事情もあり調査後十年余を経過して刊行の運びとなった本報告書が、ここに記した報告事項とともに、明言し得ない上記のようなことも含めて、今後この地域の歴史を解明していく資料として活用され、これからの本遺跡地隣接地域の調査機会には、これらのことを念頭におきつつその調査がすすめられ、その追及に役立ててもらえれば幸いである。

写　真　図　版



下斉田遺跡全景　東より西を臨む

同上　第１次から第２次調査地区を臨む

下斉田遺跡　第２次調査地区全景（北より）

同上　全景（南より）

1 号住居址

同左　遺物出土状態

2 号住居址

同左　遺物出土状態

3 号住居址

同左　竈

4 号住居址

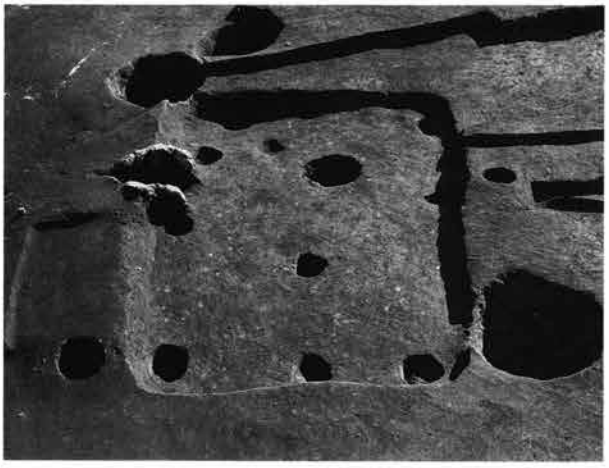
同左　竈

5号住居址セクション

同左　炉址

6号住居址

同左　竈



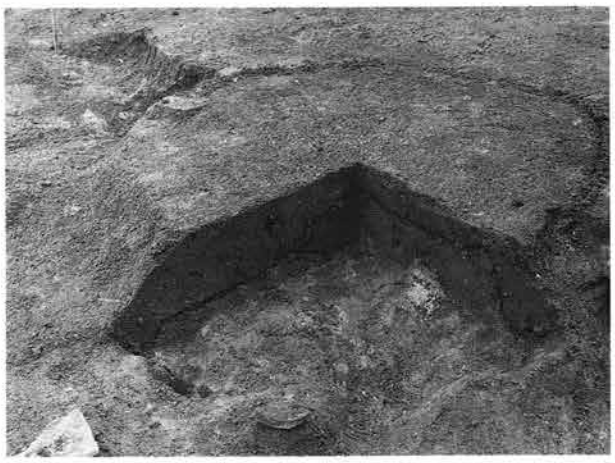
7号住居址

同左　竈

8号住居址

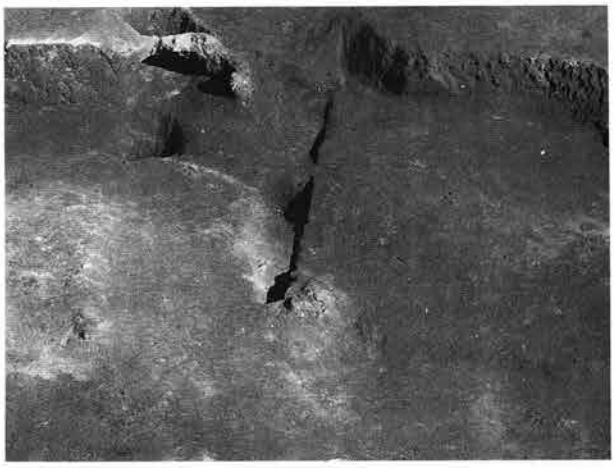
同左　遺物出土状態

9 号住居址



同左　竈

10号住居址



11号住居址

12号住居址

同左　竈

13号住居址

同左　竈

14号住居址

同左　遺物出土状態

方形周溝墓全景（南より）

同上　全景（北より）

同上　遺物出土状態

1 号掘立柱建物址

2 号掘立柱建物址

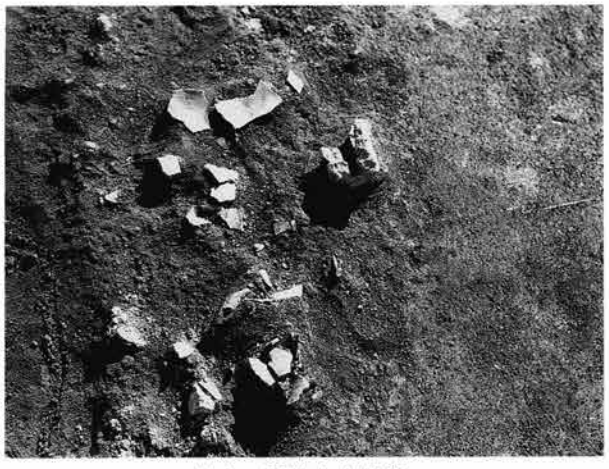
3 号掘立柱建物址

4 号掘立柱建物址

5 号掘立柱建物址

同左　小鍛冶遺構

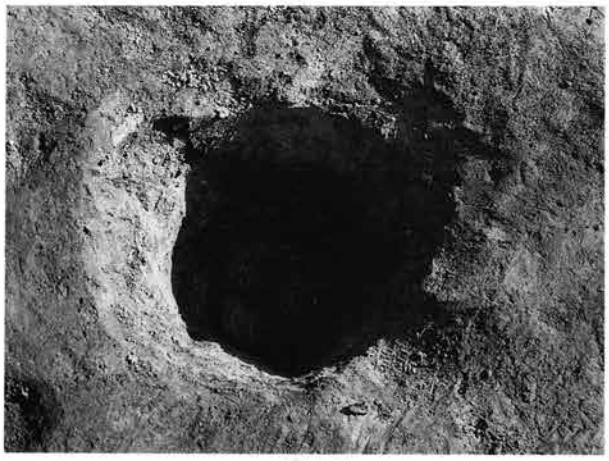
同上　小鍛冶遺構



同左　遺物出土状態

1 号土壙

2 号土壙



3 号土壙

4 号土壙

5 号土壙

6 号土壙

7 号土壙

8 号（右）・9 号土壙

10号（手前）・11号土壙

12号土壙

13号土壙

14号土壙

15号土壙

16号土壙

17号土壙

18号土壙

19号土壙

20号土壙

22号土壙

23号土壙

24号土壙

25号土壙

26号土壙

27号土壙

29号土壙

同左　遺物出土状態

30号土壙

31号土壙

32号土壙

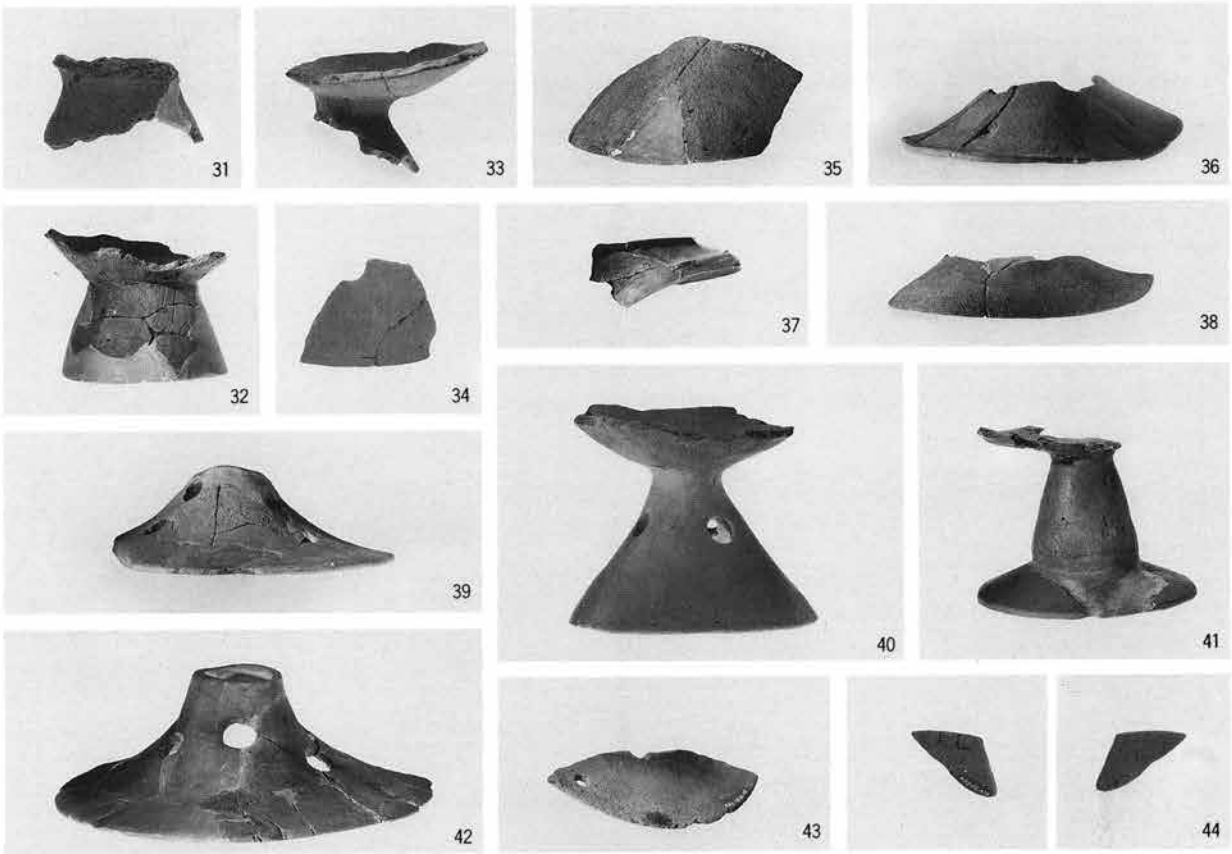
34号土壙

35号土壙

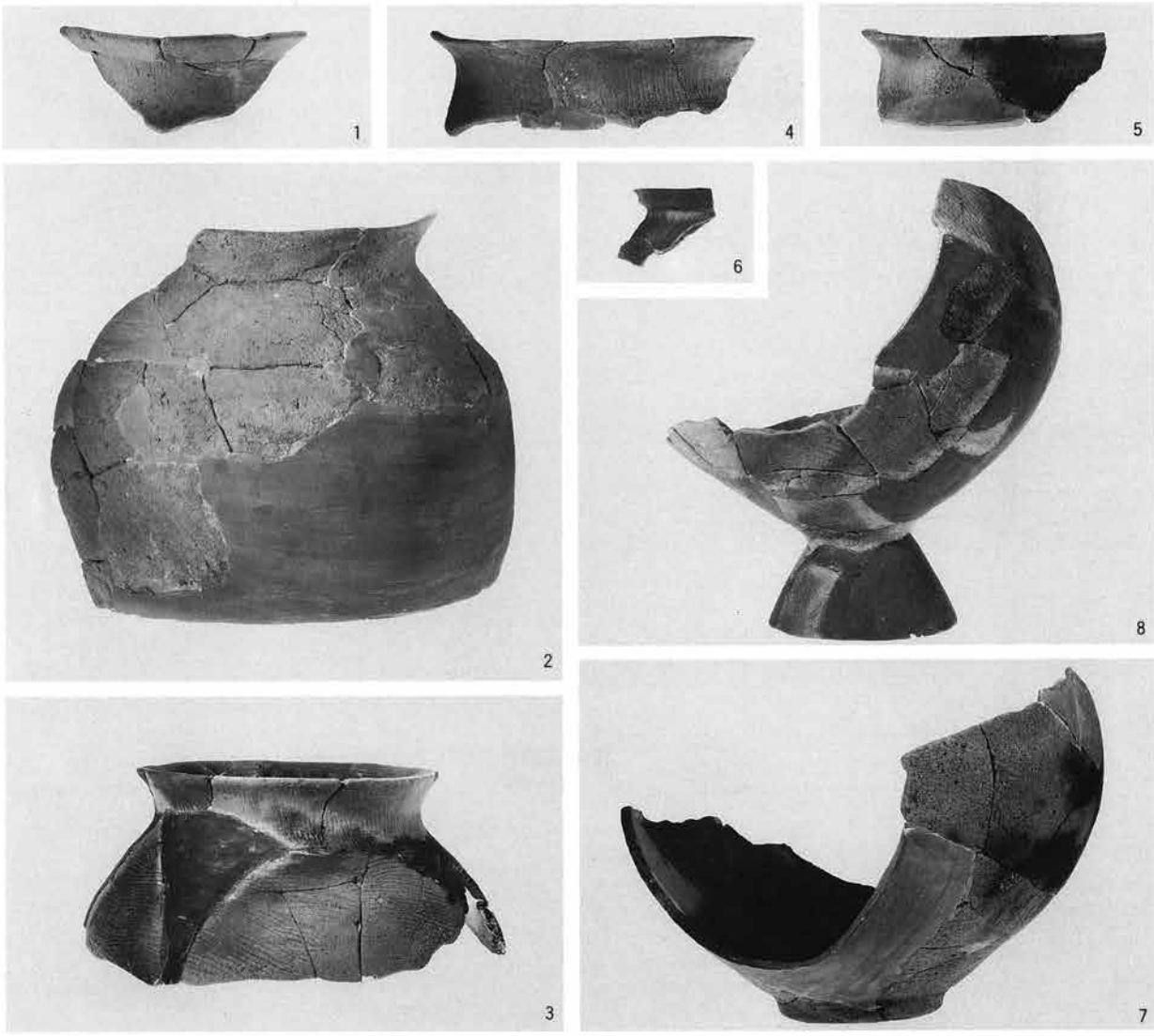
3 号溝

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

1号住居址出土遺物



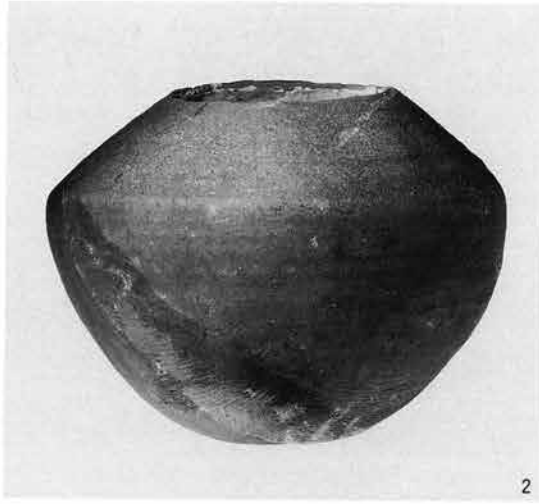
1号住居址出土遺物

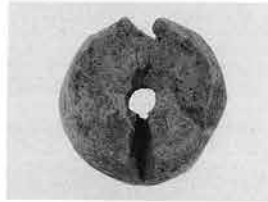


2号住居址出土遺物

2号住居址出土遺物

3号住居址出土遺物



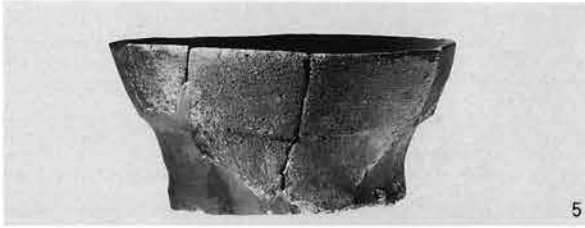


4号住居址出土遺物

5号住居址出土遺物

6号住居址出土遺物

7号住居址出土遺物



8号住居址出土遺物

7

9

10

8

14

16

13

15

12

11

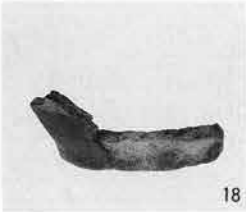
17

20

21

8号住居址出土遺物

22


18

19

23

24

25

26

27

28

29

30

31

36

32

35

37

38

33

39

40

41

44

42

34

43

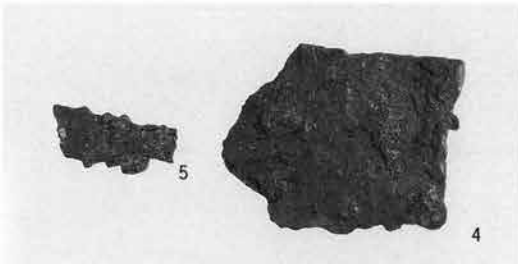
8号住居址出土遺物

9号住居址出土遺物

10号住居址出土遺物

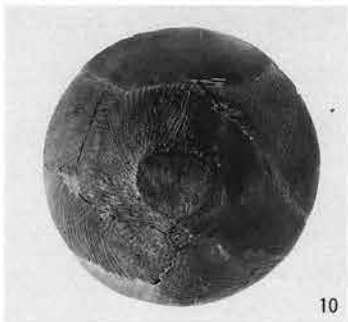
12号住居址出土遺物

13号住居址出土遺物

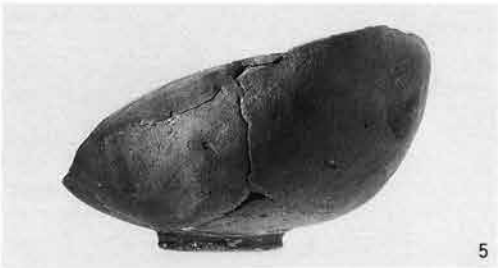


14号住居址出土遺物

方形周溝墓出土遺物



方形周溝墓出土遺物



土壙出土遺物

12

13

16

17

18

19

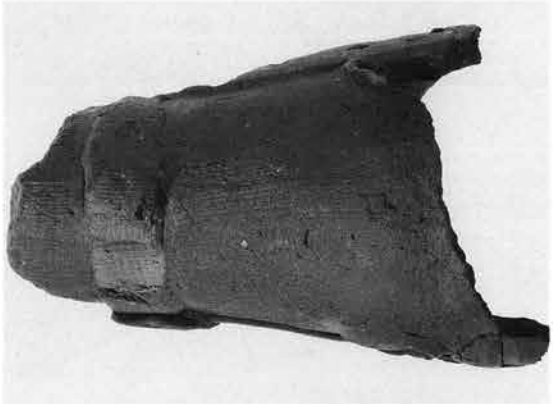
15

20

21

22

23



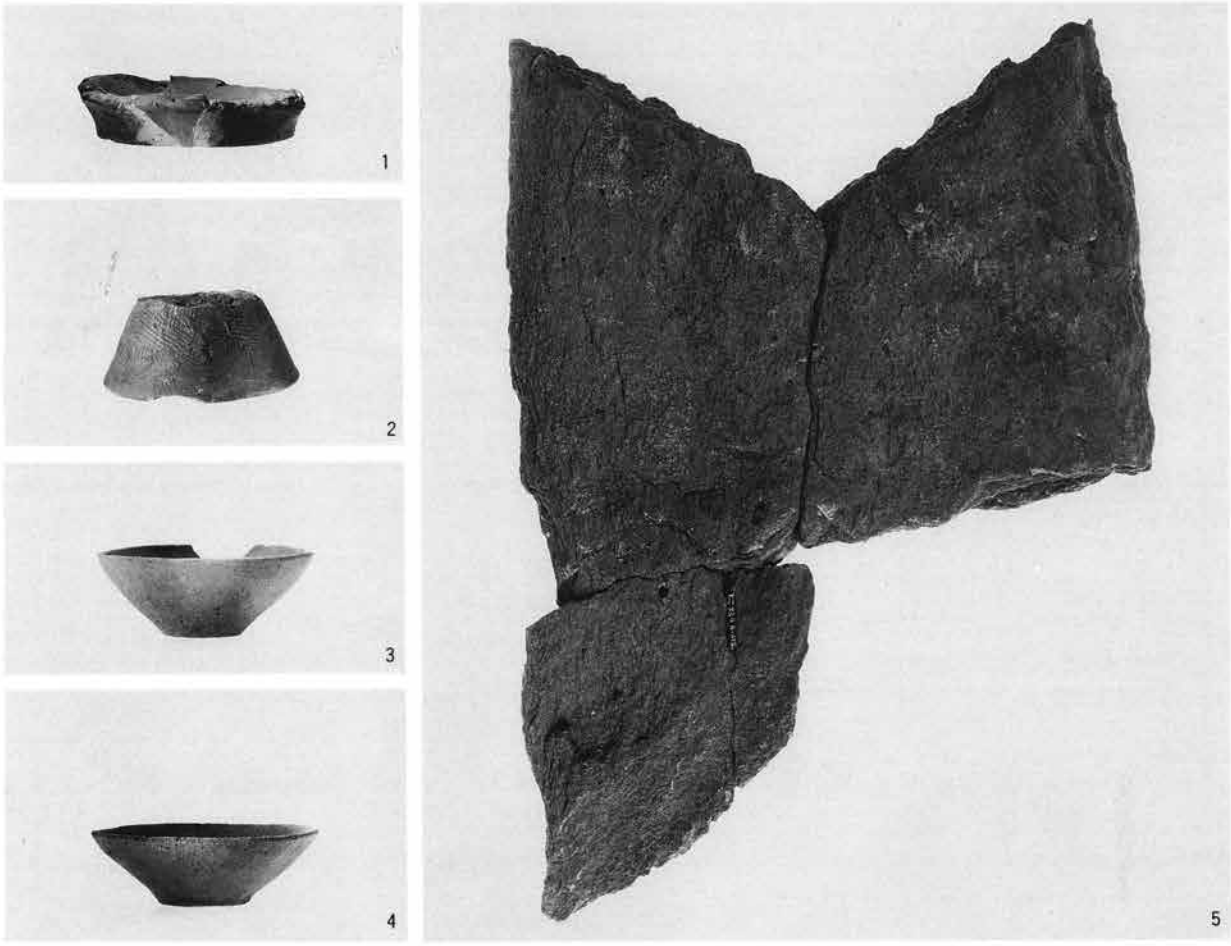
土壙出土遺物

1

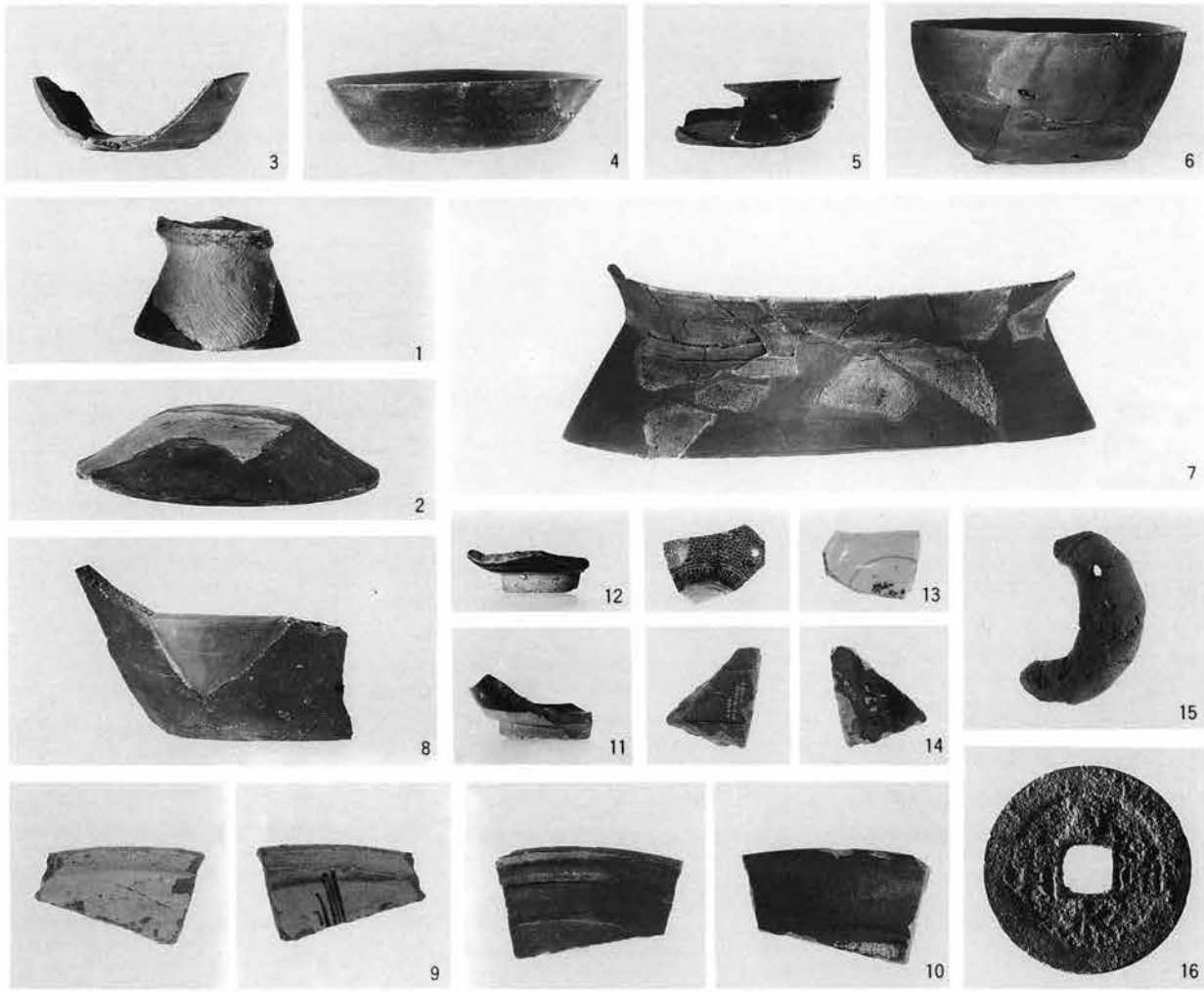
2

24

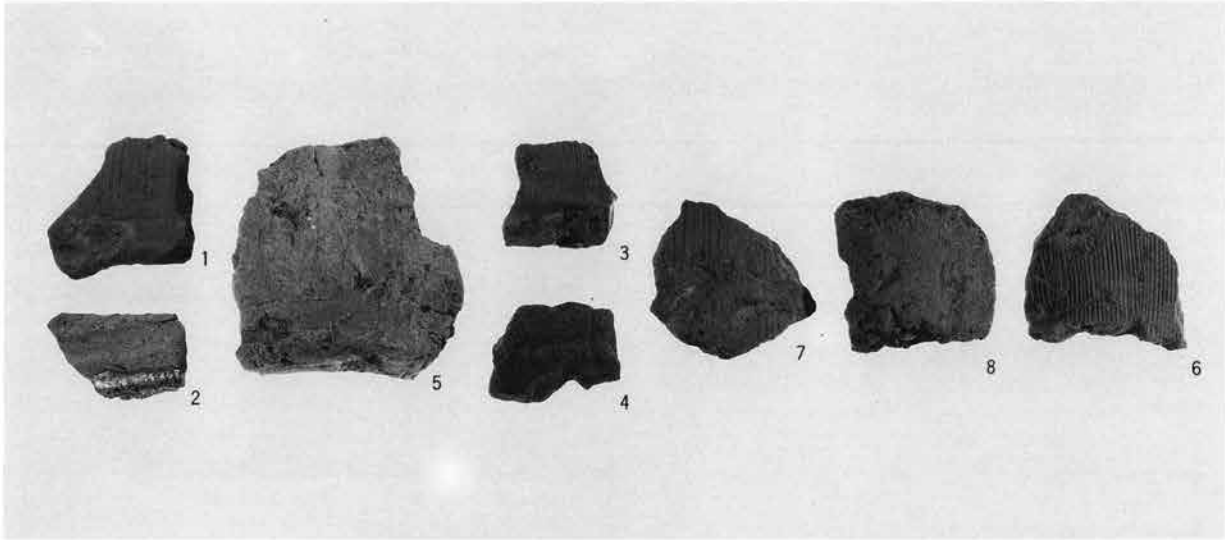
掘立柱建物址出土遺物



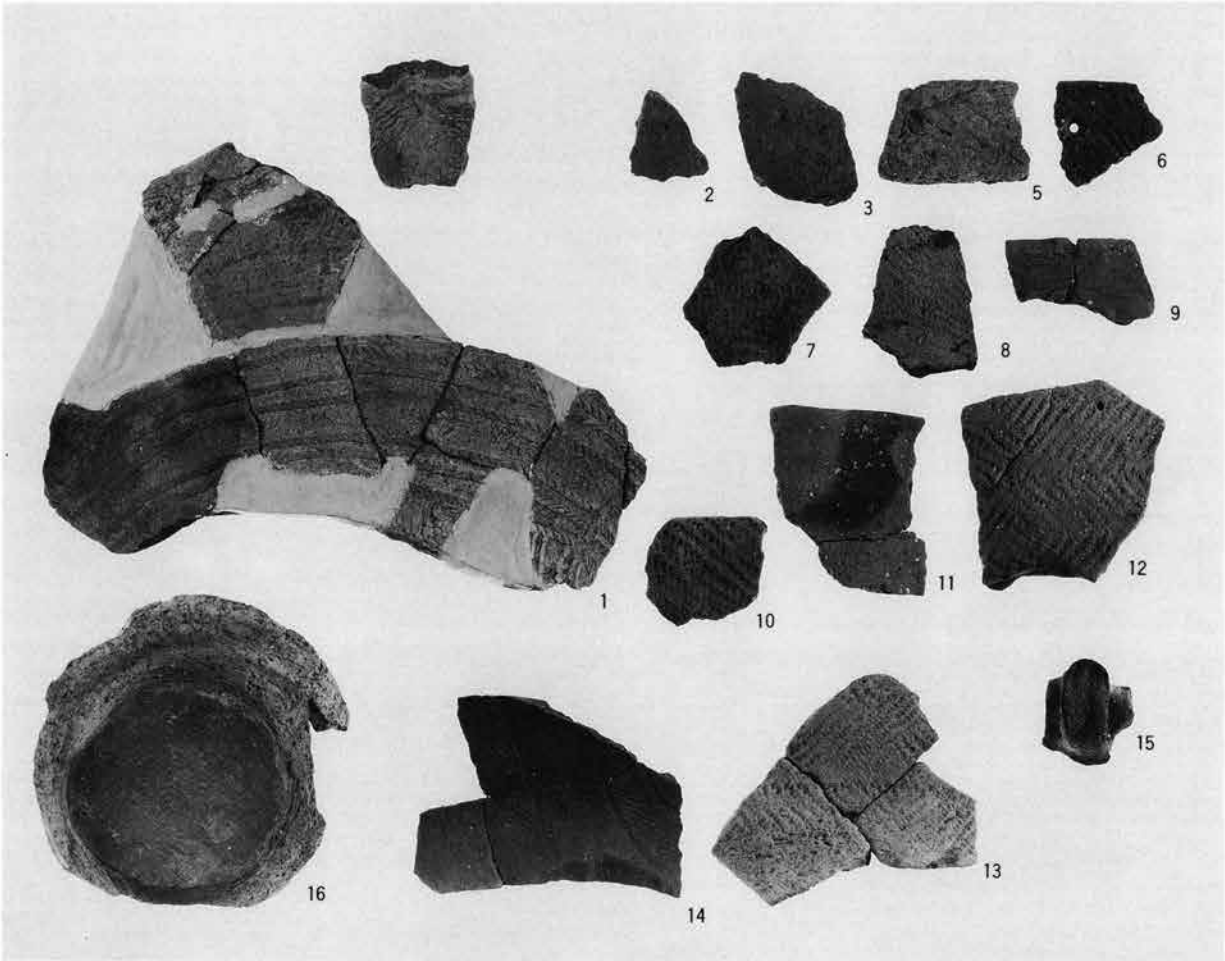
溝出土遺物

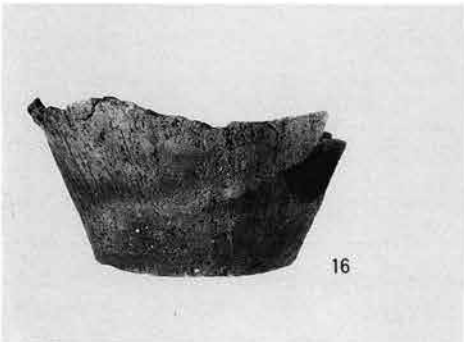


グリッド出土遺物

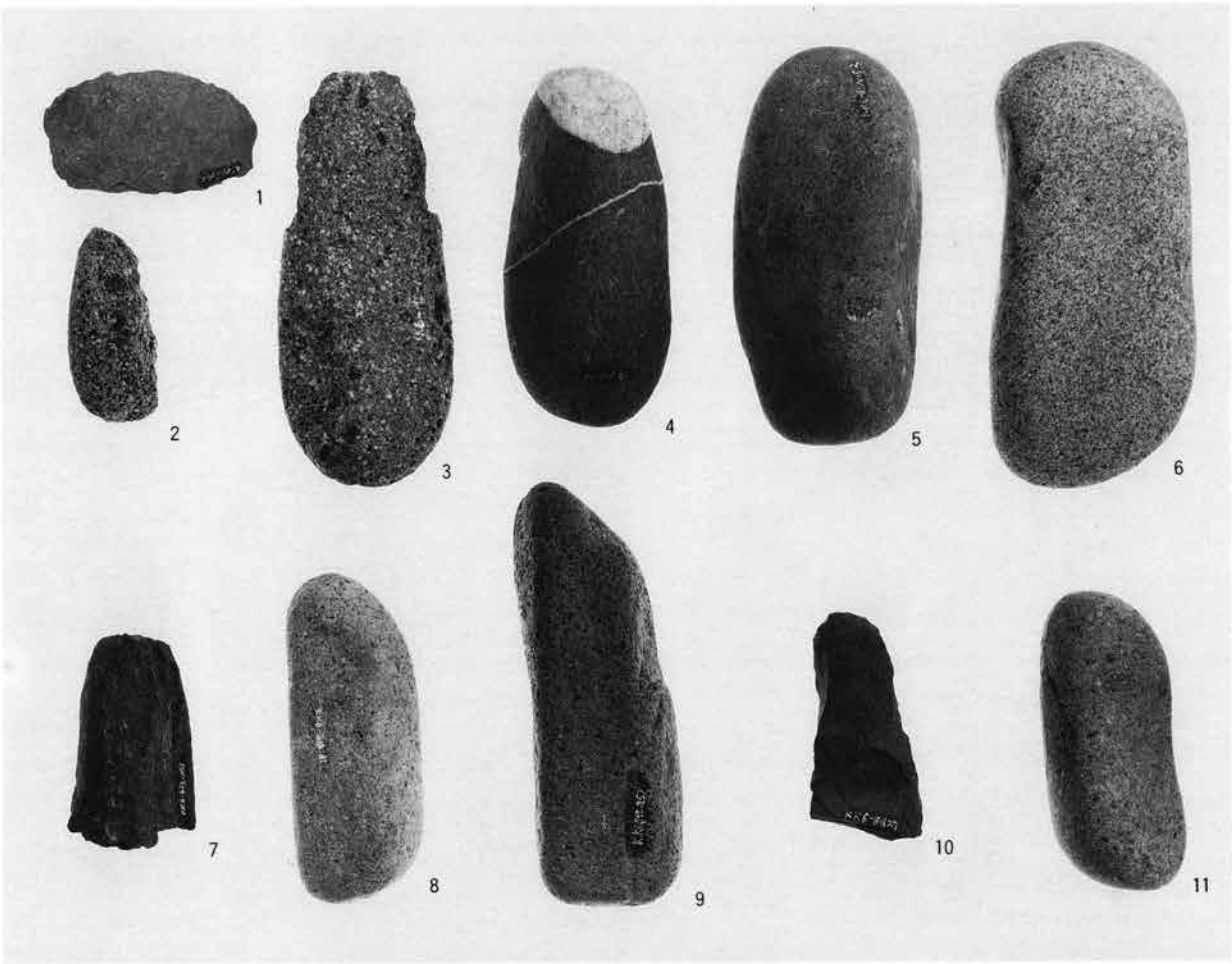


グリッド出土埴輪

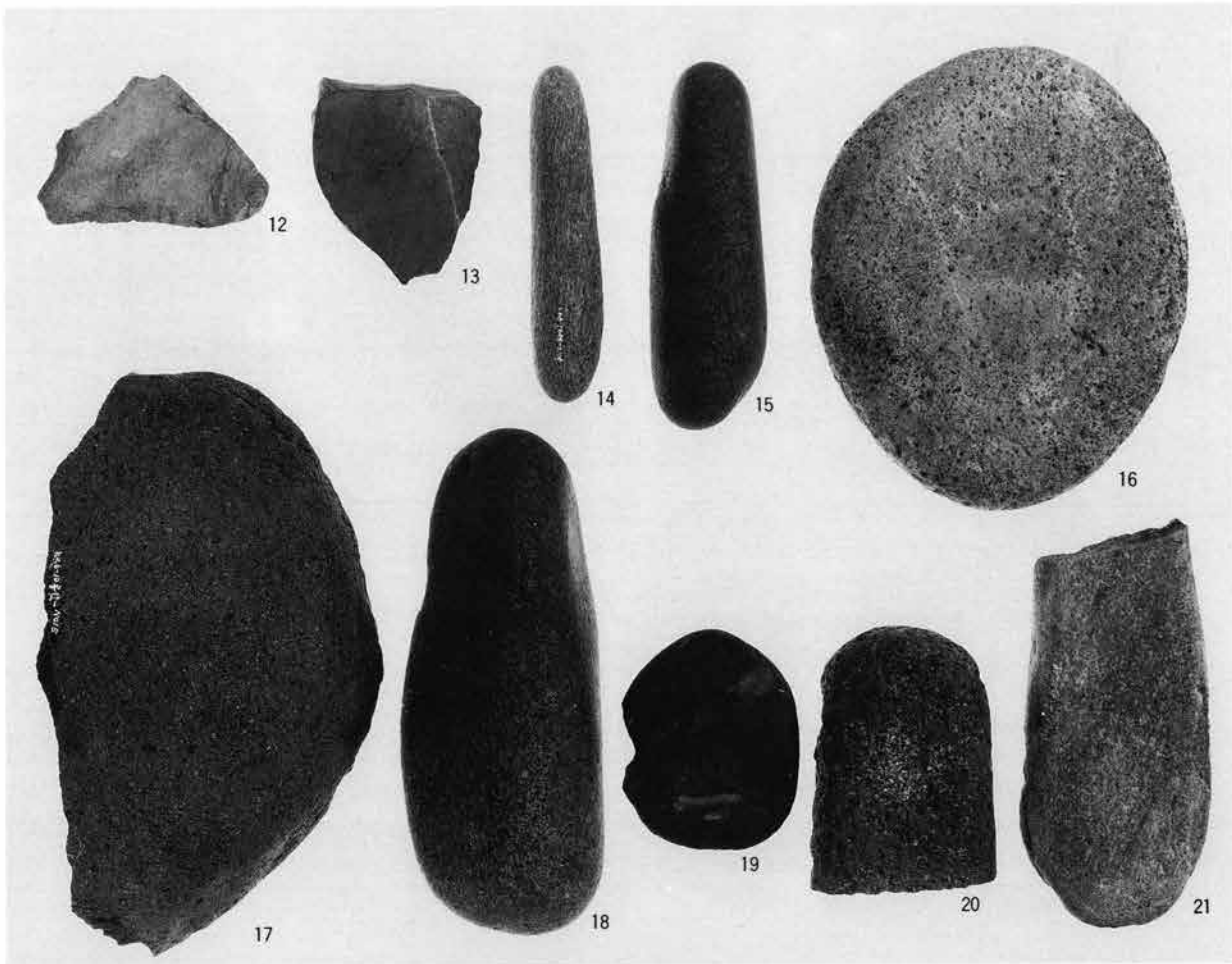




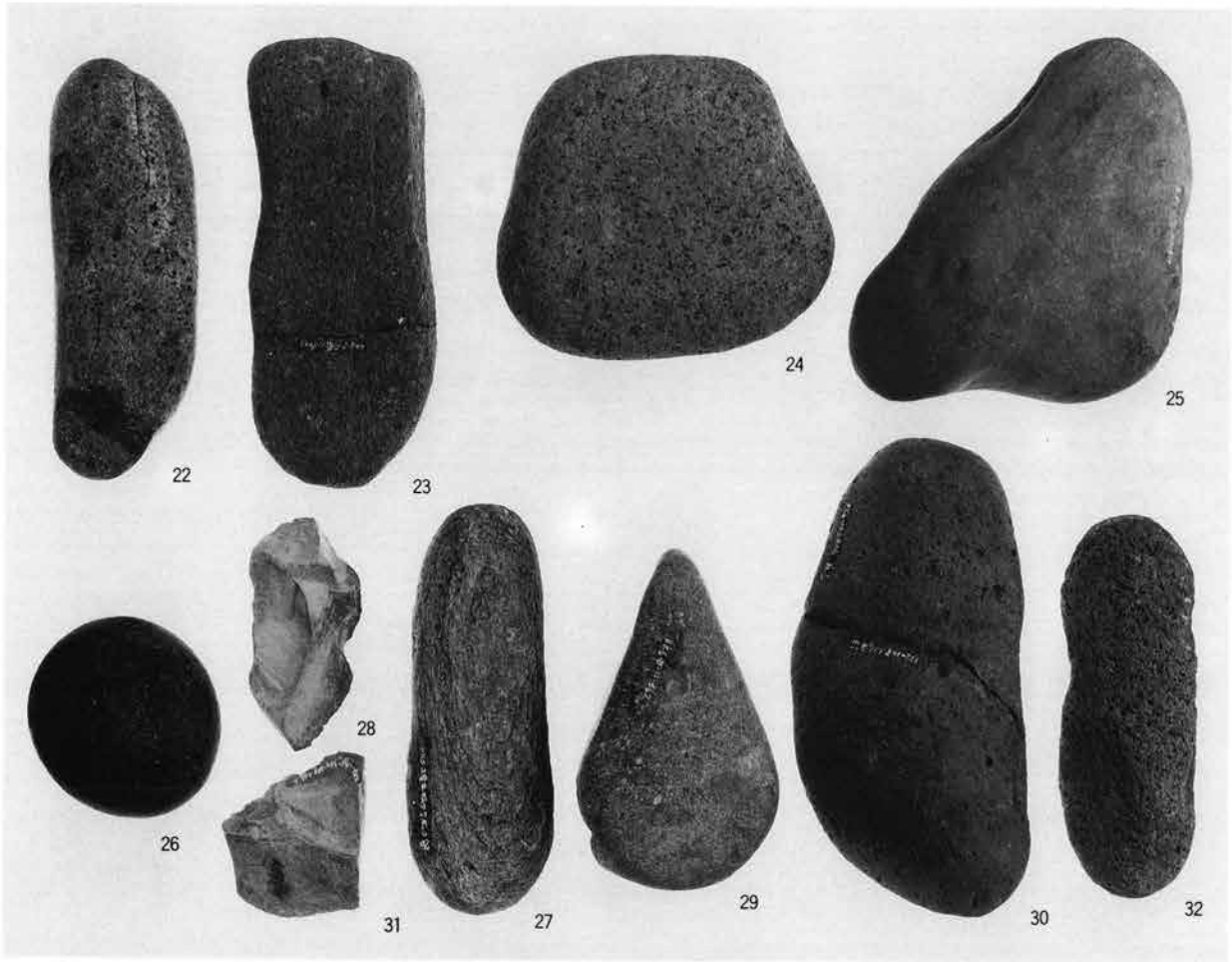
グリッド出土縄文土器



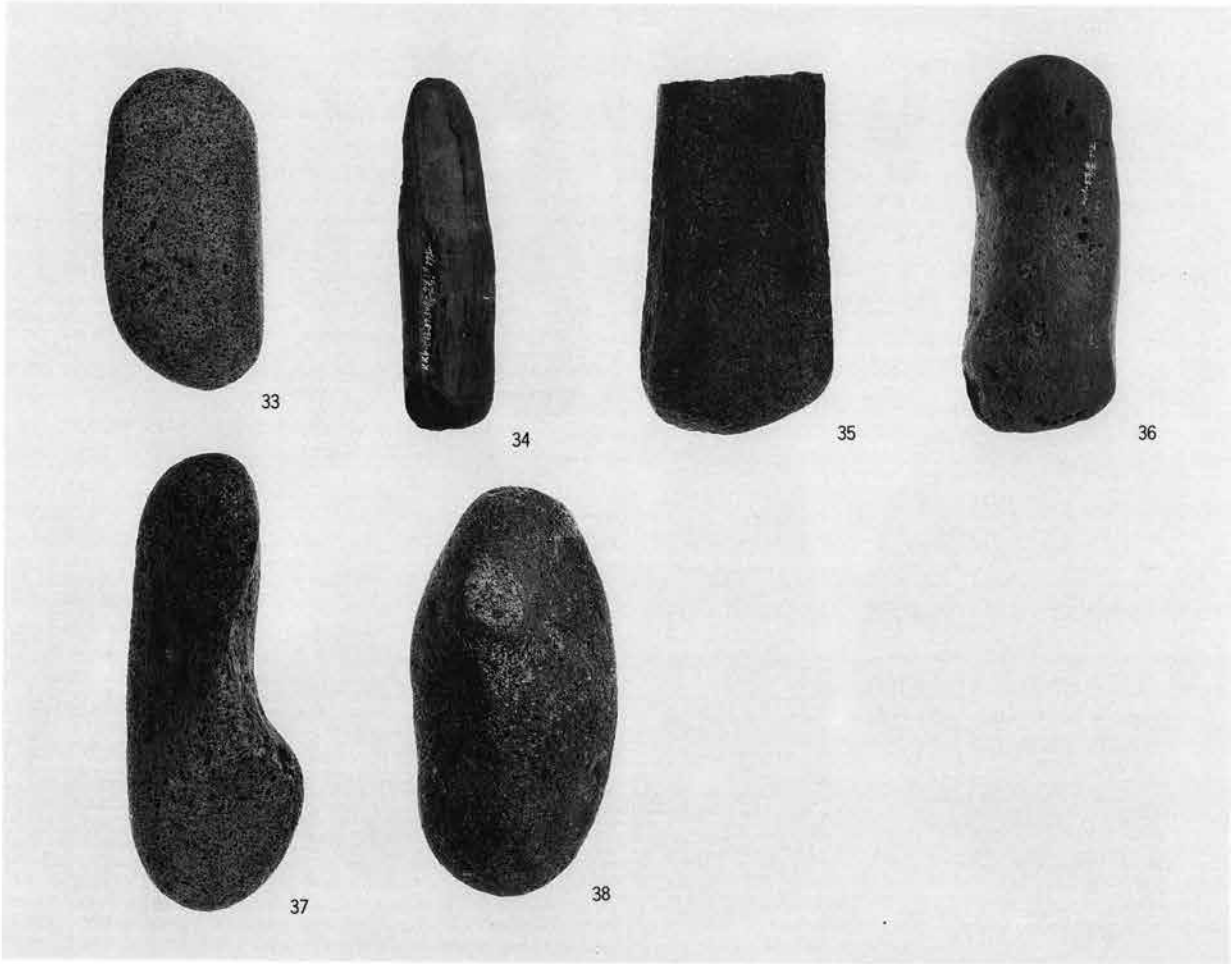
1・4・6・7・8・9号住居址出土石器



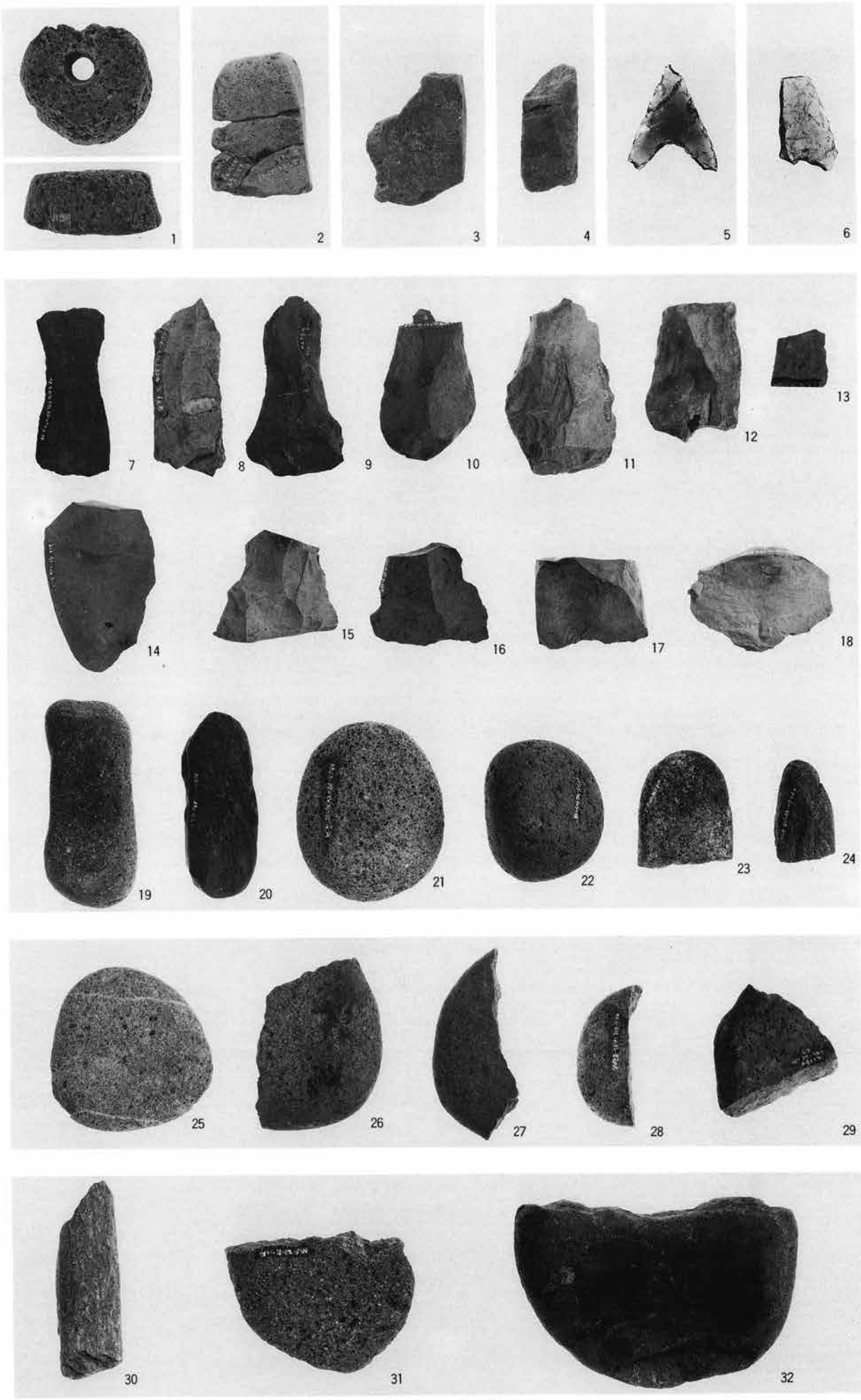
10・14号住居址、方形周溝墓出土石器



方形周溝墓、土壙出土石器



溝出土石器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

グリッド出土石器

滝川B遺跡

滝川B・C遺跡遠景

滝川C遺跡調査区　Ⅰ区

滝川C遺跡調査区　Ⅱ区

1号土壙

2号土壙

5号土壙

同左　遺物出土状態

同上　遺物出土状態

6号土壙

7号土壙

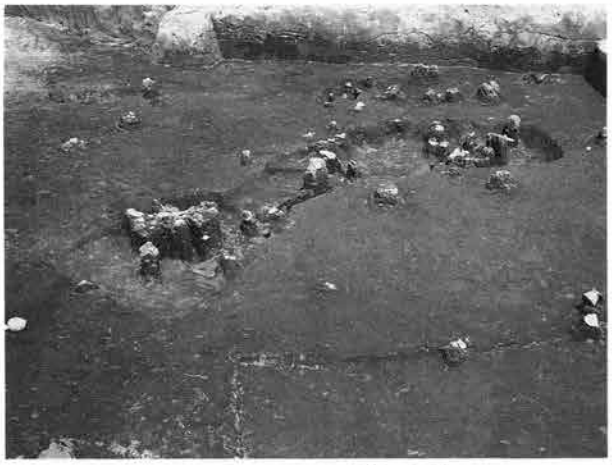
8号土壙

9号土壙

10号土壙

11号土壙

12号土壙



13号・14号（手前）土壙

13号遺物出土状態

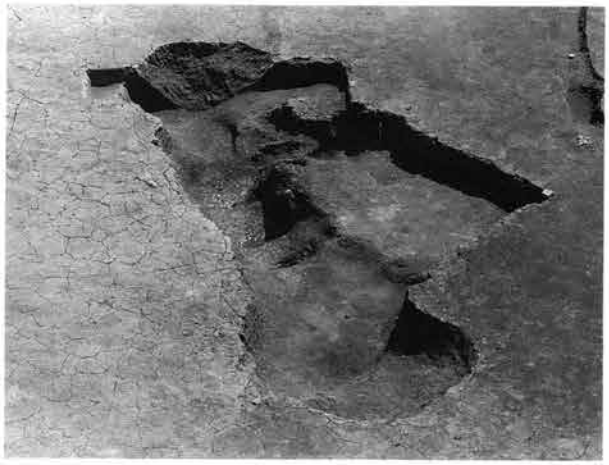
14号遺物出土状態

15号土壙

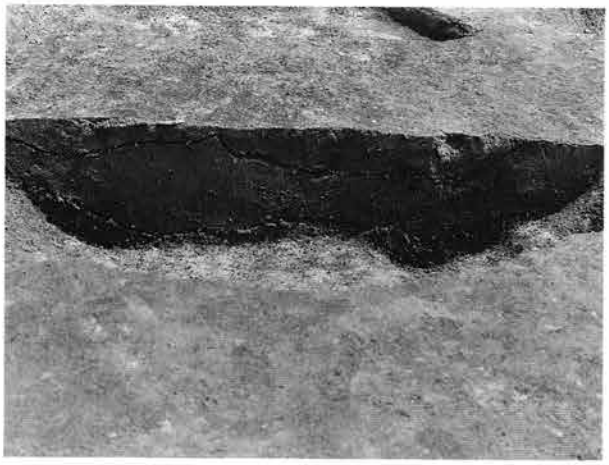
16号土壙

17号土壙

18号土壙



19号土壙

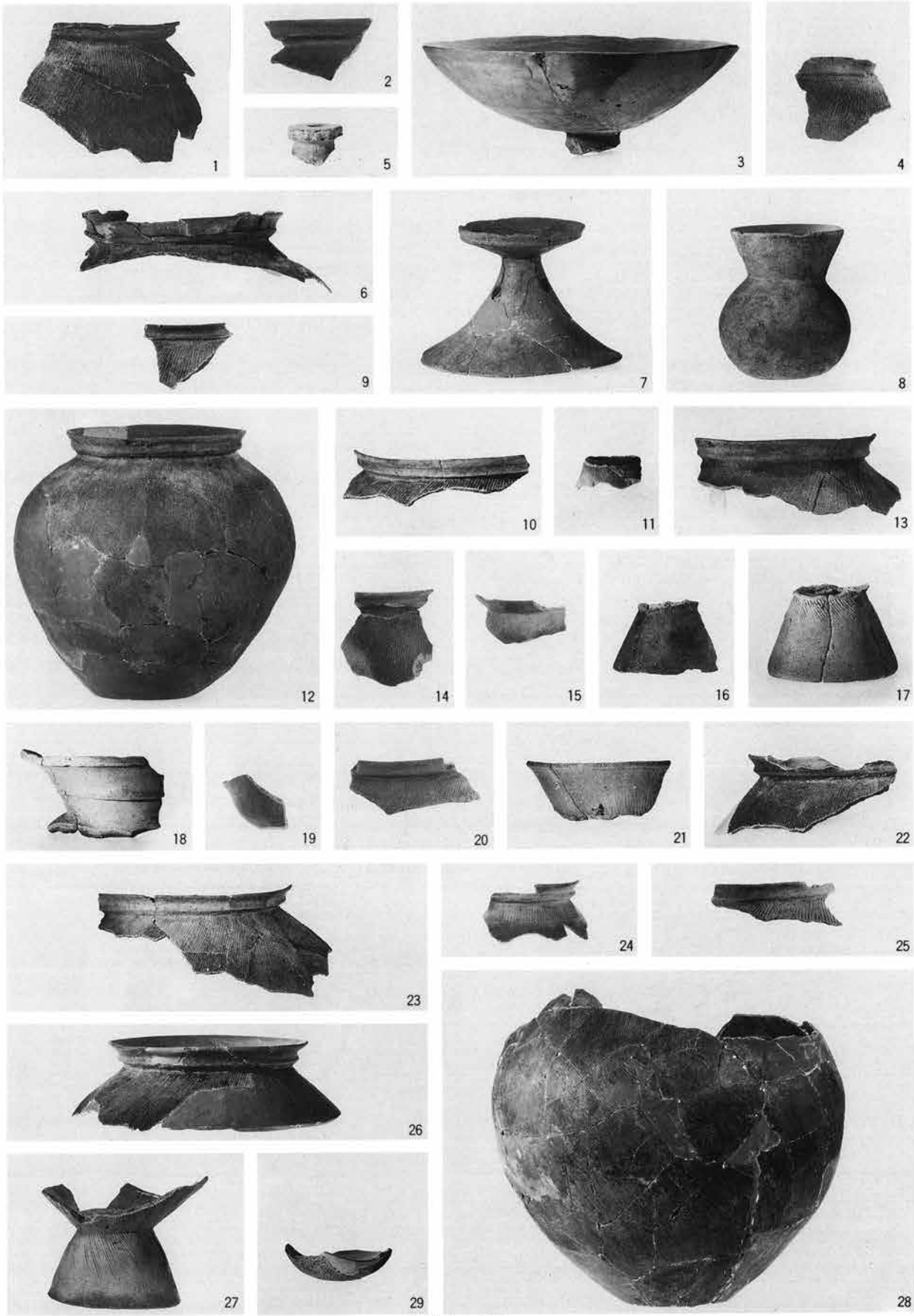


20号土壙

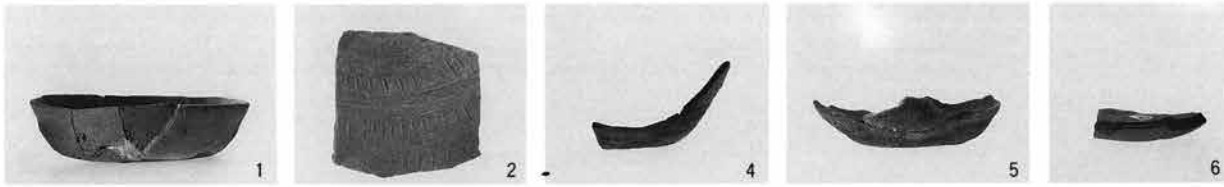
21号土壙

27号土壙

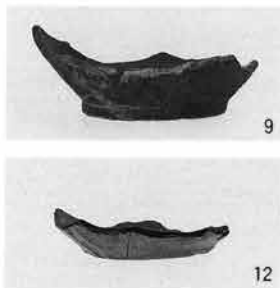
28号土壙

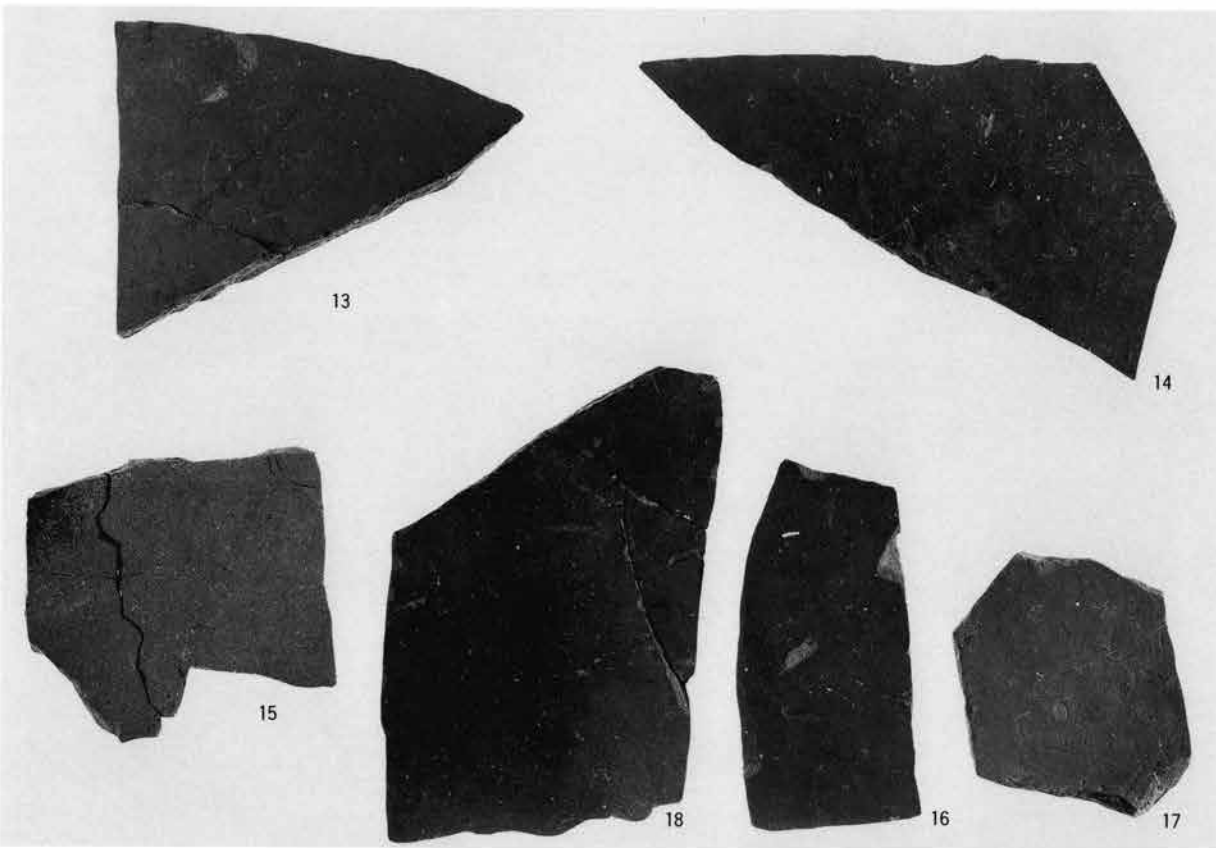


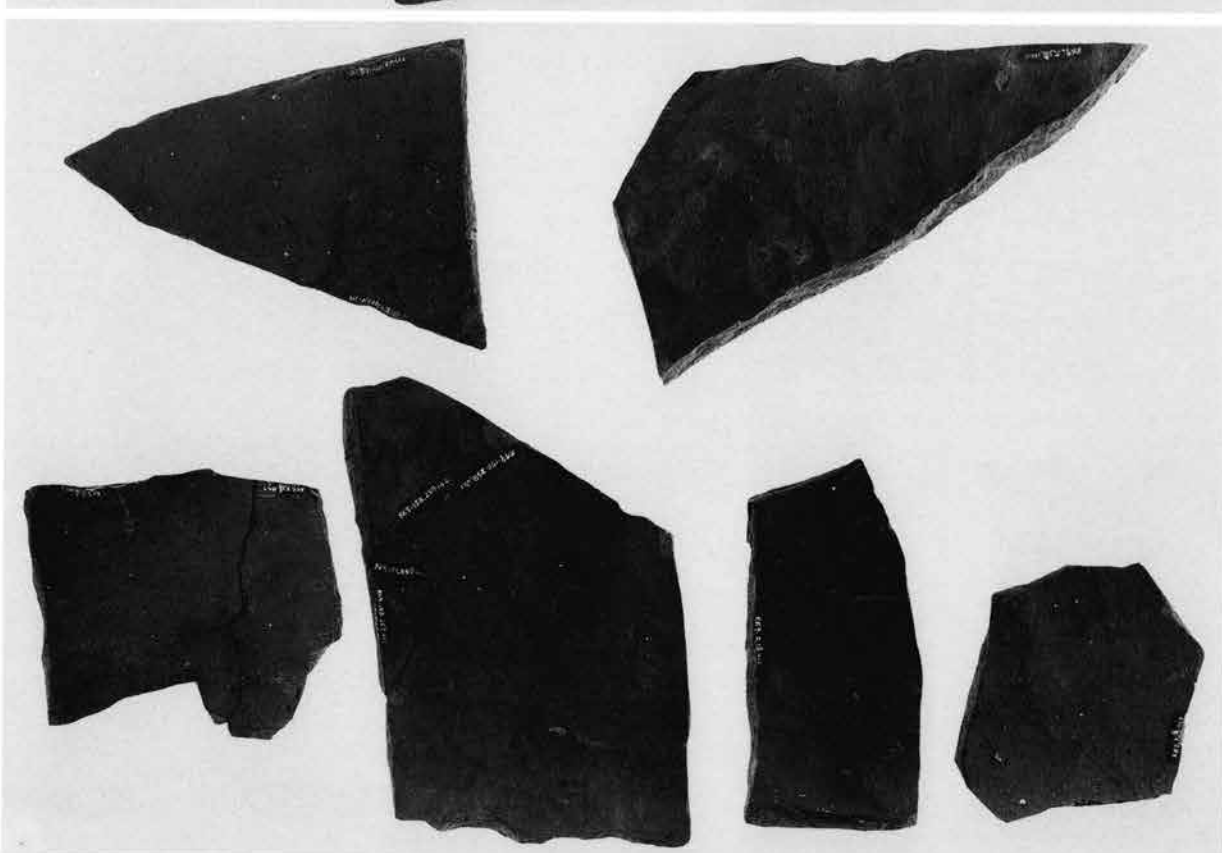
土壙出土遺物



溝出土遺物

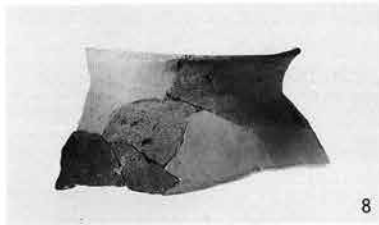


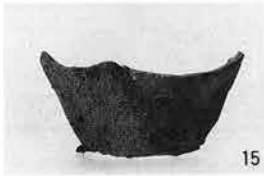




溝出土遺物

溝出土遺物

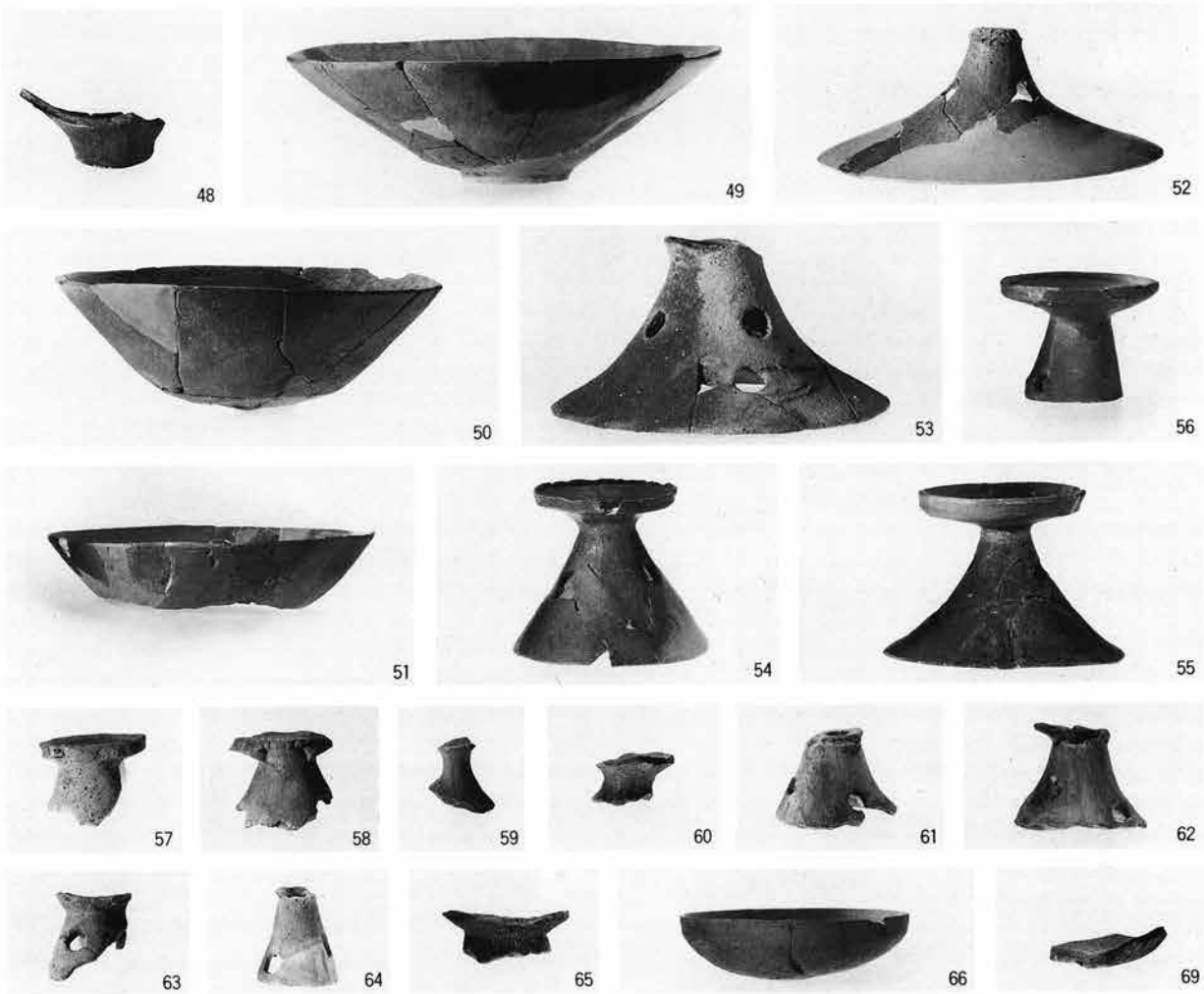




グリッド出土遺物

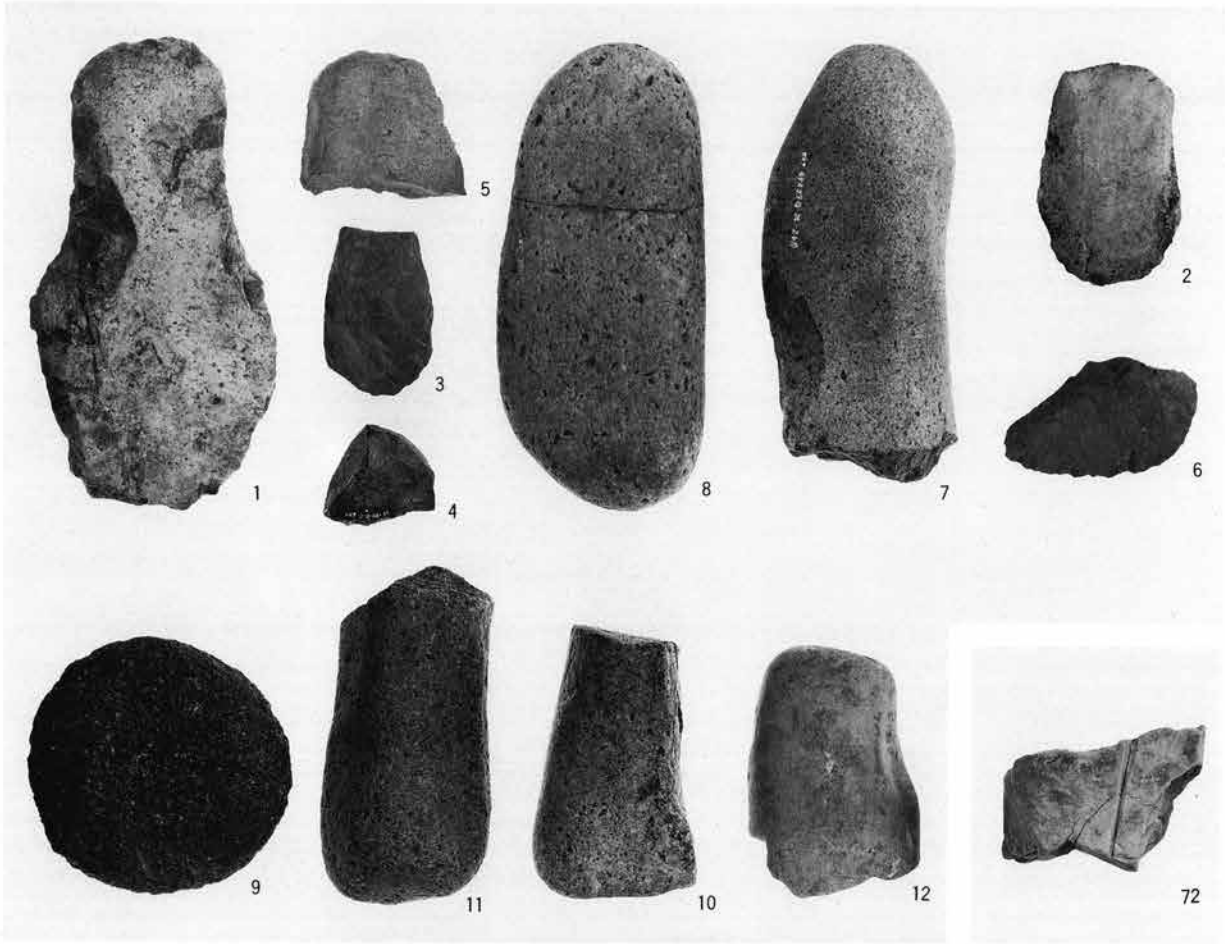
23
24
25
27
26
28
29
33
30
32
31
34
35
40
36
37
38
39
45
46
41
42
43
44
47

グリッド出土遺物



グリッド出土遺物

グリッド出土縄文土器



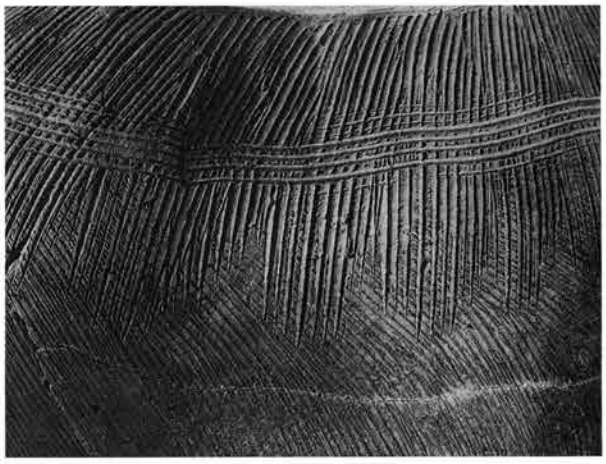
グリッド出土石器　　グリッド出土遺物

28号土壙出土馬歯

下斉田　方形周溝墓－3

下斉田　土壙－8

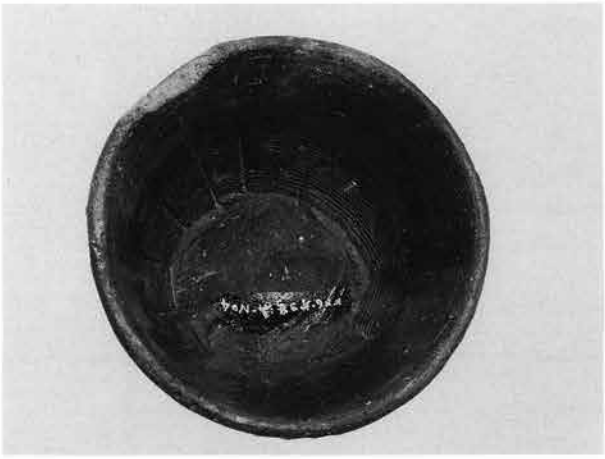
滝川C　土壙－12



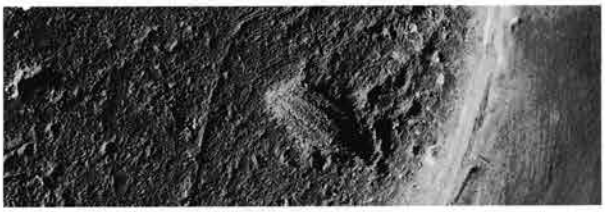
滝川C　グリッド－26

滝川C　グリッド－20

下斉田　8号住居址－3



下斉田　溝－2



下斉田　土壙－5

下斉田　6号住居址－6

部分写真

下斉田・滝川A遺跡
滝川B・C遺跡
－関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第17集－

昭和62年12月19日　印刷
昭和62年12月26日　発行

編集・発行／群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1番1号
電話（0272）23－1111

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511（代表）

印刷／上毛新聞社出版局